
魔法少女リリカルなのはStrikerS ~ 六課と妖精の尻尾 ~

ZERO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers 六課と妖精の尻尾

【Nコード】

N7105S

【作者名】

ZERO

【あらすじ】

とある依頼で森に来ていたナツとハッピーは依頼の途中で紅い石を見つめる。するとその石が突然輝き出し……

プロローグ（前書き）

なのは小説は初めてですが、頑張ります。

ブローグ

フィオーレ王国のとある森の中……そこでは、この世のものとは思えないほどの地響きが起こっていた。

その原因は……

「うおおおおおー!!」

「ギャオオオオオー!!」

ドゴオオオンー!ドゴオオオンー!

桜色の髪をした少年と巨大なトカゲのような怪物が戦っていたのである。

少年の名前は『ナツ・ドラグニル』

マグノリアという町にある魔導士ギルド『フェアリーテイル妖精の尻尾』に属する魔導士である。

彼は最近この森に出没するという謎の怪物の討伐の依頼を受け、この森にやってきた。そして現在、彼はその怪物と戦っていた。

「喰らえ！火竜の鉤爪！！！」

「ギャオオオオン！！！」

ナツは炎を纏った蹴りで怪物を蹴り飛ばす。すると、怪物は長い尻尾を使ってナツを攻撃しようとするが…

「危ないナツ！！！」

間一髪、それは避けられた。一匹の羽の生えた青いネコによって。

「サンキューハッピー！」

「あい！」

ネコの名前は『ハッピー』

ナツと同じ妖精フェアリーテイルの尻尾の魔導士であり、ナツの長年の相棒でもある。

「コイツで決めてやる!」

そう言ってナツは強く拳を握りながら怪物に向かって走り出す。

「火竜の……」

そして強く握った拳に炎を纏い……

「鉄拳……!」

ドゴオオオン……!

思いっきり怪物を殴り飛ばしたのだった。

殴りとばされた怪物は勢い良く地面を転がり、そして……

「ゴ…ガ…」

そのまま動かなくなった。それを見たナツとハッピーは笑みを浮かべる。

「おっしゃー！依頼達成だ！！」

「あい！！」

依頼を達成できた喜びを二人で分かち合う。そして二人は動かない怪物へと歩み寄った。

「しっかし、デッケートカゲだなー。なに食ったらこうなるんだ？」

「お魚を一杯食べたんじゃない？」

「カルシウム効きすぎだろ」

と、怪物を見ながら何気ない会話をしていると……

ブベエエ……

突然怪物は何かを吐き出した。

「ん？何だコレ？」

ナツは怪物が吐き出したものを拾う。

「紅い石？」

「綺麗な石だね」

ナツとハッピーが紅い石をマジマジと眺めていると……

キイイイイン…！カッ…！

「な、なんだ！？」

「うっほー…！…！？」

突然紅い石が眩い輝きを放ち、余りの眩しさにナツとハッピーは目を覆った。

「「うわあああああああ！！！！！」」

そして、二人の叫び声が木霊し、光が消える頃にはナツとハッピーの姿はどこにもなかった。

出会い

「う、うん……ここは？」

朦朧とする意識の中、目を覚ましたナツはゆっくりと起き上がり、周りを見渡す。場所は変わらず森の中だが、先ほどまでの森とは何かが違った。

「ナツー！」

すると、ハッピーが飛んできた。

「ハッピー！無事だったか！？」

「うん。一足先に目が覚めたからこのあたりを見て回ってたんだ」

「そうか。で、ここどこだ？」

ナツの問い掛けにハッピーは顔を横に振る。

「……わからない。見たこともない場所なんだ」

「……そっか」

しばらくの沈黙がその場を支配する。すると……

「っ、誰だ!？」

ナツが背後からの気配に気がつき、すぐさま後ろを振り返る。するとそこにはカプセルの形をしたガジェットドローンが4体いた。

「なんだあこいつら?」

と、ナツが疑問に思っていると、ガジェットはナツに目がけて熱線を放つ。

「っおっ!?!」

ナツはそれを咄嗟の反応でかわし、

「何すんだコラアア！！！」

ドゴオオオン！

炎を纏った拳でガジェットを叩き壊した。すると、残りのガジェットはナツを取り囲み始める。

「オレとやり合うつもりか？火傷しても知らねえぞ！！！」

ナツがガジェットと戦い始めたその頃、森の上空を飛んでいる女性二人の姿があった。先ほどガジェットの反応と次元震の反応があり、二人はガジェットの破壊と次元震の調査のため空を飛んで向かって

いた。

「ガジェット反応はこっちからだよね？」

白い服を着て髪型を栗色のツインテールの女性がもう一人の女性に話しかけた。

「うん。でもガジェットの反応がどんどん消えている」

黒い服に白いマントを羽織った金髪の女性が消えていくガジェットの反応を確認しながら反応があった場所に飛んでいく。

「それに未確認反応と生命反応もある。もしかしたら誰かが戦っているかも……」

「でもとりあえず行ってみないとわからないよね……」

二人の女性は消えていくガジェットの反応を気にしながらも反応があった場所に飛んでいった。

「うらああ！！火竜の鉤爪！！！」

その頃ナツは今しがた最後のガジェットを破壊したところである。

「なんだよ、たいしたことねーヤツらだぜ」

「あい。ナツの前に現れたのが運の尽きだね」

ナツとハッピーがそんな会話をしていると……

「その人！大丈夫ですか！？」

「ん？」

上空から声がした。見てみると、二人の女性が空からこちらに向か
つてきていた。

「空を飛んでる……アイツら魔導士か!？」

「みたいだね」

そんな会話をしているうちに二人の女性はナツたちの目の前に来て
いた。そんな二人にナツは警戒心を全開にする。

「んだデメエら?こいつらの仲間か?」

ナツは足元にあるガジェットの残骸に目を配らせながら身構える。

「いいえ、私達は時空管理局です」

「時空管理局?ハッピー、なんだそりゃ?」

「あい。オイラに振られても困るのです」

と、ハッピーが口を開くと女性は目を見開く。

「ね、ネコが喋った……！」

「あ、貴方たちは一体……？」

「オレか？オレは妖精の尻尾の魔導士、ナツだ」

「オイラはハッピーだよ」

ナツとハッピーが自己紹介すると、女性は首を傾げる。

「フェアリー……テイル……？」

「それって……？」

女性二人が問い掛けるよりも早く、ナツが口を開いた。

「なあ、ところでここどこかわかるか？」

「え？えっと……ここはミッドチルダ付近にある森ですけど……」

「ミッドチルダ？」

「聞いたことないね」

聞き覚えのない地名に今度はナツとハッピーが首を傾げる。すると、金髪の女性が問い掛ける。

「ミッドチルダを知らないのなら、貴方たちはどうやってここに？」

「知らねえよ。この紅い石を拾って、気がついたらここに居たんだ」

と言ってナツが紅い石を二人に見せると、二人の顔色が驚愕に変わった。

「それは……レリック！！」

「それを一体どこで!？」

「だーから、拾ったつってんだろ。それでコイツが急にピカーって光り出して、気がついたら此処に居たんだよ」

ナツの言葉を聞いた二人は互いに顔を見合わせると、頷きあった。

「えっと、ナツさん」

「ん？」

「貴方たちには事情聴取のため、これから私達と同行を願うことができますか？」

「同行だあ？」

「どうするナツ？」

「うーん……」

ナツはしばらく考え込んだあと……

グウ~~~~

と、お腹から気の抜けた音を発した。それを聞いた二人はずっこけそうになるが、何とか耐える。

「そう言えば腹減ったなあ」

「あい。この状況で言う事じゃないけどね」

ハッピーのさりげないツッコミを無視し、ナツは二人に話しかける。

「おい、お前らのその……えっと…時空なんとかってヤツ、メシ食わせてくれんのか？」

「え？あ、はい……」

ナツの突然の質問に呆気に取られながらも答える栗色の髪の女性。

「じゃあ行くー！」

「ナツが行くならオイラも」

と、かなり単純な理由でナツとハッピーは同行を受け入れたのだっ
た。

くじく

機動六課（前書き）

かなりグダってます。

機動六課

ナツとハッピーは先ほど森の中で出会った二人の女性と通路を歩いている。歩いているといってもナツの前には栗色のサイドテールをした女性、後ろには金髪の女性がナツを挟むようになって歩いていた。(ハッピーはナツの頭の上)二人の女性は先ほどと違い、機動六課の制服を着ている。先ほど二人が来ていた服は『バリアジャケツト』という魔法で作られる防護服で、機動六課に行く際街中を歩くためナツの前で防護服を解除して今に至る。(因みにナツとハッピーはそれを換装魔法の一種だと思っている)

しばらく歩いていると、栗色の女性は一室の扉の前に立つとドアにノックし、「どうぞ」と声が来る同時にナツとともに部屋に入ってしまった。その部屋には茶髪のショートカットの髪に髪留めをしている女性が椅子に座って机の上でなにか作業をしていた。

「失礼します。高町なのは一等空尉、任務の報告に参りました。」

「とりあえずご苦労さん。で、そこにいる人がフェイトちゃんと言っていた人なん？」

「うん。えっと、ナツ君。自己紹介してくれる？」

「ん？おお…」

そう言っつてナツは一步前が出る。

「ナツ・ドラグニルだ。よろしくな」

「オイラはハッピーだよ！」

ナツに続いてハッピーも自己紹介すると、茶髪の女性は驚いた表情をする。

「ほ、報告では聞いたつたけど、ホンマにネコが喋った……それに声がなんとなくアリサちゃんに似とる……」

「「？？？」」

ブツブツと呟く女性にナツとハッピーは首を傾げる。そんな二人に気がついた女性は「こほん」と咳払いをして口を開く。

「初めまして、私の名前は八神はやて。ここの部隊長をしております」

と、女性…はやてが自己紹介すると、はやては続けて口を開く。

「とりあえずは、ナツ君とハッピーちゃんは『次元漂流者』かもし
れへんな」

「『次元漂流者?』」

聞きなれない言葉にナツとハッピーは聞き返す。

「うん。たまに何らかの方法で自分の世界から別の世界へ移動して
しまう人がいてるんよ。君らの場合はあの紅い石、レリッククやな」

「へー別の世界か………別の世界いいいい!!!?」

「うばー!!!?」

別の世界にやって来たと聞いて、ナツとハッピーは驚愕する。

「お、おいちょっと待てハッピー!!!別の世界ってアレか?エドラ
スみてーなもんか!?!」

「よくわかんないけどたぶんそうじゃないかな!？」

「じゃあオレたちの妖精の尻尾も……!」

「存在……しない……」

二人がそう言うと、驚愕の表情から一転、二人の顔は沈んだ表情になった。そんな二人にはやてが声をかける。

「えっと、二人ともそない気い落とさんと……それより、聞いてもええか？」

「なんだよ……」

沈んだ表情のままナツが言う。

「フェアリーテイルってなに？」

と、はやてが聞くと、ナツは沈んだ表情から真剣な顔付きになる。

「妖精の尻尾は……オレたちの帰るべき場所だ」

この言葉を皮切りに、ナツは自分達の世界の説明を始めた。魔導士ギルドのこと、仲間のこと、そして妖精の尻尾のことなどを全て説明した。

「なるほどなあ。つまり、ナツ君は魔法を使えるんやな」

「ああ……」

「オイラも使えるよ」

それを聞いたはやては思案顔になる。そして……

「ナツ君、私らに協力してくれへんか？」

「協力？」

ナツが聞くと、はやては頷きながら続けた。

「せや。勝手に色々調べさせてもらうたんやけど、ナツ君の能力をこっちの言い方で言うと、魔力量はS+。さらには謎の魔法使用しとったから、このまま時空管理局本局に次元漂流者として引き渡すと色々マズいんや」

「マズイって、なにが？」

「拷問や解剖、最悪…殺されてまうかもしれん。私らはそんなん嫌や。そこでナツ君には民間協力者として機動六課に所属して欲しいんや。ナツ君へのメリットとしては時空管理局の一組織に所属する事で戸籍を騙すことができたり、民間協力者として機動六課に所属する事で、衣食住を確保出来るんやけど……どうやる？」

「……………」

はやての提案に、ナツはしばらく考え込む。そして……

「いいぜ。元の世界に帰る方法が見つかるまでって言う条件ならな」

「あい。ナツがいいならオイラも大丈夫だよ」

「ありがとうな、ナツ君！ハッピーちゃん！」

そう言って、ナツとはやては握手を交わした。

こうして、ナツとハッピーは機動六課に協力することになったのだ
った。

「ところでよお……さっきからそこで覗いてるヤツ、出て来いよ」

と、ナツがそう言うと、扉が開き、ピンクの髪をポニーテールにし
た女性が部屋に入ってきて来た。

「シグナム!？」

「申し訳ありません主はやて。彼らが何者が気になりました……」

シグナムと呼ばれた女性ははやてに頭を下げると、すぐに視線をナ
ツへと移す。

「よく気がついたな」

「オレは鼻が利くんだ。オレがこの部屋に入った時から、ずっと匂

いがしてたからな」

「ナツ、言ってることが犬みたいだよ？」

ハッピーが言うが、ナツは無視する。

「貴様、名は？」

「ナツ。ナツ・ドラグニルだ」

「オイラはハッピーだよ！」

と、ハッピーも自己紹介するが、ナツとシグナムは睨み合っており、それを無視する。

「はやて〜二人がオイラを無視する〜」

とうとうハッピーははやてに泣き付いた。はやてはそれを受け止めて「よしよし」と慰めている。

一方、シグナムは真っ直ぐとナツの目を見ていた。

「（コイツ、良い目をしている。恐らくかなりの死線を潜り抜けてきたのだろう……面白い）」

そう思ったシグナムははやてに向き直る。

「主はやて、少し頼みがあります」

「ん？なんや？」

はやてはハッピーを撫でながら聞く。

「この男、ドラグニルと模擬戦させてください」

それを聞いた瞬間、はやては『またか』と言う顔をした。シグナムは所謂、戦闘^{バトル}狂と言うヤツで、はやての悩みの一つである。しかしその反面、ナツの実力を知りたいと言う思いもあつたはやては……

「ええよ、ナツ君がええなら許可したる」

「オレも全然OKだ！久々に燃えてきたぞ……！！」

こうして、ナツとシグナムの模擬戦が始まったのである。

つづく

火竜VS剣の騎士(前書き)

初の戦闘描写ですが、短いです。

感想をお待ちしております。

火竜VS剣の騎士

機動六課の訓練所。そこでは現在、バーチャルシステムで高層ビルなどの街並みを再現しており、その中央ではナツとシグナムが対面していた。

「行くぞ、ドラグニル！」

シグナムは自分のデバイスであり、愛刀である魔剣『レヴァンティン』を構える。

「かかって来いやあっ!!！」

対するナツも拳と拳をぶつからせた後、身構える。

「烈火の将・シグナム。参る！はあっ！」

言うやいなや、シグナムはレヴァンティンでナツに斬りかかるが…

「よっと!」

ナツはそれを軽々とバックステップで避ける。

「エルザに比べたら、全然ヨユーだぜ!今度はこっちの番だ!」

そう言うと、ナツの拳に炎が纏う。

「っ!? (手から炎が……!?)」

それを見たシグナムは目を見開く。そしてナツはシグナムに向かって拳を振るった。

「火竜の鉄拳!」

「くっ!」

ガキイイン!!

シグナムは咄嗟にレヴァンティンでナツの拳を防ぐが……

「おらあああ!!」

「っ、なに!?!」

勢いまでは止められず、シグナムは大きく後ろに吹き飛ばされた。だが、シグナムはすぐさま体勢を立て直す。

「おいおい、舐めてんのかよ?」

「なに?」

「本気で来ねえと火傷するぞ烈火の将・シグナム。探りあいはこちら充分だ」

「っ……」

ナツの言葉を聞いたシグナムは目を見開き、やがて「ふふっ」と笑みをこぼした。

「よかるう。本気で行くぞ、ナツ・ドラゲニル」

それを聞いたナツもニツと笑みを浮かべる。

「燃えてきたぞ！」

その会話を皮切りに、二人の戦いは激しさを増した。

「もう一発！火竜の……！」

ナツは再び拳に炎を纏い……

「鉄拳……！」

シグナムに向かって振るった。しかし……

「二度も喰らうほど、私はバカではない！」

「なっ！？」

シグナムはナツの拳を軽々と避け、ナツのふところに飛び込む。

「終わりだ！」

シグナムはそのままナツを斬ろうとレヴァンティンを振るう。が…

「うおおおおお！…！」

ゴオオオオウ！

「っ、なに！？」

シグナムは驚愕した。何故なら、確実にレヴァンティンが当たる距離に居たナツの足から突然炎が噴き出し、それをブースターのように使って後ろに大きく避けたのだから。

「喰らいやがれ！火竜の……！」

しかもナツの行動はそれだけでは止まらず、ナツは大きく息を吸い込む。そして……

「咆哮！！！！」

口から灼熱の炎を吐き出した。

「レヴァンティン、私の甲冑を」

シグナムはレヴァンティンを何か儀式めいていた構えを取って指示を出した。すると、彼女の全身に紫色の魔力が纏われる。

それと同時に、シグナムはナツの炎に包まれる。

「どうだ！！」

火竜の咆哮をまともに喰らったのを見て、ナツは得意げに言う。しかし……

「ハアアアアア！！！！」

「なにいつ！！！！？」

なんとシグナムはナツの炎を切り裂いて出てきたのだ。そして炎から出てきたシグナムはナツに向かってレヴァンティンを振るう。

「うおおおおおー!?!」

ナツはそれを何とか真剣白刃取りで受け止めた。

「ぬおおおおおー!」

ナツはそれを押し返そうとするが……

「くっ、ダメだ……さっきので魔力を使いすぎた……力が入らねえ……」

ナツは先ほどの火竜の咆哮で大量の魔力を使ったため、魔力が底を尽きかけ、レヴァンティンを押し返すほどの力は残っていないかった。しかし、そんなナツにもシグナムは容赦はしない。

「これで終わりだ!レヴァンティン!カートリッジロード!」

[Explosion!]

レヴァンティンから音声と同時に弾丸のようなものが排出される。すると、レヴァンティンの刀身に強大な炎が纏う。

「喰らえ！紫電一閃！！！」

シグナムは必殺技の発動と同時にレヴァンティンの刃を掴んでいるナツの腕を振り切ろうと腕に力を込めた。

「（勝った！）」

シグナムは心の中で勝利を確信した。

しかし、この時シグナムは気付いた。絶体絶命のピンチにも関わらず、ナツの顔には笑みが浮かんでいたことに……

「（何故、この状況で笑っていられる…?）」

シグナムがナツの笑みの意味を理解出来ずにいると、ナツが口を開いた。

「この炎……美味そうだな」

「なに？」

ナツの言葉にシグナムは怪訝な顔をするが、その表情はすぐに驚愕へと変わった。何故なら……

「ガブツ……モグモグ……」

「（バカな！！この男……レヴァンティンの炎を喰っているだど！！？）」

そう。なんとナツはレヴァンティンの刀身に纏われた炎をガブガブと咀嚼して喰い始めたのだ。

「「ごちそーさま……」」

そしてレヴァンティンの炎を喰い終わると、ナツはニッと笑みを浮かべる。

「喰ったら力が湧いてきた……オラァ！！！！」

「なっ!!!?」

ガキイイイン!

ナツは掴んでいたレヴァンティンの刃を軽々と押し返すと、足に纏った炎をブースターにして上空に舞い上がった。

「右手の炎と左手の炎……合わせて!!」

ナツは両手に纏った炎を合わせると、それは強大な炎となった。

「火竜の煌炎「こっえん!!!!」

ドゴオオオオン!!!

「うわああああああ!!!!」

そしてその炎をシグナムにぶつけると、シグナムは地面に叩きつけられた。

「くっ……!!」

シグナムはすぐに立ち上がろうとしたが…

「おっと…」

目の前には腕に炎を纏ったナツの姿があった。それを見たシグナムは観念したかのように目を閉じた。

「ふっ……私の負けだな」

「良い勝負だったな」

こうして、ナツとシグナムの模擬戦はナツの勝利で幕を閉じたのだ。
った。

模擬戦後…（前書き）

今回の話は何がしたかったのか良く分からない上に、中途半端な終わり方となっております。

模擬戦後…

ナツとシグナムの模擬戦がナツの勝利で終わった頃、その模擬戦を
観戦していたはやては呆然としていた。

「な、何モンなんやナツ君は……炎で殴ったり、炎を吹いたり、さ
らには炎を食うやなんて…コレ、ホンマに魔法なんか……!?」

はやてがナツの規格外の強さに驚愕していると、彼女の側にいたハ
ツピーが口を開いた。

「竜の肺は焰を吹き、竜の鱗は焰を溶かし、竜の爪は焰を纏う。こ
れは自らの身体を竜の体質へと変換させる太古の魔法だよ」
エンシエント「スペル」

「エンシエント……スペル？」

「あい。ドラゴンスレイヤー滅竜魔法…イグニールがナツに教えたんだ」

模擬戦終了後、ナツははやてに呼ばれてハッピーと共に部隊長室に
来ていた。

「ナツ君、模擬戦お疲れ様」

「おう。ところでよはやて、腹減ったからメシ喰いてえんだけど
…」

「オイラもお腹すいた〜」

「もうちよっと待ってな。リイン」

「はいです〜」

はやてが呼ぶと、彼女の後ろから小さな少女が現れた。それを見たナツとハッピーは……

「妖精だー！ー！」

と口を揃えて叫んだ。しかし、リインと呼ばれた少女は頬を膨らませる。

「リインは妖精じゃないです！リインフォース？です！ー！」

「その子は私のユニゾンデバイスなんや」

「ユニゾンデバイス？」

聞き慣れない単語にナツとハッピーは首を傾げる。

「ああ、そう言えばまだデバイスの説明をしてへんかったな。デバイスは、私ら魔導師が魔法を使うときに補助してくれる機械なんや。種類も色々あつてな、もつとも広く使われているのがストレージデバイス。AIを搭載して意思を持ったインテリジェントデバイス。何らかの武器の形状をとるアームデバイス。そして、ラインのよくな所有者と融合を果たすことによって驚異的な能力を向上させるユニゾンデバイスやな」

はやては一気にデバイスの説明を終えると、ナツとハッピーは……

「「?/?/?」」

まったく理解出来ずに首を傾げていた。

「え、え〜と……つまりやな、魔法使いが使う魔法の杖みたいなもんや」

「おお、なるほど」

「あーやー」

はやてが超簡単な説明をすると、二人は納得したようにポンッと手を打つ。そんな二人を見て、はやてとリインは苦笑いをした。

「あー…ところでやな、ナツ君」

「ん？」

「ハッピーちゃんから聞いたんやけど、その……ナツ君がドラゴンに育てられたって言うんは……」

「ああ、本当だぞ」

あっさりと言うナツ。

「オレは小さい頃、森でイグニールに拾われた。そして、イグニールから色んなことを学んだんだ。言葉や文化、魔法なんかをな」

「せやけど、ドラゴンがドラゴンを倒す魔法を教えるっちゅうのも、変な話やな」

「（…はっ）」

「ちょおお!!今気付いたって顔すな!!!!」

ナツとハッピーのリアクションにツッコミを入れるはやて。

「中々見所あるツッコミするな、はやて」

「あい。ルーシィと良い勝負だね」

「そのルーシィって言う人は知らんけど、とりあえず褒められてへんのはわかるわ……」

ヒソヒソと話すナツとハッピーに苦笑いをするはやてだった。

その後、はやてに連れられて食堂にやって来たナツとハッピーは……

「（ガツガツガツ！モグモグ！ゴキユゴキユゴキユ！）」

「（モグモグモグ）」

食堂の料理をかき込むように飲み食いしていた。ナツの正面に座るはやては苦笑している。

「な、ナツ君…もうちょっとゆっくり食べや。（ベチヨ…）何か飛んで来とるし……」

はやては顔についた汁をふき取りながら言う。そこへ……

「はやてちゃん！」

「今、大丈夫？」

「あ、なのはちゃんにフエイトちゃん」

ナツとハッピーがこの世界で最初に出会った栗色の髪の女性と金髪の女性がやって来た。

「どないしたん？」

「うん、ナツ君にFWのみんなを紹介しようと思って」

なのはと呼ばれる女性の後ろには三人の少女と一人の少年が立っていた。

「そうか、ちょっと待ってや…ナツ君」

「んあ？ゴクン……なんだよ？」

はやてに呼ばれたナツは食う手を止めた。

「ナツ君に機動六課のFWメンバーを紹介したいんや」

はやてがそう言つと、なのはとフェイトと呼ばれた女性が前に出た。

「ん？お前らはあの時の……」

「まだちゃんと自己紹介してなかったよね？機動六課スターズ隊長の『高町なのは』です！」

「同じくライティング隊長の『フェイト・T・ハラオウン』です」

「そうか。よろしくな！」

ナツがそう言つて手を差し出すと、最初はなのは、次はフェイトと握手を交わした。

「それで、この子たちが私の教え子。みんな、挨拶して」

「……はい！」

すると、なのはの後ろにいた四人が前に出た。そして最初に青髪の少女が口を開く。

「スターズ3『スバル・ナカジマ』です！」

次にオレンジ色の髪の少女が口を開く。

「スターズ4『ティアナ・ランスター』です」

因みにティアナの自己紹介を聞いたナツとハッピーは……

「（ジュピアと声が似てるなあ……）」

と思っていた。

そして次に口を開いたのは赤髪の少年。

「ライトニング3『エリオ・モンディアル』です！」

そして最後に口を開いたのはピンク色の髪の少女。

「ライトニング4『キャロル・ルシエ』です！」

少女・キャラロが自己紹介をすると同時に、彼女の背中から何かが飛び出してくる。

「キュクルー」

それは小さな白い竜だった。それを見たナツは……

「ドラゴンだー！ー！ー！ー！ー！」

大興奮なようすで竜に飛びついた。

「キュイ！？」

「ふ、フリード！？」

当然驚愕するキャラロと白い竜。

「お前、ドラゴンと友達なのか！？」

「は、はい！その子はフリードリヒと言って、私の大切な友達です」

「そっか。よろしくな、フリード！」

「キュ、キュイ！」

ナツの言葉に戸惑いながらも頷くフリードだった。

「オレはナツ。ナツ・ドラグニルだ」

「オイラはハッピーだよ」

ナツとハッピーが自己紹介すると、四人は目を見開いた。

「」「」「ネコが喋った!?!」「」「」

「あい、そりゃ喋るよ。ネコですから」

「いや、ネコは普通喋らへんで……」

ハッピーの的外れな発言にツッコミを入れるはやて。そんなはやて

にハッピーは…

「気にしたら負けだよ」

と返したのだった。

う
ぐ

早朝訓練（前書き）

FWメンバー+ナツ&ハッピーの訓練風景です。

この二人が加わったらこんな感じかなあと思って書きました。

早朝訓練

ナツとハッピーが機動六課にやって来て数週間が経ったある日……
当のナツとハッピーは……

「ぐがー…ぐごー……」

「すぴー…」

部屋のベッドで爆睡していた。

そんな二人の部屋に、一人の男性が入って来た。

「まったく、こいつらまだ寝てんのか？」

男性はそう呟くと、未だ眠っている二人を起こそうと身体を揺すった。

「おい、お前らおっぴつちと起きろー！おいっ！」

「ん、うーん……この声は……」

男性の呼びかけにようやく目を覚ましたナツは……

「グレイーイ！！！！」

「うわぁあっ！！！？」

なんと男性に襲い掛かった。

「グレイ！テメエ勝負しろやあ！！」

「待てナツ！何寝ぼけてんだ！？よく見る！！」

「んあ？」

男性の言葉に反応し、ナツは寝惚けていた目をパチツと開いた。

「なんだ、ヴァイスじゃねーか。何してんだよお前？」

「それはこっちの台詞だ。離れる！」

「うっっ」

ヴァイスと呼ばれた男性はナツの顔を鷲掴みにして自分から引き剥がすと、ゆっくりと立ち上がる。

「まったく、オレの声を聞くたびにそのグレイとか言うヤツと間違えやがって……」

「なははは！わりいわりい、声が似てるから間違えちまうんだよ」

「その間違いのたびに襲い掛かれるオレの身にもなれつつの」

ヴァイスは呆れた表情でナツを見る。

「んでヴァイス。オメエ何の用だ？」

「おっと、忘れるところだった。なのはさんにお前たちを呼んでくるように頼まれたんだよ」

「なのはに?」

「ああ。お前ら、確か今日から訓練に参加するんだろ?」

「……おお！忘れてたあ!!」

ナツは思い出したようにポンスと手を打つ。

「早く行ってこいよ。なのはさんカンカンだぞ」

「やべえ！行くぞハッピー!!」

「あいさ〜……」

ナツは今だ寝ぼけているハッピーの尻尾を掴み、そのまま急いで訓練場に向かったのだった。

その後、結局遅刻したナツはなのはに叱られた後、訓練に参加したのだった。

「はい、整れーっ」

「「「「はい！」「」「」」

「おう！」

「あいさー！」

なのはの掛け声とともに五人と二匹は集合する。訓練の後なので、みんな息は上がって服も汚れていた。

正確に言えば、ナツ以外だが……

「だらしねえなあ、こんぐらいで息切れすんなよ。なあハッピー」

「あい」

「うっさいわね！アンタの人間離れた体力と一緒にしないで！！
つてかネコ！アンタはずっと飛んでただけじゃない！！」

ナツとハッピーの言葉にティアナが噛み付く。

「普段から鍛えてねえからだろ？」

「だからアンタと一緒にするなって言ってるでしょバカナツ！」

「なっ！？オレとスバル同じ扱いかよ！？」

「ちょっと！二人ともそれどういうこと！？」

「「スバル」バカ」」

「酷いよ二人ともー!!」

ナツとティアナの容赦のない言葉に涙を流すスバル。それを苦笑いで見ているエリオとキヤロ。そして、なのはが溜め息混じりに口を開く。

「ほらほら、ティアナもナツ君も仲が良いのはわかったから、こっちに集中して」

「「良くない!!」(です)」「」

と、ハモツて反論する二人。

「でえきてえる」?」

ハッピーが巻き舌風に言いつと...

「「できてない!!」」「」

またもハモるナツとティアナだった。

閑話休題

「じゃあ、本日の早朝訓練、ラスト1本！みんな、まだ頑張れる？」

「はい！！！！」

「おうよー！！」

「あい！！」

「じゃあ、シュートイベーションやるよ。レイジングハート」

「All light・Axel Shooter」

なのはの相棒、『レイジングハート』の声とともに幾何学的な魔法陣が浮かび上がり、11個もの魔法弾がなのはの周りを飛び交い始めた。

「私の攻撃を5分間、被弾無しに回避しきるか、私にクリーンヒッ

トを入れればクリア。誰か1人でも被弾したら最初からやり直しだよ。頑張っていこう!」

「「「はい!」」」

「やってやるぜ!」

「あいさー!」

早速五人と一匹は行動を開始する。

「このボロボロ状態でなのはさんの攻撃を5分間、ナツ以外で捌き切る自信ある?」

「ない!」

「同じくです」

「じゃ、何とか1発入れよう。ナツ、作戦通りにやりなさいよ!」

「わかってるよ!」

「はい！」

「よおし、行くよ！エリオ！」

「はい！スバルさん！」

「うん。準備はオツケーだね。それじゃ、レディー…：ゴー！」

なのはが腕を下ろした瞬間、ナツたちに向かって魔力弾が勢いよく飛んで行く。

「全員、絶対回避！2分以内に決めるわよ！」

「……おっ！」「……」

着弾する瞬間、5人は四方八方に散らばった。なのはも気を引き締めてみると、正面からは「翼^{エーラ}」と呼ばれる魔法で羽を生やしたハッピーがナツを抱えて飛んできている。そして背後からはスバルの先天魔法である「ウイングロード」が展開され、スバルが拳を構えているのはに迫る。さらに、別の場所からはティアナがアンカーガンを構えて狙っている。

「アクセル！」

それに気付いたなのはは三人に向かって魔力弾を向かわせる。だが、それは当たること無く三人をすり抜けた。

「シルエット……やるね、ティアナ……っ!？」

なのはが感心の声を出したのもつかの間、その背後からはハッピーに抱えられたナツが迫っていたのだ。

「もらったあああ!!火竜の……」

「っ!!」

「鉄拳!!」

ナツの炎を纏った拳が振り下ろされる。だがそれよりも一瞬早く、なのははバリアを展開し、それを防いだ。しかし、それで諦めるナツではない。

「まだまだあ!!火竜の……」

その瞬間、ナツの肘から炎が噴出す。

「炎肘えんちゆう！！！！」

「（っ……なるほど、肘から噴出した炎をブースターにして威力を上げたのね……）」

ナツの威力が上がった拳に、徐々に押され始めるのは。だが…

「ナツ！左右から砲撃が来てるよ！」

「なにぃ！？」

そう、ナツに向かって先ほどの魔力弾が戻って来たのだ。

「避けるハッピー！！！」

「あいさー！！」

それに気付いたナツとハッピーは間一髪でそれを避け、なのはから

離れる。が…

「っ！？スバル！危ねえ！！」

「え！？うわあああ！つと、とと……」

「わりいスバル！！」

何と、近くでウィングロードを走っていたスバルとぶつかりそうになり、それを避けたスバルはを崩すが何とか持ちこたえる。そんなスバルに謝罪しながら、ナツとハッピーは追って来る魔力弾から逃げる。

「良い反応だけど、ナツ君は注意力が足りないかな…」

「ナツ！バカ、危ないでしょ！！」

「わりいわりい」

「待ってなさい。今撃ち落とすから」

そう言つてティアナはアンカーガンを構え、ナツを追っている魔力弾に向かってトリガーを引く。だが……

「いつ!？」

弾は発射されず、パシュツと言う情けない音しかしなかった。

「おおおい！ティアナ！援護はどうしたー!？」

「オイラもう無理ー!！」

「この、肝心な時に!！」

ティアナはすぐに別の弾を装填し、今度こそ魔力弾を放った。

「やっと来た！ハッピー、上昇だ!！」

「あいさー!！」

ティアナの援護が来たのを見計らつて、ハッピーは大きく羽を広げて急上昇し、なのはの魔力弾を回避する。

すると、ナツの援護の他にもなのはに数発向かっていた。それをどこか嬉しそうな表情で見っていたなのはの後ろで、エリオとキャラロが魔法陣を展開していた。

「……………疾風の翼、若き槍騎士に、駆け抜ける力を」

「Exact Acceleration」

キャラロが詠唱を終えると、キャラロのデバイス『ケリュケイオン』の宝玉が輝いた。

そしてキャラロが腕を払うと、それと同時に前にいたエリオの魔法陣が光を放ち、エリオのデバイス『ストラダー』の噴射口から勢いよく炎が出てくる。

「あの、かなり加速がついちゃうから、気を付けて！」

「大丈夫！スピードだけが取り柄だから。いくよ！ストラダー！」

その言葉に応じてさらに炎が上がった。

その頃なのはは、ティアナの魔力弾を軽やかに避けながら状況を見

「エリオ！」

「外した！？」

全員が呆気に取られていると、爆煙の中からはがでてきた。

「惜しかったね、バリアを抜けるにはもう少しパワーが足りなかったかな」

なのはのその言葉を聞いたメンバーは表情を暗くした。

「……………フフッ」

ティアナを除いて……………

すると……………

「まだ終わってねえぞー！！」

『っ！！？！』

上空からそんな声が響き、それに反応した全員はそちらに視線を向ける。そこには、ハッピーに抱えられたナツがいた。

「オレが決めてやらあああ！！」

「行けええ！ナツー！！！」

そう言ってハッピーは掴んでいたナツの服を放す。そうになると、ナツの身体は必然的に落下する。

「っおおおおおお！！！」

ナツは雄叫びを上げると、ナツの全身が炎に包まれる。それを見たなのはは目を見開いた。

「（ナツ君の魔力が、さっきより上がってる！？！？どうして……っ！！）」

そこで、なのはは目に映ったフリードの姿を見て思い出した。

「(さっきのフリードの攻撃は、私を狙うためじゃなくて、その炎をナツ君に食べさせて魔力を回復させるため!!!)」

そう、先ほどフリードがなのはに向かって放った火球は彼女を攻撃するためではなく、ナツの魔力を回復させるためなのであった。

「本当はこんな一か八かの作戦はしたくなかったけど……ナツ! 決めなさい!」

「おおおおう!!」

ティアナの言葉を聞いたナツはもう一度雄叫びを上げる。

「魔力全開!!! 火竜の……」

そして、最大の攻撃を放った。

「けんかく 剣角!!!」

その瞬間、先ほどよりも大きな轟音が響き渡る。

「「「「……………」」」」

全員が固唾を呑んで見守る中、爆煙の中から出てきたのは……

「……………」

笑みを浮かべたナツだった。そして、その笑みを見た全員はすぐにその意味を理解した。

そして、次に爆煙から出てきたのはバリアジャケットが少しボロボロになったのはだった。

『Mission Complete』

「お見事。ミッションコンプリート」

それを聞いたメンバーの顔に歓喜の色が浮かぶ。

「じゃあ、今朝はここまで。一旦集合しよう」

「あはは」

「キュル…キュクル…」

「ん？フリード、どうしたの？」

「ん？おい、何か焦げくせえぞ」

「そういえば…」

「スバル！あんたのローラー！」

「へ？」

ティアナに指摘されてスバルの足元を見ると、そこには火花が出て、今にも壊れそうなローラーがあった。

「ああ！うわっ、ヤバッ！あっちゃ〜…しまった、無茶させちゃった〜」

「オーバーヒートかな？」

「たぶん、ナツとぶつかりそうになったあの時じゃない？」

ハッピーの言葉に、なのはの攻撃を回避したナツがスバルとぶつかりそうになったシーンを思い出す。

「すまねえスバル……」

「ううん、いいよ。後でメンテスタッフの人に見てもらおうから」

謝罪するナツをスバルは笑顔で許す。

「ティアナのアンカーガンも結構厳しい？」

「あ、はい……。騙しだましです」

「みんな訓練にも慣れてきたし、そろそろ実戦用の新デバイスに切り替えかなあ」

「新……」

「デバイス…？」

なのはの言葉にメンバー全員が首を傾げていた。

訓練所からの帰り道、ナツたちは肩を並べて歩いていた。

「じゃあ、一旦寮でシャワーを使って、着替えてロビーに集まろうか」

「」「」「はい！」「」「」

「シャワーよりオレは腹減ったなあ…」

「あい。まだ朝ごはん食べてないもんね」

ナツとハッピーがそんな会話をしていると、こちらに向かってきている一台の車に気がついた。そしてその車は全員の前に止まると、中からフェイトとはやてが顔を出した。

「フェイトさん、八神部隊長！」

「すごい！これフェイト隊長の車だったんですか？」

「そうだよ。私情での移動手段なんだ」

「みんな、練習の方はどないや？」

「あゝ、ははは…」

「頑張ってます」

「エリオ、キャロ、ごめんね。私は二人の隊長なのに、あんまり見てあげられなくて……」

「あ、いえ、そんな…」

「大丈夫です」

申し訳無さそうな顔をするフェイトにエリオとキャラロは笑顔で返す。

「ナツ君はどうや？機動六課での生活には慣れたか？」

「うーん……やっぱり仕事がねえとイマイチ調子が狂うんだよなあ」

「あい。でもこの世界ではクエストがないからしょうがないよナツ」

ナツとハッピーとはやてが会話していると、なのはが口を開いた。

「5人ともいい感じに慣れてきてるよ。いつ出勤があっても大丈夫」

「そーかあ、それは頼もしいなあ」

「2人はどこかにお出かけ？」

「うん…。ちょっと6番ポートまで」

「教会本部でカリムと会談や。夕方には戻るよ」

「私は昼前に帰ってくるから、お昼はみんなで一緒に食べようか」

「「「はい!」「」「」

「ほんならなあ」

はやてがそう言うと、二人を乗せた車はそのまま走り去り、新人四人は敬礼をしてそれを見送ったのだった。

つづく

初出勤

フェイトとはやてと別れた後、シャワーを浴び終わったナツとエリオ、そしてハッピーとフリードはロビーで女性陣を待っていた。

「みんな、まだかなあ……」

「キュル」

「ったくよー、何でシャワー浴びるだけでこんな時間かかるんだよ」

「仕方ないよナツ。女の子には色々あるんだってルーシイが言ってたよ」

イラつくナツをなだめるハッピー。すると、エリオがナツに声をかける。

「あの、ナツさん」

「ん？何だよエリオ？」

「前から聞いたかったんですけど、妖精の尻尾フェアリーテイルってどんな所なんですか？」

エリオから妖精の尻尾フェアリーテイルのことを尋ねられたナツは嬉しそうな顔をしながら答える。

「妖精の尻尾フェアリーテイルは、オレたちの家だ」

「家…ですか？」

「おう。オレやハッピーを含めたギルドのみんなは家族みてーなんだからな。だから、妖精の尻尾フェアリーテイルはオレたちにとって家であり、帰るべき場所なんだ。なっ、ハッピー」

「あい！」

「家族ですか…いいですね、そういうの……」

ナツの話聞いたエリオの表情はどこか悲しげだった。

「エリオ？」

そんなエリオの表情を見て、首を傾げるナツ。すると、エリオが再び口を開く。

「聞いてくれますか？ 僕の話……」

エリオのその言葉にナツとハッピーが頷くと、エリオは自分のことをつらつらと話し始めた。

自分は人口生命体であること。実の親だと信じていた人に裏切られ、捨てられたこと。その後も研究施設での非人道的な扱いを受け、一時期重度の人間不信に陥っていたことを……

「だから僕はナツさんが羨ましいです。僕は家族と言う言葉にまったく縁がありませんでしたから……」

そう言ってエリオは顔を伏せる。その表情は今にも泣きそうな悲しい表情だった。そんなエリオに対してナツは……

「なーに言っただよ？」

と言った。

「え？」

意外な言葉に呆気に取られるエリオ。そんなエリオを無視してナツは言葉を続ける。

「他のヤツと生まれ方が違ってくれえでメソメソ言っでんじゃねえよ。お前は今、ここで、こうして生きている。それで良いじゃねえか」

「っ……」

ナツの言葉にエリオの目が大きく見開かれる。

「それによ、ウチのギルドマスターであるじっちゃんと言っただ。『一人じゃ不安だからギルドがある、仲間がいる』ってな機動六課も同じじゃねえのか？」

「っ！？」

「家族に縁がないなんて寂しいこと言うんじゃないよ。機動六課をギルドに例えるなら、オレたちは仲間であり、家族だろ？ エリオ」

「キユル」

「もちろん、フリードもな」

「っ…ナツ…さん……」

ナツの言葉を聞いたエリオは目から大粒の涙を流す。

「泣くんじゃねえよ。男だろ？」

「グス……はい……！」

そう言って涙を拭い、笑みを浮かべるエリオ。釣られてナツとハッピーも笑みを浮かべる。すると……

「ナツ……！！！」

「どわあああ！！！！？」

「な、ナツさん!?!」

「ナツ!?!」

突然ナツの背後からスバルが勢い良く飛びついてきたのだ。その勢いにナツは耐え切れず、前のめりに倒れた。

「いてー!?!何すんだスバル!?!?!」

起き上がったナツは当然スバルに怒鳴りかかるが、当の本人であるスバルは満面の笑みを浮かべている。

「ナツ!さっきの言葉、私感動したよ!?!」

「はあ!?!」

スバルの言葉に呆気に取られるナツ。見ると、スバルの後ろにはそっぽを向いているティアナと目尻に涙を溜めたキャロの姿があった。

「お、お前ら今の話聞いてたな!?!?!」

「ぐ、偶然聞こえただけよ！でもまさか、アンタがあんなこと言うなんてね……………」（ボソツ）ちよつと感動しちゃったじゃない」

最後の方のティアナの呟きは誰にも聞こえなかった。

「ってか、お前はいつまで引つ付いてんだよスバル！」

「いいじゃんーん！私たち家族なんだし、ナツもお姉ちゃんに甘えなよー」

「何でお前がオレの姉気取りなんだよ！？どっちかつーとお前は
この中で一番末っ子だろ！！」

「ええ！？私エリオとキャラよりも下なの！？」

「主に精神年齢的に」

「間違っではないわね」

「あい」

「三人とも酷いよー！ー！！」

この漫才のようなやり取りがしばらく続いたあと、一同はデバイスルームへと向かった。

「うわぁ、これが…」

「私達の新デバイス…ですか？」

「そーです！設計主任あたし！協力、なのはさん、フェイトさん、レイジングハートさんとリイン曹長！」

「はあ……」

スバルとティアナの前にあるのは、青い宝石を模したペンダント上のデバイスと、白地に赤いXマークを円が囲み、中央に真っ直ぐ縦線が伸びているカード上のデバイス。

「ストラーダとケリュケイオンは変化無し……かな？」

「うん、そうなのかな？」

エリオとキャロの前にあるのは、紫色の腕時計と桃色の宝玉を模したプレスレット。

「違いまーす！」

急にラインが出てきて叫んだ。

「変化無しは外見だけですよ！」

「ラインさん！」

「はいです！二人はちゃんとしたデバイスの使用経験は無かったですから、感触に慣れてもらうために基礎フレームと最低限の機能だけで渡してたです！」

「あ、あれで最低限…？」

「ほんとに…？」

自分達がさっきまで使っていたデバイスが最低限の機能しか持っていなかったことにキャロとエリオは驚く。

「皆が使うことになる四機は、六課の前線メンバーとメカニックス
タッフが、技術と経験の粋を集めて作った最新型！部隊の目的合わせて、そしてエリオやキャロ、スバルにティア、個性に合わせて作られた文句無しに最高の機体です！」

ラインがそう言うとデスクの上にある四機のデバイスがラインの周りに集まり始める

「この子供はみんなまだ生まれたばかりですが、色んな人の思いや願いが込められて、いっぱい時間をかけてやっと完成したです！」

そしてリインはティアナ達にそれぞれデバイスを渡す。

「だから唯の道具や武器と思わないで、大切に。だけど性能の限界までおもいつきり、全開まで使ってあげて欲しいです」

「うん、この子たちもね。きっとそれを望んでるから」

リインとシャーリーが四人にデバイス説明をしているころ、ナツとハッピーは……

「何かすげえ色々あるなー」

「あい。オイラたちの世界と違って凄い技術が進んでるんだね」

特に自分のデバイスを持たないため、説明はまったく聞かず、デバイスルームの機械を物珍しそうに見て回っていた。

因みに、以前ナツはシャーリーに「デバイスを持たない？」と言われたが、ナツは「そういうめんどくせーのはいらねえ」と断っている。

「ゴメンゴメン、お待たせ」

すると、部屋になのはが入って来た。

「なのはさーん！」

「ナイスタイミングです。丁度これから機能説明をしようかと」

「そう。もうすぐに使える状態なんだよね？」

「はい！」

なのはの問いにラインが元気よく答える。

「まず、その子たちみんな何段階かに分けて出力リミッターを掛けるのね。一番最初の段階だと、そんなにびっくりするほどのパワーが出るわけじゃないからまずはそれで扱いを覚えて行って」

「で、各自が今の出力を扱いきれるようになったら、私やフェイト隊長、ラインやシャーリーの判断で解除していくから……」

「ちょうど、一緒にレベルアップしていくような感じですね」

「あつ、出力リミッターって言うと、なのはさんたちにも掛かっ
ますよね？」

「ああ、私達はデバイスだけじゃなくて、本人にもだけどね」

「「「えっ!?!」」」

「リミッターが、ですか？」

「「「???」」」

なのはの言葉を聞いて驚愕するメンバー。しかし、ナツとハッピー
は話についていけず、首を傾げていた。

「能力限定って言ってね、うちの隊長と副隊長はみんなだよ。私と
フェイト隊長、シグナム副隊長にヴィータ副隊長……」

「はやてちゃんもですね」

「うん」

「えっと……」

なのはが出力リミッターのかかっているメンバーの名前を挙げていく。ティアナはすぐにその理由を理解したのだが、その隣のスバル、エリオ、キャラの三人はまだ唖っていた。そこへシャーリーが追加の説明をする。

「ほら、部隊ごとに保有できる魔導師ランクの総計規模って決まってるじゃない？」

「あ……え……そうですね……」

「一つの部隊で優秀な魔導師を多く保有したい場合は、そこに上手く収まるよう魔力の出力リミッターをかけるんですよ」

「まあ、裏技っちゃあ裏技なんだけどね」

「うちの場合だと、はやて部隊長が4ランクダウンで、隊長達は大體2ランクダウンかな」

「4つ!? 八神部隊長ってSSランクのはずだから……」

「Aランクまで落としてるんですか」

「はやてちゃんも色々と苦労しています」

リンが少し暗い声で言う。

「私は元々S+だったから、2、5ランクダウンでAA。だからもうすぐ、一人でみんなの相手をするのは辛くなってくるかな」

「隊長さん達ははやてちゃんの、はやてちゃんは直接の上司のカリムさんか、部隊の監査役のクロノ提督の許可がないとリミッター解除が出来ないですし……許可は滅多なことでは出せないそうです」

「……そうだったんですね」

その話を聞いたメンバーは暗い表情をするが、ナツは相変わらず首を傾げていた。

「なあ、つまりどついでのことだ？」

ナツは近くに居たティアナに尋ねる。

「アンタは……！つまり、はやて部隊長、なのはさん、フェイト隊長、シグナム副隊長、ヴィータ副隊長の五人は本来の力を抑えてるってことよ」

「なにい！？ってことはアレか！？オレとシグナムが戦った時、アイツは手え抜いて戦ってたのか！！？」

「えっと、手を抜いたわけじゃないと思うけど……」

なのはが弁明の言葉を口にするが、ナツには聞こえていなかった。

「チクショー！ふざけやがって！！」

そう言ってナツはデバイスルームを出ようとするが、ティアナに止められる。

「待ちなさい！どこに行く気！？」

「決まってるんだろ！もう一度シグナムと戦うんだよ！このままじゃオレの気が収まらねえ！！」

「あなたの気なんて知るか！ってか止めなさい！！」

「はーなーせー！！」

ナツとティアナのこんなやり取りを他のみんなは呆れた表情で見
ていた。すると……

ブーブーブー！

いきなり周りが赤く点滅し、警報が鳴り響いた。

「このアラートって……」

「一級警戒態勢！！？」

「グリフィスくん！！」

『はい！教会本部から出動要請です！』

『なのは隊長、フェイト隊長、グリフィス君。こちらはやて!!』

デバイスルームにあるモニターでグリフィスとは反対側に聖王教会にいるはやてから連絡が入る。空間モニターでフェイトの顔も映し出された

『状況は?』

『教会調査団で追っていたレリックらしきものが見つかった。場所は、エイリム山岳丘陵地帯。対象は山岳リニアレールで移動中』

『移動中って...!』

「まさか...!」

「……そのまさかや。内部に進入したガジェットで、車両の制御が奪われてる。リニアレール車内のガジェットは最低でも30体。大型や飛行型の未確認タイプも出ているかもしれない。いきなりハードな初出動や……なのはちゃん、フェイトちゃん、いけるか?」

『私はいつでも!』

「私も！」

隊長二人は頷く。

『スバル、ティアナ、エリオ、キャロ、ナツ君、ハッピーちゃん、みんなもオツケーか？』

「」「」「はい！」「」「」

「よくわかんねーけど、仕事なんだろう？やってやるぜー！」

「あいさー！！」

『よし、良いお返事や、シフトはA-3。グリフィス君は隊舎での指揮。ラインは現場管制』

「『はい……』」

『なのはちゃんとフェイトちゃんは現場指揮ー！』

「うん！」

『ほんなら……機動六課フォワード部隊、出動！』

「はい！」

「おう！」

「あい！」

『……了解、みんなは先行して。私もすぐに追いかける！！』

『うん！』

この会話を最後に、フェイトとはやてからの通信が切れる。

「おし！燃えてきたあ！！で、どこに向かえば良いんだ？」

ナツのこの言葉で全員はズッコケそうになる。そしてなのはが説明する。

「とにかく私たちはへりで現場に急行するの。みんなついてきて！」

「「「「はい！」「」「」

なのはの指示にメンバーは頷き、なのはの後に続いていく。ナツとハッピーもそれに続くが…

「なあハッピー、へりってなんだ？」

「さあ？」

この二人の会話は誰にも届かなかった。

これが後々ナツにとって大変なことになるとも知らずに……

つづく

星と雷と妖精（前書き）

今回は今までで一番長くなりました。

でも内容はグダグダです。

感想お待ちしております。

星と雷と妖精

機動六課が本格始動して、初めての一級警戒態勢。

ナツ達はへりに乗り込み、現場へと向かって行った。

「新デバイスでぶつつけ本番になっちゃったけど、練習通りで大丈夫だからね」

「はい」

「がんばります」

「エリオとキャラロ、それにフリードもしっかりですよー！」

「はいー！」

「キュー！」

「危ない時は私やフェイト隊長、リインがちゃんとフォローするから、おっかなびびっくりじゃなくて、思いっきりやってみよう」

「「「「はい！」「」「」」

「ナツ君とハッピーも大丈夫……夫？」

ふと、ナツとハッピーの方に顔を向けたなのはは言葉を詰まらせた。
何故なら……

「うぶ……ま、まさかへりってヤツが乗り物だったとは……おぶ……」

「ナツーしっかりー」

苦しそうなナツとそれを励ますハッピーの姿があった。

「ちょ、ちょっとナツ君！どうしたの！？大丈夫！？」

「む……無理……」

「ナツは乗り物に極端に弱いんだ」

「ってことは……乗り物酔い!？」

「あい。いつもの事なのです」

ナツの意外な弱点に驚愕する一同。

「そ、そう。とりあえずナツ君にはコレを渡しておくね」

そう言うと、なのははナツの片耳にイヤホンのようなものを着けてあげた。

「な、なんだこれ？」

「通信機だよ。これでロングアーチの人からの指示が送られるから、それに従ってね」

なのはがナツに説明していると、通信が入った。

『ガジェット反応！空から！！』

『航空型、現地観測隊を補足！』

空間モニターに映し出されたのは、空から現場へ迫ってきている大量のガジェットの姿だった。すると、ここでフェイトから通信が入る。

『こちらフェイト、グリフィス。こちらは現在パーキングの到着。車を止めて現場に向かうから、飛行許可をお願い……』

『了解、市街地都市飛行。承認します』

それを聞いたなのはも行動を開始する。

「ヴァイス君、私も出るよ。フェイト隊長と二人で空を押さえる！」

「ウツス、なのはさんお願いします！！」

ヴァイスはヘリの後部のハッチを開いた。

「じゃ、ちょっと出てくるけど、みんなも頑張ってズバツとやっつけちゃおう」

「……はい!」

四人の返事を聞くと、なのはは開かれたハッチから飛び出し、バリアジャケットを身に纏い、ガジェットのもとへと飛んで行った。

それを見送ったリインが四人に任務の説明を始める。

「任務は2つ、ガジェットを逃走させずに全機破壊すること。そしてレリックを安全に確保すること」

空間モニターを表示し、確保対象であるレリックのある重要貨物室を映し出す

「スターズ分隊、ライトニング分隊で、ガジェットを破壊しながら、車両前後から中央に向かうです。レリックはここ。7両目の重要貨物室。スターズかライトニングのどちらか先に付いた方が、レリックを確保するですよ」

「オイラとナツはどうすればいいの?」

乗り物酔いをしているナツに変わってハッピーが質問する。

「ナツさんとハッピーはリニアの外にいるガジェットを片っ端から破壊してください」

「凄いわかりやすいね」

「壊すのは得意だ！任せ……っぶ……」

意気込むナツだが、やはり乗り物には弱い。

「で……私も現場に降りて、管制を担当するです」

リンも服装を変え、準備をする。すると、ヴァイスから連絡が入る。

『さあて新人ども。隊長さんたちが空を抑えてくれるおかげで、安全無事に降下ポイントに到着だ。準備は良いか！？』

「はい……」

開いたハッチの近くに立っているスバルとティアナが返事をする。

「スターズ3、スバル・ナカジマ」

「スターズ4、ティアナ・ランスター」

「「行きます!!!」」

そう言うと二人は勢いよくハッチから飛び降り、新デバイス、『マツハキャリバー』と『クロスミラージユ』をセットアップし、バリアジャケットを装着して降下して行った。

『次、ライトニング！チビ共、気をつけてな！』

「「はい！」」

スバルとティアナが降下したことで今度はライトニングであるエリオとキャロの番。すると、キャロが不安そうな顔をしていることに気がついたエリオは、キャロに手を差し伸べる。

「一緒に降りようか？」

「え？……うん！」

そんなエリオの言葉にキャロは少し戸惑うが、エリオの真っ直ぐな目を見ると、すぐにその手を取った。

「ライトニング3、エリオ・モンディアル！」

「ライトニング4、キャロ・ル・ルシエとフリードリヒ！」

「キュル！」

「「行きます！！」」

手をつないで降下するエリオとキャロ、そしてフリード。二人も新しくなったデバイス、『ストラーダ』と『ケリュケイオン』をセットアップし、バリアジャケットを装着して降下していく。

『おらナツ！いつまでも腑抜けてねえで、さっさと行って来い！』

「う、うるせえ……言われなくてもわかって……おぶ……」

「仕方ないね」

そう言うとハッピーは自分の背中に翼を生やし、ナツの服を掴んだ。

「行くよナツ！」

「おう！妖精の尻尾の魔導士、ナツ・ドラグニルとハッピー！行くぞおー！！」

「あいさー！！」

そう言って、ナツとハッピーはハッチから飛び出し、他のみんながいるリニアレールへと向かった。

そしてしばらくすると、ナツもリニアレール後部に到着する。と言っても、乗り物に弱いナツがリニアレールの上に立つと大変なことになるので、リニアレールの近くを滑空することになる。

「あれ？ねえ、このジャケットって……」

「もしかして……」

「デザインと性能は、各分隊の隊長さんたちのを参考にしてるですよちょっと少し癖はありますが、高性能です」

四人は自分のバリアジャケットを見て驚いている。そんな四人に、いつの間にかナツの頭にしがみ付いていたリインが答える。

「うわぁ……」

四人の中で特にスバルは憧れであるのはとお揃いなので、感激している。

「っ、スバル！感激はあと！」

ティアナがそう言った瞬間、数体のガジェットが屋根を突き破ってきた。

それを見たティアナはすぐにクロスミラージユを構え……

「シュート……！」

魔力弾を放ち、ガジェットを破壊した。

「オレたちも行くぞハッピー！」

「あいさー！」

そう言うと、ナツとハッピーはガジェットの大群に向かって飛んで行き…

「喰らえ！火竜の鉄拳！！」

炎を纏った拳を叩き込み、一体のガジェットを破壊する。

「まだまだあ！！」

当然それだけでナツは止まらず、さらに拳を振り回し、ガジェットを次々と破壊していく。

「今回は壊す仕事か。楽でいいなハッピー」

「あい。ナツはそう言うのが得意だからね」

「へへ……行くぞおおー!!」

ナツは雄叫びを上げながら、さらにガジェットを破壊し始める。

同時刻・機動六課のロングアーチでは……

『スターズF、4両目で合流。ライトニングF、10両目で戦闘中』

「スターズ1、ライトニング1、制空権獲得！」

「ガジェット？型、散開開始！追撃サポートに入ります」

リンとの通信を開きながら状況をグリフィスへと報告していく通信士メンバー。すると、ちょうどそこへ聖王教会から戻ってきたはやてが走って入ってきた。

「ごめんな、お待たせ」

「八神部隊長」

「おかえりなさい」

「ここまででは比較的順調です」

「うん」

そう聞いたはやては少々安心したように椅子に座る。

「ライトニングF、8両目突入……！」

と、シャーリーがそこまで言うと、彼女は何かに気がついた。

「エンカウント、新型です……！」

そう言うと、モニターには新型のガジェットが映し出される。しかし、シャーリーが気がついたのはコレだけではなかった。

「大変です！数名のアンノウンがりニアに接近中！魔力ランクは……お、オーバーSランクです……！」

『っ……！？』

この言葉にロングアーチ全員に衝撃が走ったのだった。

場所は戻り、リニアレール上空。

「うらあああー!」

相変わらずガジェットを破壊していくナツ。だがその顔には疲労の色が見えていた。

「ハア、ハア……こいつら次から次へと……!」

「あい。キリがないね」

ナツとハッピーは毒づくが、そんなのはお構い無しにガジェットが襲い掛かってくる。

「コンチクショー!喰らえ!火竜の……!」

ナツは大きく息を吸い込み……

「咆哮!!」

灼熱の炎を噴き出し、ガジェットを破壊していく。だが、それでもガジェットの数は一向に減らない。

「ハア、ハア……くそ！」

「ナツ……この状況で凄く言い難いんだけど……」

「なんだ!？」

「変身解けた」

そう言うと同時にハッピーの背中から翼が消滅する。

「え……ええええええ!!？」

そうなるとナツは必然的にリニアの上に落下する。そうやってしま
うと……

「アイスゲイザー
氷欠泉!!!」

「「つ!!!?」」

どこからか声が響き渡り、次の瞬間には全てのガジェットが凍り付いていた。

「この魔法って……」

「ま、まさか……！」

ナツとハッピーが驚愕していると、リニアの上に行くつかのが着地音が響いた。そこには……

「ったく……やっと見つけたと思ったら、情けねー姿だな……ナツ」

上半身が裸の黒髪の青年と……

「ナツさん！大丈夫ですか!？」

長い黒髪をなびかせた小さな少女と……

「だらしないわね、ハッピー」

羽を生やした白いネコがいた。

そしてナツとハッピーはその三人に見覚えがあった。

「ぐ、グレイ!? ウエンディ!?」

「シャルル!?」

そう。この三人はナツと同じ妖精フェアリーテイルの尻尾の魔導士、『グレイ・フルバスター』と『ウエンディ・マーベル』そして『シャルル』であった。

「お、お前らどうして…うぶっ」

「話はあとだ。とりあえずウエンディ、ナツの乗り物酔いを治してやれ」

「はい!」

グレイの言葉に頷くと、ウエンディはナツの側に駆け寄り、手に淡い光を集める。

「トロイア」

そしてナツにその光を流し込む。すると……

「おお？おお！治ったー！！！」

先ほどまでの乗り物酔いが嘘のように元気になった。

『トロイア』とは、ウェンディが得意とする治癒魔法の一つで、対象者のバランス感覚を養わせる魔法である。

「さて、治ったところでナツ。ここは一体どこだ？」

「ああ、ここは……」

と、ナツが言いかけたその時、ナツの耳についている通信機に通信が入った。

『ナツ君！聞こえるか！？はやてや！』

「はやて？？どうした？」

『どうしたやないよ！ナツ君がアンノウンと接触したから心配になって連絡したんやないか！』

「アンノウン？」

はやての言うアンノウンがグレイ達のことだと理解したナツは笑みを浮かべる。

「心配すんな。こいつらはオレと同じ、フェアリーテイル妖精の尻尾の魔導士だ！」

『ええ！？フェアリーテイル妖精の尻尾！？一体どういう……って、それどころやらへん！スバルとティアナのところに新型のガジェットが現れて苦戦してるんや！ナツ君、フォーローに向かってあげて！』

「なにぃ！？わかった！！エリオとキヤロの方は！？」

『それは心配あらへんよ。だって……』

はやてがそう言うと同時に……

「な、なんだアレは！！？」

「ぶ、ドラゴン……！？」

「行くぞハッピー！」

「あいさー！」

そしてハッピーと共にスバルとティアナのもとへ向かおうとするが、グレイ達に止められる。

「待てナツ！どういうことだ！？」

「ちゃんと説明しなさいよ！」

グレイとシャルルは抗議の言葉を言うが、ナツは聞く耳持たない。

「そんなヒマはねえ！オレの仲間が危ねえんだ！！！」

ナツのその言葉を聞いた三人は目を見開く。そして、観念したように息を吐く。

「しょうがねえ…そういつ事なら話は別だ」

「私も手伝います！」

「あとでちゃんと説明しなさいよ！！」

そう言うと、三人はナツのあとに続いた。

「ってかグレイ、服は？」

「おわっ！？いつの間に！？」

「最初からだっただよ」

その頃スバルとティアナは、はやての報告通り、新型のガジェットに苦戦していた。

「どうしよう、ティアア？」

「どうもどうも、援軍が来るまで持ちこたえるしかないでしょ！」

そう言うティアナだが、状況は最悪だった。二人とも先ほどまでのガジェットとの連戦でボロボロになっており、体力も魔力も尽きかけている。さらに新型ガジェットが発する広範囲のAMFフィールドの中にいるため、魔法も使えない状態だった。

「（くっ………とは言ったもの……どうすれば……！）」

ティアナは頭をフル回転させてどうやってこの状況を打破するか考え始める。だが彼女は気付かなかった。

足元にガジェットのコードのような触手があることに……

「っ！しまっ……！！」

気付いた時には既に遅く、そのままコードはティアナを拘束した。

「ティア！？今助け……っ！？」

そんなティアナを助けようとしたスバルも一瞬の隙をつかれ、コードに捕まってしまった。

「くっ……!!」

ティアナは何とか抜け出そうとするが、コードはビクともしない。

すると、ガジェットがティアナに向かって熱線を放とうとする。

「ティアー!!」

「っ……」

スバルの叫びが響き、ティアナが覚悟して目を閉じたその時…

「アイスメイク…？盾^{シールド}？」

ティアナの前に氷の盾が出現し、ティアナを守ったのだ。

「「っ!?!」」

突然の出来事に二人が驚愕していると…

「火竜の…さいが砕牙!?!」

聞きなれた声が響くと、二人のコードは切り裂かれ、解放される。

「よお、大丈夫か?」

見ると、そこにはナツとグレイが立っていた。

「な、ナツ!」

「と…誰?」

グレイと面識のない二人が首を傾げると、ナツが説明する。

「話はあとだ。ここはオレたちに任せろ！」

そう言っつて、ナツとグレイはガジェットと対立する。

「何だよナツ、仲間ってあの女たちか？お前もスミに置けねえなあ」

すると、グレイがからかうような口調でナツに言う。

「くだらねーこと言っつてんじゃねえよバーカ」

「あ？何だとクソ炎」

「ああ！？やんのかタレ目野郎！」

「上等じゃねえかツリ目野郎！！」

何と二人はそのままヤンキーのように睨み合いを始めた。

「ちょっと！あの二人なんで喧嘩してんの！？」

「あい。いつものことなのです」

「本当、懲りないわね」

「あれ！？ハッピーがもう一匹！？」

「ちょっと！一緒にしないでよ！」

突然現れたハッピーとシャルルに驚くスバルとそんなスバルに怒鳴るシャルル。

「あの、大丈夫ですか！？」

そこへ、ウエンディが駆け寄る。

「えっと…君は？」

ティアナに尋ねられたウエンディは慌てて自己紹介をする。

「あ、初めまして！ウエンディと言います。ナツさんと同じ妖精の尻尾の魔導士です」

そう言ってウエンディは右肩に入れた紋章を見せる。

「フェアリーテイル妖精の尻尾の……？」

「はい。とりあえず、お二人の治療を始めますね」

そう言うとウエンディはティアナとスバルの傷を治癒魔法で癒していく。

「うわぁ……」

「凄い……！シャマル先生と同等……ううん、それ以上の治癒魔法……！」

スバルとティアナは自分達の傷が瞬く間に治っていくのを見て驚愕する。

「……そうだ！ナツは！？」

スバルは思い出したようにナツとグレイが居る方を見る。そこには
……

「だいたいテメエはいきなり消えたと思ったら、なにをこんな厄介事に巻き込まれてんだ!？」

「うるせえ！文句があんなら服着てから言えや!！」

殴り合いの喧嘩をしている二人の姿があった。

「ま、まだ喧嘩してる……」

「あのバカ……!！」

そんな二人にスバルとティアナが呆れ返っていると、痺れを切らした新型ガジェットがナツとグレイに向かってコード型の触手を伸ばした。

「あぁっ!！」

「二人とも！危ない！！」

それを見たスバルとティアナはナツとグレイに向かって叫ぶ。

「「ああ？」」

そんな二人を他所に、ナツとグレイは新型ガジェットをギロリと睨むと……

「「邪魔だああ！！！！」」

ナツの炎の刃と、グレイの氷の刃が新型ガジェットを切り裂き、それを喰らったガジェットは爆発を起こして破壊されたのだった。

「い、一撃！？」

「す、凄い！凄いよナツ！！」

と、スバルはナツに駆け寄りつつするが……

「くたばれグレイー!!」

「潰すぞナツー!!」

尚も喧嘩しているナツとグレイを見て、その足を止めた。

「……もうあの二人はほっといて、レリックの回収に向かうわよ」

「……そうだね」

二人は諦めたように溜め息をつく。

「ウエンディだけ？ 貴女も行きましょう。他のメンバーにも紹介したいし」

「あ、はい!」

「オイラたちも行くわ、シャルル」

「そうね」

こうして一同は、喧嘩しているナツとグレイを放って行き、レリックの回収へと向かった。

因みにこの二人の喧嘩は、事件が解決してから駆けつけたなのは止められるまで続いたのだった。

ミッドチルダにあるどこかの研究所。そこでは大型モニターを映し出された機動六課のレリック回収作業を見つめる白衣を着た男がいた。

『刻印ナンバー？、護送態勢に入りました』

「ふうん…」

『追撃戦力を送りますか？』

「止めておこう。レリックは惜しいが彼女たちのデータが取れただけでも十分さ。それにしても、この案件はやはり素晴らしい。私の研究にとって興味深い素材がそろっている上に…」

男性の目の前のモニターに映し出されるのは、なのは、スバル、キヤロの3人とガジェットが送ってきた映像でフェイト、エリオの二人が映し出される。

「ふっ、この子たち、生きて動いているプロジェクトFの残滓を手に入れるチャンスがあるのだからね。しかし……」

次にモニターに映し出されたのは、新型ガジェットを一撃で破壊したナツとグレイの姿だった。

「この二人は一体何者だ？見たところデバイスらしきものは一切使っていないにも関わらず、この威力の魔法を使うとは……もしかしたら、プロジェクトFの残滓よりも、貴重なサンプルになるかも知れないな」

男性がそう言うと同時にモニターに通信が入り、片目に眼帯をした少女が映し出される。

『ドクター』

「ん？どうしたんだい、チンク？」

『研究所の近くで妙な黒髪の男と黒猫が倒れているのを発見したのですが、いかがでしたしょう？』

「ふむ。面白そうだ、連れてきなさい」

『了解』

男性がそう言うと通信が切れる。

「ふっふっふっふっ……」

その後、男性の不気味な笑い声が研究所に響いたのだった。

つづく

事件解決後…（前書き）

今回は短い上に半分ギャグです。

感想お待ちしております。

事件解決後…

機動六課の初出勤は様々な失敗とハプニングの連続であったが、無事に解決することが出来た。

そして事件が終わり、機動六課に帰ってきたナツとハッピーは再会した仲間であるグレイとウエンディ、そしてシャルルを連れて部隊長室へと足を運んだ。

「はやてー入んぞー」

「……ナツ君。一応部隊長の部屋やねんからノックくらいはしようや」

部隊長の部屋にも関わらず遠慮なしにズカズカと入って来たナツにはやては溜め息混じりに言う。そして「まあええわ」と声を漏らすと、視線をグレイたちに向けた。

「とりあえず、初めまして。私がここ、機動六課の部隊長、八神はやてです」

「あ、ああ……オレはグレイ・フルバスターだ」

「ウエンディ・マーベルです」

「シャルルよ」

頭を下げて自己紹介をするはやてに若干戸惑いながらも、自己紹介をするグレイ達。

これは余談だが、グレイの声を聞いたはやては「ヴァイス君と声が似とるな……」と思っていた。

「だいたいの話はナツとハッピーから聞かせてもらった。ここが別の世界であることと、アンタらが二人を保護してくれたってこと。それと、元の世界に戻る手段がないってこともな」

「それで、オレからの頼みなんだけども、帰る手段が見つかるまでこいつらも此処で住まわせて貰えねえか？」

「ええよ」

ナツの頼みをあっさり了承したはやてに一同は目を丸くする。

「おいおい、そんな簡単に許可を出すなんて信用し過ぎじゃねえのか？」

「今日のリニアでの事件で、 그레이さんはうちの局員一人を助けてくれたやろ？それで十分や」

「っ……」

笑顔でそう言うはやてに 그레이は何も言い返せず、言葉を詰まらせた。

「ほな、話も纏まったところで、 그레이さんとウエンディちゃんはどんな魔法を使うんか教えて貰えるか？」

はやての質問にまずは 그레이が答える。

「オレは氷の魔法を使う造形魔導士だ」

「造形魔導士？」

聞き慣れない言葉に首を傾げるはやての問いにハッピーが答える。

「造形魔法って言ってね、魔力に形を与える魔法なんだ。自由の魔法とも呼ばれていて、術者の力次第でいくらでも強くなるんだ」

「へえ、凄いなあ。ウエンディちゃんは？」

「は、はい！私は天空魔法を使います。ナツさんと同じ天空の滅竜ドラゴンスレイヤー魔導士です」

「ドラゴンスレイヤー滅竜魔導士！！？」

エリオやキャロと変わらない年頃の女の子がナツと同じ滅竜魔法を使うことにはやては驚愕する。

「と言っても、私はナツさんみたいに強くないですよ？使える魔法もみなさんをサポートする魔法しか使えませんし……」

「いやいや、それで十分やで。よろしくな、ウエンディちゃん」

「はい！よろしく願います、はやてさん！……」

そう言って、はやてにペコリと頭を下げるウエンディ。

「そついやグレイ、お前らはどうやってこの世界に来たんだ？」

ナツが思い出したようにグレイに質問する。

「ああ、お前とハッピーが行方不明になってから、オレたちギルドは総出でお前たちの捜索を行っていたんだ。んで、オレとウエンディとシャルルが一緒になってお前らを探していたら、突然ウエンディが妙な光に包まれてな」

「妙な光？」

「詳しいことはわかんねえが、とにかくヤバイ感じがしたんで、ウエンディを助けようとオレとシャルルがその光に飛び込んで、気がついたら森の中にいたんだ」

「それで、私たちで森の中を歩いていたら、ナツさんの匂いがしたんです」

ドラゴンスレイヤー
滅竜魔導士であるウエンディはナツと同じく鼻が利くのである。

「んで、ウエンディの鼻を頼りに来てみれば、情けねー姿のお前がいたってわけだ」

「あ？んだとコノヤロウ！」

「何だよ、間違っつてねえだろ？乗り物酔いごときであんなザコ共にやられそうになりやがって」

「テメエやる気がコラアアアア！！！！」

「上等じゃねえかあ！！！！」

そう言つと。二人は早速殴り合いの喧嘩を始めた。

「あーあ、また始まつちやったね」

「本当、どうして懲りないのかしら？」

二人の喧嘩を見て、呆れているハッピーとシャルル。

「あわわ、どじりどじり……」

「ほっときゃいいのよ」

慌てるウェンディにシャルルがそう言う。

すると、ここで全員が予想もしない出来事が起こった。

「やめんか——い——い——い——」

ゴチイイン——！

「くはああ——！？」

「——！？」

何とはやてがナツと 그레이の脳天にゲンコツを落とし、二人の喧嘩を止めたのである。

「いってえ——はやて——！？」

「デメエいきなり何しやがる!？」

当然はやてに食って掛かる二人だが……

「うるさい……」

「(ビクッ)……ごめんなさい……」

はやてのドスの効いた一言で黙らされた。

「凄いや!エルザ以外で二人を止められるなんて!」

「中々やるわね」

「はやてさん……怖い……」

そんなはやてを見て感心するハッピーとシャルルに怯えるウエー
ンデ
イ。

因みに、何故こんなことになったのかと言うと……はやては小さい頃からヴォルケンリッターの四人の守護騎士たちの面倒を見ていたため、僅か10歳にして母親のような生活を送っていたのだ。

そして、ナツとグレイの子供のような喧嘩を見て、彼女の中に眠っている『オカン魂』に火がついたので。

「二人共そこに正座しい！」

「は、はい！」

「ホンマ、いい男二人がしょうもないことで喧嘩なんかして恥ずかしいと……」

二人を正座させ、ガミガミと説教を始めるはやて。大の男二人が同じ年頃の女の子に説教されている姿はとてモシールだった。

この二人が説教から解放されたのは、それから二時間後のことだった。

UJU

進展（前書き）

サブタイトルが思いつかず、結局アニメ通りになってしまいました。

感想お待ちしております。

進展

グレイとウエンディとシャルルが機動六課に保護されてから数日が経ったある日。訓練場に立体映像で映し出される森林地帯では、何かがぶつかり合う轟音が響いていた。

「オラア！いつくぞおおおおお！！」

「っ！！」

グラーファイゼンを構えて身構えるスバルに突撃するヴィータ。

「たあああああああ！！」

「マツハキヤリバー！！」

[Protection]

「でえやあああああ！！！」

「ぐっ……くう……うう……！！」

ヴィータの強烈な一撃をリボルバーナックルを装備した右手に張ったバリアで受け止める。それでもヴィータの重い一撃により、スバルはどんどん後ろに押され始める。

「でえりやあああああ！！！」

「うあああああ！？ぐう！？」

もう一度振りかぶったヴィータの一撃でスバルは勢いよく吹き飛ばされる。そして真後ろにあった木に思い切り背中から激突した。

「ふむ」

「いったたあ……」

「なるほど。やっぱりバリアの強度自体はそんなに悪くねえな」

「えへ……ありがとうございます」

「アタシやお前のポジション……フロントアタッカーはな、単身敵陣に飛び込んだり、最前線で防衛ラインを守ったりが主な仕事なんだ。防御スキルと生存能力が高いほど、攻撃時間を長く取れるしサポート陣に頼らねえで済む……って、これはなから教わったな？」

「はい、ヴィータ副隊長！」

「受け止めるバリア系、弾いて反らすシールド系、身にまもって自分を守るフィールド系。この3種を使いこなしつつ、ポンポンぶん飛ばされねえ様に下半身の踏ん張りとおマツハキャリバーの使いこなしを身につける」

「頑張ります！」

「I・L・L・learn.（学習します）」

「防御ごと潰す打撃は、アタシの専門分野だからな。グラーファイゼンにぶっ叩かれたくなかったらしっかり守れよ」

「はい!!」

そんなスバルとヴィータとは離れた場所では、エリオとキャロがフェイトの指導を受けていた。

「エリオとキャロはスバルやヴィータ、それにナツみたいに頑丈じゃないから、反応と回避が最重要。例えば……」

自分の位置からすぐ近くに居る狙撃スフィアから低速で撃たれる攻撃をステップを踏むように避けていくフェイト。

「まずは動き回って狙わせない」

フィールド内を動きまわるフェイトはスフィアに狙わせないように縦横無尽に走り回る。そして一旦立ち止まると、スフィアが攻撃を放つ。が、フェイトはそれをすぐに避ける。

「攻撃が当たる位置に長居しない……ねっ？」

「はい!！」

エリオとキャラロは返事を返す。

「これを低速で確実に出来るようになったら、スピードを上げていく……」

スフィアの動きは先ほどとは違い、弾速の速度が速くなり、フェイトはそれをより早い動きで回避する。そして足を止めると、全スフィアがフェイトを囲み、一斉に攻撃をする。

「あつ!！」

爆発が起こり、フェイトがやられたと思った二人は声を上げる。する……

「こんな感じでね……」

エリオとキャラロの後ろから聞こえる聞き慣れた声。振り返れば二人

の後ろに立っていたのは無傷で微笑んでいるフェイトの姿があった。それを見たエリオとキャロはフィールドへと目を向けると、先ほどまでフェイトがいた場所には、今の位置まで地面が抉れていた。

「……す、凄い……」

「今のもゆつくりやれば、誰でも出来るような基礎アクションを、早回しにしているだけなんだよ」

「「は、はい」「」

「スピードが上がれば上がるほど、感やセンスに頼って動くのは危ないの……ガードウイングのエリオはどの位置からでも攻撃やサポートを出来るように、フルバックのキャロは素早く動いて、仲間の支援をしてあげられるように、確実に有効な回避アクションの基礎をしっかり覚えていこう」

「「はい……」「」

「キユク」

その頃、さらに別の場所では、いくつもの爆発音が響き渡る。そこでは、ティアナがなのはの教導を受けていた。

「うん、いいよティアナ。その調子！」

「はい！」

ティアナは返事をしながらも、なのはから放たれる様々な魔力弾を打ち落としていった。

「ティアナみたいな精密射撃型はいちいち避けたり受けたりしてたんじゃ、仕事ができないからね」

「っ！？バレット！レフトV、ライトRF！」

「AIIII r i b a c t t」

なのはが近くに遭った魔力弾を動かしたのでティアナはすぐに対応させようとするが、その背後から別の魔力弾が飛んでくる。

「あっ…!!」

それに気付いたティアナは横に飛んで、さらに地面を転がってそれを避ける。

「ほら！そうやって避けちゃうと後が続かない！」

なのはは叱咤しながらも、さらに魔力弾を放つ。

「くっ…!!」

すぐに体勢を立て直したティアナなのはが放った魔力弾を打ち落とす。

「そう、それ！足は止めて視野を広く！射撃型の真髄は……」

「あらゆる相手に弾丸をセレクトして命中させる！判断速度と命中

精度!!」

「Reload」

「チームの中央に立って誰より早く中・長距離を制す。それが私やティアナのポジション、センターガードの役目だよ」

「はい!!」

「はい!!」

「楽しそうだよな」

「初出勤が良い刺激になったようだな」

「いいつすねえ、若い連中は」

「台詞がジジ臭えぞヴァイス」

新人達の様々な訓練。それを空間モニターで見ているナツ、グレイ、シグナム、ヴァイスの四人。

「おいおいグレイ、ジジ臭いはねえだろ？オレはまだ二十代だぜ？」

「だったらもうちょっとそれなりの台詞を言っただな」

「……………」

グレイとヴァイスのそんな会話をジーツと見ているナツとシグナム。

「ん？何だよお前ら？」

「いや、お前たち二人の声は本当に似ていると思ってな」

「目え閉じて聞いてつと、独り言にしか聞こえねえぞ」

「「ほつとけ」」

ハモるグレイとヴァイスだが、声が似ているので一つの声にしか聞こえない。

「声の話はさて置き、シグナム姐さんは参加しないんで？」

「私は古い騎士だからな。スバルやエリオのミッド式と混じった近代ベルカ式とは勝手も違うし、剣を振るうしかない私が、バックス型のティアナやキャロに教えられることもないしな。ま、それ以前に私は人に物を教えると言うガラではない。戦法など、届く距離まで近づいて斬れ、ぐらいしか言えん」

「ははっ、すげえ奥義ではあるんすけど……確かに、連中にはちいっと早いっすね」

「そうか？すっげえ分かりやすくて良いと思っぞ？」

「そりやお前が単純バカだからだろ？」

「んだとグレイー!!」

「やる気か!?!」

一触即発の雰囲気になる二人。見かねたシグナムは「ハア……」と溜め息をつき……

「主はやてに報告するぞ」

と言った。

「ぐっ……チィッ……」

すると、二人は舌打ち混じりに喧嘩を止めた。どつやら前回はやての説教が身に染みているようである。

「時にフルバスターよ」

「あ？何だよ？」

「貴様、服はどうした？」

「ああ！？いつの間に!？」

いつの間にかグレイは先ほどまで着ていた上半身の服を脱ぎ捨てていたのだった。

「お、ウェンディにシャルルにハッピー」

「あ、ナツさんにグレイさん！」

ナツとグレイが昼食を取るために食堂に行くと、入り口前で偶然ウエンディたちと遭遇した。

「お前らも今からメシか？」

「はい」

「んじゃ、一緒に行くか」

「はい！」

グレイの提案にウエンディは快く了承し、一同は食堂に足を踏み入れた。

「そっぴゃ、ウエンディたちは訓練中は何してたんだ？」

「私はシャマル先生にこの世界の治癒魔法を教えてもらっていたんです」

「オイラは二人の付き添いだよ！」

「頼んでないけどね」

「ガン！」

シャルルの言葉にショックを受けるハッピー。

そんな会話をしている間に一同は大量の料理を受け取っていた。

「あ、あそこに居るのフォワードのみなさんとシャーリーさんじゃないですか？」

「お、本当だ」

と、ウエンディが指差す方にはFWメンバーとシャーリーがパスタを食べていた。

「あ、ナツ達だ！」

すると、スバルもナツ達に気がついた。

「よおお前ら。何の話をしてたんだ？」

ナツたちは近くのテーブルに腰を下ろしながら尋ねた。

「私達の故郷の話よ」

「ナツ達の故郷はどんなところなの？」

スバルが尋ねると、ナツはポリポリと頭を掻きながら答える。

「故郷って言われてもなあ……オレは気がついた時にはもうイグニールに拾われてたからなあ」

「私も同じです。物心がついた時からグランディーネと一緒にいました」

「ああ、そう言えばナツとウェンディはドラゴンに育てられたんだよね？」

「前から思ってたけど、その話本当なの？何か胡散臭いのよねえ」

ティアナがそう言うと、ナツとウェンディは凄まじい剣幕でティア

ナに迫る。

「イグニールは居るっつうの!?!」

「私たち嘘なんてついてません!?!」

「うっ……わ、悪かったわよ……」

あまりの剣幕にティアナは素直に謝罪する。すると、 그레이が口を開く。

「まあ、今のオレ達にとって故郷は妖精の尻尾フェアリーテイルってことだ」

「だな!」

「ですね!」

「あい!」

「…そうね」

그레이の言葉に妖精の尻尾組みは笑い合う。

「妖精の尻尾フェアリーテイルかあ……行ってみたいなあ」

スバルの言葉にナツが反応する。

「おっ、スバル！妖精の尻尾フェアリーテイルに入りてえのか！？」

「いや…入りたいかどうかは別にして、いつもナツが楽しそうに話してるからどんな所か興味があるんだあ」

「僕もです！」

エリオも手を上げて共感を示す。

「んじゃあみんなで来いよ！妖精の尻尾フェアリーテイルに！！」

「どつやってよ？帰る手段がないからアンタ達は此処に居るんでし
よ」

ティアナの言葉にナツは「うっ」と声を漏らす。

「えっと……ど、どうにかしてだ！..！」

「なんだよそりゃ」

『あははははははは……!』

その後、食堂には楽しそうな話し声が響いていたのだった。

つづく

ホテル・アグスタ（前書き）

今回はかなり長いです。+グダグダです。

感想お待ちしております。

ホテル・アグスタ

ミッドチルダ 首都南東地区

その上空を飛行する一台のヘリ。それに搭乗しているのはなのは、フエイト、はやての隊長陣。ナツ、グレイ、ウエンディの妖精の尻尾組。そしてスバル、ティアナ、エリオ、キャロの新人メンバー。さらにはシャマル、ザフィーラ、リインが乗っていた。

因みにハッピーとシャルルは六課で留守番。

「ほんなら改めて、ここまでの流れと任務のおさらいや。これまで謎やったガジェットドローンの製作者及びレリックの収集者は現状ではこの男……」

モニターには、一人の男性の画像が映し出される。

「違法研究で広域指名手配されている次元犯罪者…ジェイル・スカリエッティの線を中心に捜査を進める」

「こつちの捜査は主に私が進めることになるけど、みんなも一応覚えておいてね」

「……はい」「」

フェイトの言葉に新人メンバーは返事をする。

「で、今日これから向かう先はここ、ホテル・アグスタ」

「骨董美術品オークションの会場警備と人員警護。それが今日のお仕事ね」

「取引許可の出ているロストロギアがいくつも出品されるので、その反応をレリックと誤認したガジェットが出て来ってしまう可能性が高い。とのことで、私たちが警備に呼ばれたです」

「この手の大型オークションだと密輸取引の隠れ蓑にもなったりするし、色々油断は禁物だよ」

「現場には昨夜からシグナム副隊長とヴィータ副隊長、他数名の隊員が張ってくれてる」

モニターには警備をしている副隊長一名が映し出される。

「私たちは建物の中の警備に回るから、前線は副隊長たちの指示に従ってね」

「「「はい！」「」「」

なのはの指示に返事をする四人。

「フェアリーテイル妖精の尻尾のみなさんもそれでええか？」

はやての質問に全員（ダウンしているナツ以外）が頷いた。

すると、キャラロが手を上げて向かいに座っているシャマルに質問する。

「あの、シャマル先生。さっきから気になってたんですけど、その箱って……？」

キャラロはシャマルの足元にある箱を指差す。

「ん？ああ、これ？ふふっ……隊長達とグレイ君のお仕事着」

「は？」

シヤマルは楽しそうに微笑みながら言うと、グレイが素っ頓狂な声を上げた。

「んだそりゃ？オレは聞いてねえぞ」

「ふふっ、向こうに着くまでの秘密よ」

そう言ってシヤマルはグレイの質問には答えず、そのままホテル・アグスタに向かう形となった。

ホテル・アグスタ。

その受付では長蛇の列が出来ており、オークション関係者がIDカードを提示しながら受付を済ませていく。

「あつ……!!」

すると、受付の男性が一枚のIDを見て小さく声を上げ、その人物達を見た。

「こんにちは、機動六課です」

それは綺麗なドレスと少しの化粧で美しく着飾ったなのは、フェイト、はやて。そして黒いタキシードに身を包んだグレイだった。

受付を済ませた四人はなのはとはやて、グレイとフェイトの二手に分かれ、オークション会場の警備の点検を始めた。

「まったく、何でオレまでこんな格好しなきゃいけないんだ？」

「ふふ、似合ってるよグレイ」

自分の着ている服を嫌そうに見るグレイと素直に褒めるフェイト。

因みにこの役に何故グレイが選ばれたかと言つと……

ナツ 中で絶対暴れる。

ウエンデイ まだ早い。

と言つ消去法である。まあそれでも多少の不安があるのだが…

「グレイ、絶対服を脱いじゃダメだよ？」

フェイトはグレイの服を脱がないように注意する。

「わかってるよ。さすがにこんな場所で脱げるわけねえだろ」

と、そう言つグレイの上半身は既に裸だった。

「言ってるそばから服！」

「おわっ！しまった！！」

グレイは慌てて脱ぎ捨てていた服を拾う。

「わりいわりい、自分でも無意識のうちに脱いじまうんだよな」

「わ、わかったから早く服を着て…／＼／＼」

フェイトは顔を赤くしてグレイの上半身から目を逸らす。

「？なに赤くなってんだよ？」

「い、いいから早く！！／＼／＼」

「へいへい」

フェイトの必死の言葉にグレイは頷きながら服を着なおす。

「で、オークションが始まるまで、あとどれ位なんだ？」

「あ、ちょっと待って。バルディツシュ？」

「Three hours and twenty-seven minutes. (3時間27分です)」

グレイの質問にバルディツシュが答える。

「そうか。そんじゃあ次は向こうを見回ろつぜ」

「あ、うん」

そう言ってグレイが歩き出すと、フェイトはそれについていった。

「あれ？」

「先生、どうかしましたか？」

「ああ……いえ……」

二人が通り過ぎたあと、金髪の青年と緑色の髪の青年がそんな会話をしていた。

その頃、外回りをしているスバルとティアナは別々の場所を警備しながら念話で会話していた。

《でも今日は八神部隊長の守護騎士団、全員集合か》

《そうね……アンタは結構詳しいわよね？八神部隊長とか副隊長たちのこと》

《うん。父さんやギン姉から聞いたことくらいだけど、八神部隊長の使ってるデバイスが魔導書型で、その名前が【夜天の書】っていうこと。副隊長達と、シャマル先生、ザフィーラは八神部隊長個人が保有してる特別戦力だったこと。で、それにリイン曹長を合わせて6人揃えば無敵の戦力ってこと》

スバルはちょうど近くで魔方陣を展開して警戒しているリインを見ながらティアナに自分の知っていることを伝える。

《ま、八神部隊長達の詳しい出自とか能力の詳細は特秘事項だから、私も詳しくは知らないけど……》

《…レアスキル持ちの人はみんなそうよね……》

《ティア、何か気になるの?》

ティアナの意味深な言葉にスバルは尋ねる。

《別に……》

《そう?じゃあまた後でね》

そう言つてスバルは念話を切つた。途端に、ティアナは表情を少し険しくさせた。

「（六課の戦力は、無敵を通り越して明らかに異常だ。八神部隊長がどんな裏技を使ったのか知らないけど、隊長格全員がオーバース…副隊長でもニアSランク…他の隊員達だつて前線から管制官まで未来のエリート達ばかり。あの歳でもうBランクを取つてるエリオとレアで強力な竜召喚士のキャロは2人ともフェイトさんの秘蔵っ子。危なっかしくはあつても潜在能力と可能性の塊で優しい家族のバックアップもあるスバル。そして、さらに異常なのがナツ達、フェアリーテイル妖精の尻尾）」

ティアナは、フェアリーテイル妖精の尻尾のメンバーを思い浮かべる。

「（バカだけど圧倒的な破壊力のある魔法を使うナツ。氷の魔法を自由自在に使つて臨機応変に戦うグレイさん。二人のような攻撃力はないけど、治療魔法ならシャマルさんと同等の力を持つウェンディ……やっぱり、うちの部隊で凡人は私だけか……）」

ティアナの心の中で劣等感が生まれる。

「（だけど、そんなの関係ない！私は、立ち止まるわけにはいかないんだ！）」

ティアナはそう決意すると、再び見回りを開始した。すると……

「ぐおー……ぐがー……」

近くの草むらから盛大なイビキが聞こえてきた。

それに気がついたティアナは聞き覚えのあるイビキに「まさか……」
と呟きながらガサガサと草を掻き分ける。するとそこに居たのは……

「やっぱり……」

ティアナの予想通りの人物、ナツが眠っていた。

「この……！起きなさいバカナツ！……」

ガァン！

「いてええええ……！！」

ナツの頭にゲンコツを落とし、叩き起こすティアナ。

「何すんだよ！」

「それはこっちの台詞よ！大事な警備中になに居眠りしてるのアンタは！！？」

怒鳴るナツにティアナも怒鳴り返す。

「だってよお、なんも起きねえからヒマなんだよ」

「何も起こさせないために私たちが来てるの！本当にもう！！」

「……なあティアナ」

「なによ！？」

「オメエ、何か悩んでねえか？」

「…え？」

ナツの言葉に目を丸くするティアナ。

「な、なによいきなり？」

「いや、何となくだけだよ……悩みがあるなら言えよな。オレ達、仲間だろ？」

「っ……」

ナツのそんな言葉にティアナは目を見開くが、すぐに顔をしかめ……

「……ないわよ悩みなんて！憶測で変なこと言わないで！！」

と、怒鳴ってナツに背を向けてそのまま歩き去ってしまった。ナツはそんなティアナの背中をジッと見送ることしか出来なかった。

「ティアナ……ん？」

すると、ナツは鼻をクンクンと動かす。

「この匂いは……」

ナツはそう呟くと、一目散にその場から駆け出した。

ホテル・アグスタから数十キロ離れた森の中。そこにはフード付きのコートを着た男性と少女の二人組が手を握り静かに立っていた。

「…あそこか。お前の探し物はここにはないのだから？何か気になるのか？」

「……うん」

男の問いに少女はうなずく。すると、少女の指に虫のような機械が止まり、何かを訴えかけているかのように身体を動かす。少女はそれを理解し、男に伝える。

「ドクターのオモチャが…近付いて来てる、って」

ホテルの屋上で警備をするシャマル。すると、彼女の指に嵌められた指輪が光を発する。

「っ！クラーヴイントのセンサーに反応。シャーリー！」

『はい！……来た来た……来ましたよ！』

『ガジェットドローン、陸戦？型。機影30……35……』

『陸戦？型……2……3……4……』

その連絡を受けたシグナムは一緒に居たエリオとキャロとウェンディに指示を出す。

「エリオ、キャロ、ウェンディ、お前達は上へあがれ。ティアナの指示で、ホテル前の防衛ラインを設置する」

「「「はい！」「」」

「ザフィーラは私と迎撃に出るぞ」

「心得た」

ザフィーラがいきなり声を発した事に3人は驚く。

「ザフィーラって、しゃべれたの？」

「びっくり」

「本当……」

「守りの要はお前たちだ。頼むぞ……」

「うん、うん……」

「がんばる!!」

「私も頑張ります!!」

「前線各員へ。状況は広域防御戦です。ロングアーチ1の総合回線と合わせて私、シヤマルが現場指揮を行います!!」

「スターズ3、了解!!」

「ライトニングF、了解!!」

「スターズ3、了解!!」

各々が外へと向かっていく中、最初から外にいたティアナは魔力によるアンカーを使いシヤマルの近くまで行って、前線のモニターをもらって戦闘に備える。

「シャマル先生！私も状況をみたいんです！前線のモニター、貰えませんか？」

『了解。クロスミラージュに直結するわ。クラールヴィント、お願いね』

「J a .」

クラールヴィントにキスを落とすと、シャマルはバリアジャケットを纏い、シグナムとヴィータに念話を送る。

「おう、スターズ2とライトニング2…出るぞー!!」

シグナムとヴィータはバリアジャケットを身に纏い、ガジェットの迎撃へと向かった。

その様子を、スバルとティアナは空間モニターで見っていた。

ヴィータの鉄球が正確にガジェットを貫き、ザフィーラの堅い守りと鋭い攻撃で敵の行く手を阻み、シグナムの力強い一閃でねじ伏せていく。

「副隊長たちとザフィーラ、すごい！」

スバルは素直に感心するが、ティアナだけが浮かない表情をしていた。

「これで、能力リミッター付き……！」

副隊長たちと自分との力の差を見せ付けられたティアナは拳を強く握った。

その頃、先ほどからこの戦闘を観戦している先ほどの男性と少女の二人組、ゼストとルーテシア達の前に空間モニターが出現する。相手はガジェット関連の事件を起こしている張本人、ジェイル・スカリエツティだった。

『…きげんよう。騎士ゼスト、ルーテシア』

「…きげんよう」

「…何の用だ？」

ルーテシアは相も変わらず無表情、ゼストはあからさまに嫌な顔をしている。

『冷たいね。近くで状況を見ているんだろ？あのホテルにレリックはなさそうだったが、実験材料として興味深い骨董があるだ。少し強力をしてはくれないかね？君達なら、実に造作も無いはずなんだが…』

「断る。レリックが絡まぬ限り、互いに不可侵を守ると決めたはずだ」

ゼストはきっぱりと断るが、ジエイルは交渉相手をルーテシアに変えた。

『……ルーテシアはどうだい？頼まれてくれないかな？』

「……いいよ」

『優しいなあ…、ありがとう。今度ぜひ、お茶とお菓子を奢らせてくれ。君のデバイス【アスクレピオス】に私が欲しい物のデータを送ったよ』

彼女の両手に嵌められている紫の宝玉が付いたグローブを一瞥して、再び彼女に眼を合わせる。

「……うん。じゃあ、ごきげんよう、ドクター」

『ああ、ごきげんよう。吉報を待っているよ』

モニターが消えて通信が終わると、ルーテシアは準備をするためにローブを脱ぎ、ゼストに渡す。

「いいのか？」

それを受け取りながらゼストは尋ねる。

「うん。ゼストやアギトはドクターを嫌うけど、私はドクターの事そんなに嫌いじゃないから」

「そうか……」

会話が終わり、彼女は魔法を行使し始める。デバイスの宝玉が輝き、足元には魔法陣が展開する。

「我は…えっ」

そして、詠唱が始まる。

「遠隔召喚、来ます！」

キヤロが何かに気付き声を上げた瞬間、浮かび上がった4つの魔法陣から数体のガジェットが出現する。

「あ、あれって召喚魔法陣!？」

「召喚魔法ってこんな事も出来るの!？」

「優れた召喚士は転送魔法のエキスパートでもあるんです！」

「何でもいいわ。迎撃行くわよ！」

「「「おう!」「」」

ティアナの指示に三人が頷くと、ウェンディがキョロキョロと辺りを見渡したあと、疑問の言葉を口にする。

「あの、ナツさんはどこに行っただんですか？」

「「「「あっ……！」「「「「

その一言にナツが居ないことに気がついたが、ガジェットはそんなことお構い無しに襲ってくるので、一同は迎撃を開始する。

「ナツはもうほっといわいいわ！ウエンディも迎撃に集中して！」

「はい！」

ティアナの指示にウエンディは頷くと、腕を振り上げる。

「天を駆ける俊足なる風を！バーニア！！」

すると、近くにいたスバルとエリオの身体が光に包まれる。その瞬間、二人の走る速度が上がった。

「何コレ！？」

「スピード強化の魔法！」

二人は驚きながらもそのスピードを活かし、ガジェットを破壊する。そしてウエンディは次の呪文を唱える。

「天空を切り裂く剛腕なる力を！アームズ！！」

すると今度はティアナの身体が光に包まれる。

「これは……！」

「攻撃力強化の魔法です！ティアナさん！！」

「ええ……！」

ウエンディの強化魔法を受けたティアナはクロスミラージユを構えて引き金を引くと、かなりの威力の魔力弾が発射され、ガジェットを破壊した。それを見たティアナは目を見開く。

「（凄い……！いつもと同じ感覚で撃つたのに、威力が段違いに上がってる！これが天空魔法……）」

ふとティアナがウエンディの方を見ると、数体のガジェットが熱線でウエンディを狙っていた。

「っ、しまった！ウエンディが！！」

ティアナはすぐにクロスミラージュを構えるが、間に合わない。

「私なら大丈夫です！バーニア！！」

ウエンディはスピード強化魔法を自分に向け、熱線を全てかわした。しかも、ウエンディの行動はそれだけでは終わらなかった。

「天竜の……！！」

ウエンディは大きく息を吸い込み……

「咆哮！！！！」

口から竜巻のような渦を放ち、数体のガジェットを破壊した。

「ウエンディやるう！」

「ウエンディちゃん…凄い！」

「さすがナツさんと同じ、ドラゴンスレイヤー滅竜魔導士です…！」

上からスバル、キャラ、エリオがウエンディに賞賛の言葉を口にするが、ティアナだけは違った。

「（何よ……サポートしか出来ないって言ってたクセに、こんな力もあるんじゃない……！）」

ティアナは劣等感を感じ、クロスミラージユを強く握る。

「（今までと同じだ…証明すればいい。自分の能力と勇気を証明する……アタシはそれでいつだってやってきた！）」

心の中でそう決意したティアナは再びクロスミラージユを構えるのであった。

一方その頃、ホテル・アグスタの地下駐車場では……

「うぐっ……！」

一つの黒い影が警備員を気絶させ、トラックの積荷の一つを持ち去るうとしていた。すると……

「よお……やっと来たな」

突如声が響き、影がそちらを見ると、そこにはナツが立っていた。

「明らかに人間じゃねえ匂いがしたから来てみたら、大当たりだぜ
！」

そう言ってナツは両手に炎を纏わせ、影に向かって突撃する。

「正体見せるやあー!!」

ナツが拳を振るうと、影はそれを軽々と避け、代わりに後ろにあったトラックに直撃した。

「ちっ……すばしっこいやローだな」

「……………」

ナツと影は向き合い、一触即発の雰囲気はその場を支配する。すると、突然影の周りに紫色の魔法陣が出現する。

「なんだ!?!」

ナツが戸惑っていると、魔法陣からガジェットの大群が出現した。

「ガジェット! ってことは、やっぱり敵かテメエ!!」

ナツがそう叫ぶ。だが、影はそんなナツを無視し、ガジェットに後は任せたといったようにその場から去って行った。

「あっ！待ちやがれテメエ！！」

当然ナツは追おうとするが、大量のガジェットに行く手を阻まれる。

「チイツ！邪魔すんじゃないやねえええ！！」

ナツはガジェットを破壊しながら影を追うが、ガジェットの数が多いため、まったく追いつけず、結局見失ってしまった。

「くっそおお！！」

ナツは逃げられた怒りをぶつけるかのようにガジェットを破壊していく。

「テメエら全員、かかってこいやああああ！！！！」

ナツの怒りに満ちた叫び声が地下駐車場に響いたのであった。

その頃、ホテルの前でガジェットを迎撃していたティアナはガジェットに向かって魔力弾を放つが、ガジェットはそれを悠々と避ける。

210

「くっ……!!」

ティアナが毒づいていると、奥のガジェットがティアナに向かって小型ミサイルを発射する。ティアナは冷静にそれを魔力弾で相殺する。

「ティアさん!!」

「っ!!」

キヤロの叫びを聞いて振り返ると、数体のガジェットがティアナに向かつて熱線を放とうとしていた。するとその時……

「アイスメイク…？ 槍騎兵？！！！！」
ランス

どこからか複数の氷の槍が飛んできて、数体のガジェットを破壊した。

「よお、間に合ったか」

「 그레이さん！ どうしてここに！？」

見ると、そこにはホテル内を警備していたはずの 그레이が立っていた。

「 やっぱオレは中で警備するより、こっちの方が性に合ってるからな。安心しろ、フェイトに許可はもらってある」

そう言つと、 그레이は周りのガジェットを破壊し始める。すると、

ティアナ達FWメンバーにシャマルからの念話が入る。

《防衛ライン！もう少し持ちこたえてね！ヴィータ副隊長が、すぐに戻ってくるから！》

それを聞いたティアナの表情が険しくなる。

「守ってばっかじゃ息詰まります！ちゃんと全部倒します！」

《ちょっと…ティアナ大丈夫？無茶はしないで！》

「大丈夫です！毎日朝晩、練習してきてんですから！」

そう言いながら、クロスミラージユを構え、エリオとキャロとウエ
ンディに顔を向けた。

「エリオ、センターに下がって！私とスバルのツートップでいく！」

「は、はい！」

言われた通り、エリオ達は下がった。

「スバル！クロスシフトA、いくわよ！」

「おお！」

スバルはウイングロードを使って、ガジェットの注意を引き付ける。その隙にティアナは、カートリッジを四発もロードした。

「（証明するんだ。特別な才能や凄い魔力がなくなつて…どんなに危険な戦いだつて…）」

ティアナの周りに、複数のオレンジ色の魔力弾が現れる。

「私は…ランスターの弾丸は、ちゃんと敵を撃ち抜けるんだつて！」

クロスミラーージュを構える。

「おいおい、何て魔力だ……」

ティアナの魔力にグレイは小さく呟く。

《ティアナ！四発ロードなんて無茶だよ！それじゃティアナもクロスミラージユも……！》

「撃てます……！」

「Yes」

ティアナとクロスミラージユはそう答える。

「クロスファイヤー……シュート……！」

オレンジ色の魔力弾が、一斉にガジェット達に迫る。次々とガジェット達に魔力弾が当たり、倒していく。だが……

「え？あつ……！！！」

何と、その魔力弾が一発反れて、スバルに迫っていた。

「っ……！」

それを見たスバルは大きく目を見開いたのだった。

その頃、地下駐車場では……

「ハア、ハア………つたく、手間とらせやがって………」

そう言うナツの周りには大量のガジェットの残骸が転がっていた。

「………ん？」

何かを感じ取ったナツは鼻をクンクンと動かす。すると、ナツの顔

色が変わる。

「こゝこの匂いは……!?!」

そう言いつと、ナツは出口に向かって駆け出した。

ティアナの放った魔力弾がスバルに当たるかと思われたその時……

スパアアン!

「……え？」

気がつくと、魔力弾は真つ二つに切り裂かれ、消滅していた。

「大丈夫だったか？」

するとそこには鎧を身に纏い、剣を持った一人の女性がウイングロードに立っていた。どうやらこの女性がスバルに当たりそうな魔力弾を切り裂いたらしい。

「あ、貴女は……？」

スバルが尋ねると、女性は微笑みながら答える。

「私か？私は……」

その女性は綺麗な緋色の髪をなびかせながら振り返った。

「エルザ・スカーレット。
妖精の尻尾の魔導士だ」

そう、その女性はナツ達と同じ妖精の尻尾の魔導士、『エルザ・スカーレット』だった。

「ぐ、 그레이さん！アレッ……！」

「ああ、間違いねえ！エルザだ！」

그레이とウエンディは目を見開いて驚愕する。

「あああああ！やっぱりエルザだ！！」

すると、ナツの絶叫に似た声が響き渡る。

「ナツさん……！」

「ナツ！テメエ今までどこにいやがった！？」

「んなことより、何でエルザが此処に居るんだよ……？」

「オレが知るか……！」

「ん？そこに居るのはナツとグレイか！？」

二人の口論を聞いたエルザがナツとグレイに気がつく。するとナツとグレイはビクツと身体を震わせる。

「「よ、よお…エルザ……」」

「エルザさん！」

「ウエンディも一緒か……よかった、無事だったのだな」

エルザが安心したように息を吐くと、スバルのもとにヴィータが駆けつける。

「スバル！無事だったか！？」

「は、はい……」

「ティアナ！この馬鹿！無茶やった上に味方撃ってどうすんだ！！？」

怒鳴られたティアナは、魔法陣を展開させたまま呆然としている。

「あの…ヴィータ副隊長。今のも、その…コンビネーションの内で……」

「ふざけるタコ！直撃コースだよ、今は…！」

「違うんです！今は、私が悪いんです！」

「うるせえ！バカ共！もういい、二人まとめてすっこんでろ…！」

ヴィータは怒鳴り終わると、視線をエルザに移す。

「アンタ、うちの部下を助けてくれてありがとな」

「いや、気にするな。それより今は、この状況をどうするかが問題のようだな」

気がつく、エルザ達は大量のガジェットに囲まれていた。すると、エルザは一步前へ出る。

「お前たちは下がっている。あとは私がやるっ」

「なっ！？そんなことさせられるわけねえだろ！アタシも一緒に…」

ヴィータはそこから先の言葉を言うことは出来なかった。何故なら、グレイの氷で出来た鎖を身体に巻きつけられたからである。

「グレイ！テメエ何しやがる！」

怒鳴るヴィータだが、ナツとグレイは必死の形相で怒鳴り返す。

「バカ野郎！巻き込まれてもしらねえぞ！！」

「いいからこっち来い！！」

「うわあああ！！」

グレイは思いっきり鎖を引っ張り、ヴィータを引き寄せた。

「スバルも速く戻って来い!!」

「あ、う…うん」

ナツに言われ、スバルはナツ達のもとに戻って行く。

「お前ら、何考えてんだ!?!」

「いいから黙って見てろ」

「これからスゲエもんが見れるぜ」

『?????』

ナツとグレイの言葉に一同は首を傾げた。

一方エルザは大量のガジェットに囲まれる中、一本の剣を構える。

「あんな剣一本で…無茶ですよ!」

キャラはエルザの身を案じるが、次の瞬間……

「ハアアアア！！！！」

ズギヤギヤギヤギヤギヤ！！！！

『っ！！！？』

「は、速い！」

軽やかな動きでエルザは次々とガジェットを切り裂いていく。その動きはまるで宙を舞う妖精のようだった。

すると、一体のガジエットのエルザに向かって熱線を放とうとする。

「あ、危ない！」

エリオの声が響く。すると、エルザが持っていた剣が消え、代わりに長い槍を持っていた。

「ふん！」

そのまま槍を振るい、熱線を放とうとしたガジェットを破壊した。

「剣が槍になった!？」

スバルの驚愕の音が響いている間に、エルザの武器がまた変わり、今度は斧でガジェットを切り裂いていた。

「今度は斧!？」

ティアナが驚愕していると、 그레이が口を開く。

「相変わらずスゲエ速さの換装だな」

「換装?」

聞き慣れない単語にヴィータは首を傾げる。そしてその問いにはウインディが答えた。

「換装と言うのは、魔法空間にストックされている武器を呼び出して持ち帰ることを言うんです」

ウエンディの説明に全員が感心していると、ナツがニヤリと笑う。

「エルザのステエところはこっからだぞ」

ナツの意味深な言葉に疑問を持ちながらも一同はエルザの方に視線を戻す。

「まだこんなにいるのか。面倒だ、一掃する」

そう言うと、エルザが纏っていた鎧がはがれ始める。

「鎧がはがれて行く!?!」

「オレ達の世界の魔法剣士は武器を換装しながら戦う」

「だけどエルザさんは、自分の能力を高める『魔法の鎧』にも換装出来るんです」

「それがエルザの魔法…『ザ・ナイト騎士』だ」

上からグレイ、ウエンディ、ナツの順番で説明していく。その間にエルザの鎧は羽のついた天使のようなに鎧…『天輪の鎧』に変わっていた。

「舞え、剣たちよ……」

エルザがそう言うと、彼女の周りに無数の剣が飛び交い始める。

「サークル・ソード循環の剣！！！！」

この言葉と同時に無数の剣が飛んで行き、その一本一本がガジェットを確実に破壊していく。

『す、凄い……』

六課メンバーが口を揃えて感心の声を漏らす……

「アレが妖精フェアリーテイルの尻尾最強の女……」

「妖精女王タイターニアのエルザの力だ！！」

ナツとグレイがそう言い終わる頃にはガジェットは全滅しており、
そこにはエルザしか立っていないのだった。

つづく

すれ違う想い（前書き）

魔王編です。

かなりノリノリで書きましたが、結局駄文になってしまいました。それでも読んでくださる方々、本当にありがとうございます。

感想お待ちしております。

すれ違う想い

ホテル・アグスタでの戦闘が終わり、現場検証も終わって六課に戻ってきた妖精の尻尾一同ははやてのもとを訪れていた。

「話は全て彼らから聞かせてもらった。仲間が世話になったことを心から感謝する」

エルザがはやてに頭を下げると、はやては慌てたように口を開く。

「そんな、頭上げてください……私らかてナツ君達には助けってもらってるんやし……」

「しかし、ウエンディはともかく、ナツやグレイが迷惑をかけていないか心配だな……」

エルザの言葉にははやては少し考え込み……

「まあ……二人がつまらんことで喧嘩するのはちょっと困りものやけど……」

「なに？」

はやての言葉を聞いて、エルザはギロリとナツとグレイを睨む。すると二人はビクツと肩を震わせる。

「また喧嘩していたのかお前たちは？」

「い、いや……オレ達はずっと仲良くやってたぜ……なあナツ？」

「あい」

「ナツ君がハッピーちゃんみたいになった!!?」

怯えすぎて口調がハッピーのようになってるナツにツッコミを入れるはやて。

「すまない。この二人には後で私からきつく言っておこう」

「は、はあ……」

三人の上下関係にはやてが呆然としていて、はやてのもとにハッ
ピーが飛んできて彼女に説明する。

「ナツもグレイもエルザが怖いんだよ」

「いや、それは見たらわかるけど……なんでなん？」

「ナツは昔エルザに戦いを挑んでボコボコにされて……」

「嘘お！？あのナツ君が!?!」

ナツの力を何度も目の当たりに行っているはやてはナツが負かされた
ことが信じられなかった。

「グレイは裸で歩いているところを見つかってボコボコに」

「……あぁ……」

何故かそれは納得出来たはやてであった。

「そついや、エルザはどうやってこの世界に来たんだ？」

「……わからん」

エルザから出てきたのは意外な回答だった。

「この世界に来る直前の記憶がまったくないのだ。確か、誰かと一緒に居たような気がするのだが……」

エルザの言葉に不穏な空気が部屋を支配する。すると、そんな空気を変えようとウェンディが口を開いた。

「あの、はやてさん。一つ聞きたいことがあるのですが」

「ん？なんや、ウェンディちゃん」

ウェンディは可愛らしく手を上げてをはやてに質問する。

「ティアナさんのことなんですけど、あの時のティアナさん…何だか様子がおかしかったような……」

それを聞いたグレイとナツも口を開いた。

「そいつはオレも気になっていた。普段のティアナなら、あんなミスはしねえはずだからな」

「あいつ、何かあったのか？」

「……………」

しばらくの沈黙の後、はやては空間モニターで一人の男性の画像を出す。

「彼はティアナの兄、ティード・ランスター。当時の階級は一等空尉で執務官志望の魔導師。所属は首都航空隊で……享年21歳」

「享年ってことは…死んだのか？」

ナツの言葉にはやては頷きながら話す。

「ティーター等空尉は逃走中の違法魔導師に手傷を負わせたんやけど、取り逃がしてもうたんや。任務自体は地上の陸士部隊に協力を仰いだおかげで解決したんやけど……その件について、心無い上司が最低なコメントをして、一時期問題になったんや」

「コメント？」

エルザの疑問の言葉のあと、はやてはゆっくりと口を開いた。

「『犯人を追いつめておきながら取り逃がすなんて首都航空隊の魔導師としてあるまじき失態だ。たとえ死んでも取り押さえられるべきだった』とか……さらに直球に『任務を失敗する役立たずは……』とかな」

それを聞いたナツ達は憤慨する。

「酷い……!!」

「何だよそいつ!!許せねえ!!!!」

「ああ、気に入らねえな……必死で仕事をこなそうとしたヤツに、
劳いの言葉もねえのかよ!!!!」

「オイラも許せないよ!」

「最低ね……」

興奮するナツ達をエルザが取り締まる。

「落ち着け。もはや過ぎたことだ。今更言ったところでどうにもならん」

「……チイツ!」

ナツは舌打ちをすると、そのまま部長室を出ようとする。

「ナツ、どこに行く?」

「散歩だよ!」

「待ってよナツ!」

ナツは怒鳴りながら部屋を出て行き、ハッピーもそれを追いかけていった。

部隊長室を飛び出したナツとハッピーは隊舎近くの森の中を歩いていった。

「ああークソ！何かムカつく！モヤモヤすつぞあー！！」

「落ち着きなよナツー。オイラもあの話にはムカついたけど、エルザの言う通り今更だよ」

「わかってんだよそんな事は！けど、オレの心の奥で何かが引っ掛かってんだ。それが何かわかんねえからモヤモヤすんだよ！！」

「ナツ……ん？」

ナツを心配そうに見るハッピーすると、何かに気がついた。

「ナツ！アレ！」

「んだよ？」

ハッピーが指差す方向を見ると、そこに居たのは一人で訓練しているティアナだった。

「おいティアナ！」

「っ！」

名を呼ばれて振り向くティアナ。そしてナツの顔を見ると、溜め息混じりに言った。

「なんだナツか…」

「なんだとはなんだよ？」

「うるさいわね。私は今自主練中なの。邪魔しないで」

そう言つと、ティアナは再び自主練を再開する。

「……………汗の量が尋常じゃねえ……………お前まさか、帰ってきてからずっとやってたのか？」

「……………」

ナツの問いには答えず、黙々と練習するティアナ。

「何やってんだよ！？身体壊すぞお前！」

「そつだよティアナ、身体壊したら元も子もないよ」

「うるさいって言うてるでしょ……！」

ティアナの叫びが森に木霊する。

「私みたいな凡人がなのはさん達のような天才に追いつくにはこうするしかないのよ!!」

「それで身体壊したら意味ねえって言うてんだよ!!」

「アンタに凡人である私の気持ちがるの!!?」

「わかんねえよ!オレはティアナじゃねえからな!!」

「だったら口出ししないで!!」

「うるせえ!!さっきから凡人だの天才だの、くだらねえこと言うてんじゃねえぞ!!」

「っ、くだらないですって!!?」

「ああくだらねえなっ!!天才がそんなに偉えのか!?凡人がそんなにダメなのか!?違うだろ!!ようはテメエの気の持ちようだろ

うが！！たった一回のミスで自信喪失してんじゃねえぞお！！！！」

「っ…………！！」

ナツとティアナの激しい口論の末、ナツの言葉にティアナは言葉を詰まらせ、ギリツと悔しそうに歯を食い縛る。

「うるさいバカナツ！！私のやり方に口出ししないで！！もうほっといてよ！！！！！！」

ティアナは悲痛な叫び声を上げる。それを聞いたナツはティアナに背を向ける。

「……………そうかよ。だったらもう勝手にしろ。けどな、これだけは言っとくぞ」

ナツはティアナに背を向けながらこう言い放つ。

「テメエみたいに周りが見えてねえヤツは、一生強くなんなれねえんだよ」

「っ…………！！！！」

ナツの言葉にティアナは目を見開く。そしてナツはそのまま歩き去って行った。

「……何よ、バカナツのクセに……!!」

「ティアナ」

「っ……」

声がした方を見ると、そこにがまだハッピーがいた。

「アンタまだ居たの？早くナツのところに行きなさいよ」

「ティアナ、ナツの言ったこと、わかってあげて」

ハッピーの言葉にティアナは顔をしかめる。

「………何よ、アンタも私のやってることは無駄だって言いたいの？」

ティアナは冷たく言い放つが、ハッピーは首を横に振る。

「そうじゃないよ。オイラ気付いたんだ。ナツとティアナは似た者同士なんだって」

「似た者同士？私とナツが？」

ハッピーの言葉にティアナは首を傾げる。

「うん。さっきね、はやてから聞いたんだ。ティアナのお兄さんのこと……」

「っ……」

それを聞いたティアナは顔をしかめるが、ハッピーは構わず続ける。

「ティアナはたった一人の家族だったお兄さんの夢を引き継ごうと頑張ってる。ナツもね、イグニールに会うために頑張ってるんだ」

「イグニールって、ナツを育てたって言うドラゴン？」

「うん。ナツはね、一人前の魔導士になればイグニールに会えると思ってるんだ」

「何よそれ？私と全然違うじゃない。どこが似た者同士なのよ？」

「確かに目的は全然違うよ。だけど、家族のために強くなるうとしているのは一緒だよ」

「っ!!！」

ハッピーの言葉にティアナは目を見開く。

「だからナツは無茶をして身体を壊しそうになってるティアナを放っておけないんだと思うよ。本人は無自覚みたいだけどね」

「……………」

笑顔でそう言うハッピーにティアナは何も言えず、黙ってしまふ。

「だからティアナもナツが言ったことを考えてあげて。それじゃあね」

そう言うとハッピーは羽を広げてナツのもとへと飛んで行った。

「私は……私は……！」

その場には一人呟くティアナだけが取り残されたのだった。

そして、数日後。

「さーて、じゃあ午前中のまとめ。2001で模擬戦やるよ」

いつもと同じ訓練風景。今日もいつも通りに進むと思っていた。

「まずはスターズからやろうか。バリアジャケット、準備して」

「はい！」

「エリオとキャロ、ナツとハッピーはアタシ達と見学だ」

「はい！」

「見学かよ。つまんねえの」

「仕方ないよナツ」

愚痴りながらもナツ達は近くのビルの屋上へと上がり、模擬戦を見学することになった。

「やるわよ、スバル！」

「うん！」

意気込むスバルとティアナ。それを不安そうな表情で見ているハッピー。

「ナツ、ティアナ大丈夫かな？結局あのあと自主練してたみたいだし……」

「知るかよ」

心配するハッピーに冷たく言い放つナツ。すると、ビルの屋上にフイトとグレイ、そしてエルザがやって来た。

「あっ、もう模擬戦始まっちゃってる？」

「あ、フイトさん」

「グレイにエルザ！」

「どつやら間に合ったみてーだな」

「むっ」

「私も手伝おうと思ったんだけど…」

「今はスターズの番」

「本当はスターズの模擬戦も私が引き受けようと思ったんだけどね」

「ああ、なのはもここんどこ訓練密度濃いからな。少し休ませねえと」

「なのは、部屋に戻ってからもずっとモニターに向かいっぱなしなんだよ。訓練メニュー作ったり、ビデオでみんなの陣形をチェックしたり」

「なのは、部屋に戻ってからもずっとモニターに向かいっぱなしなんだよ。訓練メニュー作ったり、ビデオでみんなの陣形をチェックしたり」

「なのはさん……訓練中もいつも僕たちのこと見ててくれるんですよね」

「本当に、ずっと……」

「お、クロスシフトだな」

ヴィータの眩きに一同は下を見る。そこにはティアナがいくつもの魔力弾を生成していた。

「クロスファイヤー……シュート!!」

いくつもの魔力弾がなのはに向かう。だが、それに違和感を感じる者がいた。

「なあ、ティアナの今の攻撃……何か変じゃねえか？」

ナツの疑問にヴィータが頷きながら答える。

「ああ、何かキレがねえな」

「コントロールは良いみたいだけど……」

「調子でもわりいんじゃないかねえのか？」

「それにしたって……!!」

「……………」

それを見ているナツの胸に不安がよぎる。

そしてしばらくすると、スバルのウイングロードが出現しスバルがなのはにむかって突撃してきた。

「っ、フェイクじゃない！本物!？」

目の前のスバルを本物だと判断したなのははスバルに向かって魔力弾を放つ。

「うおおおおおおお!!」

が、スバルはそれをバリアで防ぎ、なのはに向かってリボルバーナツクルを構えた。

「うりゃああああああああ!!」

「っ!!」

その攻撃をなのはバリアを張って防御する。

「くっ……っ……!!」

「っ……!!」

予想外の戦術になのは顔をしかめる。そして、スバルの攻撃を弾き飛ばした。

「うわあああああ!!」

飛ばされたスバルは何とかウィングロードに着地する。

「こらスバル!危ないよそんな軌道!」

魔力弾を避けながらスバルに注意するなのは。

「すみません!でも、ちゃんと防ぎますから!!」

ウイングロードに乗りながら謝るスバル。

「っ、ティアナは？」

なのははティアナを探して辺りを見回す。すると、遠くのビルで砲撃を撃つ準備をしているティアナの姿があった。

「砲撃？ティアナが？」

「でりやあああああああ！！」

そして一同がそちらに気を取られている隙に、スバルがウイングロードを走り、リボルバーナックルをなのはに叩き込む。それをバリアで防ぐなのは。

「っ！？」

そしてふと、ティアナの方を見ると、砲撃の構えを取っていたティアナの姿が消える。

「あっちのティアナさんは幻影！？」

「本物は!?!」

「っ、あそこだ!」

グレイが指差す方向には、なのはの頭上のウイングロードを走っているティアナの姿があった。

「一撃必殺!!でええええええい!!!!」

クロスミラージュの銃口に魔力の刃を纏い、なのはに向かって突っ込むティアナ。

「レイジングハート……モードリリース……」

「All right」

なのはがそう呟いた瞬間、辺りに轟音が響く。

「なのは！」

「スバル！ティアナ！」

ナツとフェイトは三人の名前を叫ぶ。すると、煙が徐々に晴れてきて、そこにいたのは……

「おかしいな……二人共どうしちゃたのかな？」

片手でスバルの拳、もう片手でティアナの刃を止めているなのはの姿があった。

「頑張っているのは分かるけど、模擬戦は喧嘩じゃないんだよ？」

なのはの声は今まで聞いた事がないほど無機質だった。

「ちゃんとさ、練習通りにやるつよ……ねえ？」

「あ、あの……！」

スバルは何かを言おうとするが、恐怖で言葉が続かない。

「私の言ってる事、私の訓練……そんなに間違ってる？」

「……………くっ！」

「Blade erase」

すると、ティアナは魔力刃を消し、後ろに飛んでなのはとの距離を取る。

「私は！もう、誰も傷付けたくないから！無くしたくないから！！」

「ティア……」

悲痛な叫びを上げながらクロスミラージュを構えるティアナ。

「だから！強くなりたいんです！！！」

「……少し……頭冷やそうか？」

ティアナの叫びを聞いたなのはは、無表情のまま人差し指を彼女に向けた。

「クロスファイアー……」

「うあああああああああ！！！！ファントム・ブレイ……」

「シュート」

なのはが放った六つの魔力弾は、容赦なく、ティアナに直撃した。

「ティア！っ、バインド！？」

ティアナの元へ駆け寄ろうとしたスバルにはバインドが掛けられていた。

「じつとして。よく見てなさい」

そう言うなのは再びティアナに向かって魔力弾を放とうとしていた。

「なのはさん!!」

スバルの必死の叫びも虚しく、なのははティアナに向かって砲撃を放った。

その時……

「火竜の…翼撃!!」

足の炎をブースターにして飛んできたナツが両腕に纏った炎で魔力弾を焼き払った。そしてナツはウィングロードに着地すると、ティアナに駆け寄った。

「ティアナ！大丈夫か！？」

「ナ…ツ…」

しかしティアナはナツの名前を呟くと同時に倒れ、ナツはそれを抱きとめた。

「ティアー！！」

すると、バインドで縛られながらもマツハキャリバーを使ってスバルが駆け寄ってくる。

「スバル、ティアナを連れてグレイ達のところに行ってる」

ナツはスバルのバインドを焼き切りながら言うと、ナツはなのはに向き直る。

「どづいつつもりかな、ナツ君？」

「……ティアナが、泣いていた」

ナツは静かに語る。

「弱音を吐いて、声を震わせていた。そんなティアナは見たくねえ。ティアナは気が強い方がいいじゃねーか」

そしてナツは怒りに満ちた目でなのはを睨みつける。

「目が覚めた時、いつものティアナでいて欲しいから…オレが戦うんだ!!」

そう言うナツをなのはは冷めた目で見据える。

「……ナツ君も少し、頭冷やそうか？」

「冷やせるもんなら冷やしてみやがれ!!今のオレはメチャクチャ燃えてんだよおお!!!!」

ナツは雄叫びを上げながら炎を纏い、なのはに攻撃をしかけた。

それを見ていたヴィータ達は……

「あのバカ何やってんだ！？早く止めねえと！！」

ヴィータがデバイスを構えながら飛び出そうとすると……

「アイスメイク……？城壁？！」
ランバート

目の前に巨大な氷の壁が出現し、完全にナツ達から分け隔てたのだ。

「わりいが、ナツの邪魔はさせねえ」

「グレイ！」

ウィータは壁を作った張本人、グレイを睨みつける。

「何やってんだよ！早くこの壁を解け！」

「黙りやがれ！！アイツのやったことに頭に来てんのはオレも同じなんだよ！！！」

『っ！！！？』

グレイの威圧感の籠った叫びに全員が硬直する。

「確かにアイツらは危険な無茶をした！けどな…だからと言って、教え子を撃ち落とす師匠せんせいがどこにいるつつうんだよ！？オレはそんなヤツを…師匠せんせいとは認めねえ！！！」

「う、うるせえ！テメエこそ、いつもナツと喧嘩してるクセに！！！」

「それは認め合っているからこそだ」

すると、今まで黙っていたエルザが口を開く。

「ナツとグレイは互いのことを認め合い、互いの顔をしっかりと見ている。だが、今のなのは…ティアナの顔を見ようとしていない。それはもう喧嘩ではなく、ただの暴力だ」

エルザが視線をナツとなのはに向けると、一同もそれに釣られ、視線を向けた。

「火竜の鉄拳!!」

ナツはなのはに向かって炎の拳を振るうが、なのはのバリアにそれは阻まれる。

「テメエは気付いていたんだろ！？ティアナが悩んでいることに！」

「……………」

なのは何も答えない。

「それに気付きながらもテメエは、ティアナの必死の思いを否定したんだ！！」

ナツは叫びながら炎の蹴りを放つが、それもバリアに防がれる。

「くっ、デイバイン・バスター！！」

「火竜の咆哮！！」

なのはの桜色の閃光とナツのブレスがぶつかり合い、相殺される。

「……………くせこ…！」

「あ…？」

「なにも知らない癖に…私の何がわかるの!?!?」

なのはの悲痛な叫びが響く。

「何でもわかってなきゃ仲間じゃねえのか?」

「っ……」

「知らねえから互いに手を伸ばすんだろお!!?!?それすらもしようとしねえヤツが、偉そうなことを言ってるじゃねええええ!!?!」

叫びながら殴りかかろうとするナツだが、その瞬間、ナツの動きが止まる。

「なっ!?!?これは……!?!?」

「それは設置型のバインド。ナツ君が突撃してくることはわかりきってたから」

「くっ……!?!?」

ナツは何とか抜け出そうとするが、バインドはビクともしない。

「ナツ君。一人で無茶したって、強くはなれないんだよ?。」

レイジングハートをナツに向けたまま、なのははそう呟く。

「みんな、誰かの支えがなくちゃ……………」

「んなこたあわかってんだよ!。」

なのはの言葉を遮ってナツが叫ぶ。

「だからこそ!オレ達には仲間が必要なんだ!けどな……………!。」

ナツの身体から炎がゆっくりと噴き出る。

「ティアナが信じた道を、ティアナの想いを……………否定する権利なんざ誰にもねえんだよおお!……………」

ナツが叫ぶと、ナツの身体中から激しい炎が燃え上がる。

「な、何あの炎は!?!」

ナツの炎を見て、フェイトが驚愕の声を上げる。

「あんな炎、見たことねえぞ……!」

ヴィータも驚愕の言葉を口にすると、エルザが説明する。

「あれは感情の炎だ」

「感情の……」

「炎……？」

エリオとキャロが首を傾げる。

「ナツの炎の温度はその感情に比例し上昇する。そしてそれに一番反応する感情こそが『怒り』。今のナツは理不尽に仲間を傷つけた怒りに満ちている。その炎は、強大なものとなる」

「……おおおお……」

ナツが雄叫びを上げると、さらに炎が上昇し、ついにはナツを拘束していたバインドも熱に当てられ消滅した。

「バインドが……解けた!？」

なのはが驚愕していると、ナツが口を開く。

「お前の過去に何があったのかは、オレは知らねえ……けど!」

ナツは語りながら全ての炎を拳に集める。

「過去に縛られて、なんにも伝えようとしねえヤツが……人に何かを教えることなんざ出来ねえんだよ!」

「っ!!!?!?」

そしてナツはなのはに向かって飛び上がり……

「自分を解放しろおおお!……なのはあああああああ!……!」

「っ、きゃあああああああ！！！！」

ドゴオオオオオオン！！！！

思いつきりなのはに拳を叩き込み、地面に叩きつけた。

そして土煙が晴れると、そこには眠ったように気絶しているのはの姿があった。

こうして、ナツとなのはの互いの意地をかけた戦いは幕を閉じたのである。

つづく

伝わる想い・伝える想い(前書き)

今回は前半はグレイ、後半はナツを主軸にしてみました。まあグダグダっぷりは相変わらずですが……

感想お待ちしております。

伝わる想い・伝える想い

医務室。そのベッドの一つでは、なのはが眠っていた。そして、
なのはがゆっくりと目を開く。

「ん……あれ？……私……」

「よお、目え覚めたか？」

声が出たのでそちらを見てみると、そこにはグレイが座っていた。

「グレイさん……あの、私どうなって……」

「お前はナツに気絶させられて、ここに運び込まれたんだよ」

「……あ、そっか……」

なのはは気絶する前に何があったかを思い出した。

「ウエンディに感謝しろよ」

「え？あつ……」

なのははグレイに言われて気がついた。自分のベッドに身を預けて眠っているウエンディが居たことに。

「身体の調子はどうだ？」

「え？……そう言えば、何だか体が軽いような……」

「お前、ここんどこずっと働き詰めだったんだろ？身体にかなりの疲労が溜まっていたらしい。ナツにやられた傷を含めて、ウエンディが全部治療してくれたよ。お陰でウエンディは疲れ果てて眠っちまったけどな……」

「そう……ありがとう、ウエンディ」

そう言っただけは眠っているウエンディの頭を撫でた。眠っているウエンディはどこか嬉しそうな顔をする。

「あの、 그레이さん……」

「ん？」

「私……間違ってたのかな？」

「……………」

なのはの質問に、 그레이はボリボリと頭を掻きながら答える。

「間違っているかどうかオレにはわからねえ。けど、これだけはハッキリ言おう。オレは今日のお前のやり方を認めない」

「っ……………」

그레이の言葉に目を見開くのは。それでも構わず、 그레이は話を続ける。

「オレには魔法を覚えてくれた師匠がいた。ウルって言ってな、家族を殺されたオレを拾ってくれた」

「家族を……！？」

グレイの過去を聞いたのはは驚愕する。

「ああ……当時オレが住んでいた街の近くでは、厄災の悪魔・デリオラつつう怪物が暴れ回っていた。そいつはオレの街にも現れ、街は壊滅した。唯一の生存者であるオレはウルに拾われたんだ。それからは色んなことを教えてもらった。魔法の基礎、造形魔法の素晴らしさをな……」

「……優しい師匠だったんだね」

「ああ……だが、オレが全部ぶち壊しちまった」

「え？」

「その時のオレは心に闇を抱えていた。デリオラへの復讐という心の闇を……」

「……………」

それを聞いたなのは察した。家族と街を全てを壊されて、怨ましい方がおかしい。

「近くにデリオラが居ることを知ったオレは、ウルや兄弟子の制止も聞かずに飛び出したんだ。そしてデリオラに戦いを挑んだ。当然敵わなかったけどな。けど、そこへウルが駆けつけてくれた。デリオラがオレの闇ならば、自分にも戦う理由があるって言ってな」

それを聞いたなのは、頭の中に最悪の結果を想像した。

「まさか……………ウルさんは……………」

「ああ……………ウルは命をかけて、デリオラを封印した」

それを聞いたなのはは無意識に口元を押さえた。

「アイスドシエル絶対氷結……………その魔法は自らの身体を氷へと変え、対象を永久に氷の中に封じ込める。ウルはその魔法を使って、デリオラを封印した。その時、心に残っている言葉があるんだ」

お前の闇は私が封じよう

「つてな……」

グレイの話が終わると、なのはは俯きながら口を開く。

「そつか……じゃあ私はダメな先生だね。最近ティアナの様子がおかしいことはわかっていたのに、私は何もしてあげられなかった。ティアナの近くにいると思いついて、実際はあの子のことをまったくわかっていない……ううん、わかるうともしてなかった。全部……ナツ君の言う通りだよ……」

なのはの後悔と自己嫌悪が入り混じった言葉を聞いたグレイは、再び口を開いた。

「まったく、いつまでもメソメソしてんじゃねえよ」

「……………」

グレイの言葉に反応せず、俯くなのは。

「ナツが言っただら？何にも知らねえから互いに手を伸ばすんだって……今からでも間に合うんじゃないかねえのか？」

「っー！」

ようやく反応したなのはは勢いよく顔を上げ、グレイを見た。

「自分の想いを伝えて、相手の想いを知る。そして教え子が心に闇を抱えていたのなら、その闇を取り払って手を差し伸べる。それが、師匠が教え子に出来る最高のことじゃねえかな？」

「グレイさん……」

グレイの言葉を聞いたなのはは目尻に涙を溜め……

「ありがとう……！」

感謝の言葉を口にした。

「よせよ。オレは思ったことを言ったただけだ」

グレイは照れくさそうに言う。すると、なのはは涙を拭い、真っ直ぐとグレイを見た。

「グレイさん……みんなに話す前に、聞いてもらってもいいですか？ 私の過去を……」

「……ああ」

グレイは何も言わずにただ頷いた。

それからなのははグレイに全てを話した。

9歳の頃に、偶然魔法と出会い、魔法少女となったこと。

とある事情によりフェイトと戦ったこと。

様々なことがあった末、なのはの思いが届き、2人が『友達』になれたこと。

半年後。はやてやシグナム達が大きく関わった『闇の書』事件の際も、当時安全性が危うかった『カートリッジシステム』の使用により、辛くも危機をくぐり抜け、彼女たちとも親しくなったこと。

だが、幼いころから高威力の魔法を使ってきた彼女の体には、当然

ながら見えない疲労が蓄積していたこと。

そしてそれが原因で少しだけ動きが鈍り、重傷を負ってしまったこと。

過酷なりハビリの末、今のよう空を飛べるようになったこと。

フォワードの皆には、自分と同じ思いをさせたくない。だから、多少しつこいくらいに思えても、怪我をしないように基礎をしっかりと固めておきたい、ということ。

「……以上が、私の過去の出来事」

「……そうか」

グレイはそれしか言えなかった。なのはが歩んできた道は余りにも過酷で、「大変だった」なんて言葉では解決できないほどに。

「お前の話は過去の出来事だから、オレから言えることは何もねえ。けど、これだけは覚えておけ」

一呼吸置いて、グレイは言った。

「お前が誰かを助けたいと思っているように、みんなもお前を助け

たいと思っていることを……そして……」

再び一呼吸置いて、グレイは続けた。

「手を伸ばせば、助けしてくれる仲間がいることを……！」

そう言い終わると、グレイはなのはに背を向けた。

「んじゃ、オレは戻るわ。なのはも動けるようになったらちゃんと
はやてに報告しに行けよ」

そう言うと、グレイは医務室から出て行った。それを見送ったなのはは……

「ありがとう……グレイさん……」

と、軽く頬を染めてそう呟いたのであった。

それから数時間が経った医務室では……

「ん……あ……あれ？」

眠っていたティアナが目を覚ました。

「あ、ティアナさん。目が覚めましたか？」

そんなティアナの顔をウエンディが覗き込む。

「ウエンディ……ここは？」

「ここま医務室ですよ」

ティアナの質問にウエンデイが答えると、医務室の扉が開き、シャルが入ってくる。

「あらティアナ。起きた？」

「シャル先生？えっと…」

「昼間の模擬戦で撃墜されちゃったのは覚えてる？」

未だに状況が把握出来ていないティアナにシャルが問い掛けると、ティアナは思い出したように目を見開く。

「……はい」

「なのはちゃんの訓練用魔法弾は優秀だから、身体にダメージは無いと思うんだけど」

と、ここでティアナはズボンを穿いていないことに気がつき、頬を

染める。

「はい、ティアナさん」

すると、そんなティアナを心中を察したウエンディがズボンを差し出した。

「あ、ありがとうウエンディ」

それを戸惑いながら受け取るティアナ。

「どこか痛いところある？」

「……いえ、大丈夫です」

そう答えながらティアナはズボンを穿くと、ふと時計が目に入る。

「え、9時過ぎ！？え、夜！？」

「すごく熟睡してたわよ。死んでるんじゃないかって思うくらい。最近ほとんど寝てなかったでしょ？たまった疲れがまとめて来た

のよ」

自分が予想以上に眠っていたことに驚くティアナ。

「あら？そう言えば、なのはちゃんは？さっきまでそこで寝てたはずなんだけど……」

シャマルはなのはが眠っていたベッドが空になっていたのに気付く。

「なのはさんなら、さっきもう大丈夫と言って、部屋に戻りましたよ」

その問いにウエンデイが答えると、シャマルは「そう……」と言って返す。すると、その会話を聞いていたティアナが問い掛ける。

「あの、なのはさんが眠ってたってどういっことですか？」

「なのはちゃんも、ティアナと同じように気絶して隣のベッドに寝てたのよ」

「気絶！？なのはさんが！？どうして!?!？」

なのはが気絶したということが信じられないティアアナは声を上げる。

「ええ、ナツ君がやったのよ」

その言葉にティアアナは言葉を失い、何も言えなくなったのだった。

それからしばらくすると、ガジェットが出現し、緊急出動の警報が鳴った。そしてフォワード陣と妖精の尻尾のメンバーはヘリポートに集合した。

「今回は空戦だから出撃は私とフェイト隊長、ヴィータ副隊長の三人」

「みんなは妖精の尻尾フェアリーテイルの人たちとロビーで出動待機ね」

「そっちの指揮はシグナムだ留守を頼むぞ」

「はい！」

「はい……」

元気に返事をするライトニングの二人に対し、スターズの二人の声は沈んでいた。すると……

「待てよ」

グレイがストップをかけた。

「なのは、お前は今回は外れとけ。代わりにオレが出る」

『ええ!!!?』

グレイの提案に全員が驚愕した。

「ズリイぞグレイ!!! だったらオレも行くぞ! オレも暴れてえんだ
!!!」

「そんなんじゃねえよ」

反論するナツを無視してグレイは真っ直ぐなのはを見据えて言う。

「なのは、お前にはやるべきことがあるだろ?」

「で、でも……!!」

「でもクソもねえ。とにかくお前は外れる。いいな?」

グレイは無言を言わずなのはを丸め込むと、フェイトとヴィータ

に視線を向ける。

「と言う訳だ。オレがなのはの代わりに出る。戦力としては申し分ねえだろ？」

「そりゃそうだけどよ、今からメンバー変更するにはちゃんとはやてに許可取らねえと」

「なら今から許可を取ってくれ。それ位出来るだろ？」

「……わかった。聞いてみる」

そう言つと、フェイトははやてに念話を送り、会話を始める。そしてしばらくすると、フェイトが口を開く。

「うん、許可が下りたよ。その代わり、出撃を認めるのはグレイだけだつて」

「十分だ」

グレイはニヤリと笑う。そして、それを面白くなさそうに見ているナツ。

「ちえ、いいよね。オレも暴れたかったのよ」

「そう言っつな。グレイにも色々と考えがあるのだから」

ふて腐れるナツをエルザが嗜める。

「それにさ、ナツが出るとなったらへりに乗らないといけないんだよ」

「うっ……や、やっぱりいせ。うぶっ……」

「想像で酔っこのやめなよ」

ナツとハッピーの漫才のようなやり取りが繰り広げられている間に、フェイトとヴィータ、そしてグレイを乗せたへりは現場に向かって飛びだって行った。

「（ありがとう……グレイさん……）」

なのはは心の中でグレイに感謝すると、FWメンバーに向き直った。

「みんな、話したい事があるの」

同時刻。ジェイル・スカリエッツィのアジトでは、スカリエッツィがルーテシアと通信をしていた。

「おや、これは珍しい。君から連絡をくれるとは嬉しいじゃないか。ゼストとアギトはどうしたんだね？」

『…今は別行動。…遠くの空にドクターのおもちゃが飛んでるみたいだけ』

「気にしなくていい。直に綺麗な花火が見れるはずだよ」

『…レリック』

「だったら、真っ先に君に報告しているさ。私のおもちゃの動作テストなんだよ。破壊されるまでのデータが欲しくてね」

『…壊されちゃうの?』

「ふっふっふ、私はあんな鉄クズに直接戦力は期待してないんだよ」

「誰が鉄クズだコノヤロウ」

と、突然部屋に響く乱暴な声。スカリエツティがそちらに視線を向けると、大量の鉄を持った黒髪の男性が立っていた。

「いや、君のことではないのだが…まあ、気に障ったのなら謝ろう」

『ドクター、その人は?』

「ああ、彼は次元漂流者さ。この間近くで倒れているところを拾ったんだ」

「人をモノみてえに言ってんじゃないよ」

そう言うと、男性は手に持っていた鉄を口へ運び……

「ガジガジ……」

なんとそのまま鉄を食べ始めたのだ。

「相変わらず、変わった食生活だね」

「ほっとけ」

男性がそう言うと、スカリエッティはルーテシアとの通信に戻る。

「さて、さっきの続きだが…アレは私の作品たちがより輝くために
デコイ 罠として使うガラクタさ」

『……そう。レリックじゃないなら、私には関係ないけど…でも、

頑張ってね、ドクター』

「ああ、ありがとう。優しいルーテシア」

『じゃあ、ごきげんよう』

その言葉を最後にルーテシアとの通信が途切れる。その瞬間、スカリエッティの顔に不気味な笑みが浮かぶ。

「ふっふっふ……私の作品は、やはり良い出来だな」

スカリエッティがそう言うと、鉄を食べている男性が口を開く。

「オレの世界のヤツらも大概だが、テメエも相当イカれてるぜ」

男性がそう言うと、スカリエッティは男性に視線を向ける。

「ふっふっふ。人間、少しはイカれてる位が丁度いいのさ。それより、君の相棒はどうしたんだい？」

「向こうで小娘どもの訓練の相手をしてるよ。あれでも昔はとある

王国の師団長をしていたからな」

「そうか。まあ、私は君たちには期待しているからよろしく頼むよ……ガジル君」

「ギヒッ」

スカリエツティにそう言われ、男性・『ガジル・レッドフォックス』は楽しそうな笑みを浮かべた。

そして彼の左肩には、ナツ達と同じ妖精の尻尾フェアリーテイルの紋章が刻まれているのだった。

「……以上が、高町なのはの失敗談でした」

そう言っつて、なのはは話を聞いていたメンバーの方に顔を向ける。

なのはによる昔話と、彼女の気持ちが語られた後、メンバーはずつと俯いていた。

「無理をし過ぎて、今後に支障を与えないように導く。これが教導官として1番大事な事。話そうとは思っていたんだけど、正直この話をするのが怖かったの。それで先送りにして行った結果がこれ……グレイさんに言われて、ようやく決心がついたの」

何故ここでグレイの名前が出てくるのかメンバーは疑問を感じたが、あえて口には出さなかった。

「導いていくはずの立場なのに、生徒を傷付けて……生徒のことも知ろうとせず勝手に決め付けて……。こんなんじゃ私、教導官失格だよね」

「そんな事ありません!」

なのはの言葉をティアナが力強く否定する。

「なのはさんは悪くありません！全部私が悪いんです！私が……！」

ティアナは溢れ出てくる涙を拭おうともせず言葉を続けようとするが、中々出てこない。すると、なのはが口を開く。

「ありがとう、ティアナ。でも、これは私なりのケジメだから、ちゃんと謝らせて」

「……はい」

「あとね、ティアナが考えたこと、間違ってはいないんだよね」

そう言うなのはの手にはいつの間にかクロスミラージュが握られていた。

「システムリミッター、テストモードリリース」

『Yes』

「命令してみてください。モード2って」

なのははそう言ってティアナにクロスミラージユを渡す。ティアナは戸惑いながらもそれを構え…

「…モード…2」

と言った。

『Set up · Dagger Form』

直後、ティアナは起こったことに絶句する。クロスミラージユから魔力で造られた剣が出現したのだ。

「コレ……！」

「ティアナは執務官志望だもんね。此处を出て執務官を目指すようになったら、どうしても個人戦が多くなるし将来を考えて用意はしてたんだ」

「っ……う、うわあああ………！……！」

なのはの想いに、ティアナは再び涙を流した。泣きじゃくる彼女を、
なのはは優しく抱きしめたのであった。

「……んで、なーんでオレがこんなことしなくちゃ何ねーんだ？」

廊下を歩くナツは一人愚痴る。いや、正確には一人ではなく、ナツの背中にはティアナが眠っていた。

あの後ティアナは泣きつかれたのかそのまま眠ってしまい、何故かナツが彼女を運ぶ役に任命されたのだ。当然ナツは「同じ部屋のスバルが運ばばいいだろ!？」と反論したのだが、当のスバルが「私はちよつと用事があるから」と言っでどこかに走り去ってしまったのだ。

さらには「ナツ君、お願いね」「大変だけど、頑張つて」「変なこととはすんなよ?」「男の役目だ。行け、ナツ」「でえきてえる」と様々な人から様々なことを言われ、結局ナツが運ぶことになった。

「ん……あれ?」

「お!起きたか、ティアナ」

「ナツ?あれ?私……」

「あの後お前が寝ちまって、何故かオレが運ぶことになったんだよ」

「そつなんだ……って、ええ!!!?」

その瞬間、彼女の寝ぼけていた頭が一気に覚醒した。

「ちよ、何でナツが!？」

「知るか!!オレだって不本意だっつうの!!」

「って言うか、降ろしなさいよ!!」

「うおっ!?!暴れんじゃねーよ!!今降ろすから!!」

閑話休題

「んじゃ、あとは自分で戻れるよな?」

「う、うん……」

「んじゃあな」

そう言っただけは立ち去ろうとする。が…

「ま、待って！」

グイッ キュッ

「ぐおっ!!?」

ナツを引き止めるためにティアナはナツのマフラーを引っ張るが、それが原因でナツの首を絞めてしまった。

「何すんだコラー!!?」

「い、ごめん!ちょっと言いたいことがあって……」

憤慨するナツに素直に謝罪するティアナ。

「で、言いたいことってなんだよ?」

「うん……その……ありがとう」

「……は？」

突然のティアナの感謝の言葉にナツは目を丸くする。

「その、模擬戦の時に助けしてくれたでしょ？だからその……」

モジモジと言葉を搜しながら話すティアナ。そんなティアナを見たナツは……

「気持ちわりー……」

と言った。

「な、何ですって!!!??」

当然ティアナは憤慨する。

「だってオメエ、ガラにもなくモジモジしゃがって…似合わねえ」

「あ、アンタねえ……」

ティアナはプルプルと身体を震わせる。そして……

「人がせつかく素直にお礼を言ってるのに、普通に聞くことも出来ないの！？このバカナツ……！！！」

と怒鳴った。するとナツは何故かニカツと笑って言った。

「やっといつものティアナになったな」

「え？」

そう言われたティアナは一瞬呆然とする。

「やっぱりオレは、そうやって気が強えティアナの方が好きだぜ？」

「なっ……！！？（ボンッ）」

ナツの言葉を聞いたティアナは顔を赤くした。

「ば、バカナツ！変なこと言わないでよ！！／＼／」

そう言っただけティアナはナツに背を向ける。

「あ？オレが何言ったんだよ？ってか、何で後ろ向くんだよ？」

ナツがティアナの顔を覗き込もうとすると……

「う、うっさい！！！！」

ボゴオ

「ぐはっ！？」

顔を思いつきり殴られた。

「いってえ！！何すんだよティアナ！！」

「…………ア…」

ナツが憤慨していると、ティアナは何かを呟いた。

「あ？なんだって？」

「ティアア！！これからはそう呼んで！！」

「な、なんでだよ？」

「いいから呼びなさい！！！！」

ティアナのいきなりの申し出にナツは戸惑いながらも……

「ティアア」

と呼んだ。すると、ティアナの顔がこれでもかと言つほど真っ赤になった。

「そ、そう！それでいいのよ！それじゃあ私はもう部屋に帰るわ！

「じゃあね！お休み！！！」

ティアナは早口にそう言うと、ナツを取り残して走り去って行ってしまった。

「な、何なんだよ？」

そんなナツの眩きは、誰もいない廊下に虚しく響いていった。

つづく

休日（前書き）

やっと更新できました。

GWが明けてから学校の授業が大変で……

これから更新スピードが落ちるかと思いますが、どうぞよろしくお願ひします。

休日

『休暇？』

食堂で昼食を取っていた妖精の尻尾一同は、はやてに告げられた言葉に首を傾げる。

「せや。今朝の訓練でティアナ達が第2段階の見極めテストに合格してな、今日一日お休みにしたんや。そこで、妖精の尻尾フェアリーテイルのみなさんには色々お世話になってるから、みなさんにもお休みをあげようと思うたんや」

「「「おおー！」「」

「街にでも出かけて、遊んできい」

「「「おー！」「」

「「「……」」

はやての妖精の尻尾休暇宣言に一同…というより、ナツとグレイとハッピーが両手を挙げて喜ぶ。

「休暇だ休暇だー！」

「あいさー！ー！」

「正直、この世界の街ってやつに興味があつたんだよな」

「ふむ、たまには思いつきり休むのもいいかもしれないな」

「やったねシャルル」

「……まあ、たまにはいいかもね」

と、休暇を喜ぶ妖精の尻尾メンバー達。すると……

『…当日は、首都防衛隊の代表レジアス・ゲイズ中將による管理局の防衛思想についての表明も行われました』

「……………！」

モニターに映っているニュースキャスターの言葉を聞いて、その場にいた六課メンバー全員がモニターを見た。

そこには、一人の男性がなにやら力説している場面が映し出されていた。

『魔法と技術の進歩と進化は素晴らしいものであるが、しかし！それがゆえに我々を襲う危機や災害も十年前とは比べものにならないほどに危険度を増している！！兵器運用の強化は進化する世界の平和を守るためである！！』

「誰だ？この敵ついオッサン？」

ナツの疑問になのはが答える。

「彼はレジアス・ゲイズ中将。時空管理局地上本部の総司令だよ」

「総司令？そりゃまた随分と偉いやツなんだな」

「まあな。でもこのオッサンはまだこんなことを言ってるよ」

ヴィータはスープを飲みながら呆れていた。

「レジアス中將は古くからの武統派だからな」

シグナムが説明をすると、エルザはレジアスの隣りにいる三人について尋ねる。

「その隣にいる三人のご老人は誰だ？」

「右からミゼット提督、キール元帥、フィリス相談役よ。『伝説の三提督』って言って管理局の黎明期から今の形まで整えた偉大な方なんだよ」

それをフェイトが説明する。

「ふーん。ま、オレ達の世界で言う『魔法評議員』もしくは『せい聖十大魔導』んだいまだうみてーなもんか」

グレイは自分の世界にある組織に例えて納得する。

「でもこうして見ると、普通の老人会だ」

「確かに……」

そう言うヴィータとグレイをフェイトが注意する。

「ダメだよヴィータ、グレイ、偉大な方たちなんだよ」

「へいへい」

「ま、あたしは好きだぞ。ばーちゃん達」

ヴィータがそう言うと、全員の視線が集中する。

「防衛任務を受け持った事があってな。ミゼット提督は主はやってやヴィータ達がお気に入りだようだ」

「ああ、そっか」

「なるほど」

シグナムの言葉に全員が納得した。すると、グレイが思い出したように口を開いた。

「そついやあ、街にはどうやって行けばいいんだ？」

「あ、そつか。グレイさん達はこの辺の地理は全然知らないんだよね？」

「一応ここから街までは一本道やけど、歩きやと時間掛かるしなあ……グレイさんはバイクとか乗れます？」

「まあ、乗れねえこともねえが……」

「せやったら、後でヴァイス君にでもバイクを借りたらどうや？ヴァイス君バイクを二台持つとるし……」

「んじゃあ、そうさせて貰つか。ナツ、テメエはどうすんだ？」

「オレはもちろんハッピーに運んでもらうぞ」

「あいー！」

「あ、それは止めた方がええわ」

「何でだよ!？」

「こっちではハッピーちゃんやシャルルちゃんみたいな喋るネコは珍しいんや。そんなんが街中を歩いてみい。捕まって売られて見世物にされるのがオチやで」

「うっ……!」

はやての言い分にナツは言葉を詰まらせる。そんなナツの肩にグレイの手が乗る。

「ま、安心しろ。オレが運転するバイクの後ろに乗つけてやるから」
「よ」

「……………」

乗り物が苦手なナツは心底嫌そうな顔をするが、街に行きたいという気持ちが強いため、何も言わなかった。

その後、ヴァイスからバイクを借りることが出来たグレイとナツはバイクを押して六課の入り口前に来ていた。すると……

「あ！グレイさんにナツだ！」

「よお！スバルにティアじゃねーか」

スバルとティアナの二人にバツタリと出会った。

「二人もお出かけ？」

「ああ、クラナガンってところを適当に回ろうと思う」

グレイがそう言うと、スバルは突然なにかを思いついた表情になり、口を開いた。

「それじゃあ、私達と一緒にいきましょう！」

「……は？」

その言葉にスバル以外の全員が呆気に取られた。

「私達ならどこに何があるか知ってるし、何も分からないで回るよ
りが良いでしょ？」

「ふうん、スバルにしては良い案じゃないの」

「酷いよティアー」

「けどまあ、お言葉に甘えんとするか」

「だな」

そう言っただけでナツとグレイは頷きあう。

「よかったねティア。ナツとお出かけが出来て」

「なっ!?なに言っただけなのよ!!!? / / /」

「あれティア、顔が赤いよ」

「うっ…うっさいバカスバル!!!」

ティアナはスバルに怒鳴るが、当のスバルはそれをモノともせずニヤニヤと笑っている。

「(……ほっ…)」

そのやり取りを見ていたグレイも意地の悪そうな笑みを浮かべる。

「……………（コク）」

そしてグレイとスバルはアイコンタクトで何かを伝え合つと、同時に頷き合つた。

「よし！それじゃあ行くか！」

「おおー！」

そう言つてグレイがバイクに跨ると、何とその後ろにスバルが跨つた。スバルの予想外の行動にティアナは驚く。

「ちょ、ちよつとスバル！なんでアンタそっちに乗ってるの！？」

「いいからいいから」

と、スバルに軽くあしらわれるティアナ。

「そう言つわけだナツ。わりいがお前はティアナの方のバイクに乗せてもらつてくれ」

「んー…まあ別にいいけどよ」

ナツは特に深く考えもせずティアナが跨っているバイクの後ろに乗った。

「~~~~!!!!ああもつわかったわよ!!ナツ、しっかり掴まっとなさいよ!!!!」

「おう!!」

そう言ってティアナの腰に手を回すナツ。

「 / / / !!!!?? 」

すると、ティアナはトマト顔負けなほど赤面する。

「ん?おいティア、何かオメエ顔があか　　うおお!!!!?」

ナツが言い切る前にティアナはバイクを発進させた。

「お、おいティア！急に発進させ……おぶう……」

「うるさいうるさいうるさい……い……い……い……」

段々と叫び声が遠くなっていき、取り残されたグレイとスバルは……

「初々しいねえ」

「ティア、頑張れ！」

と、咳きながらバイクを発進させ、二人を追いかけて行った。

その後、クラナガンに到着した一行は、最初にスバルオススメのアイスクリーム店に行った。

「やっぱりこのアイスは見た目から素敵だあ〜」

スバルは店員から受け取ったアイスを見てうっとりとした表情でそう呟く。

「それ、全部食う気かよ？」

「うん!」

「すげえな……」

ナツとグレイはスバルの持っているアイスを見てそう呟く。何故なら、スバルの手には大きなコーンの上に七つのアイスクリームが盛りられているのだ。

「ホント、あんたってアイス好きよね」

「好き好き大好き」

そんな会話をしながら四人は近くのベンチに腰を下ろす。

「さて…それじゃ、乾杯」

四人は互いのアイスクリームを軽くぶつけ合い、食べ始める。

「はむっ！はふはふ」

スバルは幸せそうにアイスを頬張り、後の三人はそれを笑顔で見ながらアイスを食べていた。

その頃、ナツ達と同じく街に来ていたエリオとキャラは、公園のベンチに腰を下ろしていた。

「はあ…何だかホントのんびりだねえ」

「うん」

特に会話らしい会話もなく、ただジツと座ってるエリオとキャラ。そんな二人の目に楽しそうに歩いている親子の姿が映った。すると、エリオが口を開く。

「キャラは、六課に来る前はこういうお休みとか過ごしてた？」

「実はあんまり…でも、フェイトさんに遊園地とか水族館に連れて行ってもらった事はあるよ」

「あ、ホント？僕もだ」

「初めて遊園地に連れて行ってもらった時はすごく楽しくて…楽しんで過ぎて…だけど日が暮れて楽しい時間が終わって行っちゃうのが悲しくて、それでちょっと泣いちゃって…」

「うん…何だかよく分かる。前日は楽しみで眠れなくて、遊び終わった日はずっと寂しくて」

「うん、そうそう…」

「今なら分かるけど、ファイトさんすごく忙しいのにその合間で面倒見てくれたんだなって……」

「うん……」

少ししんみりとした空気が流れる中、エリオの腕時計型デバイス『ストラータ』に通信が入って来た。

「ん？はい、こちらライトニング3」

『はい。こちらスターズ3。そっちの休日はどう？』

『ちゃんと楽しんでっかあ！？』

『うるせえぞナツ!』

『ちょっと喧嘩しないでよ!』

通信の相手はスターズの二人と妖精の尻尾フェアリーテイルの二人だった。

「はい。まだ始めたばかりですが、何とか」

『いや、何か困ってる事とかないかなあっと思ったただけなんだけどね』

「ふふっ、ありがとうございます」

「おかげさまで、ありません」

『そっちはどんな感じだあ?』

「えっと、予定通り公園で散歩して、これからデパートを見て回って、な感じです」

「その後食事して、映画見て、夕方には海岸線の夕焼けを眺めるってプランを作ってもらってますので」

『『『『はあ?』』』』

キャロの『プラン』という言葉に四人は素っ頓狂な声を上げる。

「ちゃんと順番にクリアしていきます」

『……何言ってるんだコイツら?』

『クリアって、あの子達は……』

『これがデートだって気付いてねえんじゃねえのか?』

『あはは……まあ、健全だ』

「?」
「?」

上からナツ、ティアナ、グレイ、スバルの順番で呆れていると、当

の本人達は首を傾げていた。

『いや、こっちの話』

『んじゃ、何か困った事があつたらこっちに連絡するんだよ』

『街中での遊びも、私達の方が先輩だからね』

「はい」

「ありがとうございます」

『じゃ〜ね〜』

スバル達からの通信が切れると、エリオとキャロは笑みを浮かべる。

「スバルさんとティアさん、ナツさんとグレイさんも優しいね」

「うん」

一方その頃、クラナガンのとあるトンネル内では、交通事故が起こっていた。

「陸士108部隊、ギンガ・ナカジマ陸曹です。現場検証のお手伝いにまいりました」

と、敬礼ながら言う女性はスバルの姉、『ギンガ・ナカジマ』だった。

「横転事故と聞きましたが…」

「ええ。ただ、事故の状況がどうも奇妙でして……」

「運転手も混乱してるんですが、どうも何かに攻撃を受けて、荷物が勝手に爆発した…と言ってますが」

「運んでいた荷物は缶詰やペットボトル。爆発するようなモノじゃないですね」

「それと、下の方に妙な遺留品がありました」

そう言ってギンガが連れてこられた先にあっただのは、ガジェットの残骸と中身の無い生体ポッドだった。

所変わって、スカリエッツィの研究所では……

『レリック反応を追跡していたドローン？型6機、すべて破壊されました』

「ほお……。破壊したのは局の魔道士か、それとも『当たり』を引いたか」

『確定は出来ませんが、どうやら後者の様です』

「ふふ……。素晴らしい。早速追跡を掛けるとしよう」

そんな会話をする二人に、一人の少女が歩み寄る。

「ねえ、ドクター。それならあたしも出たいんだけど」

「ノーヴェ、君か」

『ダメよノーヴェ。あなたの武装は調整中なんだし』

「今回出てきたのが『当たり前』なら、自分の目で見てみたい」

「別に焦らずとも、アレはいずれ必ず、此処にやって来る事になるわけだがね、ふふっ。まあ、落ち着いて待っていて欲しいな。いいかい？」

「分かった…」

ノーヴェと呼ばれる少女が引き下がる。

「だったら、オレが出てやるよ」

すると、突然声が響き渡り、全員がそちらに視線を移すと、そこにはガジルが立っていた。

「ガジル君か」

「ガジル！ テメエ何しにきた！？」

「聞こえなかったのか？ オレも出るっつたんだよ」

ガジルは不気味な笑みを浮かべながらそう言う。

「ここんとこ最近運動不足だからな。たまには思いっきり暴れてえんだよ」

「お前はいつもアタシ達を相手に戦ってるだろ!？」

「テメエら小娘共ごときが相手じゃあ運動にもなりやしねえんだよ。悔しかったらオレに手傷の一つでも負わせてみるよ。ま、無理だろうがな」

「ぐっ……!!」

ガジルの言葉にノーヴェは悔しそうに歯を食い縛る。

「で、どうなんだスカリエッテイ？」

「ふむ……まあいいだろう。戦力は大きいに越したことはない。それに、君の性格だとダメだと言っても出るんだらう?」

「ギヒッ」

ガジルは肯定を意味する笑みを浮かべると、そのまま部屋を後にした。

「本当にいいのか、ガジル？」

ガジルが部屋を出てしばらくすると、ガジルは黒ネコに呼び止められる。

「リリーか。何がだよ？」

ガジルは自分の相棒、『パンサー・リリー』に視線を向ける。

「正直、オレはあのスカリエッティと言う男に協力するのは気が引けるんだがな」

リリーがそう言うと、ガジルは笑みを浮かべる。

「協力なんざしねえよ」

「なに？」

「オレはアイツを利用していただけ。元の世界に帰るためにな」

「……そうか。ならいいんだがな」

「それより行くぞ。久々にひと暴れしてやんよ」

「……やれやれ」

楽しそうな笑みを浮かべるガジルにリリーは若干呆れながらもついでに行った。

「さて、次はどこ行く？」

「オレはどこでもいいぜ。どれもこれも珍しくて楽しいからな」

「オレもお前たち二人に任せるぜ」

「うーん…それじゃあね」

街中を遊び歩いているナツ達一行は次に行く場所を話し合っていた。
すると……

ピピピ、ピピピ

突然二人のデバイスから電子音が鳴り響いた。

「あれ？キャロから全体通信？」

「なんだろう？」

「「？？」」

四人は首を傾げながらも、とりあえず通信を聴くことにした。

『こちらライトニング4。緊急事態につき、現場状況を報告します。サードアベニューF-32の路地裏にてレリックと思しきおぼケースを発見。ケースを持っていたらしい小さな女の子が一人』

『女の子は意識不明です！』

「「「「「つ！！」「」「」

それを聞いた四人の顔付きが仕事の顔付きへと変わる。同時に、なのはからも通信が入った。

『みんな、お休みは一旦中断。すぐにエリオ達の所に向かって』

『救急の手配はこつちです。2人はそのままその子達とケースの保護。応急手当をしてあげて』

『全員待機態勢。デッキを外してる子達は配置に戻ってな！安全確保に保護するんよ。レリックもその子達もや』

「『了解！』」

「おっ！」

こうして、楽しかった休日は終わりを告げたのだった。

くっ

鉄の竜（前書き）

今回はだいぶ…と言っよりかなり原作をハシヨりました。終わり方も少し微妙です。おまけにグダグダです。

感想お待ちしております。

鉄の竜

エリオとキャロから緊急連絡を受けたナツやティアナ達はサードアベニューF-32の路地裏に来ていた。

「エリオ！キャロ！」

スバルの呼び声に反応した二人は顔をそちらに向ける。

「みなさん！」

「連絡にあったのはこの娘か」

そう言ってグレイはしゃがみ込み、金髪の女の子の容態を見る。

「随分とボロボロだな…」

「地下水路を通って、かなり長い距離を歩いたんだと思います」

「まだこんなにちっちゃいのに……」

「ケースの封印処理は？」

「キャロがしてくれました。ガジェットが見つかる心配はないと思います。それから、これ……」

そう言っただけでエリオが見せたのは鎖がついたケースだった。

「今ロングアーチに調べてもらっています」

「隊長達とシャマル先生、それからウエンディとリイン曹長がこっちに向かってくれてるそうだし、とりあえず現状を確保しつつ、周辺警戒ね」

「うん！」

「はい！」

「おう！」

ティアナの指示に三人が返事を返すと、ティアナは一つの違和感を覚えた。

「あれ？ナツは？」

そう、先ほどまで一緒だったナツの姿がないのだ。

「ああ、あのバカならそこで伸びてるぞ」

と、 그레이が指差す方向には……

「おぶう……」

苦しそうな表情でダウンしているナツがいた。原因は当然、乗り物である。

「あ、あはは……そう言えば、随分飛ばして来たもんね……」

スバルの言葉に 그레이とティアナは呆れ、エリオとキャロは苦笑いを浮かべていた。

それからしばらくして……

「…うん、バイタルは安定してるわね。」

「危険な反応もありません。心配無いと思います」

「はい！」

「よかった」

シヤマルとウエンディの診断結果に全員が胸を撫で下ろした。

「ごめんね、みんな。お休みの最中だったのに」

「あ、いえ」

「平気です」

「ケースと女の子はそのままへりで搬送するから、みんなはこっちで現場調査ね」

「」「」「はい！」「」「」

「」「おっ！」「」

なのはの指示にナツ達が返事を返すと、全員はすぐに行動を開始した。

「さて、みんな！短い休みは堪能したわね！」

「お仕事モードに切り替えてしっかり気合を入れていこう！」

「はい！」「」

「おっ！」「」

そう言うと、ティアナ達はバリアジャケットを身に纏う。そして六人は地下水道に降り立ち、レリックの搜索を開始した。

その頃、街のどこかのポールの上では一人の少女、ルーテシアが立っていた。すると、彼女の側に女性の姿が映った空間モニターが出現する。

『へりに確保されたケースとマテリアルは、妹達が回収します。お嬢様は地下の方に』

「…うん」

『騎士ゼストとアギトさんは?』

「別行動」

『お一人ですか?』

「一人じゃない」

そう言うと、ルーテシアのデバイスの宝玉から小さな黒い塊が出現する。ルーテシアはそれを愛おしそうに両手で包み込む。

「私にはガリユールがいる」

『失礼しました。それと、大変勝手ながら、協力者を一人そちらに寄越してあります』

「協力者?」

「オレだよ」

突如聞こえた声にルーテシアをそちらに視線を向ける。するとそこには、同じくポールに立っているガジルと彼の肩に乗っているリリーの姿があった。

「……………貴方は？」

「オレはガジル・レッドフォックス。さっき言った協力者だ。よろしくな、お嬢様……………」

「オレはこいつの相棒のパンサー・リリーだ。よろしくな」

「うん……………よろしく……………」

邪悪な笑みを浮かべながら自己紹介するガジルと礼儀正しく自己紹介するリリーに、ルーテシアはそう返した。

「……………それじゃあ、行こう」

ルーテシアがそう言うと、二人の足元に魔法陣が出現し、次の瞬間には二人の姿は消えていた。

「火竜の…鉄拳！」

「アイスメイク…？大槌兵？！」
ハンマー

その頃、地下水道のナツ達は襲い掛かってくるガジェットを破壊しつつ、レリックを探していた。

「空の上は何だか大変みたいね」

「うん」

「ケースの推定位置まで、もうすぐです！」

「んじゃあ、さっさと済まして帰るぞ！」

そう言って、ナツが歩き出そうとした瞬間……

ドゴオオオオン……！！

「「どわあああああ……！！？」」「

「「「「っ！！！？」「」「

突然壁が爆発し、近くにいたナツとグレイは吹き飛ばされる。残ったメンバーもその爆発に身構える。すると、そこから現れたのは青い髪の女性だった。

「ギン姉！」

「ギンガさん！」

女性・ギンガの登場に歓喜の声を上げるスバルとティアナ。

「一緒にケースを探しましょう！ここまでのガジェットは殆ど叩いてきたと思うから」

「うん！」

ギンガの言葉に頷くスバル。すると……

「あゝ」

キャラが手を上げてティアナに話しかける。

「ん？どうしたのキャラ？」

「あの、さっきの爆発で、ナツさんと 그레이さんが……」

「「え？」」

キャラの言葉を聞いたティアナとスバルはすぐさまナツと 그레이が居る方角を見た。そこには……

「……………」

頭にタンコブを生やし、白目を剥いて気絶しているナツと 그레이の姿があった。

どうやら先ほどの爆発で吹き飛ばされた際に思いっきり頭を打ち付けたらしい。

「ちよっ、ナツ！？しっかりしなさい！！」

「 그레이さん！大丈夫ですか！？」

ティアナはナツを、スバルは 그레이の身体を揺さぶるが、二人の反応はなかった。

「……………ダメね。完全に伸びてるわ」

呆れた表情をするティアナにギンガがおずおずと声をかける。

「えっと、その人達は？」

「ほら、前にメールで話したでしょ？妖精の尻尾の……」
フェアリーテイル

「ああ、あの次元漂流者の……」

スバルの説明に納得するギンガ。

「それで、ティア……この二人はどうする？」

「……仕方ないわね。起きるまで待つてられないし、このまま放つて行きましょう」

「え？大丈夫なの？」

ティアナの決断にギンガは目を丸くする。

「大丈夫ですよ。この二人は殺しても死なない生命力の塊みたいなものですから」

「そ、そう……」

笑顔でそう言うティアナに顔を引きつらせるギンガ。

そして一同はマジで気絶したナツとグレイをその場に取り残し、レリックの搜索を再開した。

それからしばらくして……

「ありましたー！」

キャロがケースを抱えてそう言う。

目的の物を見つけた一同は安堵の息を吐く。その時……

「てつりゅうこん
鉄竜棍！！！」

「え？きゃあ！！！」

突然どこからか鉄棒が伸びてきて、キャロが持っていたケースを叩き落した。

「そのケース、貰ったぜ！！！」

すると、奥から一人の男性がケースを奪おうと襲い掛かってきた。

「でええええええい！！！」

その時、エリオが男性の前に飛び出し、ストラダーで男性を斬ろうとした。だが……

「ギヒッ」

ガキイイイイン！

「なっ！？」

男性は不気味な笑いを上げると、なんと素手でエリオのストラダーを受け止めた。

「槍の使い方がなってねえなあ、ガキ……」

そう言うと男性は、自分の右手を槍のような形に変形させた。

「っ、手が……！？」

「鉄竜槍・鬼薪きしん！！！」

エリオが変形した男性の手に驚愕していると、男性は槍状になった

手を使い、エリオに向かって連続で突きを繰り返した。

「くっ…ぐあああああ！！」

エリオはそれをストラダで何とか受け止めようとするが、余りのスピードに身体が追いつかず、肩に傷を負ってしまった。

「エリオ君！」

エリオの傷を見てキャラロが近付くが、エリオは腕を横に振り上げ、無言で後ろに下がるように指示する。

「ほう…アレをその程度の傷で済ませるか。中々やるじゃねえか、ガキ」

そう言って男性は楽しそうな笑みを浮かべる。すると……

「ああ！」

何かの気配に気がついたキャラロが後ろを振り向くと、そこにはケースを持っていこうとする少女の姿があった。キャラロはケースを取り返そうと少女に駆け寄るが…

「…………邪魔」

「っ…………！」

少女はキャロに向かって砲撃を放った。キャロはそれをバリアで防ごうとするが、威力が大きすぎて防ぎきれず、後ろに吹き飛ばされてしまった。

「きゃあああああ！！」

「キャロ！？うわあああ！！」

その後ろに居たエリオも巻き込まれ、二人は壁に叩きつけられた。

「おいおい、お嬢様よ……………オレの獲物を取るんじゃないよ」

と、男性が少女に向かって不満を言う。

「っおおおおおおお！！」

すると、男性の横からスバルの飛び蹴りが飛んでくる。

「おっと……」

男性はそれを軽々と避ける。しかし……

「てえええええええい！！！」

「っ！」

その後ろからギンガの拳が迫ってくる。それに気付いた男性はそちらへ振り返る。

ドガアアアアアン！！

しかし、避ける事は叶わず、ギンガの拳が男性の顔面に叩き込まれた。

「やった！」

そう言う男性の顔を見たスバルは驚愕した。何故なら、男性の身体の一部が鱗のような鉄に覆われていたからだ。

「鉄竜の鱗は全ての攻撃を無力化する。テメエらごときじゃ、この鉄竜くろがねのガジル様に傷一つ負わせることは出来ねえんだよ!!」

そう言う男性・ガジルは「ギヒヒヒ」と不気味な笑い声を上げる。

「おい！お嬢様よお、そのケースを持ってさっさと行け。こいつらはオレの獲物だ」

「……………（コク）」

ガジルの言葉に少女・ルーテシアは頷き、その場を去ろうとするが、突然その動きが止まった。何故なら、幻術で姿を消していたティアナがルーテシアの背後に回り、首元にダガーモードにしたクロスミラージュを突きつけていた。

「ゴメンね、乱暴で。これは危ないモノなんだよ」

「っ……………」

無表情であるルーテシアが僅かに顔をしかめる。

《ルー…一、二、三で目え瞑れ》

すると、ルーテシアに誰かからの念話が入る。

《一、二……》

ルーテシアは念話に従って目を閉じる。そして……

「スターレンゲホイル！」

ドゴオオオオオオオン！！！！

その瞬間、辺りには赤い閃光と凄まじい爆発音が響いた。余りの轟音にルーテシア以外の全員が耳を塞ぐ。

そしてその間に立ち去ろうとするルーテシア。すると、いち早く復活したティアナがルーテシアに向かってクロスミラーージュを構える。しかし……

「鉄竜棍!!」

「っ、きゃああああああ!!」

横から現れたガジルの攻撃が直撃し、吹き飛ばされるティアナ。

「つてえ〜……くそっ、何だ今の音は？耳がイカれちまうぜ」

と、ガジルが文句を言っていると、起き上がったティアナは再びクロスマラージュを構え、ルーテシアに向かって発砲した。

「鉄竜剣!!」

「っ…!!」

するとガジルは腕を刺々しい剣に変形させ、それを盾にしてルーテシアを守った。

「たくもお〜。あたし達に黙って勝手に出かけちゃったりするからだぞ。ルールー」

その時、突然聞き慣れない声が響き、全員の視線がそちらに向く。そこには、赤い髪をした少女がいた。

しかしその少女の身長は余りに小さく、六課にいるリインと同じ位である。

「……アギト」

「おう！ところでそこの人相の悪いお前！」

「人相の悪いは余計だ！」

アギトと呼ばれた少女はガジルを指差し、そんなアギトにガジルは怒鳴る。

「さつきルールーを守ってくれたみたいだが、何モンだ？」

アギトは警戒している目でガジルを睨む。

「ああ？お前らが協力しているところのモンだよ。コイツを傷ついたら、小娘共がうるせえんだよ」

「……そうか」

ガジルの説明に、アギトは納得したような表情を浮かべると、ルーテシアに向き直った。

「まあ、もう大丈夫だぞ。何しろこのアタシ、烈火のく剣精！アギト様が来たからな！」

アギトがそう言うと、彼女の背後に小さな花火が咲き誇る。それをルーテシアは無表情、ガジルは呆れた表情で見っていた。

「オラオラ！お前らまとめて、かかってこいやああ！！」

と、アギトがティアナ達に向かってそう言ったその時……

ドゴオオオオオオオオン！！

『……！！』

突如響いた轟音と共にガラガラと壁が崩れ始める。するとそこから二つの人影が現れた。

「まとめてかかってこいだあ？上等じゃねえか……」

「オレ達は今虫の居所が悪いんだ。どうなっても知らねえぞ？」

それは、怒りに満ちた表情をしたナツと上半身が裸になったグレイだった。

「ナツ！グレイさん！」

それを見たスバルは嬉しそうな声を上げる。他のメンバーの表情を明るくする。しかし、当の二人は怒りの表情でメンバーを睨む。

「テメエらあ！よくも置いていきやがったな！！」

「お陰でこの地下水路の中を彷徨い歩くハメになったじゃねえか！！」

どつやらこの二人は置いていかれたことを怒ってるようだ。二人の言葉にティアナが反論する。

「アンタ達が気絶したのが悪いんでしょ!！」

「うるせえ!この騒動が終わったら覚えてるよ!！」

そう怒鳴ったナツは視線をルーテシア達……いや、ガジルに向けていた。

「よお……嗅ぎ覚えのある匂いがしたと思ったら、やっぱりテメエか……ガジル」

「ギヒッ……まさかテメエらもこの世界にいたとはな、サラマンダー火竜」

ナツとガジルは好戦的な笑みを浮かべる。

「今のテメエは敵ってことで良いんだよな?」

「ああ……本気でかかってきなあ!！」

「上等おおー！」

そう言ってナツは拳に炎を纏ってガジルに向かって行った。

今ここに、二頭の竜が激突する。

つづく

ナンバーズ（前書き）

少々遅くなりました。

今回はナツとガジルが激突！

と書こうと思いましたが、あんまり激突しませんでした。

あと無駄に長いです。

ナンバーズ

「うおおおおおおお！……！」

「うらあああああ！……！」

ドゴオオオオオン……！」

地下水路に響くとてつもない轟音。

その理由は、ナツとガジル……両者の拳が互いの顔面を捉えた音だった。

「ぐあああああ！……！」

その衝撃で両者は同時に吹き飛ばされるが、二人ともすぐに体勢を立て直す。

「っあああ！……！」

「オラアアア!!」

そしてすぐに拳を構え、どつき合いを始めた。互いの攻撃がぶつかり合うたびに辺りにかなりの衝撃が巻き起こる。

この光景に、ティアナ達六課メンバーに加え、ルーテシアやアギトも呆然としていた。

「な、なんて戦いをするの…あの二人…!!」

「じ、次元が違う…!!」

「あの人、ナツさんはガジルって呼んでましたけど、知り合いなんですか?」

エリオはいつの間にか近くに来ていた 그레이 にそう尋ねる。

「アイツの左肩をよく見てみる」

그레이 にそう言われ、スバル達はナツと戦っているガジルの左肩を凝視する。そして気がついた。ガジルの左肩に見慣れた紋章が刻まれていることに…

「余所見してんじゃねえ!!」

「おおっと!!」

そんなガジルの背後からナツが殴りかかるが、ガジルはそれをギリギリで避ける。

「火竜の……」

「鉄竜の……」

すると二人は大きく息を吸い込み、頬を膨らます。それを見たグレイは慌て始める。

「やべえ…みんな伏せろおお!!」

『っ!?!?』

グレイの異様な慌てようにティアナ達、そしてそれを見ていたルーテシアとアギトも物陰に隠れる。

「「咆哮！……！」」

ドゴオオオオオオオオン！！！！

その瞬間、ナツの灼熱のブレスとガジルの鉄の破片を含んだブレスが激突し、辺りに信じられない程の衝撃が拡がり、地下水道全体が震える。

「「「うわあああああ！！！」」」

「「「きゃあああああ！！！」」」

「「「……！！！」」

その衝撃にティアナやルーテシア達は吹き飛ばされないように必死に耐える。

「「……へっ」

「……ギヒッ」

衝撃は止むと、二人はお互いを睨み合い、のちに楽しそうな笑みを浮かべた。そして……

「うおおおおおおおおおおおお！！！！」

二人は再び殴り合いを始める。それを見ていたティアナ達は作戦会議を始める。

「ティア、どうする？」

「あのガジルって人はナツに任せましょう。任務はあくまでケースの確保よ。撤退しながら引きつける」

「こつちに向かってるヴィータ副隊長とリイン曹長に上手く合流できれば、あの子達も止められるかも。だよな？」

「そう！」

二人が作戦を決めたその時、グレイ以外の全員にヴィータからの念話が送られる。

《よし。中々いいぞスバルにティアナ》

《《ヴィータ副隊長！？》》

《私も一緒です。二人とも、状況をちゃんと良く読んだ、ナイス判断ですよ！》

《副隊長、リイン曹長。今どちらに？》

エリオがそう尋ねると、向こう側のアギトが何かに気がついたようだ。

「っ…ルールー、何か近付いて来てる。魔力反応……でけえ！」

アギトがそう言った瞬間、天井が大きな轟音を立てて崩れ落ち、そこからヴィータとリインが姿を現した。そしてリインはすぐに手を翳して魔法陣を展開させた。

「捕らえよ、凍てつく足枷！フリール・フェッセルン！！」

「ちっ、ごちゃごちゃしてきやがった。ここは一旦引くか……おい
火竜！この勝負は預けた！！」
サラマシダー

「な、なんだと！？」

「ふざけんじゃねえ！逃がすと思ってんのか！？」

ガジルの言葉を聞いたナツは驚愕し、ヴィータはガジルを逃がすま
いとす。だが……

「オラアアア！！」

ドゴオオオオオン！

『っ！！？』

ガジルは自分の足元の床を鉄の鱗を纏った拳で思いつきり殴り、辺
りに土煙を巻き上げた。

そして土煙が晴れると、そこにはガジルの姿はなく、床にはガジル
が逃げたと思われる穴が開いていた。

「ちっ！」

「こっちもです！逃げられた、ですね」

魔法を解いて氷塊を消すと、そこにはルーテシアやアギトの姿はなく、ガジルと同様に床には穴が開いている。

「ガジルのヤロー……逃げやがって……！」

ナツはガジルに逃げられたことに悔しそうに拳を握っていた。すると……

コトコトコト……！

『っ！？』

突然地下道が揺れ始める。

「何だ！？地震か！？」

「違います…大型召喚の気配がします。たぶん、それが原因で……」
グレイの疑問に答えたのは、いつの間にか目を覚まし、エリオに支えられているキャロだった。

「ひとまず脱出だ！スバル！！」

「はい！ウイング、ロード！」

スバルはヴィータに言われると、地面にリボルバーナックルを叩きつける。すると地面からウイングロードが螺旋状に伸びていき、ヴィータとリインが出てきた天井の穴に入ってそのまま伸びていく。

「スバルとギンガが先頭で行け！アタシは最後に飛んで行く！」

「はい！」

ヴィータの指示を聞いた二人はウイングロードに乗った。そんな中、ティアナはキャロに話しかけていた。

「キャロ。ほら、帽子」

「あ、ありがとうございます……」

ティアナから受け取った帽子を深々と被るキャロ。

「ねえ、レリックの封印処理、お願いできる？」

「え、はい。やれます。」

「ちょっと考えがあるんだ、手伝って！」

「はい！」

キャロは元気よく返事をし、ティアナ達はウィンググロードに乗って登って行った。

その頃、地上では脱出したガジルとルーテシア、そしてアギトが居た。そして三人の目の前にはルーテシアが召喚したと思われる黒い虫のような生物が身体に電気を纏い、地下を揺らしていた。どうやらこれが地震の原因らしい。

「ダメだよルーラー！これはマズいって！埋まった中からどうやってケースを探す？アイツらだって局員とはいえ、潰れて死んじゃうかもなんだぞ！」

「落ち着けよチビ娘」

興奮するアギトに話しかけたのはガジルだった。

「誰がチビ娘だ！！？」

チビ娘と呼ばれたことにアギトは憤慨するが、ガジルはそれを無視して続ける。

「アイツらがこの程度で死ぬかよ」

「うん。それに、ケースはクアットロとセインに頼んで探してもら
う」

ガジルとルーテシアはそう言うが、アギトは反論する。

「よくねーよルールー！あの変態医師とかナンバーズ連中と関わっ
ちゃダメだって！それに、この人相の悪いヤツも怪し過ぎるだろ！
？」

「人相悪いつて言うんじゃないよ！！」

ガジルが怒鳴ると、ルーテシアはアギトの言うことを否定するよう
に首を横に振る。

「大丈夫。ガジルはいい人」

「っ……っ！」

まさか『いい人』と言われると思っていなかったガジルは呆気に取
られる。

「怪我…大丈夫？」

すると、ルーテシアはナツとの戦いで少々負傷したガジルにそう問
い掛ける。

「ああ？この程度なんともねーよ」

ガジルは素っ気無い態度でそう返す。次にルーテシアは視線を黒い
虫へと移す。

「地雷王も……！」

「「っ!？」」

地雷王と呼ばれる召喚獣を戻そうとしたその時、地雷王の足元に魔
法陣が展開され、何本ものピンク色の鎖が地雷王を縛る。

「な、なんだ!？」

「気いつける!さっきのヤツ等の匂いがする!近くにいます!…」

ガジルがそう言うと同時に、三人に向かって二本のウィングロードが伸びて来る。それぞれにはスバルとギンガが走ってきており、間にはヴィータが飛んでくる。

それを見たルーテシアとアギト、ガジルは身構える。すると、ガジルは少し離れたビルからティアアナが狙っていることに気がついた。

「っ、狙われてるぞ！散れ！」

「っっ！」

ガジルの言葉を聞いた二人はティアアナの砲撃を避ける。

「ハアアア！」

そしてすぐにアギトはティアアナに向かって火炎弾を、ルーテシアは向かってくるヴィータ達に向けてクナイのようなダガーを発射した。

しかしそれは意味を成さず、ティアアナには避けられ、ヴィータ達の勢いを止めることすら叶わなかった。それを見ながらルーテシアは近くの高架の手摺部分に着地、アギトはその近くに飛んできた。

だがその瞬間、高速で移動していたエリオがルーテシアの胸元にストラーダを突きつけ、アギトの周りには氷で出来た無数のダガーが浮かぶ。

「ルーテシア！アギト！！」

それを見たガジルは二人を助け出そうとするが……

「アイスゲイザー
氷欠泉！！」

「なっ！？うおおおおお！！？」

その瞬間、いつの間にか近くに来ていた 그레이 がガジルの身体を凍りつかせ、完全にガジルの動きを封じた。

「よおガジル… テメエいつの間にロリコンになったんだ？」

「……言ってる、氷クズが……」

그레이 の嫌味を嫌味で返すガジル。

「……あれ？ナツは？」

ティアナは地下から出るまで一緒だったはずのナツがいつの間にか消えていることに気がつく。

「ナツならさつき、『妙な匂いがする』とか言ってどっかに言ったよ」

スバルの返答にティアナ「あのバカ……」と呟きながら頭を押さえた。そこへ、ヴィータとリインが降りてくる。

「子供を虐めてるみてーで、いい気分はしねーが。市街地での危険魔法使用に公務執行妨害、その他諸々で逮捕する」

掴まった三人にヴィータはそう言い放つ。しかし、彼女達は気付かなかつた。ガジルの口が僅かに釣りあがっていることに……

一方、あるビルの屋上に二つの人影があった。

1人は眼鏡をかけてケープを羽織った、髪を二つ結びにしている女性。もう片方はマントの様な物に身を包み、自分の身長ほどもある巨大な何かを持ち、首の後ろで髪を一つに纏めている少女。

「デイエチちゃん。ちゃんと見えてる？」

眼鏡をかけた女性は少女、デイエチに声をかける。

「ああ。遮蔽物もないし、空気も澄んでる。………よく見える」

そう言うデイエチの視線の先には、シャマルとウェンディ、そしてスバル達が保護した少女が乗っているヘリが存在していた。

「でもいいのかクアットロ？撃っちゃって。ケースは残せるだろうけど、『マテリアル』の方は破壊しちゃう事になる」

デイエチの問いに眼鏡の女性、クアットロは「うふふ」と微笑しながら答える。

「ドクターとウーノ姉さま曰く、あの『マテリアル』が当たりなら……本当に『聖王の器』なら、砲撃くらいでは死んだりしないから大丈夫…だそうよ？」

「ふうん」

そう返事をしながら、デイエチは持っていた巨大な物を包む布を取る。すると、小柄な彼女に扱えるとは思えない程の巨大な砲身が姿を見せた。

すると、クアットロの横に空間モニターが出現し、一人の女性の姿を映し出した。

『クアットロ。ルーテシアお嬢様とアギト様、それにガジルが捕ま
ったわ』

「ああ。そういえば、例のチビ騎士に捕まってましたねえ」

どこか楽しそうに言うクアットロ。

『今はセインが様子を窺っているけど……』

「フォローします?」

そう言ったクアットロの目には、惚けた口調とは裏腹に鋭い光があ
った。

『お願い』

女性がそう言うと、空間モニターが消える。それと同時にクアット
ロはセインと呼ばれる少女に念話を送った。

《セインちゃん》

《あいよークア姉》

《こっちから指示を出すわ。お姉さまの言う通りに動いてね》

《んー了解》

セインからの返事を聞いたクアットロは次に掴まったルーテシアに
念話を送った。

《はーいお嬢様》

《クアットロ？》

《何やらピンチのようで。お邪魔でなければクアットロがお手伝い
致します》

《……お願い》

《はーい。ではお嬢様？クアットロが言うとおりの言葉を、その赤
い騎士に》

自分を見つめているヴィータを見つめ返し、ルーテシアはクアット
口の言葉を待った。

同時刻、なのはとフェイトはへりを目指して全速力で移動していた。
あからさまな陽動に、敵の狙いがへりに乗る少女と、レリックであ
る可能性が高いと判断したからだ。そして、風を切って空を飛ぶ
人の視界に無事な姿のへりが映る。

「見えた！」

「よかった、へりは無事！」

へりの無事な姿になのは達が胸を撫で下ろした瞬間、いきなり大き
な魔力反応が現れた。魔力反応の元は、デイエチとクアット口の居
たビルからデイエチが構えたあの巨大な大砲からだった。

『砲撃のチャージ確認！物理破壊型、推定Sランク！』

ロングアーチからの通信に、なのはとフェイトの顔に緊張が走った。

「インヒューレント・トスキルIS・ヘヴィバレル、発動」

構えた砲身の先に橙色の巨大な魔力の塊を浮かべ、へりに狙いを定めながらデイエチが呟く。それをデイエチ後ろに立って眺めつつ、クアットロは楽しそうにルーテシアへの伝言を口にする。

「逮捕は、いいけど……」

「大事なへりは、放っておいていいの？」

『っ！！！？』

突然ルーテシアが発した言葉を聞いて、一同に緊張が走る。しかしルーテシアはそのまま言葉を続ける。

「貴女はまた……守れないかもね」

「っ！！！？」

その言葉にヴィータの目が大きく見開かれた。

「……………発射！」

その言葉と同時に、デイエチが構えた砲身から凄まじい砲撃が放たれ、それは真つ直ぐにへりへと向かった。

それを阻止しようとなのはとフェイトは全速力でへりへと向かうが

……

「……ダメ！間に合わない！！！！」

ドゴオオオオオオン！！！！！！

無情にも、放たれた砲撃が轟音と共に爆発した。

『砲撃……へりに、直撃……』

『そんな筈ない！状況確認！』

『ジャミングが酷い……精査できません！』

ロングアーチからの言葉にヴィータ達一同は愕然としていた。

「そんな……」

「ヴァイス陸曹と、シャルル先生が……」

「嘘だろ……あのへりにはウェンディも……！！」

「っ……テメエ!!」

エリオとティアナとグレイが呟いた瞬間、ヴィータがルーテシアに掴みかかる。

「ふ、副隊長!落ち着いて!」

「うるせえ!!」

ヴィータを押さえようとするスバルだが、呆気なく振り払われる。

「仲間がいんのか!?!どこに居る!?!言え!!」

ヴィータがルーテシアに問いただしている一方で、ギンガは何かを感じ取り、後ろを振り返った。

「っ!?!」

そこには何と、人の手が地面から生え、ゆっくりとエリオの接近していた。

「エリオ君！足元に何か！」

「え！？」

そう言われ、慌てて足元を見るエリオ。しかし、時既に遅く……

「うわっ！？」

「いただき」

突如地面から現れた青い髪の少女、セインがエリオからケースを掠め取ったのだ。

それを見たティアナはクロスミラーージュを構えて発砲するが、セインは再び地面の中に潜ってそれを回避した。

それを見たガジルはここぞとばかりに声を張り上げる。

「今だ！来い、リリーー！！」

「ぬおおおおおおおー！！！！」

ガシヤアアアアン！

ガジルの声に反応して現れたのは戦闘モードシフトで巨体になり、まさに「パンサー」の名に相応しい姿となったリリーだった。そしてリリーは拳でガジルを拘束していた氷を粉々に砕いた。

「っ、しまった！！」

「遅せえよ！！！」

そして次の瞬間にはガジルはすでに行動に移っていた。

「鉄竜槍・鬼薪きしん！！！」

『うわああああああ！！！！』

ガジルの突然の攻撃に対処出来ずに吹き飛ばされるメンバー。

「セイン！！！」

「あいよーガジル！！！」

ガジルの言葉に反応してルーテシアの前に現れるセイン。そしてセインはルーテシアを抱きしめると、再び地面に潜り、そのまま橋の下に突き抜ける。

「…………アギトが…………」

「ああアギトさんなら、さっきの瞬間で離脱しました。さすが、良い判断です」

そう言ってもう一度地面の中に潜り、その場から去った。

「ギヒツ…………んじゃあ、オレらも戻るぞリリー」

「ああ」

そう言うと、リリーは普段の小さな姿に戻り、背中に羽を生やしてガジルと共に超スピードでその場を離れて行った。

「反応…………ロストです…………」

「黙って。今命中確認中……」

クアットロを黙らせて砲撃が当たったかどうかを確認するディエチ。
そして、煙が徐々に晴れていくと……

「あれ？まだ飛んでる……！」

「あら？」

なんとへりはまだ飛行していた。そして煙が全て晴れ、そこに居たのは……

「どっちら……間に合ったようだな」

「あい！」

装甲が分厚い鎧を身に纏ったエルザと、そのエルザを支えて飛んでいるハッピーの姿があった。

「エルザさん！」

「よかった…！」

エルザの元へ行き、ヘリの無事を喜ぶのはとフェイト。

「あら〜」

「こつちもフルパワーじゃないとはいえ、あんな鎧一つで止められるなんて…！」

予想外の事に驚くクアットロとディエチ。

因みにエルザが身に纏っているのは超防御力を誇る『金剛の鎧』である。

「オイラ……もうダメ……」

六課からここまで超速スピードで飛んできたハッピーは力尽き、その場から落ちそうになる。それを見たエルザはすぐに飛行可能な天輪の鎧に換装し、ハッピーを受け止める。

「ご苦労だったハッピー。ゆっくり休んでくれ」

「あい……」

そう返事をすると、ハッピーは眠ってしまった。

「なのは、ハッピーを頼む」

「え？あ、はい……」

エルザはハッピーをなのはに預けると、砲撃が飛んできた方を睨む。
そして……

「サイクルソード
循環の剣」

静かにそう呟き、数本の剣を飛ばした。

「「っ!?!」」

それを見たクアットロとディエチはすぐに飛んで避け、別のビルに着地した。だが…

「あの砲撃は貴様らの仕業だな？」

その後ろにはエルザの姿があった。

「こっちも!？」

「速い!？」

それを見た二人はすぐにその場から離れる。当然エルザはそれを追いかけて、その後ろにフェイトが続く。

「私たちの仲間を危険に晒した貴様らは、絶対に逃がさん!!」

「市街地での危険魔法使用、及び殺人未遂の現行犯で逮捕します!」

「今日は遠慮しときます〜! IS発動『シルバーカーテン』」

クアットロは自分のISを発動し、デイエチと共にその姿を消した。
しかし……

「火竜の…翼撃!!」

「え!?!」

近くのビルから突然ナツが飛び出し、両手に纏った炎で姿を消した二人を的確に狙った。

「きゃっ!!」

「くっ…!!」

二人はそれを何とか回避し、地面に着地した。

「どうして私達の居場所が!?!」

「オレは鼻が利くんだよ。さっきからしてた妙な匂いはテメエらか。ガジェットと同じ、機械みてーな匂いだ」

ナツがそう言っている間に、二人は何とかその場を離れようとするが……

「逃がさんぞ」

既に二人はナツとエルザ、そしてフェイトの三人に囲まれていた。

「Will Not Surrender…In danger
of runaway.Catch on fire will
be faint（投降の意志なし…逃走の危険ありと認定。砲撃
で昏倒させて捕らえます）」

バルディッシュがそう言うと同時に、三人はそれぞれ攻撃の構えを
取る。

「火竜の……」

「循環サークルの……」

「トライデント……」

そして、一気にそれを放った。

「咆哮……」

「剣^{キーン}!!」

「スマツシャー!!」

そしてそれらがクアットロとディエチのもとに飛んで行き、大爆発を起こした。

『やった!』

『ビンゴ!』

それを見たロングアーチは喜ぶが……

「くそっ!避けられた!!」

『っ!?!』

ナツの言葉ですぐに驚愕に変わる。

「直前で救援が入った。アルト、追って!」

フェイトはすぐに指示を出すか…

「その必要はねえよ」

それをナツが止めた。

「え、どういふこと？」

「……もう、エルザが追ってる」

その頃、町外れでは……

「ふう〜。トーレ姉様、助かりました〜」

「感謝……」

クアットロとデイエチは自身を助けてくれたトーレと呼ばれる女性に感謝の言葉を口にする。

「ボーっとするな、さっさと立て。バカ者共め……監視目的だったが、来ていてよかった。セインはもう、お嬢とケースの確保を完遂したそうだ。ガジルとリリーも撤退した。合流して戻るぞ」

「させると思うか？」

「……っ?!?!?」「……」

突然後ろから聞こえた声に三人は驚愕しながら振り返る。そこには、チーターのような模様が入っており、自身の速度を上げる『飛翔の鎧』を身に纏ったエルザが立っていた。

「バカな！？私のライドインパルスに追いついただと！？」

エルザの登場にトーレは驚愕し、クアットロとデイエチは身構える。

「お前たちを捕縛し、目的などを洗いざらい吐いてもらっぞ」

エルザは剣を構え、一番前にいたトーレを睨む。

「…………お前たちは逃げる。こいつは私がやる」

「…………わかりました。IS発動『シルバーカーテン』」

トーレの言葉をあっさりと了承したクアットロはISを発動し、デイエチと共にその場から姿を消した。

「……………」

その場に残ったエルザとトーレは互いにジッと睨み合い……

しばらくの激突のあと、二人は高速移動を止め、お互いに距離を取った。

二人の頬には、あの激しい斬り合いの中であついたのでろう一筋の切り傷が刻まれ、血を垂らしている。

「やるな……」

「貴様もな……」

二人は微笑を浮かべながら互いを称える。

「名を聞いておこつか……」

「私はエルザ・スカーレット。貴様は？」

「ナンバーズ3のトーレだ」

「そうか。行くぞ、トーレ！」

「来い！スカーレット！」

自己紹介のあと、二人は武器を構え、再び激突………するかと思われたその時……

「鉄竜の咆哮！！！！」

「「っ！！？」」

突如上から二人の間に向かって強力な攻撃が叩き付けられた。そしてそれに巻き上げられた土埃にエルザとトーレは目を覆う。

「今だセイン！！」

「あいよー！」

すると、トーレの足元からセインが現れた。

「や、トーレ姉。逃げるよ」

「……………わかった」

セインの言葉にトーレは渋々と言った感じで頷くと、セインと共に地面の中に消えて行った。

「くっ……………逃がしたか……………！」

そう呟きながらエルザは上空を見上げる。そこには、リリーに抱えられて飛んでいるガジルの姿があった。

「ガジル、リリー……………貴様ら、何故そちら側にいる!？」

「ギヒッ……………オレがこの世界でどうしようがオレの勝手だ」

「お前たちにはお前たちの…オレ達にはオレ達の都合がある」

それだけ言い残すと、ガジルとリリーは飛んで行き、その場から離れていった。

「……………」

エルザはそれを、ただジッと見つめていたのだった。

その頃、ヴィータははやくに報告をしていた。

「こっちは最悪だ。召喚士一味には逃げられ、ケースは持っていかれちゃった。逃走経路も攫めねえ……」

「あ、あのヴィータ副隊長……」

報告しているヴィータに向けてスバルが声をかけるが、言葉を続ける前にグラーファイゼンを向けられて押し黙る。

「ああ、フォワード陣はベストだった。今回は完全にアタシの失態だ」

「リインもです……」

「副隊長！あのー！」

落ち込む二人に今度はティアナが声をかけた。

「何だよ！？報告中だぞ！？」

「いや、あの……ずっと緊迫してたんで切り出すタイミングがなかったんですけど……」

「レリックには私たちが一工夫してまして……」

「「??？」」

ティアナとスバルの言葉にヴィータとリインは首を傾げた。

一方、スカリエツティがアジトとしている地下施設では…戻って来たナンバーズとルーテシア、そしてガジルとリリーが通路を歩いていた。

「はあ、やっと戻ってこれた……」

「お嬢の集団転送のおかげですね。ありがとうございます」

「……うん」

「ああセインちゃん。ケースの中身確認」

「はいよ〜」

そう言つてセインは近くの台座にケースを置き、指先を光らせてケースをなぞると、ケースが音を立てて開かれた。そしてセインは蓋を持ち……

「じゃじゃ〜ん!」

と、勢い良く蓋を開いた。しかし……

「っ、からっぽ!?!」

ケースの中にレリックはなかった。

「どづいことだ!?!」

「セインちゃん! 貴女まさか……!」

「って、私はちゃんと運んできた！」

「デーパーダイバーの使い方間違えて、中身だけ落としてきたとか？」

「間違えねえ!!!」

ナンバーズが口論している間に、ルーテシアは空のケースを見つめ、残念そうに目尻を下げていた。

「ちゃんとスキャンして、本物のケースだと確認して……ほれ！」

セインはその場に行くつかの空間モニターを出し、確認させる。

「ま、確かにこのケースにはあのガキどもの匂いがついてる。ケースは本物だな」

ガジルは空のケースを持ち上げながらそう言う。すると、モニターを見ていたトーレが何かに気がついた。

「んーおかしいわねえ？」

「バカ共が！お前らの目は節穴か！？ここだ！！」

と、トーレが指差したのは……キャロの帽子の中だった。

「ギヒッ……してやられたってわけか……」

そう呟くとガジルは持っていたケースにかぶりつき、そのまま喰い始めた。

「ケースは、シルエットではなく本物でした。私のシルエットは衝撃に弱いんで、奪われた時点でバレちゃいますから」

「なので、ケースを開封してレリック本体に直接嚴重封印をかけて……」

「その中身は……」

説明しながらスバルはキャロの帽子を取ると、そこには一輪の花が咲いたカチューシャがあった。

「こんな感じで……」

ティアナがパチンと指を鳴らすと、カチューシャはレリックへと姿を変えた。

「敵との直接接触の一番少ないキャロに持ってもらおうって」

「なるほど〜！」

「考えたもんだ……」

「は、ははは……」

感心するリンとグレイとは別に、教え子に出し抜かれたヴィータは顔を引きつらせながら笑っていたのだった。

つづく

予言（前書き）

リリカルテイルの番外編アンケートに投票していただいた

Blueさん

レットさん

nukosannさん

鏝さん

レイフォンさん

支配者さん

クレハさん

シマさん

まことにありがとうございます！これからもリリカルテイルをよろしく願います！

現在の投票数は…

?…2票

?
∴ 1票

?
∴ 3票

?
∴ 3票

?
∴ 1票

?
∴ 1票

??
∴ 0票

となっております。

まだまだ投票は受け付けておりますので、お気軽にどうぞ！一人2票まで受け付けております！

予言

「……んあ？……朝か……」

どこかの山の中……そこで野宿をしていたガジルは目を覚ました。

「ん？」

ふと、ガジルは服に違和感を感じたので見てみると、そこにはガジルの服を掴みながら寄り添って眠っているルーテシアの姿があった。さらに彼女の膝にはリリーが眠っており、その隣にはゼストも眠っている。

「まったく……何でオレがガキのお守りをしなきゃなんねえんだ……」

そう……ガジルは先日の事件以来、何故かルーテシアに懐かれてしま
い、その後行動と共にするようになった。もちろんリリーも一緒に
ある。

最初は当然ゼストとアギトはガジルを警戒していたが、ゼストはガ
ジルの目を見て「悪いヤツではない」と判断し、共に行動すること
を許したのである。

「うーくっそお……やな夢だ……」

すると、ルーテシアの胸元で眠っていたアギトが目を擦りながら起
きてきた。

「よお、起きたかよ」

「ガジル……」

「随分うなされてたみてえなだ」

「ああ……ちよっと昔の夢をな……」

「……そうかよ」

それ以上ガジルは何も言わなかった。するとアギトは「ちよつと頭冷やしてくる」と言つて、そのまま上空に飛び上がつていった。

「……………」

それを見送つたあと、ガジルは未だに眠っているルーテシア達に視線を移す。

そして、ガジルは以前聞いたメンバーの過去などを思い出していた。

ルーテシアは意識不明の母親を目覚めさせるレリックを見つけたため、例え犯罪であろうと手を染める。

ゼストは八年前、率いていた部隊ごと抹殺されているが、最高評議会の依頼を受けたスカリエツティによつて人造魔導師として蘇生させられる。

アギトは非合法組織の研究所で貴重なサンプルとしてさまざまな実験を受けており、ロードも既に亡くなつていた。

リリーは怪我をした人間の子供を救つたがために、故郷を追放された。

そしてガジル自身も、フェアリーテイル妖精の尻尾を破壊した過去を持つため、メンバーからは恐れられ、孤立していた。

「ギヒッ……ようするにオレ達はこの世のはみだし者集団ってわけか……」

ガジルは嘲笑うかのように笑みを浮かべ、眠っているルーテシアの頭をそつと撫でる。

「だが……悪くはねえな……」

ガジルのその咳きは、アギトの「絶対燃やしてやるうー!!」という叫びにかき消されたのであった。

一方、ミッドチルダの道路を走る一台の車の中では……

「すみませんシグナムさん。車出してもらっちゃって……」

「なに…車はテストロツサからの借り物だし、向こうにはシスターシャツハがいらっしやる。私が仲介した方がいいだろう。それより、あの二人は連れてくる必要があるのか？」

シグナムが後部座席にチラリと視線を向ける。

「む？」

「う……おふ……」

シグナムの視線に気がつき、首を傾げているエルザ。そして乗り物酔いでダウンしているナツとの姿があった。

「スカーレットはわかるが、何故ドラグニルまで？」

「じゃはは……ほら、何となくナツ君は子供と気が合いそうじゃない？」

「そ、それ……オレが子供と同レベルって聞こえるんだ……が……お
ぷう
」

「ふう……まったく仕方がないな」

相変わらず乗り物酔いをしているナツにエルザは溜め息を一つつくと……

ボスッ！！

「ぶほっ！！」

「！！！？」「」

何といきなりナツの腹部を殴ってナツを気絶させ、頭を膝の上に置いた。所謂、膝枕である。

「これで少しは楽になるだろう」

「……………」

エルザのメチャクチャっぷりになのはとシグナムは啞然としていた。

「し、しかし、検査が済んで何かしらの白黒がついたとして、あの子はどうなるのだろうか？」

すると、シグナムは話題を無理矢理変え、先日保護した少女の話をした。

「うん……………当面は六課か協会で預かるしかないでしょうね。受け入れ先を探すにしても、長期の安全確認を取れてからでない……………」

「……………」

なのはの言葉にシグナムは黙り込む。すると、突然通信が入り、空間モニターが表示された。

『騎士シグナム！聖王教会のシャツハ・ヌエラです！』

「どごされました？」

『すみません。こちらの不手際がありまして、検査の合間にあの子が姿を消してしまいました！』

その後、車を飛ばすこと数分…一同が聖王医療院に到着すると、中からシャツハが飛び出してくる。

「申し訳ありません！」

「状況はどうなってますか？」

「はい…特別病棟とその周辺の封鎖と避難は済んでいます」

なのはの質問に答えるシャツハ。すると、その答えにエルザが異論を唱えた。

「たかが一人の子供にそこまでする必要があるのか？」

「……貴女は？」

「フェアリーテイル妖精の尻尾の魔導士、エルザ・スカーレットだ」

「そうですね、貴女が……私は聖王協会のシスター、シャツハ・ヌエラです。申し訳ありませんが、今は説明している暇はありません。探すのを手伝ってもらえますか？」

「……わかった」

エルザはそう言うと、未だに気絶しているナツに歩み寄る。

「起きろナツ！いつまで寝ているつもりだ！？」

「へばっ！？」

エルザに文字通り叩き起こされ、ナツは目を覚ます。

その際になのはが「エルザさんが気絶させたんじゃない………」と疑問を抱いたが、それを口に出すことはなかった。

その後、全員で居なくなっただ少女を探すことになり、ナツはエルザ

と、シグナムはシャツハと、なのはは単独で少女を探し始めた。

「ナツ、どっちだ？」

「クンクン……こっちだ」

ナツとエルザはナツの嗅覚を頼りに少女を探して、中庭を歩いていた。

「ん？この辺りだ！」

ナツがそう言うと、エルザは辺りを見回す。すると……

ガサツ

「「っ！」」

音がした方に目を向けると、そこにはウサギのぬいぐるみを大事そうに抱えた金髪の少女がいた。

「アイツだ！」

「こんな所にいたのか。とにかく見つかったよ……」

少女を発見したナツとエルザは安堵の表情を浮かべる。そしてエルザは少女を怖がらせないようにゆっくりと近づく。すると……

キーン！

「っ！？」

突如、病棟の方からオレンジ色の閃光が飛び出してきてエルザ達の前に降り立った。その正体はバリアジャケットを身に纏ったシャツハだった。

そしてシャツハはトンファーのような武器を構え、少女に襲い掛かるうとする。そんなシャツハを見て目に涙を浮かべながら少女は怯えていた。

「貴様……何をしている？」

「っ!?!?」

その時、シャツハは後ろから聞こえた殺気の籠った声にゾクリと恐怖を感じた。振り返るとそこには鎧を身に纏い、怒りの形相をしたエルザが立っていた。

「え、エルザを怒らせやがった……オレ知ーらね」

そんなエルザにナツは怯えながら身を引いた。

「もう一度問う。貴様、何をしている?」

とてつもない殺気を放つエルザにシャツハは冷や汗を流すが、それをグツと堪えて声を発する。

「この子は人造魔導師素体……危険な存在なんですよ!?!?」

「危険?あのように怯えて泣いている少女が危険だと?」

「そうです!ですからこの子はこの場で処分を……っ!?!?!?」

シャツハがそれ以上を言葉を発することは出来なかった。何故なら、先ほどよりさらに膨れ上がったエルザの殺気に当てられ、強制的に黙らされたのだ。

「例え造られた命であろうと、この子はこつして生きている……それを奪う権利は誰にもない!！」

「っ……何も知らない者が、口を慎みなさい!！」

そう言つて、トンファーを構えてエルザに襲い掛かるシャツハ。それを見たエルザは「ふう」っと溜め息をつき……

「口で言つてもわからんか?」

ガキイイイイイン!!

一閃。

エルザが換装で出した一本の剣。そののたつた一振りでシャツハの武器であるトンファーを弾き飛ばした。カラッと、トンファーが地に落ちる音が響く。

「そ、そんな……！」

信じられないという表情を浮かべるシャツハ。そんなシャツハの首元に剣を突きつけるエルザ。

「やっぱりエルザ怖え……」

ナツが顔を引きつらせながら言う。すると……

「そこまでだ、スカーレット」

「っ、シグナム……」

シグナムが剣を握っているエルザの手を掴み、仲介に入った。

「シスターシャツハ。今回は貴女に非がある」

「し、しかし……」

「それに、この者は私や貴女が敵う相手ではありません。どうかご理解を……」

「……わかりました」

シグナムに諭され、シャツハはバリアジャケットを解除する。それを見たエルザも鎧と剣を消し、少女に駆け寄る。

「大丈夫だったか？」

「ふえ……！」

しかし、先ほどのやり取りを見ていたせいか、エルザが近づくと少女は目に涙を浮かべて怯える。

「うっ……いや、その……」

それを見たエルザは珍しくオロオロしている。すると、なのはが少女の前に出てきた。

「ごめんね、ビックリしたよね？大丈夫？」

そうやってなのはは少女が落としたウサギのぬいぐるみを拾い、ホコリを払って少女に返す。それを少女は恐る恐る受け取る。

「立てる?」

なのはの問いに答えるようにゆっくりと立ち上がる少女。

「初めまして、私の名前は高町　なのはって言います。お名前、言える?」

「……………ヴィヴィオ」

ポツリと呟くように答える少女、ヴィヴィオ。

「ヴィヴィオ……………いいね、可愛い名前だ」

そう言うと、なのははちよいちよいとナツとエルザを手招きする。どうやら今の内に自己紹介をしろと言うことらしい。それを見たナツとエルザはヴィヴィオに歩み寄る。

「オレはナツ・ドラグニルだ。よろしくな、ヴィヴィオ」

「さっきは驚かせてすまなかった。私はエルザ・スカーレットだ。よろしく頼む、ヴィヴィオ」

ニカッと笑みを浮かべながら自己紹介をするナツと先ほどのことを謝罪しながら自己紹介をするエルザ。

「ヴィヴィオ、どこか行きたかった？」

「ママ、居ないの……」

ヴィヴィオの言葉に三人は一瞬切なそうな表情をするが、すぐに笑顔を浮かべた。

「ああ、それは大変！」

「では、私たちと共に探そうか？」

「一緒に母ちゃん探そうぜ！」

「……………うん！」

「臨時查察？」

「機動六課にか？」

「うん。地上部隊にそんな動きがあるみたいなんよ」

部隊長室では上からフェイト、グレイ、はやての声が続く。

因みに部屋には彼女らだけではなく、はやての膝の上には何故かハッピーもいた。

「地上部隊の査察は厳しいって聞くけど…」

「うう…。六課はただでさえツッコミ所満載の部隊やしなあ」

「今の配置やシフトの変更命令が出たりしたら、正直致命的だよ？」

「それに、妖精の尻尾のこともツッコまれたら、色々とヤバイよ？」

「ううん。何とか乗り切らな」

ハッピーを含めた四人は揃って頭を悩ませる。すると、フェイトが口を開いた。

「ねえ…これ、査察対策にも関係して来るんだけど…六課設立の本当の理由、そろそろ聞いてもいいかな？」

「…そやね。まあ、ええタイミングかな。これから聖王教会本部、カリムの所に報告に行くんよ。クロノ君も来る」

「クロノも？」

「なのはちゃんと一緒について来てくれるかな？そこでまとめて話すから」

「うん」

フェイトが頷くのを見た後、はやてはグレイに視線を向ける。

「グレイさんもついて来てくれますか？」

「俺も？」

「正確にはナツ君とエルザさん、それにウエンディちゃんにも来て欲しいんやけど……」

「わかった。オレはいいぜ」

「オイラは？」

「ごめんな、ハッピーちゃんは留守番しててくれるか？」

「……最近、オイラ留守番が多い気がするよ」

留守番を命じられたハッピーはしょんぼりとする。

「なのは達、もう戻ってると思うけど……」

そう言ってフェイトは空間モニターを操作してなのはに回線を繋げる。すると……

『うわああああああああん！！！！』

聞こえてきたのは少女の大きな泣き声だった。

『ほら泣かない、泣かないで!』

『泣くなヴィヴィオ! ほら! 火の玉だぞ!』

『バカナツ! そんなの見せたら余計に泣いちゃうでしょ!』

『むう………こつこつ時はどうしたら……!』

それを何とか慰めようとオロオロしているのはとナツとエルザ、そしてFWメンバーの姿があった。

「あの、何の騒ぎ?」

『あ、フェイト隊長。実は……』

『やだあああ! ……いつちややだあああ! ……!』

『………と、言うわけだ』

なのはとエルザはそれ以上言葉を発することはなかったが、少女・ヴィヴィオの泣き声で全てを察して、三人と一匹は苦笑いを浮かべた。

「まったく、さすがの火竜サラマンダーや妖精女王も子供には敵わねえか……」

「あい……」

「あはは……なのは隊長、私たちも今からそっちに向かうから」

『うん、了解』

そう言つと、空間モニターを消し、四人は部隊長室を出て、部屋に向かったのだった。

その後、四人が部屋に入ると、そこには未だになのはに抱きついて
いるヴィヴィオがいた。周りには困り果てたナツ達もいる。

「エース・オブ・エースにも勝てへん相手がおるもんやね」

《フェイトちゃん、はやてちゃん、あの…助けて!》

「ん…スバル、キャロ、ナツ君とエルザさんも取り合えず落ち着こ
か。離れて休め」

なのはは念話で二人に助けを求め、それを受け取ったはやては二人
の周りにいるナツ達に離れるように指示をする。

「オイラに任せて！」

すると、ハッピーがヴィヴィオに向かって飛び出した。

「あい！」

「ふえ？」

突然目の前に現れたハッピーにヴィヴィオは目を丸くする。

「ネコ…ちゃん？」

「あい！オイラはハッピーだよ！」

「ハッピー？」

「あい。君の名前は？」

「ヴィヴィオ……」

「よろしくねヴィヴィオ！」

「うん…！」

ハッピーと会話をするうちにヴィヴィオは涙を引っ込め、小さな笑顔を浮かべる。

「ねえ、ヴィヴィオはなのはと一緒に居たいの？」

ハッピーの問いにヴィヴィオは「うん…」と小さく頷く。

「でもね、なのははこれから大事な用事があるんだ。でもヴィヴィオが我侷を言うから困ってるんだ。オイラも困っちゃうよ……」

「うん……」

ハッピーの言葉にヴィヴィオは再び涙を浮かべる。

「ヴィヴィオはなのはを困らせたいわけじゃないんだよね？」

「うん……」

必死にヴィヴィオを説得するハッピー。そんなハッピーをナツとグレイトとエルザは呆然と見ていた。

「なあ…ハッピーって、あんなに子供の扱いが上手かったか？」

「さ、さあな…」

「意外な一面だな…」

一番付き合いが長いナツもハッピーの意外な一面に目を丸くしていた。

「だからさ、オイラと一緒に留守番してようよ！ね？」

「……………」

ようやくハッピーの説得に応じたヴィヴィオはゆっくりと頷き、ずつと掴んでいたなのはの服を放す。

「ありがとねヴィヴィオ、ちょっとお出かけしてくるだけだから」

「……うん」

ヴィヴィオはまた泣きそうになったが、我慢して頷いたのだった。

その後、へりの中。

「ごめんね、お騒がせして……」

「いや、ええもん見せてもらったよ」

はやての言葉になのはは苦笑い、フェイトはクスクスと笑った。

「あの…どうして私たちまで呼ばれたんですか？」

ウエンディが連れて来られた妖精フェアリーテイルの尻尾のメンバーを代表してはやてに問い掛ける。

「ああ、そうやね。実は……」

はやてはグレイ以外の事情を知らないメンバーに事情を説明をした。

「ふむ…臨時査察か……」

「確かに、私たちにとっても大変ですね」

事情を聞いたエルザとウエンディは納得する。因みにナツは……

「お、おお……うぶっ……」

いつも通りである。

「うん。それではやてがみんなにも聞いてもらいたい事があるって」

「ま、その内容はまたあとで言っわ」

はやてのその言葉にメンバーはひとまず納得した。

「しかし、あの子はどうしよか？なんなら教会に預けとくんでもええけど……」

「平気。帰ったら、私がつ少し話してなんとかするよ」

「そうか」

「……ヴィヴィオは今、周りに頼れる者がいないから不安なのだらうな」

そう言つて、エルザはそつと自身の右目に触れた。

エルザは幼い頃、楽園の塔の建設のために集められた奴隷だったが、仲間の命と引き換えに奴隷から解放されたが、心に大きな傷を負つた。そして妖精の尻尾フェアリーテイルに加入した当初は誰かを失うかもしれない恐怖心から周囲と距離を置いていたのだ。

『周りに頼れる者が居ない』その不安や苦しみはエルザには痛いほどよく分かつていた。

聖王教会についた一行は、とある一室に招かれた。そして扉をノックして中に入ると、そこには金髪の女性がいた。

「高町なのは一等空尉であります」

「フェイト・T・ハラOWN執務官です」

ピシッと敬礼をして自己紹介をするのはとフェイト。

「はじめまして。聖王教会、教会騎士団の騎士、カリム・グラシアと申します」

カリムと呼ばれた女性は二人に自己紹介をすると、なのは達の後ろに居る妖精の尻尾組に歩み寄る。

「貴方がたがはやての言っていた妖精の尻尾フェアリーテイルの皆様ですね？」

「おう！オレはナツ・ドラグニルだ！」

「オレはグレイ・フルバスター」

「エルザ・スカーレットだ。よろしく頼む」

「ウエンディ・マーベルと言います。えっと、よろしくお願ひします！」

四人が自己紹介をすると、カリムは「どうぞこちらへ……」と言って全員を部屋の奥の窓辺のテーブルへと招き入れた。

そして既にその場に居たフェイトの義兄『クロノ・ハラウン』とも自己紹介を済ませた。

「さて……昨日の動きについてのまとめと、改めて機動六課の設立の裏表について。それから……今後の話や」

はやてがそう言うと、カリムは部屋の明かりを全て消し、カーテンを閉めた。

「六課設立の表向き理由はロストロギア『レリック』の対策と独立性の高い少数部隊の実験例」

クロノがそう言つと、近くにいくつもの空間モニターが出現する。

「知つての通り、六課の後見人は僕と騎士カリム。それで僕とフェイトの母親で上官、リンディ・ハラオウンだ」

「……（若っ！！？）」「……」

リンディの顔写真を見た妖精の尻尾メンバーは心の中で驚愕した。

「それに加えて非公式であるが、かの三提督も設立を認め、協力の約束をしてくれている」

「その理由は私の能力と関係があります」

そう言いながらカリムは席を立ち、古いお札のような紙束を全員に見えるように前に出す。そして縛っていた紙の紐をゆっくりと解くと、札は光を放ちながらカリムを中心に円を描き始めた。

「私の能力、『プロフェーティン・シユリフテン』。これは最短で半年、最長で数年先の未来。それを詩文形式で書きだした予言書の作成を行う事が出来ます。2つの月の魔力がうまく揃わないと発動できませんから、ページの作成は年に1度しか出来ません」

カリムが説明している途中に7枚の札がなのはとフェイト、そしてナツ達の前に飛んでくる。

「んだコレ？」

「何か書いてありますけど、読めませんね……」

その札には何か文字が書かれていたが、7人とも解読出来ず、首を傾げる。

「予言の中身も古代ベルカ語で、解釈によって意味が変わる事もある難解な文章。世界に起こる事件をランダムに書き出すだけで、解釈ミスも含めれば的中率や活用性は…割と良く当たる占い程度。つまりは、あまり便利な能力ではないんですが…」

「聖王教会はもちろん、次元航行部隊のトップもこの予言には目を通す。信用するかどうかは別として、有識者による予想情報の一つとしてな」

「ちなみに、地上部隊はこの予言がお嫌いや。実質のトップがこの手のレアスキルとか嫌いやからな」

「レジアス・ゲイズ中将、だね」

「ああ…あのヒゲオヤジか」

グレイは以前ニュースで見たレジアスを思い出していた。

「そんな騎士カリムの予言能力に数年前から少しずつ、ある事件が書き出されている」

クロノの視線にカリムは頷くと、彼女の前に予言が書かれた一枚の札が浮かび上がり、それを読み上げる。

「古い結晶と無限の欲望が集い交わる地。死せる王の元、聖地より彼の翼が蘇る。死者達が踊り、なかつ大地の法の塔は虚しく焼け落ち、それを先駆けに数多の海を守る法の船も砕け落ちる」

「それって……！」

「まさか……！」

なのはとフェイトは予言の意図がわかり、顔色を驚愕に染める。

「ロストロギアをきっかけに始まる管理局地上本部の壊滅と。そして管理局システムの崩壊……」

『っ!!!?!?』

カリムがそこまで言うと、ようやく意図が理解出来たナツ達は驚愕する。しかし、カリムの話はまだ続いていた。

「そしてこれが、最近現れた新たな予言です」

そう言うと、カリムの前にもう一枚の札が浮かび上がる。

「憎悪の魂と祝福の魂が交わり、この地に舞い降りし時……星・闇・雷の力でこの世を破滅へと導く……」

「憎悪と祝福の魂だあ？」

「星と闇と雷の力……?」

「この世の……破滅?」

出てきた予言の単語にナツ達は首を傾げる。

「まだ続きがあります……この地に舞い降りた妖精の魂を持つ三頭の竜が揃いし時、破滅への道は救いの道へとなる」

「っ、これって!」

「もしかして……」

なのはとフェイトの視線はナツ達に向けられる。

「妖精の…魂……」

ナツはそう呟きながらそつと自分の肩に刻まれた紋章に触れる。

「せや。これが今回、ナツ君たちを呼んだ理由や」

「なるほどな。この予言を聞く限り、オレ達が大きく関わっているのは明白だ」

「予言に出てきた三頭の竜……この場合は滅竜魔導士ドラゴンスレイヤーと考えた方が良
いだろう。そしてこの地に舞い降りた滅竜魔導士ドラゴンスレイヤーと言えは……」

「私とナツさん……そして……」

「ガジルのヤローか……」

ナツは拳を強く握りながら呟いた。本来なら仲間であり、ライバル
であるはずの男の名を……

つづく

一時の休息（前書き）

ようやく更新できました。

最近スランプ気味で困っております。

今回の話も時間系列が一気に飛んだ上に短い上にグダグダな内容となっておりまして、読まなくても特に問題はないです。

因みにアンケート結果は以下の通りです。

?
∴ 2票

?
∴ 1票

?
∴ 4票

?
∴ 4票

?
∴ 2票

?
∴ 1票

??
∴ 0票

と言うわけで、結果は3番の『機動六課VS妖精の尻尾』と4番の『海鳴への出張任務』に決定いたしました！

投票してくださったみなさん、本当にありがとうございました！

シナリオが纏まり次第、更新させていただきます！

一時の休息

聖王教会で予言を聞いた日から数日。その数日間の間になのははヴィヴィオの保護者責任者になった。

そして現在、訓練所には朝練で集合しているFWメンバーと隊長陣に加え、ナツとグレイとエルザが集まっていた。

「さて、今日の朝練の前に1つ連絡事項です。陸士108部隊のギンガ・ナカジマ陸曹が今日からしばらく六課へ出向となります」

「はい。108部隊ギンガ・ナカジマ陸曹です。よろしく願います」

「「「「「よろしく願います!」「」「」「」

「「あの時のヤツか……」「」

ナツとグレイは以前ギンガのせいで酷い目に遭っているので、少々
苦い顔をしていた。

「それから、もう一人」

「ど〜も」

シャーリーの隣りに立つ眼鏡をかけた女性が片手を上げながら軽い
挨拶をする。

「10年前からうちの隊長陣のデバイスを見てきてくださっている
本局技術部の精密技術官…」

「マリエル・アテンザです」

「地上でのご用事があるとのこと、しばらく六課に滞在していた
だくことになった」

「デバイス整備を見てくれたりもするそうなので…」

「気軽に声をかけてね」

「「「はい！」「」」

「おゝし…じゃあ紹介が済んだ所で、早速今日も朝練行つとくか！」

「「「はい！」「」」

ヴィータの号令で柔軟などの準備運動を始めるFWメンバー。

「ふわぁ…んじゃ、オレらは部屋に戻ろうぜ」

「だな。朝早くに起こされて眠くてしょうがねえ」

そう言って欠伸をしながら隊舎へ戻ろうとするグレイとナツ。

「待て」

そんな二人の肩をエルザが掴んで止めた。

「せっかくだ。私たちも朝練をして行こうではないか」

「「え？」」

「ふふ…腕が鳴るな」

そう語るエルザの目は、まるで獲物を見つけた野獣のようだった。そんなエルザを見たナツとグレイは大量の冷や汗を流し……

「「う…うわあああああああ！…！」」

訓練所全体に響くような絶叫を上げたのだった。

数時間後…

「ぜえ…ぜえ…ぜえ…！」

「はあ…はあ…はあ…！」

エルザの地獄の朝練を終えた二人は息を切らしながら地面にうつ伏せに倒れこんでいた。

「ふ、二人とも大丈夫？」

「だ、大丈夫なわけ…あるか…！」

「や、やっぱりエルザ…とんでもねえ……！」

息絶え絶えになりながらティアナに返事をかえすナツとグレイ。その姿は泥だらけで、よほどキツイ訓練だったことがわかる。

「ふむ、良い運動になったな」

当のエルザはスッキリとした表情をしている。当然、服に汚れは見当たらない。

「じゃあ、みんな集ごう！」

「……………はい！」「……………」

なのはの号令に集合するFWメンバーとギンガ。ナツとグレイもヨロヨロと立ち上がりながらも集合した。

「せっかくだからギンガも入れたチーム戦、やってみよっか？FWチーム5人対、前線隊長4人チーム！」

「……………へ？」

なのはが告げた訓練メニューにギンガは目を点にして呆然とする。

「いや、あのねギン姉。コレ時々やるの」

「隊長達、かなり本気で潰しに来ますので」

「まずは地形や幻術を駆使して何とか逃げ回って」

「どんな手を使っても決まった攻撃を入れる事が出来れば撃墜になります」

「キョクルー」

そんなギンガにスバル達は一通りの説明を終える。

「ギンガはスバルと同じくデバイス攻撃ね。左ナツクルか蹴り」

「はい！」

「じゃあ、やってみよっか！」

「」「」「」「はい！」「」「」

「で、その間私たちは訓練再開だ」

「嘘だあああああああ！！！！」

その後、ナツとグレイは再び地獄を見たのだった。

その頃、六課の隊舎のなのはとフェイトの部屋ではヴィヴィオが洗面所で顔を洗っていた。その傍らではハッピーとザフィーラがついている。

「ぶはっ……うっ？……うっ……？」

顔を洗い終わったヴィヴィオはタオルで顔を拭こうとするが、タオルが見当たらず、ヴィヴィオは困った顔をする。

「あい！ヴィヴィオ、タオルはここだよ」

見かねたハッピーは床に落ちていたタオルを拾い、ヴィヴィオに渡した。

「あっ、ありがとう」

ハッピーにお礼を言いながらヴィヴィオはタオルで顔を拭く。

「アイナさん、ウエンディお姉ちゃん。できたー」

洗面所から出てきたヴィヴィオは部屋を掃除していた寮母のアイナとその手伝いをしているウエンディに駆け寄った。

「はい、良く出来ました」

「偉いね、ヴィヴィオちゃん」

「うん」

二人に褒めてもらい嬉しそうな顔をするヴィヴィオ。ハッピーはそれを微笑ましそうに見ている。すると、シャルルがハッピーに話しかける。

「意外と面倒見がいいのね、ハッピー」

「まあね。オイラ、小さい頃のナツやグレイを知ってるからね。ア
レに比べたら全然マシだよ」

「納得……」

ハッピーの言葉にシャルルは苦笑いをした。

一方、アイナとウエンディはヴィヴィオに服を着せてあげていた。

「ママのお迎え、ちゃんとか愛くして行かないとね？」

「うんー」

アイナの言葉にヴィヴィオは満面の笑みでそう答えたのだった。

「は〜い、じゃあ今日は此処まで」

「全員防護服解除！」

「「「「「は、はい…」「」「」」

なのはとヴィータの模擬戦終了宣言を聞いたFWメンバーとギンガは息を荒げながらその場に座り込む。

「ふむ、おしい所まで入ったな」

「後もうちょっとだった」

「あ〜！最後のシフトがうまく行ってれば逆転できたのに〜！」

「んあ〜…く〜や〜し〜い〜」

「フォロ〜足りなかったね。ごめんね」

「いえ！」

「ギンガさんは全然！」

「悔しい気持ちのまま反省レポートまとめとけよ」

「……………はい……………」

「ちょっと休んだらクールダウンして上がる。お疲れさま」

「……………ありがとうございました……………」

その後、メンバーはストレッチや体操などでクールダウンを始めた。

「あ……………死ぬかと思った」

「エルザの野郎……………加減つてもんを知らねえ……………」

ようやくエルザの地獄の訓練から解放されたナツとグレイもFWメンバーと同じようにストレッチをしていた。

「すごいね。毎日朝からこんなにキツいの？」

「隊長戦は…まあ、ちょっと特別だけど」

「だいたいこんな感じですよ」

「出勤があっても大丈夫な程度には、限界ギリギリまでですね」

「密度濃いです」

「で、練習後はがつつり食べてしっかり休んで、ばっちり回復！」

「そう」

「つかグレイ、お前服は？」

「エルザに細切れにされた」

そんな会話をしながらストレッチをする一同。すると……

「ママー！」

「あ、ヴィヴィオー！」

ヴィヴィオがなのはとフェイトに向かって走ってきていた。

「危ないぞ、転ばないようにな」

「うん！…ふみゃー！」

『あっ……』

エルザがヴィヴィオに注意をすると同時にヴィヴィオは顔から転んでしまった。

「あっ、大変！」

「大丈夫！地面は柔らかいし、綺麗に転んだ。怪我はしてないよ」

「へたに甘やかすより、まずは自分で立てる強さを身に着けるべきだろう」

「それはそうだけど…」

なのはとエルザの言葉を理解しつつも納得できないフェイトは心配そうにヴィヴィオを見ていた。そしてなのははしゃがみ込み、ヴィヴィオに声をかける。

「ヴィヴィオ、大丈夫？」

「ふえ………!!」

顔を上げたヴィヴィオの顔はすでに泣き顔である。

「怪我はしていないな？では、がんばって自分で立ってみる」

「ママ………」

「うん。なのはママはここに居るから、おいで」

「ふえ……ふえええ……！」

ついにヴィヴィオの目から涙がポロポロと溢れ始める。それを見たフェイトはついに…

「なのは、エルザ、ダメだよ！ヴィヴィオはまだちっちゃいんだから！」

そう言っつてヴィヴィオに駆け寄り、抱き起こした。

「も〜フェイトママちよつと甘いよ〜」

「なのはママは厳しすぎです」

「ふむ…甘すぎても厳しすぎてもダメとは…子育てとは奥が深いものだな」

エルザは一人、妙な納得をしていた。

その後、ウエンディとハッピーとシャルルを加えた一同は食堂に来ていた。

「ヴィヴィオ髪の毛可愛いね〜」

「なのはママのリボン！ウエンディお姉ちゃんはつけてくれたの！」

「良い感じだよ、ヴィヴィオ」

「えへへ〜」

リボンを褒められ、嬉しそうに笑うヴィヴィオ。

「しっかしまあ、子供って泣いたり笑ったりの切り替えが早いわよね」

それを見ていたティアナは朝食を口に運びながら言う。

「スバルのちっちゃい頃もあんなだったわよね」

「ええ！？そ、そうかな？」

ギンガがそう言うと、スバルは恥ずかしそうに頬を染める。

「リインちゃんも」

「ふえ〜！？リインは初めっから割りと大人でした〜！」

「嘘をつけ」

「身体はともかく、中身は赤ん坊だったじゃねえか」

「む〜…はやてちゃん！違いますよねえ！？」

「ふふ、どっちゃったかなあ？」

リンははやてに助けを求めるが、はやては軽くいなし、ナツとグレイに話を振った。

「ナツ君とグレイさんは子供の頃どんなんやったん？」

「ああ？」

「私も興味ある！ナツとグレイさんの子供の頃の話」

「私も！」

その話を聞いていたスバルとティアナが食いつく。

「んな昔のことなんざ覚えてねえよ」

「オレもだ。わざわざ話すようなもんでもないしな」

と、ナツとグレイはシラを切るが……

「ナツとグレイは今も昔も変わらないよ」

勝手にハッピーが喋り始めた。

「「おい!」」

二人は止めようとするが、ハッピーは構わず続ける。

「二人はオイラが生まれる前も顔を合わせるたびに喧嘩してたんだよ」

「うわぁ、本当に今も昔も変わらないのね」

「ほっとけ!」

バカにするようなティアナの台詞に怒鳴るナツ。

「あの頃のナツはリサーナと一番仲が良かったよね?」

「(ピクッ)」

「いつも一緒に居て…むぐっ」

「お前もう黙れ!!」

流石に恥ずかしくなったのか、ナツはハッピーの口を押さえ込む。
しかし……

「ねえ…そのリサーナって誰？」

「お、おう？どうしたティア？何かこえーぞ」

ティアナの異様な雰囲気になツは少々身体を震わせる。すると、ナツの代わりに解放されたハッピーが答えた。

「リサーナはね、ナツのお嫁さんになるって約束した人だよ」

「何言ってるんだオマエー……!!?」

「へえ…そう……ナツ、向こうでちょっと詳しい話を聞かせてもら

おっじゃない(ゴロゴロ...)」

「ま、待てティア！ガキの頃の話だって！！つか何でテメエがキレてんだよおおお！！？」

そのままナツは嫉妬という名の炎に包まれたティアナに引きづられて行ったのだった。

余談だが、この時のティアナはなのはを初めとした隊長陣を震え上げらせるほどの気迫を纏っていたらしい。

つづく

襲撃（前書き）

今回から少しずつオリジナルの展開になっていきます。

ですので、これから少々短くなってしまつかもしれませんが、ご了承ください。

襲撃

9月11日 機動六課隊舎 PM19:14

「とうとうわけで、明日はいよいよ公開意見陳述会や」

隊舎に集合したFWメンバーや妖精の尻尾フェアリーテイルの面々に向かってはやては言う。

「明日14時からの開会に備えて、現場の警備はもう始まっている。
なのは隊長とヴィータ副隊長、リン曹長とフォワード4名、それからナツ君とグレイさんとエルザさんはこれから出発。ナイトシフトで警備開始」

「みんな、ちゃんと仮眠取った？」

「はい！」「」「」

「私とフェイト隊長、シグナム副隊長は明日の早朝に中央入りする。それまでの間、よろしくな！」

「「「はい！」「」「」

「「おじー！」「」

はやての言葉に全員大きく返事を返したのだった。

その後、メンバーは会場へ向かうヘリに乗るため、ヘリポートに来ていた。

「では、留守を頼むぞウエンディ」

「はい！任せてください！」

「オイラとシャルルも居るよ！」

「バカね。私たちじゃ戦力にならないでしょ」

「んなことねーよ。頼りにしてるぜ、ハッピー、シャルル」

「あい！」

「……ふん」

ナツの言葉にハッピーは元気良く返事を返し、シャルルは恥ずかしそうにそっぽを向いた。

一方、なのはとヴィヴィオは……

「なのはママ、今夜は外でお泊りだけど、明日の夜にはちゃんと帰

ってくるから」

「……絶対？」

「絶対に絶対」

そう言ってヴィヴィオに向かって小指を突き出すのは。

「良い子で待ってたら、ヴィヴィオの好きなキャラメルミルク作ってあげるから」

「……うん」

そう頷いてヴィヴィオは自分の小指をなのはの小指を絡め、指きりをしたのだった。

その後、全員へりに乗り込み、会場へと出発した。

「う……おぷっ……気持ち……わる……」

「ちょっとナツ、酔うの速いわよ。そんな調子で大丈夫なの？」

「あ、あたりめえだ……全然大丈……おぶう……」

ナツは虚勢を張るが、やはり乗り物には勝てない。それを見たティアナは「はあ……」と溜め息をつき……

「仕方ないわね。ほら、膝を貸してあげるから横になってなさい」

と言った。

「お、おう……すまねえ……うぶっ……」

ナツは特に深く考えず、ティアナの厚意に甘え、ティアナの膝枕で横になる。その光景をみた他のメンバーは驚き半分、微笑ましき半分で見っていた。

「それにしてもヴィヴィオ、本当に懐いてちゃっていますね」

「まったたく」

スバルが話を切り出すと、ティアナが同意する。

「そうだね……結構厳しく接しているつもりなんだけどなあ……」

「きっとわかるんですよ。なのはさんが優しいって」

「いっそ、お前がこのまま引き取っちまえばいいんじゃないか？」

グレイの提案になのはの表情が曇る。

「受け入れてくれる家庭探しはまだまだ続けるよ。良い受け入れ先が見つかってヴィヴィオがそこに行くことを納得してくれれば……」

「納得しない気が……」

「うん……」

「だな」

「うむ」

」「」「」「」

「おぶっ…（コクコク）」

エリオを初めとした全員が頷く。

「それは、ずっと一緒にいられたら嬉しいけど、本当に良い行き先が見つかったらちゃんと説得するよ。良い子だもん…幸せになつて欲しいから…」

なのはの言葉に一同は黙り込む。

「……本当に、それでいいのか？」

グレイが沈黙を破り、なのはに問い掛けた。

「どっぴいじいじと？」

「お前はヴィヴィオの幸せを考えてそう言ってるんだろ？が…ヴィヴィオからしてみれば、お前と離れること事態が最大の不幸だとオレは思う」

「っ……………」

グレイの言葉になのはは顔をしかめる。

「ヴィヴィオがお前に一番懐いているのはただ単に保護責任者だからじゃない。あの子は心の底からお前のことを信頼しているんだ。その信頼をお前の方から切っちゃったら、ヴィヴィオはどう思う?」

「……………」

そう言われたなのはは思案顔になるが、グレイは構わず続ける。

「なのは……………失ってから後悔しても遅いんだ」

「っ!?!?」

グレイの言葉になのはは大きく目を見開いた。

「オレも……………失ってからたくさん後悔した……………」

それを聞いたなのはは以前聞いたグレイの師匠、ウルの話思い出した。

そのことも踏まえて上でなのはは出した結論は……

「それでも、受け入れ先は探してみるよ。ヴィヴィオの幸せのために……」

「……そうか。だったらオレはもう、何も言わねえよ」

グレイのその言葉を最後に、再び沈黙が訪れ、それは目的地につくまで続いたのだった。

だがその時、グレイは気付いていた。

なのはの瞳が大きく揺れていたことに……

翌日。中央管理局・地上本部。

「さて、じゃあ私はそろそろ中に入るよ」

陳述会の開始が近付いて来た事で内部の警護することになったのは先ほどまで共に警備をしていたスバルとギンガに声をかけた。

「でね、内部警備の時デバイスは持ち込めないそうだから…スバル、レイジングハートの事お願いしていい？」

「あ、ああ、はい！」

そう言って、なのははポケットからレイジングハートを取り出し、スバルに預けた。

「前線の皆でフェイト隊長達からも預かっておいてね」

「はい！」

スバルがそう返事をする、なのはは本部内、スバルとギンガは周辺の警備を再び再開したのであった。

一方、グレイとエルザは本部周辺の警備をしながら今回のことについて話し合っていた。

「それにしても、わっかんねえな。予言通りにことが起こるにしても、内部からのクーデターの可能性は低いんじゃないか？」

「うむ。アコース殿が調査してくれた範囲ではな」

「だとしたら外部からのテロだが……その目的がわかんねえ。犯人はガジェットを作った張本人、スカリエツティだったか？管理局を襲って、何の得があるんだ？」

「わからん。管理局に恨みがあるのか、ただ自分の兵器の威力を証明したいのか……」

「ま、確かにこんなデケー組織を潰した兵器となりや、欲しがるヤツはいるだろうな。だが、リスクが高すぎじゃねえか？」

「……考えても仕方ないだろう。もしヤツ等がここを狙ってきたとしても、全力で叩き潰すまでだ」

「……そうだな」

そこで会話は終了し、二人は再び警備に戻った。

「それからグレイ」

「ん？」

「服はどうした？」

「ああ！！..?」

陳述会が開始してから4時間と少し経ったころ、FWメンバーとナツは休憩がてら本部前に集合していた。

「開始から4時間ちょっと…中の方もそろそろ終わりね」

「つまんねーなあ。結局なんも起きねえでやんの」

「何も起きない事に越したことはないよ。最後まで気を抜かずにつきりやろっ!」

「「はい!」」

スバルの言葉にエリオとキャロは元気良く返事をする。

「そっぴや、ギンガはどこ行ったんだ?」

「ギン姉なら、グレイさんと一緒に北エントランスに報告に行ってるよ」

スバルの回答を聞いたナツは「ふーん…」と興味なさ気にしたのだった。

一方その頃、ミッドチルダ上空ではゼストとアギトが中央本部を見下ろしていた。

「連中の尻馬に乗るのは、どうも気が進まね〜けど」

「それでも、貴重な機会ではある。今日ここで全てが片付くのであれば、それに越した事は無い」

「ま〜ね。つか、あたしはルーラーも心配だ。大丈夫かな、あの子？」

「ガジルがついているから大丈夫だろう。それに心配なら、お前もついてやればいい」

ゼストのその発言に、アギトは少しムツとして反論する。

「今回に関しちや、旦那の事も心配なんだよ！ルールーには蟲たちやガリユー、それにガジルもいるけど、旦那は一人じゃんか」

アギトはそう言いながら、空間モニターに映った男性、レジアスを指差す。

「旦那の目的はこの髭オヤジだろ？そこまではアタシが付いて行く。旦那の事、守ってあげるよ」

「……お前の自由だ。好きにしろ」

「するとおさ！旦那はアタシの恩人だからな」

もう一方、こちらはスカリエッティのアジト。

「ナンバーズ。NO・？トールからNO・？？デイドまで、全機配置完了」

その司令室とも呼べる場所で、鍵盤の様なコンソールを叩きつつ、ウーノは全ての準備が整ったことをスカリエッティに告げる。彼女らの前の巨大なモニターには、ゼストとルーテシア、そして地上本部が映し出されている。

『お嬢とガジル、ゼスト殿も、所定の位置につかれた』

『攻撃準備も全て万全。あとはGOサインを待つだけですう』

「ええ」

「ふふふふふっ……！」

トーレとクアットロからの通信に、ウーノが微笑みながら答える。その時、ウーノの後ろに座していたスカリエッティが小さく笑い声を上げた。

「楽しそうですね。ドクター」

「ああ、楽しいさ。この手で世界の歴史を変える瞬間……研究者として、技術者として、心が沸き立つじゃないか。そうだろ？ ウーノ」

心底楽しそうに笑うスカリエッティに、ウーノは微笑みを返す。

「我々のスポンサー氏にとくと見せてやろう。我々の想いと、研究と開発の成果をな……」

椅子から立ち上がり、不気味な笑みを浮かべながらスカリエッティが手を振り上げる。

「さあ！始めよう……！」

「はい」

スカリエッツェの言葉を聞き、ウーノが両手をコンソールに落とす。その指がコンソールの上を滑るように動き、それに合わせて荘嚴なパイプオルガンの音色が響き渡ったのだった。

「っ、なんだこりゃ！！？」

本部周辺を警備していたナツが突然大きな声を上げた。

「どうしたの、ナツ？」

「嘘だろ……ありえねえ!!」

「だからどうしたの!？」

一人焦っているナツにティアナが怒鳴るように問い掛ける。そしてナツは冷や汗を流しながら口を開いた。

「大量のガジエットの匂いだ!ここいら一帯にいきなり現れやがった……困まれてんぞ!!」

『っ!!!!?』

ナツの叫びにその場にいた全員が驚愕したのであった。

同時刻、中央本部から遠く離れたビルの上では、三人の人影があった。

「始まりましたね」

「うん。どっちが勝つんだろうね？」

「ふん、くだらん……塵芥どもの戦いなど、どちらが勝とうが我らには関係のない」

上から冷静に淡々と言葉を発する茶髪の女性。無邪気で子供のよ
うな笑みを浮かべる青い髪の女性。興味無さそうに鼻を鳴らしながら
吐き捨てるように言う白髪の女性。

「帰るぞ。姉上がお待ちだ」

「はい」

そう言っ
て、茶髪と白髪の女性は朱色と黒色の閃光となってその場
から飛び立った。

「あつ！ちょっと待ってよー！！」

少し遅れて青髪の女性も水色の閃光となって二人の後を追いかけて
いったのだった。

UJU

信じてくれるなら…(前書き)

連続投稿!

信じてくれるなら…

襲撃が始まって数分。

本部の管制室、エネルギー室が破壊され、さらには敵の策略により内部にいるのはやフェイト達を閉じ込めてしまった。

それを見ていたナツ達はFWメンバーは行動を開始していた。

「チッ！通信妨害がきつい…。ロングアーチ！」

『外からの攻撃はひとまず止まっていますが、中の状況は不明です！』

「副隊長！」

その通信を聞いたスバルがヴィータに声をかける。

「私達の中に入ります！なのはさん達を助けにいかないか！」

その言葉に他のメンバーも頷く。

「……………」

行かせるべきか止めるべきか、ヴィータは考え込む。すると、引き続きロングアーチから通信が入った。

『本部に向かって航空戦力!?!』

『速い! ランク…、推定オーバーS!?!』

「っ、リイン!?!」

「はいです!?!」

その報告を聞いたヴィータはすぐさま駆け出す。

「そっちはアタシとリインが上がる! 地上はこいつ等がやる!」

「ならば私も共に行こう!」

「……そうだな。頼む！」

そう言うと、ヴィータはポケットの中からはやたとシグナムから預かっていたデバイスを取り出す。

「こいつらのことも、頼んだ！」

「届けてあげてくださいです！」

「……はい！」「」「」

一同はそう返事をし、二人のデバイスをティアナが預かる。

「ナツ！お前はFWメンバーと行動しろ！」

「おう！」

エルザの指示にナツは頷き、そのままFWメンバーについていった。

「リイン！ユニゾン行くぞ！」

「はいです…」

「ユニゾン・イン！」

赤と白の魔力光が一つとなり、リインがヴィータの中へと入る。

すると、ヴィータの深紅のバリアジャケットは白を基調とした物となり、髪の色素が少しだけ薄まり目の色はリインと同じ碧眼となった。

「換装！！」

同時にエルザも身に纏っていた鎧を消し、代わりに黒い羽の生えた鎧『黒羽の鎧』を身につけ、ユニゾンが完了したヴィータと共に飛んで行った。

その頃、内部では閉じ込められたなのはとフェイトが話し合っていた。

「会議室や非常口への道は完全に隔壁ロックされてるね。中との連絡が付かない」

「エレベーターも動かないし、外への通信も繋がらない」

「とにかく、此処でじっとしているわけにはいかないよね」

そうやってなのはは目線をフェイトからある方向へと変える。フェイトもそれに釣られて目線を横に移すと数人の男がエレベーターのドアを開けようとしていた。

「ちょっと荒業になるけど、フェイトちゃん、付き合ってくれる？」

「当然！」

なのはの言葉にフェイトは頷く。その後、二人は男性の局員達と協力してエレベーターのドアを開ける事に成功した。そして開いたドアの中を覗き込む。

「うん…これなら…」

そう言うと、二人はエレベーターのワイヤーを伝って勢い良く降りて行った。因みに二人の両手には魔力コーティングがされているため、摩擦熱が伝わることはない。

「こんなの育士訓練校以来だけど、色んな訓練やつともんだね」

「だね！緊急時の移動ルートは指示してある。目標合流地点は地下通路、ロータリーホール！」

「うん！」

二人は闇の中へと消えて行き、目的地へと急いだ。

ミッドチルダ上空。

中央本部へと急接近を始めたゼストとアギト。すると、彼らに向かってどこからか声が聞こえる。

『こちら管理局。あなた方の飛行許可と個人識別表が確認できません！』

「あ、この声…」

『直ちに停止してください。それ以上進めば迎撃に入ります！』

だが二人はそんな溪谷を無視して進み続ける。すると、彼らの下の雲の中から数発の赤い魔力弾が襲い掛かる。

「むっ…」

「じゃーん！」

それを紙一重で避ける二人。

「フレネンスヒューガ!!」

そしてアギトはその魔力弾を撃ち落とそうと火炎弾を放ち、爆発を起こす。しかし、その爆発の中から鉄球が彼ら目掛けて迫り来た。

「実体弾!?!」

驚くアギトだが、ゼストの方は動揺することもなく、冷静にバリアを張って鉄球を防ぐ。だが……

「ハアアアアアア!!」

雲の中から剣を構えたエルザが現れ、ゼストに向かって剣を振り下ろした。

「むっ……!!」

ゼストは咄嗟に槍で剣を防ぎ、金属音が辺りに鳴り響く。

「ハアア！！」

「ぬうん！！」

それを皮切りにエルザとゼストの激しい攻防が始まる。斬っては防がれ、防げば斬る。そんな攻防が数秒の間で何度も繰り返され、激しい金属音が響く。

そして ガキイイイイン！ っと、一際大きな金属音が鳴ると、エルザとゼストは互いに距離を取る。

「やるな……かなりの槍の使い手だ」

「お前もな。長いこと生きてきて、お前のような剣の使い手は初めてだ」

エルザとゼストは互いに賞賛の言葉を送る。そして再び斬り合いが始まるかと思われたその時……

「ぬおおおおおおお！！！！」

「「「っ！！！！？」」」

突然二人の上空から咆哮が聞こえたと同時に、エルザに向かって一振りの剣が振り下ろされる。エルザはそれを後ろに飛んで避けると、声を張り上げた。

「貴様：リリー！！！」

現れたのは、ガジルの相棒であり、戦闘モードシフトの身体となったパンサー・リリーだった。

「久しぶりだな、エルザ」

そう言うと、リリーは視線をゼストとアギトに向ける。

「リリー……」

「何でお前がここに居るんだよ！？ガジルと一緒にだったんじゃない……」

「妙な胸騒ぎがしてな、心配でこっさり着いてきたんだ。エルザはオレに任せろ」

そう言うと、リリーは再び剣を構え、エルザに向き直る。その時……

「ギガント・ハンマアアアアアア！！！」

雲の中に身を潜めて機会を伺っていたヴィータは背後からリミッタ
ーギリギリで出せる高威力の攻撃を繰り出す。だが…

「外したです！相殺と防御で防がれました！」

「ダメージは通した。続けてぶつ潰す！！」

身の丈以上に変化させたハンマーで煙を振り払い、敵を視認するが
ゼストの容姿が先程までの姿と違っている。髪と甲冑の色が金へと
変わり、瞳の色は紅。ゼストとアギトがユニゾンした時の状態だ。

近くにいたりリリーも少なからずダメージは受けているが、ゼストと
方はどうやら無傷のようである。

『いって〜！チックショー！思いっきりブン殴りやがって〜！』

「すまん、ゼスト、アギト。助かった」

『なんのなんの!』

「気にするな」

リリーの礼に二人はそう返す。

『やっぱり、融合型!』

「アタシ達と同じか……」

「加えてリリーも相手とは……一筋縄では行かないな」

そう言うと、エルザとヴィータはそれぞれ武器を構える。

「管理局機動六課スターズ分隊副隊長、ヴィータだ!」

「フェアリーテイル妖精の尻尾の魔導士、エルザ・スカーレット!」

二人がそう名乗ると、ゼストとリリーも武器を構えて名乗る。

「オレはパンサー・リリー。エルザと同じく妖精の尻尾の魔導士だ」

「……ゼスト」

そして名乗りを終えると、エルザはリリーと、ヴィータはゼストとそれぞれ戦闘を開始した。

一方その頃、なのは達との合流場所へ向かっているナツとFWメンバーは地下通路を突き進んでいた。すると……

「っ！マツハキヤリバー！！」

何かに気がついたスバルがマツハキヤリバーに指示を出すと同時にバリアを張り、どこからか飛んできた攻撃から身を守る。

「スバル！危ねえ！！」

「えっ！？」

ナツの声が聞こえたと同時に、スバルの目に自分に向かって飛び蹴りを放とうとしている赤髪の女性の姿が映った。それを確認したスバルは蹴りを避けようとするが……

「あっ……！！」

その女性を見た瞬間、スバルの動きが一瞬だけ止まった。その隙に女性は見逃さず、容赦ない蹴りをスバルに叩き込んだ。

「うわああああ！！」

スバルは咄嗟に腕をクロスさせて防ごうとしたが、あまりの威力に後ろに吹き飛ばされ、壁に叩きつけられた。

「スバル！」

「っ…待て、ティアナ！ 囲まれてんぞー！！」

「っ！？」

ナツにそう言われ、スバルに駆け寄ろうとしたティアナは足を止めた。ナツの言う通り、スバル以外のメンバーはピンク色の魔力弾に囲まれていた。

「ノーヴェ、作業内容忘れてないっすか？」

「うるせえよ、忘れてねえ」

「捕獲対象4名。全部生かしたまま持って帰るんっすよ」

「旧式とはいえ、タイプ・ゼロがこれ位で潰れるかよ」

「戦闘、機人…」

現れたのはスバルと武装が似ているノーヴェと大きなボード型の銃砲を携えたウエンディだった。

「そんじゃあ、まずは挨拶代わりに……！」

そう言つてウエンディはティアナ達に向かってボード型の銃砲を構える。だがその時……

「火竜の…翼撃……！」

「「っ！！？」」

ナツが両腕から放つた炎がティアナ達を囲んでいた魔力弾を燃やしつくし、次の瞬間にはナツはノーヴェの懐に潜り込んでいた。

「火竜の……！」

「っ、しまっ……！！！」

「「「「っ!?」「」」」

ナツの言葉を聞いた四人は目を見開く。

「ちよつと待ちなさい!アンタ、まさか……!」

「ああ……オレはここでアイツらぶつ倒す!!」

ナツのその言葉に、ティアナは当然反論する。

「無茶よ!さつきは不意をついたから良いけど、戦闘機人を二人も相手にするだなんて!!」

「無茶じゃねえ!!」

「っ、なんでそう言い切れるのよ!??」

ティアナの問い掛けにナツはニツと笑いながら答える。

「お前らが信じてくれるなら、オレはいくらでも強くなれる!!」

「「「「つ!!」「」「」」

ナツの力強い言葉を聞いたティアナ達4人は目を見開いて呆然とする。

「行けえ！モタモタすんじゃねえ!!！」

ナツが再びFWメンバーに向かってそう叫ぶと、ティアナはグツと拳を握り締めてスバル達に指示を出した。

「みんな、ここはナツに任せて行くわよ！」

「うん!!！」

「「はい!!」「」

ナツの言葉を受け入れた4人はすぐに行動を開始し、なのは達と合流するために先を急いだ。

「行かせるかあああ……！」

その時、復活したノーヴェエがスバルのウィングロードに似た黄色い足場を作り、ティアナ達を追おうとした。だが……

「火竜の劍角けんかく……！」

「なっ！？チイツ……！」

背後から全身に炎を纏ったナツが突撃してきたため、ノーヴェエはすぐにそれを回避した。

「へへ……ここは通さねえぞ」

「コノヤロー……！行くぞウエンディ……！」

「OKっす……！」

ノーヴェエとウエンディの二人はそれぞれ武器を構え、ナツを睨む。

「アイツ、ウエンディって名前なのか……偶然ってあるもんだなあ」

と、ナツは自分の仲間と目の前にいる敵の名前が同じだということに少々驚きながらも拳を構え、ノーヴェとウエンディを見据えたのだった。

同時刻…本部内の別の場所では……

「……………」

その場所で佇んでいるのはナンバーズの一人であり、片目に眼帯をした少女、チンク。

「ふん…ガジルと同じ妖精フェアリーテイルの尻尾の魔導士とタイプゼロ・ファーストが相手だと言うから期待してたが……この程度か」

そう呟いたチンクの目の前には……

身体中に数本のナイフを突き刺されて倒れている、グレイとギンガの姿があった。

つづく

人間（前書き）

オリジナルの展開：ムズイ&短い&グダグダ

「逃がさないっす！」

それをウエンディが固有武装『ライディングボード』を構え、ナツに向かって数発の魔力弾を放つ。

「流石に空中じゃ避けられないでしょ！」

そう言ってウエンディは笑みを浮かべるが……

「残念。避けれるぞ」

ナツは口から炎を噴き、その反作用を使って地面に倒れるように避けた。

「今度はこっちの番だ！喰らいやがれえ！！」

そう言ってナツは逆立ちをし、足を180度開いて、そのまま足から炎を噴出したままブレイクダンスのようにグルグルと回り始めた。

「うわぁっ！熱い！熱いっす！！」

「チイツ！」

ウエンデイは悲鳴を上げながら、ノーヴェは舌打ちをしながら紙一重で炎を避ける。

「（この魔法のデタラメ加減……同じだ。ガジルのヤツと……！）」

この時、ノーヴェの頭にガジルの姿がよぎる。

「まだまだあ！行くぞおお！！！」

「（こんなデタラメなヤツに…勝てるのか！？）」

ノーヴェはそんな疑問を抱きながら突撃してくるナツを迎え撃ち始めた。

一方その頃、ナツが戦っている場所から少し離れた場所では、ナンバーズのチンクが身体中をナイフで突き刺されて倒れているグレイトとギンガに歩み寄っていた。

「この二人を回収して、私の任務は終了だな」

そう呟きながらチンクはグレイトの腕を掴む。すると……

ピシッピシッ…パリィィィン!

「なっ!?!?」

なんと、突然グレイとギンガの身体が粉々に砕け散ったのだ。

「これは…氷!?!」

「かかったな!」

「っ!?!」

「アイスメイク…? デスサイズ 大鎌?」

背後から聞こえた声にチンクが振り向くと同時に、グレイが造り出した氷の鎌がチンクに向かって振るわれる。

「くっ!」

チンクはそれを間一髪、後ろに飛んで避ける。

「行ったぞ、ギンガ!!」

「っ、なに!?!」

「てええええええい！！！」

チンクが着地した先で待っていたのは、拳を構えたギンガだった。チンクは咄嗟にバリアを張って、ギンガの拳を防ぎ、二人から距離を取った。

「氷の人形など、いつの間に……！」

「へへ。万が一の時に備えて、あらかじめ造っておいたんだよ。まさか本当に必要になるとは思わなかったけどな」

「でも、そのお陰で貴女のことを知ることが出来ました」

「くっ……！！」

まんまとやられたチンクは悔しそうに顔を歪める。

「ギンガ、お前は先になのは達と合流してる。こいつはオレがやる」

「……わかりました。気をつけてください」

ギンガはそう言つと、その場から離れようとする。

「させるか！」

それを阻止しようとチンクはナイフ型の固有武器『ステインガー』を走り去ろうとしているギンガに向かって放つ。

「そりゃこっちの台詞だ」

だが、それはギンガに届くことなく、グレイが造り出した氷の中に閉じ込められた。

「っ、ステインガーが爆発しない……！」

本来ならば、金属を爆発物に変換するIS『ランブルデトネイター』の能力でステインガーを爆発させるチンクだが、何故かそれが発動しなかった。

「残念だったな。オレの氷の中はあらゆる物の？時？を止める。こっちは閉じ込めちまえば、爆発なんて起きねえだろ」

「っ……舐めるな！」

そう叫びながら再びグレイに向かってスティンガーを投げるチンク。

「何度やっても無駄だ!!！」

それを再び氷の中に閉じ込めるグレイ。だが…

「後ろがガラ空きだ！」

「っ、しまった!?!」

いつの間にか後ろに回りこんでいたチンクのスティンガーがグレイに襲い掛かる。

「くっ……」

スティンガーを凍らせる暇がないため、グレイは横に飛んで避ける。

「IS発動! 『ランブルデトネイター』!!！」

「いつ!?!」

グレイが驚愕すると同時に、投げられたステインガーが大爆発を起こした。

「ゲホゲホ! あつぶねえ」

すると、煙の中からグレイが飛び出してきた。どつやらギリギリで爆発から身を守ることが出来たようだ。

「クソッ!」

グレイは毒づくとおもむろに上半身の服を脱ぎ捨てる。それを見たチンクは驚く。

「な、何故服を脱ぐ!?!」

「あ? オレはこうした方が集中できんだよ」

「っ…この変態が!?!」

そう叫びながらステインガーを投げるチンク。グレイはそれを慌てることなく氷の中に封じ込める。

「さあ、決着をつけようぜ……！」

「火竜の翼撃……！」

「くっ、エアライナー!!」

ナツが両腕に纏った炎の攻撃を、ノーヴェエはスバルと色違いのウィングロード『エアライナー』を発動し、その上に乗って避けた。

「隙ありっス!!」

ウエンディはそう叫びながらナツの一瞬の隙をつき、数十発の魔力弾を放つ。だがナツは一切動じることなく……

「火竜の咆哮!!!!」

灼熱のブレスで魔力弾を全て焼き払った。

「コノヤロオオオオ!!!!」

ノーヴェエはエアライナーを使ってナツに接近し、彼に向かって渾身の拳を放った。

「おもしれえ!火竜の……」

それを見たナツも炎を纏った拳を構え……

「鉄拳!!!」

渾身の拳をノーヴェエの拳にぶつけた。

「オオオオオオオオオオオオ!!!」

二人の拳がぶつかり合い、凄まじい衝撃が辺りに響き渡る。そして…

「ぐわああああ!!!」

「うわああああ!!!」

ナツとノーヴェエはほぼ同時に吹き飛ばされる。

「へっ…やるじゃねえかオメエ」

そう言いながらナツは立ち上がる。

「うるせえよ……」

対するノーヴェは毒づきながら立ち上がる。

「なあ、さっきから気になってたんだけどよ」

「……なんだよ？」

「なんスか？」

ナツの質問にノーヴェとウエンディは応じる。

「お前らさっき、スバルのことをタイプ何とかって呼んでたよな？
どういうことだよ、そりゃ？」

「？…なんだお前、知らなかったのか？」

ノーヴェは続ける。

「アイツは『タイプゼロ・セカンド』……アタシ達と同じ、戦闘機
人だ！」

「っ!!!?!?」

ノーヴェの言葉にナツは衝撃を受ける。しかし、ノーヴェはそのまま続ける。

「アイツもアタシ達と同じ……人殺しの道具なんだよっ!!!」

ノーヴェはどこか悲しげな眼をしながら悲痛な叫びが響き渡った。

「違っっ!!!?!?!?!」

だが、ナツはそれを凌駕するほどの叫びを上げた。

「スバルは仲間のために頑張っつて、仲間のために涙を流す!そんな

優しい心を持った人間だ！！何にも知らねえで、アイツを語んじやねええ！！！！」

「っ……うるせええええ！！！！」

ナツの叫びを聞いたノーヴェは怒りの形相でナツに殴りかかる。そしてナツは、その拳を避けることも受け止めることもせず、ただノーヴェに殴られる。

「お前に何がわかる！？どんなに取り繕っても、結局アタシ達はただの機械なんだよ！！戦うためだけに生み出された兵器だ！！人間らしく生きることなんて……出来ねえんだよおお！！！！」

ノーヴェは悲痛な叫びを上げながらナツを殴り続ける。すると……

「……………ぶざけんじやねえぞ」

そう呟くと同時に、ナツはノーヴェの両手首を掴み、殴るのをやめさせた。

「っ！は、放しやがれ！！」

両手を掴まれたノーヴェは振り払おうとするが、強く掴まれているため、それは敵わなかった。

「お前がただの機械だと？ だったら……その眼から流れてるもんは何なんだよ!!?」

「っ!!?」

そう言われて、ノーヴェは気付いた。自分の片方の眼から一筋の涙が流れていることに……

「涙を流すことが出来るのは、心を持った人間だけだ!! その涙は、お前が人間であることの証だっ!!」

ナツはさらに言葉を続ける。

「他のヤツと生まれ方が違ってくれえでグチグチ言ってんじやねえよ……お前が何と言おうと、誰が何と言おうと、オレは言い続けるぜ。お前は……人間だ!!」

「っ……!!?」

その言葉を聞いたノーヴェは、片方だけではなく、ついに両目から涙が溢れ出始めた。

「オレは今から戦闘機人としてのお前を全力で倒す。次に眼が覚めた時は、お前はもう人間だ。そしたら、また喧嘩しようぜ」

「……………ああ」

ナツはニカツと笑って言うと、ノーヴェは消え入りそうな声ではつきりと頷いた。それを見たナツはノーヴェの両手を放し、炎を纏った拳を構える。そして……

「紅蓮・火竜拳!!」

今の自分が放てる最高の技をノーヴェに放った。

「うわあああああああ!!!!」

それを喰らったノーヴェは吹き飛ばされ、壁に激突する。

「……………ありがとうよ」

そう言い残してノーヴェは倒れ、気絶した。だが、その表情はどうか清々しそうな表情だった。

「さて……………テメエはどうすんだ？」

ナツは先ほどのやり取りを見守っていたウエンディに尋ねる。

「……………もういいっすよ。何かやる気無くなっちゃったし」

ライディングボードを降ろしながら、ウエンディは「それに……………」と
言って言葉を続ける。

「アタシもなってみたくなくなっちゃったっすから……………人間に……………」

その言葉に、ナツは「そっか」と言って笑ったのだった。

一方その頃、チンクと戦っているグレイは……

「はあ……はあ……やるじゃねえの」

「お前もな……」

互いに傷だらけで息を切らしながら一定の距離を保っていた。その周りにはいくつもの凍らされたスティングアがあつた。

「アイスメイク…？ランス槍騎兵？！！」

「くっ！」

グレイが放った氷の槍をチンクは顔をしかめながら避ける。

「（まだだ…あともう少し…）」

「逃がすかよ！アイスメイク？バトルアックス戦斧？！！！！」

グレイは氷の斧を造りだし、横一線に切りつけるが、チンクはそれをも避ける。

「（もう少し…！！）」

「くそっ！チヨロチヨロしやがって！アイスメイク……」

「今だ！ハアッ！」

すると、チンクは一本のステインガーを投げた。しかし、それはグレイに届くことはなく、地面に突き刺さった。

「どうした？もうまとも狙いも付けられねえのか？」

「……………どうかな？」

「なにに？」

「お前の足元を良く見てみる」

「？……………なっ、これは！！？」

言われてグレイは気がついた。グレイの周りにはいつの間にか何本ものステインガーが落ちていたことに。

「まさか……………さっきからチヨロチヨロ逃げ回ってたのも…！」

「ああ……………逃げる振りをして少しずつステインガーを仕込ませてもらった」

「チッ！アイスメイク……………」

「遅い。発動…『ランブルデトネイター』」

「っ！！！！」

その瞬間、 그레이の周りでいくつもの大爆発が起こった。

「終わったか……」

と、チンクが一息ついたその時……

「まだ終わってねえよ……！」

「っ！！！？」

突如、爆炎の中から 그레이が飛び出してきた。

「オレは負けるわけにはいかねんだよ！！仲間のためにもなあ！！」

「っ、しまっ……」

グレイは油断していたチンクの一瞬の間をつき、そして……

「アイス・キャノン
氷雪砲！！！！」

「うあああああああ！！！！」

氷のキャノン砲を造りだし、チンクに放った。それを喰らったチンクは吹き飛ばされ、壁に叩きつけられた。

「うっ……」

チンクは地面に倒れながら身体を動かそうとするが、まったく動かない。すると……

ガラガラガラ！！

「っ！？」

「……何故だ」

「ん？」

一息ついたグレイにチンクが問い掛ける。

「何故、敵である私を助けた？」

「……別に。ただ身体が勝手に動いちゃったんだよ」

グレイは頭をボリボリと掻きながら答えた。

「で、どうする？まだやんのかい？」

「いや、いい……私の負けだ」

そう答えたチンクの顔はどこかスッキリしていた。

UJU

強襲！機動六課（前書き）

本日二本目の更新！

サブタイトルが浮かばなくなってきた……

強襲！機動六課

ナツとグレイの戦闘が終了した頃と同時刻。本局の地下では、なのはとフェイトがFWメンバーとの合流場所であるロータリーホールに向かっていた。すると…

「高町一尉！」

「っ、シスターシャツハ！」

呼び止められた2人が後ろを振り返ると、聖王教会のシスター兼力リムの護衛であるシャツハが息を切らしながら近付いて来ていた。

「シスター、会議室にいらしたんじゃない？」

「はあ、はあ…会議室のドアは勇姿の努力でなんとか開きました。それで、私も急ぎ、二人を追って……」

「はやてちゃん達は？」

「お三方共、まだ会議室にいらっしやいます。ガジェットや襲撃者達についての説明を……」

シャツハがそこまで説明すると、なのはとフェイトの背後から複数の足音が聞こえてきた。その音に振り返ると、そこにはFWメンバー四人が走ってきていた。

「わあ、良いタイミング」

フェイトがそう呟くと同時に、FWメンバーが到着した。

「お待たせしました！」

「お届けです！」

スバルとティアナは息を切らしながらも預かっていた二人のデバイスを差し出す。

「うん！」

「ありがとう、みんな」

二人は感謝をしながらデバイスを受け取る。

「こちらは私がお届けします」

「お願いします」

はやてとシグナムのデバイスを受け取るシャツハ。

「みなさん！！！」

すると、ティアナ達がやってきた道とは別の方からギンガが走ってきていた。

「ギン姉！」

「スバル！良かった、無事だったのね」

ナカジマ姉妹はお互いが無事だったことに喜ぶ。

「あれ？ナツ君は？」

「そう言えば、 그레이さんも……」

そこで二人はFWメンバーと共に行動していたナツと、ギンガと行動していた 그레이が居ないことに気がつく。

「実は……」

ティアナとギンガはあったことを有りのまま二人に説明する。

「そう……じゃあ、早く二人を助けに行かないとね」

なのはの言葉に全員が頷く。

「ロングアーチ、こちらライトニング1」

そしてフェイトは現状を報告するため、ロングアーチに連絡を取っ

た。しかし……

『……こちら…ロングアーチ……』

聞こえてきたのはノイズが酷く、まとも聞こえない通信だった。

「グリフィス！？どうしたの、通信が！？」

『こちらは今、ガジェット達やアンノウンの襲撃を受けて…持ち堪えていますが、もう……！』

ここで、グリフィスからの通信が途絶えた。すると、なのはとフェイトは頷き合い、メンバーに指示を出した。

「分散しよう。スターズとギンガはナツ君とグレイさんの安否確認と襲撃戦力の排除」

「ライトニングは、六課に戻る」

「……………はい……」

「シスターシャツハ。上のみんなをお願いします」

「この身にかけて！」

そして、全員それぞれの行動を開始し、分散して行った。

その頃、機動六課。

「「「はあ…はあ…！」」」

六課の隊舎の前では騎士服を着たシャマルとザフィーラ、そしてウエンデイが息を荒げて膝をついていた。そして彼女たちの前には、ボーイツシユな髪形と気だるそうな顔が印象的な少女、ナンバーズのオットーが立っていた。

「たった三人でよく守った。けどもう終わり。僕のIS『レイストーム』の前では、抵抗は無意味だ」

そう言いながら、オットーは手のひらに緑色の魔力球を生成する。

「っ！？クラーヴイント、防いで！！」

オットーが放った緑色の光は5条の光となって六課に襲いかかる。だが間一髪でシャマルがバリアで防ぎ、均衡状態に持ち込んだ。

その隙にザフィーラがガジェット的光線を掻い潜りながらオットーに飛びかかる。

「ておおおおおおお！！！！」

だが…

「デイド」

オットーがそう呟くと同時に、ザフィーラの前に栗色のストレートヘアの少女、ナンバーズのデイドが現れた。

「IS『ツインブレイズ』」

そしてデイドは赤い刃の双剣、ツインブレイズでザフィーラを斬り付けた。

「ぐあああああああ！！！」

斬られたザフィーラはそのまま地面に激突した。

「ああっ！」

「ザフィーラさん！！」

ウエンディとシャマルがその光景に眼を見開くと同時に、シャマルのバリアが破られ、光線が六課に直撃し、大爆発を起こした。それ

を悔しそつに見ているシヤマルとザフィーラ。

「さよなら」

そう言つてオットーが二人に向かって手を翳したその時……

「天竜の咆哮！！！！」

「「っ！？」」

オットーとデイドに向かって一陣の竜巻が放たれた。二人はそれを飛び上がつて避けると、竜巻が放たれた方向に視線を移した。

「はあ……はあ……！」

そこには息を荒げながらフラフラと辛そつに立っているウエンディの姿があつた。

「六課は壊させない……！ナツさんや 그레이さんやエルザさん……なのはさん、フェイトさん、はやてさん……みんなの、帰る場所だ

「からっ！！！！」

ウエンディは悲痛な叫びを上げながらオットーとディードを睨む。対する二人は、特に動揺した様子もなく、ただ冷静に分析していた。

「あの子…ドクターの捕獲対象の一人だ」

「なら、彼女の捕獲を開始します」

そう言うと、ディードはツインブレイズを構えてウエンディに襲い掛かり、彼女に向かって刃を振るう。

「バーニア！！」

ウエンディはスピード強化の魔法を自身にかけ、ディードの攻撃をかわした。

「天竜の咆哮！！」

そして再びディードに向かって竜巻のブレスを放つ。しかし…

「『レイストーム』」

「っ……！」

デイドの後ろに控えていたオットーが五重に重なった光線を放ち、ブレスを打ち消した。さらにその光線はウエンディに襲い掛かった。

「きゃああああああー！」

直撃こそしなかったものの、余りの衝撃にウエンディは吹き飛ばされ、地面を何度も転がった。

「っ、っ……」

「ウエンディちゃん！大丈夫！？」

そんなウエンディにシャマルが駆けつける。

「はい…まだ…戦えます！」

「無茶よウエンディちゃん！そんなボロボロの状態で！」

「大丈夫です。私に考えがあります……ザフィーラさん、シャマルさん、協力してください」

ウエンディのあまりに真っ直ぐとした眼を向けられ、シャマルとザフィーラは何も言えなくなる。そして……

「わかったわ」

「何をすればいい？」

ウエンディに協力することにした。

「私の準備が整うまで、攻撃を防いでください」

「わかったわ」

「心得た」

シャマルとザフィーラは頷くと、残っている魔力を全て使い、強大なバリアを展開した。

「アームズ！うっ……！！」

もちろん、そう何度も強化魔法を連発するのは身体への負担も激しいため、ウエンディは苦しそうに呻き声を上げる。

「まだ…まだ……！！」

それでも、ウエンディは倒れることはなかった。何故なら…

「みんなが帰ってくる場所は絶対に……私が守るっ！！！！」

その思いが、彼女を突き動かしているからである。

「シャマルさん！ザフィーラさん！伏せてください！！」

「っ！？」

それを聞いた二人はバリアを消し、すぐにその場から離れた。

「魔力全開……！天竜の……！！」

ウエンディは身体中の魔力を口に集める。そして……

「咆哮！！！！！」

今までで一番強大な竜巻のブレスを放った。

「っつ……！！？」

その余りの大きさにオットーとディードは眼を見開き……

ドゴオオオオオオオン！！

大爆発が起こったのだった。

一方、ナツとグレイの搜索に向かったスターズはナツとグレイを探して通路を走っていた。と言っても、走っているのはスバルとギンガで、なのははティアナを抱えて飛んでいた。

「ナツ……」

ティアナは表情を暗くしてナツの身を案じていた。すると……

「っ、なのはさん！前から何か来ます！！」

「っっっ！！」「っ」

スバルの言う通り、なのは達の居る通路の前方から何かに向かってきている。それを見た全員はその場で止まった。

そしてその何かが近づいてくると……

「あー！ やっと見つけたっスー！！」

「「っ！？」」

スバルとティアナはその声に聞き覚えがあった。その声の主とは、数十分前に自分達を襲ってきた戦闘機人、ウエンディだった。ウエンディはライディングボードに乗り、自身のISである『エリアルレイヴ』の力でこちらに向かって来ていた。

「アンタは！！」

それを見たスバルとティアナは武器を構える。すると、ウエンディは慌てて声を上げる。

「わあー！！ ストップ！ ストップっスー！！ アタシ達はもう戦う気ないっスよ！！」

「「えっ！？」」

ウエンディの意外な言葉にスバルとティアナは驚愕する。

「それより、こいつを何とかして欲しいっス！」

ウエンディはティアナ達の前で止まると、自分の後ろを指差す。そこには……

「うっ……おぶう……！」

苦しそうな表情をしているナツと気絶しているノーヴェが横たわる形で乗っていた。

「……」

「アタシがライディングボードに乗せた瞬間に急に苦しそうに呻きだして、どうしたらいいのかわからなかったからアンタ達を探してたっス！何とかして欲しいっス！」

必死に頼み込むウエンディ。すると、ティアナは呆れた表情をしなからこう言った。

「大丈夫よ。それ、ただの乗り物酔いだから」

「……………へ？」

その言葉にウエンディは呆気に取られる。

「ナツは乗り物に極端に弱いんだよ。だからそのボードで酔っっちゃったんだね」

「とりあえず、ナツをボードから降ろしなさい」

「……………はいっす」

言われる通り、ウエンディはライディングボードからナツを降ろした。すると……………

「うおおおおー！…生き返ったー！…！」

すぐさま復活した。それをウエンディを含めた五人が呆れた表情で見ていると、なのはがウエンディに質問した。

「それで、君はどうしてナツ君と一緒に行動してたの？」

「あ、それはっスね……」

ウェンディが説明しようとしたその時……

ドゴオオオオオオン！！

「……………っ！！？」

突然近くの壁が爆発し、それを見た全員が身構えた。すると、その壁の向こうから二つの人影が現れた。

「お、いたいた！な？こうした方が速かっただろ？」

「ただの偶然な気がするが……」

「……………グレイ（さん）！？」「……………」

「チンク姉！？」

それは得意げに笑みを浮かべるグレイと呆れた表情を浮かべるチンクだった。

その後、ウエンディとチンクはこれまでの経緯を説明した。

「えっと……つまり、ウエンディとそこで気を失っているノーヴェはもう戦う気はなくて、チンクもグレイさんに負けて、同じくもう戦う気はないと？」

「はい」

「……わかった。じゃあ、君たちの身柄は機動六課が預かるということだ」

なのはの問い掛けに頷くウエンディとチンク。その真っ直ぐとした眼に、なのはは嘘偽りが無いことを悟り、そう告げたのだった。

場所は戻り、機動六課。

「はあ…はあ…はあ…やった！」

ウエンディは爆発が起こった方を見て、小さくガッツポーズを取って喜んだ。それはシャマルとザフィーラも同様で、勝ったと思い、笑みを浮かべた。しかし……

「今のは少し…驚いた」

「「「っ！!?」」」

上から聞こえてきた声に三人は驚愕しながら視線を上へと向けた。そこには無傷のオットーとディードが立っていた。

「あと少し避けるのが遅かったら、やられていた」

そう、二人はウエンディのブレスを、間一髪で避けていたのだ。それを聞いたウエンディの表情に絶望の色が浮かぶ。

「そんな…もう、魔力が…！」

全魔力を込めたブレスを避けられたウエンディにはもう、成す術も魔力も残されていない。それはシャマルとザフィーラにも言えることだった。

「これで終わり。『レイストーム』」

そう言つて三人に向かつて手を翳し、手のひらに魔力を集め、光線を放とうするオットー！。

「「「っ……！」「」」

三人が諦めて目を瞑つたその時……

ドゴオオオン！ドゴオオオン！ドゴオオオン！！

「「「っ！！？」「」

突如、オットーとディードの周りに居たガジェットが音を立てて壊れ始める。

「なに？」

突然の事態にオットーが戸惑っていると、デイドが口を開いた。

「オットー…六課の周りに配置したガジェットが、もの凄い速さで破壊されていつてる」

「なに？」

この時、初めてオットーの表情に僅かだが驚愕の色が見て取れた。

「な、何が起こってるの？」

「わからん……だが、我々ではない別の魔力を感じる」

シヤマルとザフィーラは突然の事態に戸惑っているが、ウエンディは何か別のことを感じ取っていた。

「……………この魔力…どこかで……………？」

ウェンディは感じた魔力をどこかで感じたことがあり、それを思い出そうと首を傾げていた。

「……………」

オットーは冷静に、ジッと目に集中させて辺りを見ていた。その時、彼女の視線の端で、金色の閃光が見えた。

「デイド。そこ！」

オットーはすぐさまデイドに指示を出し、それを聞いたデイドはオットーが指示した場所にツインブレイズを構えた。そして…

「捕らえた」

ガキイーン！ドオオオオン！！

突如出現した金色の閃光に向かってツインブレイズを振った。しかし斬ることは叶わず、金色の閃光はウェンディ達の前に墜落し、土煙が舞い上がる。

「まさか、あのスピードを捕らえるとはな……」

「っ!!!?!?」

閃光が墜落した場所からそんな声が響く。そしてそれを聞いたウエ
ンディは目を見開いた。

「そんな……この声……まさか……!!」

どうやらウエンディは聞こえた声に聞き覚えがあるようで、ただた
だ驚愕の表情を浮かべていた。すると、土煙が晴れ、声の主の姿が
明らかになった。

青色の短髪に整った顔立ち。そして右目には奇妙な模様をいれ、黒
いロングコートを靡かせた青年が立っていた。

「あ、貴方は……!!」

ウエンディは目を見開き、驚愕と動揺が入り混じった声で、その青
年の名を叫んだ。

「ジエラール！！！！？」

そう。その青年はナツ達の世界で大罪を犯し、逮捕されたはずの男……『ジエラール・フェルナンデス』だった。

く
く
く

マテリアル（前書き）

今回はスゲー短いです。

あと、サブタイトルから予想できると思いますが、今回ヤツ等が登場します。

なお、僕はゲームを未プレイなので、口調とかが間違っているかもしれない。

ご了承ください。

マテリアル

ウエンディの最後の攻撃も失敗し、絶体絶命のピンチに陥った機動六課。そんな彼女達の前に現れたのは、かつて大罪を犯して逮捕されたはずの男…ジェラルルだった。

「ほ、本当に…ジェラルルなの？」

未だに驚愕と困惑が入り混じった表情でジェラルルを見るウエンディ。

「……久しぶりだな。ウエンディ・マーベル」

その言葉でウエンディは目の前に居るジェラルルが本物だと悟った。

「どうしてジェラルルがここに……！？貴方は確か評議員に……」

「話はあとだ。まずは……あの二人を、倒す」

ウエンディの言葉を遮り、ジェラルルは上空に居るオットーとディードを見据えて言った。

「あの男は…危険だ」

ジェラルルを見据えたオットーは直感的にそう言った。

「今、この場で排除する。IS『レイストーム』」

オットーはジェラルルに向かって数本の光線を放った。対するジェラルルはまったく動じず、ゆっくりと口を動かした。

「^{ミイティア}流星」

そう呟くと、ジェラルルの身体が光に包まれる。そして同時に、ジェラルルは凄まじいスピードで飛び始め、オットーの光線をかわした。

「無駄だ。そのスピードはもう見切った。ディード」

「ええ」

オットーの指示を受けたデイドはジェラルルの動きを予測し、彼に向かってツインブレイズを振り下ろした。だが…

キーン！

「「っ！！？」」

なんと、ツインブレイズが当たる瞬間、ジェラルルのスピードがさらに速くなり、攻撃をかわした。

「まだ、速くなるのか？」

感情表現に乏しいオットーとデイドも流石に驚きを隠せない。

「オレにお前たちの攻撃は当たらない。見せてやる…天体魔法の力を……！」

そう言うと、ジェラルルはそのスピードのままさらに上空に飛び上がり、二人の頭上に立った。

「七つの星に裁かれよ……」

そしてそう言いながら両手の指を七本立てる。

「天体魔法『グランシャリオ七星剣』！！」

すると、天から七つの巨大な光の玉がオットーとディードに向かって降り注いだ。

「うあああああ！！」

それを喰らった二人は地面に叩き落され、地に伏せたのだった。

「凄い……！！」

それを見ていたシャマルはそう言葉を漏らした。

「ザフィーラ、今の内に中のみんなを」

「心得た」

シャマルの言葉を聞いたザフィーラは隊舎の中へと走って行った。

「ねえ、ウエンディちゃん。あの人も妖精の尻尾フェアリーテイルの一員なの？」

シャマルはウエンディにそう尋ねるが、ウエンディは首を横に振って否定する。

「いいえ、あの人は妖精の尻尾ではありません。あの人の名前はジエラール……私達の世界で大罪を犯して逮捕された人です」

「っ！？それって、犯罪者ってこと！？」

「あ、いえ……そうかもしれませんが、でも……私の知ってるジエラールはとても優しい人です」

ジェラルルの言葉に何も返さず、二人同時にジェラルルに向かって駆け出した。

「『レイストーム』!!」

「『ツインブレイズ』!!」

そして同時にISを発動させてジェラルルを攻撃する。だが……

「無駄だ」

ガシャアアアアン!!

魔力を込めた腕の一振り。

たったそれだけで、ジェラルルはオットーの光線を霧散させ、デイドのツインブレイズを粉々に打ち砕いたのだ。

「「っ……………!!?」」

ジェラルルの圧倒的強さに言葉を失う二人。そしてジェラルルはそんな二人に向かって手を翳し…

「すまない……」

そう呟いて、魔法を発動させた。

「天体魔法…アルテアリス暗黒の楽園」

すると、まるで星空のような黒い球体が出現し、オットーとディードを襲った。

「「うわあああああああ！！！」」

それを喰らった二人の断末魔が響く。そして、球体が消滅すると、そこには倒れているオットーとディードの姿があった。

「……終わったか」

それを見たジェラルルはそう呟きながら一息ついたのだった。だが

その時……

ドゴオオオオオオオオオン！！！！

「「「「「つ！！？」」「」「」

突如、六課の隊舎が爆発し、その場にいた全員は目を見開いた。

「まさか、他にも仲間が！？」

「そんな……中にはみんなが……！！」

「とにかく中へ！！」

そう言ってシャマル、ザフィーラ、ウエンディは隊舎の中に入ろう

とした。すると…

「その必要はありません」

「「「「つ!!!?」「」「」

四人の上空から、どこか聞き覚えのある声が響いた。そしてその声が聞こえた方へ全員が視線を向けた。そこには……

「え？なのは…さん？」

「なのはちゃん……よね？」

ウエンディとシャマルの言う通り、そこにはなのはが立っていた。しかし、髪はショートカットで、白いはずのバリアジャケットは黒く染まっており、その顔は無表情だった。

全員が困惑する中、ジェラルルが口を開いた。

「現れたか……マテリアル」

「マテリアル？」

ジェラルルが発したマテリアルと言う言葉に二人は首を傾げた。だがジェラルルはその問いには答えず、ただマテリアルと呼ばれた女性を睨んでいた。すると、その女性はペコリと頭を下げ、名を名乗った。

「初めまして。私は闇の書から生まれたマテリアルの一人……マテリアルS、シュテル・ザ・デストラクター星光の殲滅者と申します」

その頃、ミッドチルダ上空ではフェイト、エリオ、キャロの三人が六課へと向かっていた。すると……

「っ……！」

遠くで何かが光ったのに気がついたフェイトはすぐにエリオとキャロを庇うようにバリアを展開する。すると、フェイトのバリアに水色の魔力弾が直撃する。

「ふうん…アレを防ぐなんて、結構やるじゃん！」

「「「っ！！？」「」」

声が聞こえてきた方を見て、三人は絶句した。何故なら…

「わ、私……！？」

「フェイトさんが……」

「二人！？」

そこには、フェイトによく似た容姿とバリアジャケットを纏い、ツインテールにした水色の髪を靡かせた女性が目の前にいたのだ。

「こいつらよりかは、遊べそうかな？」

そう言って、女性はフェイト達に向かって何かをポイツと投げた。

「っ、フリード……！」

投げられたその正体に気がついたキャラはフリードの背中ですれを受け止める。その受け止めたものとは、なんと人であった。

「こ、この人たちは……！」

「戦闘……機人！？」

その受け止めたものは何と、トール、セツテ、ディエチ、三人の戦闘機人だった。

「そいつら、ボクを君と勘違いして襲ってきたんだ。ま、振り返ちにしてやったけどね」

と、子供のような無邪気な顔で語る女性。

「貴女は、一体……!？」

「あ、そう言えばまだ言っただけじゃなかったね」

女性は思い出したように言うと、バルディッシュによく似たデバイスを掲げ、高らかにこう名乗った。

「いいかよく聞け!!ボクは闇の書から生まれたマテリアルの一人
…マテリアル!!レイ・ザ・スラッシャー雷刃の襲撃者だ!!!」

そしてもう一方のミッドチルダ上空では……

「ぐあああああー!!」

「リリー!!!!」

何者かに攻撃され、吹き飛ばりりり。エルザとゼストはその攻撃した者を睨み、ヴィータは驚愕した表情でその人物を見ていた。その人物とは……

「ククク……」

邪悪な笑みを浮かべたはやてと瓜二つの女性だった。

「何なんだよテメエは！？はやてと似たような姿しやがって！！」

ヴィータは怒りを込めて女性に怒鳴るが、女性は笑みを崩さない。

「ククク…知りたければ教えてやろう！王たる我が名を！！」

そう言つて女性ははやてのデバイス、シュベルトクロイツとよく似たデバイスを構えて、こご名乗った。

「ロード・デヴィ我は闇の書から生まれたマテリアルの王！マテリアルD、アーチェ闇統べる王だ！！！！」

今此処に、三人のマテリアルが舞い降りた。

マテリアル・その2（前書き）

サブタイトルが…思いつかない。

今回は今までで一番の駄文かもしれません。グダグダな上に無理矢理終わらせた感があります。どうかご容赦ください。

やべ…スカリエッティどうしよう……思いつきり忘れてた。

マテリアル・その2

「闇の書の……」

「マテリアル…だと？」

突如六課に現れたなのはにソックリの女性・星光の殲滅者（以後、星光）。彼女の口から出てきた『闇の書』という言葉にシャマルとザフィーラは目を見開いていた。

「そんな…闇の書は十年前に消えてなくなったはずじゃ……」

「おかしなことを言いますね。湖の騎士、シャマル」

シャマルの疑問に答えるように星光が口を開いた。

「私が此処に居る……それが何よりの証拠じゃないですか？」

「っ……」

静かだが、確かな威圧が籠った星光の瞳に見つめられ、シャマルは息を呑んだ。その時……

「鉄竜の咆哮！！！」

どこからか星光に向かって鉄の破片を含んだブレスが放たれた。

「……………」

しかし星光は一切動じず、朱色のバリアを展開してそれを防いだ。そして、ブレスが飛んできた方向に視線を向ける。そこには…

「テメエ……！ルーテシアをよくも……！！」

傷だらけのルーテシアを抱えて怒りの表情を浮かべているガジルの姿があった。

「ガジルさん!？」

「っ、小娘!ちょうどいい、コイツを頼む!！」

「は、はい!！」

「私も手伝うわ!！」

ガジルはルーテシアをウエンディとシャマルに預けると、再び星光を睨んだ。

「オレの仲間に手え出したこと、後悔しやがれ!！」

そう叫びながらガジルは星光に向かって飛び上がる。

「鉄竜剣!！」

そして、腕を刺々しい剣に変形させ、星光に斬りかかった。

「……………」

ガキイイイイン！

しかし、星光は顔色一つ変えず、手に持っていたレイジングハートによく似たデバイス『ルシフェリオン』でそれを防いだ。

「11の……！」

ガジルは押し返そうと腕に力を込めるが……

「……………邪魔です」

そう呟くと同時に、ガジルの攻撃を受け流す。

「っ！？」

突然の事態にガジルは体勢を崩す。そこを狙って星光はルシフェリオンを構え……

「ブラストファイアー」

そう呟き、ガジルに向かってなのはディバインバスターに似た朱色の砲撃を放った。

「なっ!?!?おおおおおお!?!?」

それを喰らったガジルは地面に叩きつけられる。

「ぐっ…バカナ…オレの鋼鉄の鱗に傷をつけただど…!?!?」

そう言うガジルの身体からは血が流れていた。

「ヤロウ…!」

ガジルは再び星光に攻撃を仕掛けようとするが……

「待て。今ヤツと戦うのは得策ではない」

ジェラルルに止められる。

「ああ？テメエは…ミストガン？」

ジェラルルの顔を見たガジルは、彼とソックリの妖精の尻尾の魔導士、ミストガンと勘違いをする。

しかし、ジェラルルは気にせず星光に向かって口を開く。

「また会ったな…シュテル・ザ・デストラクター星光の殲滅者」

「……そうですね。ジェラルル・フェルナンデス」

ジェラルルの言葉を淡々とした口調で返す星光。

「ここへ来たのは、ヤツの命令か？」

「はい。機動六課、及びジェイル・スカリエツティ一味の殲滅。それが私たちの主の命令です」

「……っ?!?!?」「」「」

その言葉にジェラルル以外の全員の表情が驚愕に染まったのだった。

「機動六課とスカリエツティ一味の…殲滅？」

「そつだよ。それが主よりボク達、闇の書のマテリアルに与えられた仕事。まあ、その半分はもう達成されたようなモンなんだけどさ」

フェイト達の前に現れたマテリアル、雷刃の襲撃者（以後、雷刃）はフリードの上で気絶している傷だらけの戦闘機人：トーレ、セツテ、ディエチに視線を移しながら言う。

「あとは、君たちを始末してボクの仕事は終わりさ」

「「「っ……！」」」

そう言うと雷刃は自身のデバイス『バルニフィカス』を構える。それに対して、フェイトはバルディッシュを構えながら後ろに居るエリオとキャラロに声をかける。

「エリオ、キャラロ。先に六課に戻ってて」

「でも、フェイトさん！」

「すぐに追いかける。行つて!!」

フェイトはそう言うが、キャラロは未だに戸惑っている。

「っ、フリードー！」

すると、エリオがフリードに指示を出し、その場から離れた。

「エリオ君……」

「相手は空戦でアウトレンジで戦える。僕達がここに居たら、フェイトさんは全力で戦えない！」

「……うん」

エリオの説得に、キャラは納得し、その場から離れていった。

「逃がすか！電刃衝でんじんしょう！！！」

そんなエリオとキャラに向かって雷刃は水色の魔力弾を放つ。

「っ、バルディッシュュ！！！」

それを見たフェイトはソニックムーブで移動し、バリアで魔力弾を防いだ。

「お前の相手は…私だ！」

「ふーん…まあいいや。さっさと倒して追いかけるだけだもんね」

「そんなことはさせないっ!!」

フェイトと雷刃はしばらく睨み合ったあと……

「ハアアアアアアアア!!」

金色と水色の閃光となり、激突した。

「でええええええええい！！！」

「五月蠅いぞ。塵芥」

「うわっ！！！」

「「ヴァイター！！！」

ヴァイターが闇統べる王（以後、闇王）に向かってグラーフアイゼンを振り下ろそうとするが、闇王が放った魔力弾に阻止されてしまう。

現在エルザとヴァイター、そしてヴァイターとユニゾンしているリインは先ほど合流したシグナムと共に闇王と戦っていた。

因みにいつの間にかゼストはアギトとリリーを連れてどこかに消えてしまっていた。

「大丈夫か、ヴァイター？」

「くそっ……アイツ、六課を潰すとかわけわかんねーこと言いやがって……！」

心配するシグナムを他所に、ヴァイターは闇王を睨みながら齒軋りを

する。

「機動六課ははやての夢だ!!それを潰させてたまるか!!」

「…そうだな。主ははやての夢は、私たちが守る!」

そう言うと、シグナムとヴィータは共に闇王のもとへ突撃する。そして…

「ギガント・ハンマアアア!!」

「飛竜…一閃!!」

闇王を挟み込むように同時に強力な攻撃を仕掛ける。だが…

「弱い」

その一言と同時に自身のデバイス『エルシニアクロイツ』を振り、そこから発せられた衝撃で二人の攻撃をシグナムとヴィータ諸共吹き飛ばした。

「うわああああ!!」

「くっ……!!」

「失せろ!使えぬ守護騎士共よっ!」

そう言いながら闇王は二人に向かってエルシニアクロイツを構え……

「アロンドイト!!」

強力な黒い砲撃魔法を放った。

「くっ……!!」

「くそお……!!」

迫る黒い砲撃を見て毒づき、後に来るであろう衝撃に備えて身構える二人。その時……

闇王は楽しそうに笑いながらエルザに向かって言う。

「うぬの名を聞いておこうか？」

「フェアリーテイル妖精の尻尾の魔導士。エルザ・スカーレットだ」

「覚えておこう。そして光栄に思え！我が魔導に滅びることを！！」

「六課の…殲滅？」

「そんな……！」

星光の口から発せられた言葉にシャマルとウエンディは驚愕していた。

「させると思っているのか？」

そう言ってザフィーラは一步前に出て星光を睨む。しかし星光は相変わらずの無表情で淡々と告げる。

「無駄な抵抗はしない方がよろしいかと。どうせ……」

星光は語りながらルシフェリオンを掲げ……

「全て消し去るのですから」

冷たく、そう言い放った。その瞬間、ルシフェリオンに朱色の魔力が集まっていく。

「アレは…収束砲！！？なのはちゃんのスターライト・ブレイカーと同じ…もしくはそれ以上の！？」

それを見て驚愕するシャマル。しかしその間にも、ルシフェリオンに魔力が収束されていく。

「集え、明星…：全てを焼き消す焔となれ…：！」

そして収束が終わり、星光は無表情のまま…それを放った。

「ルシフェリオン・ブレイカー…！！！」

巨大な朱色の閃光がその場に居る全員に襲い掛かる。

「ておおおおおおお！！！」

その瞬間、ザフィーラが咆哮を上げ、全員を守るためにバリアを展開して砲撃を食い止める。しかし…

「フウ、フウ、フウ……!!」

爆煙の中から傷だらけになりながらも全員を守るように立っているジェラールとガジルの姿があったのである。

「ぐっ…!!」

「ガジルさん!!」

しかし、ついに力尽きたガジルがその場に倒れこみ、ウエンディが駆け寄った。

「驚きました。まさかあの砲撃を受けてその程度で済ませるとは…」

星光はそう言うが、その表情はまったく驚いてはいない。

「しかし、その様子だと防御に殆どの魔力を使い果たしてしまったようですね。そんな状態で戦うことが出来ますか？」

星光はジェラールに向かってそう問い掛ける。そして、ジェラール

から帰ってきた答えは…

「ふっ……」

小さな笑みだった。

「？…何故この状況で笑っていられるのですか？」

「いや……それよりいいのか？」

「何がですか？」

ジェラルルの言っている意味が理解出来ず、首を傾げる星光。

「「後ろが……から空きだ」「

「っ！？」

突然ジエラルルの声が二重に聞こえ、星光はすぐさま後ろを振り返った。そこには、何とジエラルルが居た。

「……………」

星光はすぐに迎え撃とうとするが……

「遅い。天体魔法……星座崩し！！！」

間に合わず、天空から振ってきた無数の光が星光に降り注いだ。

「っああああ！！！」

ジエラルルの魔法をまともに受けた星光は地面に叩きつけられた。

「……………やられましたね。まさか思念体とは……………」

だが、星光は何事もなかったかのように立ち上がった。

因みに思念体とは、実体を持たない自分の分身を作る魔法である。ジエラルルは先ほどの爆発の際にコレを造りだし、星光の気を引く

匣に使用したのである。

「私も、本気で戦えそうです」

そう言つてルシフェリオンを構える星光。それを見たジェラルも身構える。だがその時……

キィィィン…

「っ……」

突然ルシフェリオンのコアの部分が淡く輝き始めた。

「……どうやら撤退のようです」

それを見た星光はどこか残念そうな口調で言う。どうやらその光は撤退の合図だったらしい。

「貴方と本気で戦える日を、楽しみにしています」

星光はそう言い残して、朱色の閃光となり、その場から飛び立って

いった。

「……………」

星光の撤退は、魔力が尽き掛けていたジェラールにもありがたいことだったので、ジェラールはそれを静かに見送ったのだった。

その後、六課から撤退した星光は別の場所で雷刃と闇王と合流した。

「ちえ、もう少しでボクがカッコ良く勝てたのに撤退なんてつまんないの……………」

「うむ……………我も久しぶりに心躍る戦いが出来ると思ったのだがな……………」

雷刃と闇王は不満そうに言う。それをなだめる様に星光が口を開く。

「仕方ありません。私たちの主と姉様の命令は絶対ですので」

「それはそうだけども」

「……………」

尚も不満そうにする二人に星光は溜め息をつく。

「ほら、行きますよ」

「はい」

「我に命令するな」

星光の言葉に渋々といった感じで二人は納得した。

「では帰りましょう……………方舟へ……………」

そう言つと同時に、三人は朱色、水色、黒色の閃光となり、その場

から去って行ったのだった。

くじく

マテリアル・その2（後書き）

今回ジェラルが使用した魔法、セーマ星座崩しは『RAVE』から持ってきた魔法です。何だか名前がそれっぽいので使用しました。

黒幕（前書き）

サブタイトルの通り、今回はこの物語の黒幕が登場します。

因みにですが、マテリアル三人娘の体格は10歳の姿ではなく、S
t s 時のなのは達と同じ体格と言う設定です。

今更で申し訳ございません。

黒幕

本局と六課が襲撃されたり、闇の書のマテリアルと名乗る三人娘が現れた事件から一日が過ぎた。

その事件に立ち会ったナツ、グレイ、エルザ、ウエンディの四人と機動六課のFW部隊。ヴォルケンリッターの騎士全員がはやての居る部隊長室に集合していた。

「闇の書のマテリアル……かあ」

はやては頭を押さえながら呟くように言う。闇の書に一番深い関わりを持つはやてにとって、マテリアルの出現はかなりの衝撃だった。

「はい。しかも、私とヴィータとスカーレットの前に現れたマテリアルは主はやてと同じ姿を……」

「私たちの方はなのはちゃんと……」

「私の方には、私と同じ姿をしていた」

シグナムとシャマルとフェイトが説明すると同時に、空間モニターにマテリアル三人の姿を映し出す。

「確かに、髪型とか髪の色を除いたら瓜二つだな」

グレイが少し感心したように声を漏らす。

「あの、八神部隊長……闇の書って、十年前の闇の書事件のアレですよね？」

ティアナが小さく手を上げながら尋ねると、はやては小さく頷きながら答える。

「うん……十年前の事件の後、消滅したはずだったんやけど……」

「はやて……」

「はやてちゃん……」

辛そうな表情するはやてを心配するフェイトとなのは。すると、ザ

フィーラが口を開く。

「我らの前に現れたシュテル・ザ・テストラクター星光の殲滅者は主の命令と言っていた。つまり

……」

「うん。誰かが闇の書、もしくはそれに似たモンを使うとるかもしれんな」

ザフィーラの言葉に同意し、はやては仮説を立てた。すると……

「オレはそいつの事を知っている」

『っ！！！？』

部隊長室の扉が開き、一人の青年が入ってくる。

「なっ！？」

「お、オメエは……！！」

「ジェラー…ル…？」

青年・ジェラーの姿を見たナツとグレイは驚愕し、エルザは信じられないものを見るような目でジェラーを見ていた。

「……久しぶりだな、エルザ」

「ど、どうしてお前が此処に？お前は、評議員に捕まったはずじゃ……！？」

「そのことも踏まえて、オレが知っていることを全て話そう」

動揺するエルザをなだめるように言うと、ジェラーははやてを初めとした機動六課の面々に向き直る。

「オレはジェラー・フェルナンデス。エルザ達の世界の魔導士だ」

「そうか。君がシャマルが言うつつたジェラー君か。六課を守ってくれたこと、部隊長としてお礼を言います。ホンマにありがとう！」

はやてはジェラールに深く頭を下げる。が、ジェラール本人は何やら複雑そうな表情をしている。

「……やめてくれ。オレは人から礼を言われるような人間ではない」

「え……？」

「……さて、本題に入ろう」

ジェラルルの寂しげな言葉に、はやては疑問を感じるが、それを口にすることなくジェラルルの説明が始まった。

「先ほども言ったとおり、オレは闇の書のマテリアルの主であり、今回の事件の黒幕の正体を知っている」

「誰なんだよ、そいつは？」

ナツの問い掛けにジェラールは一呼吸置いて、ゆっくりと口を開いた。

「そいつの名は、サタン……サタン・ペザリオスだ」

「っ、なんだとっ!!?」

その名を聞いたエルザが目を見開き、声を荒げて叫んだ。

「エルザ、そいつのことを知ってんのか？」

「お前たちも聞いたことがあるだろう!? 魔法開発局に勤めていた男で“マッドサイエンティスト狂科学者”と呼ばれていた男だ!」

「……そういや、聞いたことがある。余りに危険で凶悪な魔法の研究ばかりをしていて、魔法開発局から追放された…そいつがサタンだっつてののか？」

「ああ……一時期は二代目ゼレフとも呼ばれた最悪の魔導士だ。だが、何故そいつがこの世界に……?」

エルザの疑問に答えるようにジェラルルが口を開いた。

「ヤツがこの世界に来たのは……ナツ、お前と同じ理由だ」

「あ?」

突然ジエラールに話を振られ、ナツは首を傾げる。

「お前はどつやってこの世界に来た？」

「どつやってって……仕事でデケエトカゲを倒したら、そいつから出てきたレリックつつう赤い石を拾って……」

「っ、もしかして……」

ナツがそこまで言うと、なのはが声を上げた。

「そうだ。サタンもこの世界でロストロギアと呼ばれるモノを手に入れ、この世界に来たのだ」

『っ！！？』

ロストロギアと言う言葉を聞いて、六課メンバーに衝撃が走る。

「そのロストロギアの名前は【旅人の鍵】」

「っ、それ知ってる！確か次元世界を自由に行き来できるけど、その鍵自体もまるで旅人のように次元世界を渡り歩いているから誰も所在を知ることが出来ない、幻のロストロギア…！」

フェイトの説明にジェラルルは頷きながら言葉を続ける。

「そしてオレは、その旅人の鍵でこの世界に呼ばれた」

「なっ、どういうことだ？」

エルザがジェラルルに問い掛けたその時……

ヴーヴーヴー！

『っ！？』

突如、六課全体に警報が鳴り響いた。

「何事や！？」

『大変です！何者かが、六課のシステムをジャックしています！！』

「なんやて!？」

通信から聞こえるシャーリーの声にはやてだけではなく、その場に居た全員が驚愕する。

『今全力で対処していますが、システムがありえない速さで次…ぎ…と…』

「シャーリー？シャーリー!？」

急に切れたシャーリーとの通信にはやては焦りながら呼びかけるが応答はない。すると、部隊長室に突然大きな空間モニターが展開された。

『っ…!？』

全員が驚いていると、その空間モニターに映像が映し出された。

『初めまして…機動六課、そして妖精フェアリーテイルの尻尾のみなさん』

それは、黒髪に黒いヒゲを生やした初老の男性の映像だった。

『私の名はサタン…サタン・ペザリオス』

「っ、こいつが!？」

「サタン……ペザリオス……!!」

そう、その男性は先ほどまで話していたサタン本人だった。

「サタン……!」

そんな中、ジェラルルは目を見開いて驚愕している。

『やあ、ジェラルル君』

「……何の用だ? 機動六課こくのシステムをジャックしてもお前に何の

得もないはずだ」

『なあに、安心したまえ。あとでちゃんとシステムは戻してあげるよ。今日はちよっとした挨拶さ』

サタンは不適な笑みを浮かべながら言う。

「挨拶だと……?」

「いい度胸してんじゃねーか……!」

シグナムとヴィータがモニターに映るサタンを睨むが、サタンは笑みを崩さない。

『そう、挨拶。私と…彼女達のね』

そう言うと、空間モニターの映像が動き、何人かの女性を映し出した。

『シユテル・ザ・デストラクター
星光の殲滅者』

一人はなのはに似た容姿をし、無表情で佇む女性・星光。

『レヴィ・ザ・スラッシュヤー
雷刃の襲撃者』

二人目は水色の髪をツインテールにして、子供のような笑みを浮かべている女性・雷刃。

『ロード・ディアーチェ
闇統べる王』

三人目は邪悪な笑みを浮かべ、はやてと瓜二つの容姿をした女性・闇王。

『そして……』

『……………え？』

四人目の女性が映し出された瞬間、はやての表情が凍りつき、信じられないものを見るような目でモニターを見ていた。

その女性は、黒いバリアジャケットを身に纏い、腰まで届く長い銀髪に血のように赤い瞳をした女性……

『祝福の風…リインフォースだ』

十年前に消滅したはずのリインフォースだった。

「な…なんでや…！なんでリインフォースがそこに居るんや…！
？その子は十年前に…」

『消滅したはず……かね？』

「っ……！！」

はやての台詞を先取りしてサタンが言うと、はやては言葉を詰まらせる。

『コンピュータと同じさ…消したつもりでも、どこかにデータの残骸が残っている。私は偶然そのデータの残骸を見つけ、解析し、復元させた……つまりは蘇らせたと言うことさ。三人のマテリアルと言うオマケ付きでね』

楽しそうに語るサタン。それを見ていたはやてはグッと拳を握り締め、叫んだ。

「なら、その子を返して!!!リインフォースは…ウチの家族や!!!」

はやての叫びを聞いたサタンは『ふむ…』と顎に手を当てて考える素振りを見せる。そして…

『いいだろう。返してあげよう』

と言った。その言葉にはやてだけではなく、全員が驚愕した。

『ただし、彼女が帰りたいと言えば…ね』

そう言うと、モニターからサタンの姿が消え、リインフォースが映し出される。

「リインフォース……」

『……お久しぶりですね、主…いえ、“元”主、八神はやて』

「っ!?!?!?」

リインフォースの“元”主と言つ言葉にはやてに衝撃が走つた。

『残念ですが、私は貴女の外に帰る気などありません。貴女は私の主でも無ければ、家族ですらありません。私の今の主は、サタン様です』

「……………！！」

リインフォースが冷たく言い放つたその言葉に、はやては茫然自失といった表情でその場に膝から崩れ落ちた。

「「「はやてちゃん！」「」」

「「はやて！」「」

そんなはやてになのは、フェイト、ヴィータ、シャマル、リインが駆け寄る。

『と言つ訳だ。いやはや、まったく残念だよ』

と、まったく残念そうとは言えない表情をしているサタン。

「貴様！リインフォースに何をした！！？」

そんなサタンにシグナムが凄まじい剣幕で問い掛ける。だが、そんなシグナムの剣幕などものともしていないサタンは普通に答えた。

『なに、蘇らせる際にちよつとデータを弄っただけさ』

「っ………貴様……！！」

今にもモニターに殴りかからんとするシグナム。そんなシグナムをエルザが片手で制した。

「落ち着け、シグナム。モニターに映るヤツを殴っても無意味だ」

「スカーレット………くっ………！！」

エルザの言葉にシグナムは行き場の無い怒りをぶつけることもなく、ただ悔しそうに顔を歪めた。そしてエルザはモニターに映るサタンと向き合った。

『やあ、妖精女王テイカーニアのエルザ・スカーレット。君達のギルドの武勇伝は私の耳にも届いているよ』

「そんな見え透いた世辞はいらん。貴様はそいつらの力を使って、何をするつもりだ？」

『アルハザード……と言う場所を聞いたことがあるかね？』

「っ!!!？」

アルハザードと言う言葉が出た瞬間、一番反応を示したのはフェイトだった。

『知らないのなら、そこに居るフェイト・T・ハラオウン執務官に聞いてみたまえ。彼女が一番よく知っていそうだからね』

意地の悪い笑みを浮かべながらサタンが言うと、全員の視線がフェイトに集中する。

「フェイトちゃん……」

「大丈夫……」

心配そうなのはにそう言うと、フェイトはゆっくりと口を開いた。

「アルハザード…別名『忘れられし都』。古代ベルカよりさらに昔に存在したといわれている世界で、時を操り、死者さえも蘇らせる秘術がある都市。だけど、次元断層に沈み、その存在は伝説上のものとされている」

『正解だよ。私の目的は、そのアルハザードさ』

「けど、アルハザードはあくまで伝説上の存在。実在はしないと…」

『するね』

フェイトの言葉を遮り、サタンははっきりと言った。

『そして、そのための準備は整っている。見たまえ』

サタンがそう言うと、モニターに別の光景が映し出される。

「あれは……」

「船？」

そう、モニターに映し出されたのは、木と鉄で出来た巨大な船だった。

『ただの船ではない。これはロストロギア【ノアの方舟】』

『っ！！？』

モニターに映る船がロストロギアだと言われ、目を見開いて驚愕する一同。

『これを使えば、どこでも航海が出来るのさ。海の上でも、空の上でも、宇宙空間でも……次元断層でもね』

「そんなものまで用意して……貴様はそのアルハザードで何をするつもりだ！！？」

エルザの問い掛けにサタンは……

『研究だよ』

と答えた。

「研究……だと？」

『そうさ。私は魔法科学者…死者をも生き返らせる秘術がこの世にあると聞いては、黙っていることなど出来ないのさ。私はそれが知りたい…知って研究したいのさ!!』

「…それだけの…理由で……」

サタンの目的を聞いたはやてがゆっくりと立ち上がる。そして、モニターに映るサタンを睨みつける。

「たったそれだけの理由で、リインフォースを……私の家族を利用しようとしたのか?!?!?」

はやての怒声が部屋に響き渡る。長い付き合いのなのはやフェイト、守護騎士ですらここまで怒ったはやては見ることがなかった。

「アンタだけは絶対許さへん……！六課へのハッキング行為、及びロストロギア所持の罪でアンタは必ず逮捕する」

怒りの表情でそう告げるはやて。だが、やはりサタンは表情を崩すことはなかった。

『ふむ…こうなるとわかっていたからこそ、星光達に六課を襲わせただがね』

溜め息混じりにそう言つと、サタンは視線をエルザ達に移した。

『ところで妖精の尻尾の諸君』

「……………なんだ？」

『今回の件、君たちには手を出さないで欲しいのだがね。それを約束してくれるなら、君たちを元の世界に帰してあげよう』

相変わらず意地の悪い笑みを浮かべながらサタンが言つと、その場にいた全員の視線が妖精の尻尾フェアリーテイルに集中する。

そして、しばらくの沈黙の後……

「……………ふざけんじゃねえよ」

最初に口を開いたのはグレイだった。

「ここまで関わっておいて、今更仲間を見捨てて元の世界に帰れだあ？あんまオレ達を舐めんなよオッサン」

怒りの表情で言うグレイにウエンデイが続く。

「私たちは六課のみなさんを見捨てたりしません！」

次にエルザが…

「仲間を売るくらいなら死んだほうがマシだっ！！！！」

と叫んだ。

「おいオッサン……………よく聞けよ」

最後にナツがサタンが映るモニターの前まで近づいてくる。

「オレ達がこの世界に居る限り、六課こくはオレ達にとって家ギルドであり、こいつらは家族みてーなもんだ」

そしてナツはほぼゼロ距離でモニター越しのサタンを睨みつけ……

「家族に手を出すヤツはみんな敵だ…全て滅ぼしてやる…!!」

静かだが、確かな怒りを露にし、ナツはそう言った。すると、今まで黙っていたジェラルルが口を開いた。

「サタン……お前の計画には一つだけ大きな誤算があった」

『……ほう？それはなにかね？』

「こいつが……ナツ・ドラグニルと言う男がこの世界に来てしまったことだ」

ナツの肩に手を置き、ジェラルルはそう告げた。

「この男がお前の計画を潰してくれる。ナツと言う男の底知れぬ力……希望の力がな」

ジェラルルがサタンに向かってそう言つと……

『ふ、ふふふふ……ハツハツハツハツハ……！面白……！やってみるがいい……！』

突然サタンが高笑いを上げながらそう言つた。

『一週間後だ！一週間後、私は【ノアの方舟】でアルハザードへと向かう！止めれるものなら、止めてみるがいい……！機動六課、そして妖精の尻尾よっ……！』

『ハツハツハツハ……！』と、サタンの高笑いを残して、空間モニターが消えた。その瞬間、シャーリーから通信が入った。

『システム、復旧しました！』

「ハッキング元は……！？」

『……すみません、痕跡すら残されていませんでした』

「そうか……」

これでもう、一週間後にしかサタンを捕まえるチャンスは無くなつてしまった。そう悟ったはやては、六課メンバーに顔を向けた。

「そう言うわけや。私たち機動六課はこれからサタン・ペザリオスを逮捕するために全力をあげる。ええか？」

はやてがそう言うつと……

『了解!!』

六課メンバー全員が敬礼をして賛成の意思を見せる。

「フェアリーテイル妖精の尻尾のみなさんも、お願いします。私に力を貸してください！」

そう言うつてはやては妖精の尻尾フェアリーテイルの面々に頭を下げる。すると……

「バカ者お!!」

「いたっ!？」

エルザがゴンツと鈍い音を立てて、はやての頭にゲンコツを落とすた。

「おいおい、水臭せえこと言っんじゃねえよ」

「私たちの答えは最初から決まっていますよ?」

「さっきの見てたらわかんたろお?」

「無論、私たちも協力する。つまらぬことを一々聞くな!」

上からグレイ、ウエンディ、ナツ、エルザの順番で言葉を口にすると、はやてはもう一度深く頭を下げ……

「ありがとうございます!」

心から感謝の言葉を口にした。

「……お前はとうするんだ、ジェラール？」

エルザはジェラールに問い掛けると、彼は微笑を浮かべながら答えた。

「もちろん協力させてもらう。オレはその為に此処へ来たんだ」

「……そうか」

ジェラルルの言葉にエルザが満足そうな笑みを浮かべと、ジェラルは「それに……」と言って言葉を続ける。

「オレがお前たちをこの世界に連れてきたんだ。その責任も取らないといけないからな」

「……えっ？」「」「」

ジェラルルが発した言葉にエルザ達四人は目を丸くしたのだった。

UJU

作戦会議（前書き）

相変わらずグダグダですが、久しぶりの本編更新です。

そして読者の皆さんにはまっつことに申し訳ありませんが、先日更新した二本の番外編を一旦削除したいと思います。

と言うのも、まずは本編を終わらせてから番外編を書こうと思ったからです。

大変勝手な作者で申し訳ありませんが、これからもどうぞよろしく願いたいします。

尚、作者のもう一つのなのは小説『リリカルなのはStriker S』過負荷の少年』がスタートしました。

基本、リリカルテイルの更新を優先するのでこちらの更新は不定期ですが、よろしく願います。

「これがさっき話したロストロギア【旅人の鍵】だ」

『えええっ!!!?』

ジェラルルが【旅人の鍵】を持っていることに驚愕する一同。

「な、何でテメエがそれを持ってんだよ!? そいつはサタンが持っているはずじゃなかったのか!？」

「……オレがこの世界に来たのは、ナツがこの世界にやってくるより少し前だ」

グレイがジェラルルに問い掛けると、ジェラルルを目を伏せて語り始めた。

「オレが評議員の牢獄で過ごしていると、突然オレの身体が輝き始め、気がつくとおレはこの世界に居た。サタンが【旅人の鍵】を使ってオレを呼んだんだ」

「なんのために?」

「さっきヤツが言っていた【ノアの方舟】それを手に入れるために

は圧倒的破壊力を持った魔法で方舟の封印を解く必要があった。当時はリインフォースもマテリアルの力も不完全だった為、圧倒的破壊力を持つ魔法……天体魔法を使うオレにヤツが目を付けたんだ」

「貴様はそれに……協力したのか？」

エルザの問い掛けにジェラールは静かに頷く。

「何故だ！？何故そんなことを！？」

「……………仕方がなかったんだ。協力しなければ…エルザ、君を殺すと言われたんだ」

「なっ……………！？」

その言葉にエルザは愕然とした。

「もちろん、君がそう簡単に殺されるとは思っていなかった。ただど……………」

ジェラールはそこで言葉を区切ると、片手で顔を抑える。

「オレのせいで君が……エルザが傷つく姿など、二度と見たくなかったんだ!!」

「っ!?!……ジェラルル……」

ジェラルルのその言葉を聞いたエルザは驚愕し、その目には僅かな涙が浮かんでいた。

「そして【ノアの方舟】の封印を解いたあと、オレはサタンから目的を聞きだし、その目的を阻止しようと考えたが、エルザが人質に取られているから迂闊に動くことが出来なかった。そしてある日……オレはヤツの一瞬の隙をついて、奪ったんだ……【旅人の鍵】を」

ジェラルルは【旅人の鍵】を見せながら説明を続ける。

「そしてしばらくして、オレは知ったんだ。ナツ、君がこの世界に来たということ……」

「っ!?!?」

「そしてオレは確信した。ナツなら、サタンの野望を潰してくれるはずだと。だが、いくらナツでも一人では荷が重いと考えたオレは

決めたんだ。グレイ、ウエンディ、ガジル…そしてエルザを【旅人の鍵】でこの世界に呼ぶことを」

「「「っ！！？」「」」

「それからオレは【旅人の鍵】を使って、君たちをこの世界に送り込んだんだ」

「そうだったのか……」

「んじゃあ、サタンのヤツがオレ達を元の世界に帰すって言ったのも……」

「ヤツのハツタリだ」

グレイの問いに答えると、ジェラールは顔を俯かせる。

「……すまない。オレの勝手な判断で、結局君を危険な目に……」

「それ以上言うな、ジェラール」

ジェラルルの言葉を遮り、エルザが言った。

「お前が私のことを想い、守っていてくれたことは嬉しく思う。だが、これからは違う」

エルザはジェラルルの手を取り、微笑みながら言葉を続ける。

「今度は私たちと、共に戦おう…ジェラルル」

「っ…ああ……ありがとう、エルザ…！」

エルザの言葉にジェラルルは目から一筋の涙を流し、エルザに感謝の言葉を送った。

それを微笑ましい表情で見ている一同。するとはやてが…

「できてえる」

と、ハッピーのように巻き舌で言った。

「……主、何故今それを言いましたか？」

ると、そこには何処かに行こうとしているルーテシアを必死で止めているガジルとチンクが居た。

「何の騒ぎだ？」

「それが、お嬢様がドクターの研究所に居る母親を助けに行くと云って聞かないんだ」

チンクが説明すると、エルザが膝を折り、ルーテシアに視線を合わせる。

「母親を…助けたいのか？」

「……………（コクリ）」

エルザの目を真っ直ぐ見て、はっきり頷くルーテシア。そんなルーテシアを見たエルザは「そうか…」と呟き……

「ならば私たちに任せろ。お前の母親は、必ず救い出す！」

と言った。

「……………本当？」

「ああ、本当だ。私たち妖精の尻尾フェアリーテイルは一度受けた依頼は必ず完遂させる。信じて待っていてくれ」

「フェアリー……………テイル……………」

妖精の尻尾フェアリーテイルと言う単語を聞いたルーテシアは同じく妖精の尻尾フェアリーテイルの魔導士であるガジルに視線を移した。

「……………へっ、仕方ねえ……………オレも妖精の尻尾フェアリーテイルの魔導士だ。お前の依頼、引き受けたぜ、ルーテシア」

そう言つて、ガジルはルーテシアの頭を乱暴に撫でる。そしてルーテシアは両目に一杯の涙を溜める。

「グスツ……………お願い……………妖精の尻尾フェアリーテイル……………母さんを……………助けて……………！」

「……………任せる(てください)……………！！……………！！……………」

ルーテシアの依頼を引き受けたエルザは、視線をはやてへと移す。

「とう言うわけだ。すまないがはやて、対策を練るために至急ナンバーズを集めてくれないか？」

「ええよ。その代わり条件や」

「条件？」

「その依頼、私ら機動六課も手伝わせてもらおう？」

「なに？だが、これは私たちが独断で受けた依頼であってだな……」

「さつきナツ君が言うつつたやる？この世界に居る間は機動六課はギルド家であり、私らは家族や……家族は助け合うもんやる？」

「っ……！」

はやての言葉にエルザは言葉を詰まらせる。

「それに、私たちの本来の目的はジェイル・スカリエッティの逮捕だから」

「協力する理由…あるよね？」

「むっ……！」

フェイトとなのはにまでそう言われ、ついにエルザは何も言えなくなつた。

「かつつか！一本取られたなエルザ！」

「けど確かに、こいつらの言う通りまったく無関係ってわけじゃねえしな」

さらにナツと 그레이がそう言うと、エルザは諦めたように「ふう…」と溜め息をつき…

「仕方がないな。では役割を分担しよう。私たち^{フェアリーテイル}妖精の尻尾はルーテシアの母親の保護。機動六課はスカリエッティの逮捕…それで良いか？」

「OKやー！」

その後、ナツ達は保護したナンバーズを集めた部屋にやって来た。

「おっ、ナツ！」

一同が部屋に入ると同時にナツに駆け寄ってきたのは赤い髪とスバルと似た容姿の少女、ノーヴェだった。

「ノーヴェ！目覚めたのかよ？」

「ああ、今朝な。お前が思いっきり殴ってくれたお陰でな」

「なははははっ！ま、目が覚めたんだから良いじゃねーか！」

「他人事だと思ってテメエ！」

「うおっどー！」

ナツの首に手を回し、ヘッドロックをかけるノーヴェエ。しかしその光景は仲の良い友達同士のじゃれあいだった。

「……………あの二人…随分仲が良いわね」

「あ、う…うん……そうだね」

それを見ていたティアナは背中から黒いオーラを出しながら言う。
そんなティアナに怯えながら答えるスバル。

「……………ノーヴェエ、凄く明るくなつたね」

「ああ、姉も驚いたぞ。この間まではずっと不機嫌な顔をしていたからな」

「ああ、それはっスね……………」

そんなノーヴェエの姿に驚いた表情をしているディエチとチンク。そんな二人に事情を知っているウエンディが一通り説明する。

「ふうん…そんなことが……」

「やはり、不思議な連中だ…妖精の尻尾は…」
フェアリーテイル

ウエンディの説明を聞いたチンクはそう言った。

すると、エルザが前にやって来て全員に向かって話を始めた。

「さて…お前たちナンバーズを集めたのは他でもない。私たちはこれからスカリエッティのアジトに乗り込み、ルーテシアの母親の奪還、及びスカリエッティの逮捕を実行する。それに当たって、お前たちにはスカリエッティの情報を知っている限り教えて欲しいのだが…」

「ふん……くだらん」

エルザの話聞いて最初に声を上げたのはナンバーズ3のトーレだった。

「我々ナンバーズはドクターに作られた存在だ。そんな我らが貴様らに協力など…」

「アタシ、教えてやってもいいぜ」

「なっ!?!」

ノーヴェの言った言葉に目を見開くトーレ。

「アタシもいっすよ」

「私も協力しよう」

「じゃあ…私も……」

「き、貴様ら……!?!どういっつもりだ!?!」

ノーヴェだけでなく、ウエンデイ、チンク、ディエチまで協力の意志を見せたことに憤慨しながら怒鳴るトーレ。そんなトーレの問い掛けに答えたのはノーヴェだった。

「どういっつもりも何も、トーレ姉……アタシはそこに居るナツに負けた時から、もう『ドクターに作られた戦闘機人』じゃなくて、ノーヴェっていう名前の一人の『人間』になっただ」

「人間……だと？」

トーレの言葉にノーヴェは頷きながら返す。

「アタシは、アタシを人間にしてくれたナツにスゲエ感謝してるんだ！そのナツが力を貸して欲しいって言うんなら、アタシは喜んで力を貸すよ！」

「……………！」

ノーヴェの力強い言葉にトーレが驚愕していると、ウエンディ、チンク、デイエチが口を開いた。

「アタシもノーヴェと同じ意見っス！」

「私も…グレイ・フルバスターには借りがある」

「私は、あの暗かったノーヴェをここまで変えてくれた妖精の尻尾フェアリーテイルに少し興味が湧いた」

「……………好きにしろ。だが、私は協力などしないからな」

三人の言葉を聞いたトーレはそう言い残して部屋の隅へと移動した。

「で、オメエらはどうすんだよ？」

グレイは先ほどから黙っているオットー、デイド、セツテに問い掛ける。

「……トーレ姉さまが協力しないのであれば、私も協力する気はありません」

「僕たちはドクターの命令だけを聞くように作られてるから……」

「私もオットーと同じ……」

それを聞いたグレイは呆れた表情をする。

「まったく、どいつもこいつもドクターの命令ってよあ……そいつの命令だけが全てじゃねえだろ？もう少しさ、前を向いて生きろよ」

「前？……向いてるけど……？」

「まず、スカリエッツィのアジトの場所だが……」

「あ、それだったら……たぶんお嬢様のデバイスの中に地図のデータが入ってると思う」

「うん……入ってる」

デイエチの言葉に頷いたルーテシアは自身のデバイス、アスクレピオスの中からスカリエッツィのアジトまでの地図とアジト内の地図を取り出し、空間モニターに表示した。

「うわっ……凄い入り組んだ構造やな」

「ドクターは用心深い人っすからね……」

「侵入者が来てもすぐに対処できるように作ってあるし、色んな罠も張ってあるんだ」

ウエンディとノーヴェの説明に一同は考え込む。罠が仕掛けてあると分かった以上、迂闊に入り込むわけにはいかなかったのだ。

「サタンの野郎がやったように、こっちからヤツ等のシステムにハ

ツキングすることは出来ねえのか？」

「残念だがそれは無理だ」

グレイの提案をチンクが即座に却下する。

「私達の一番上の姉、ウーノ姉様のIS『フローレス・セクレタリー不可触の秘書』の情報処理能力の前ではハツキングなど無理だ」

チンクの言葉を聞いた一同は再びいい作戦はないか考え込む。すると……

「オレに一つ考えがある」

ジェラルルが口を開いた。

「ジェラルル……お前も協力してくれるのか？」

エルザの問い掛けに頷くジェラルル。

「そのシステムのことはオレに任せてくれないか？」

「……信じていいんだな？」

「ああ、任せてくれ。エルザ」

「よし。ではシステムの方はジェラルルに任せよう」

エルザがそう言うと、ジェラルルは頷く。

「あの……」

すると、今まで黙っていたオットーが口を開いた。

「なんだ？」

「これ……極秘任務なんだけど……No.2のドワー工姉さまが地上本部のレジアスとか言うヤツを殺そうとしている」

『っ！！！？』

それを聞いた六課メンバーは驚愕した。

「そんな…スカリエツティだけでも手が一杯なのに……！」

「それでも何とかせえへんと……！」

フエイトとはやてが焦ったように言う。すると……

「私が行こう」

エルザが名乗り出た。

「だがどうする？ドゥーエ姉様のISは『ライアーズ・マスク偽りの仮面』。その能力で変装しているだろうから、見分けるのは至難の技だぞ？」

チンクがそう言うと、エルザは「ふっ」と笑みを浮かべる。

「大丈夫だ。ウエンディ！」

と、エルザがウエンディを呼ぶと……

「はい(っス)?」

二人のウエンディが返事した。

「あ、いや……妖精の尻尾フェアリーテイルの方のウエンディだ」

「うーん……やっぱりややこしいっスね」

「あはは……」

二人のウエンディは苦笑いを浮かべる。

「コホンッ……ウエンディには私と同行してもらおう。
鼻ならば、変装を嗅ぎ分けることができるだろう?」
滅竜魔導士ドラゴンスレイヤーの

「は、はい!やってみます!」

エルザにそう言われたウエンディは両手を握り締め、「頑張ります
!」と意思表示をする。

「私も行こう、スカーレット」

「シグナム」

そう名乗り出たシグナムの目をジッと見るエルザ。そして……

「頼めるか？」

「任せておけ」

シグナムも地上本部に行くことが決まった。

「お前、何で急にそんなことを話したんだ？」

グレイは突然情報を提供したオットーに問い掛ける。

「……別に……自分で考えた結果だよ……」

「……へっ」

オットーの言葉を聞いたグレイは満足そうに笑みを浮かべた。

「んじゃあ…やることはだいたい決まったな」

「うん…」

ナツの言葉になのが頷く。

「目的は三つや……最初は地上本部のレジアス中将の殺害を阻止」

「そして、ルーテシアの母親を助けてること…」

「最後に…ジェイル・スカリエッティの逮捕」

上からはやて、なのは、フェイトが目的を整理する。

「おっし!!行くぞお!!!!!!」

『オオオッ!!!!!!!!!!』

ナツの号令と共に全員が拳を突き出し、雄叫びを上げたのだった。

つづく

騎士の覚悟（前書き）

リリカルテイル！前回までは！

「母親を…助けたいのか？」

「お前の依頼、引き受けたぜ、ルーテシア」

「おっし…！行くぞお…！…！」

『オオオツ…！…！…！』

騎士の覚悟

地上本部の総司令、レジアスはある男と対面していた。その男はゼスト・グランガイツ。

ルーテシアとガジルの二人と共に行動を共にしていた男で、元は管理局の人間だったが、八年前のある事件で一度死に、スカリエツェイによって蘇生させられた。

そして、事件の真実を確かめるべく、親友であったレジアスの元に来ているのだ。

「レジアス、八年前……俺と、俺の部下たちを殺させたのはお前の指示で間違いないか？」

「ゼスト……」

ゼストとレジアス以外にその場に二人の女性がいた。一人はレジアスの娘で秘書をしているオーリス・ゲイス。そして、もう一人は……

「（そろそろ潮時かしらね……）」

ナンバーズのNo.2、ドゥーエだった。殺気を抑え、右手の固有武器『ピアッシングネイル』を発動しようとしたその時……

「ハアアアアアア！！」

ガシャアアアアン！！

『っ！？』

窓の外から『黒羽くわはの鎧』の鎧を身に纏い、剣を構えたエルザとレヴアンティンを構えたシグナムが窓を斬り裂いて飛び込んで来たのだ。

「ウエンディー！！」

床に着地したエルザは少し遅れて部屋に入って来たシャルルに抱えられているウエンディに声をかけた。それを聞いたウエンディは鼻をクンクンと動かす……

「エルザさん！その人です！！」

変装しているドゥーエを指差した。それを聞いたエルザはドゥーエに向かって即座に剣を振るった。

「っ……！！」

それに反応したドゥーエはすぐにピアッシングネイルを発動させ、エルザの剣を受け止めた。そして剣を弾き、エルザから距離を取る。

「NO.2のドゥーエだな？」

「貴女…何者？私の『ライアーズ・マスク偽りの仮面』を見破るなんて……」

ドゥーエは驚愕しながら『ライアーズ・マスク偽りの仮面』を解除する。

「私は妖精の尻尾の魔導士、エルザ・スカーレットだ。お前の任務…阻止させてもらう」

そう言って再び剣を構えるエルザ。

「生意気な女……いいわ、まずは貴女から殺してあげる」

それに対してドゥーエはピアッシングネイルを構えて、エルザに切り掛かる。

だが……

「悪いが、遊んでいるヒマはない」

そう言うと同時にエルザは渾身の力で剣を振り、ピアッシングネイルを一刀両断したのだ。

「なっ!?!」

予想外の事態にドゥーエが驚愕の表情を浮かべている間に、エルザは『天輪の鎧』に換装しながらドゥーエの懐に潜り込み……

「てんりん・フルメンバー天輪・繚乱の剣!?!?!」

「ぎゃあああああつ!?!?!」

無数の剣でドゥーエを連続で切り裂いた。

「安心しろ。殺しはしない」

「くっ……！」

傷だらけとなったドゥーエは何とか起き上がろうとするが、それは叶わず、そのまま意識を手放した。

「ふっ……」

「お疲れ様です、エルザさん」

「流石ね」

「見事だったぞ、スカーレット」

鎧をいつもの鎧に戻し、一息をつくエルザにウェンディとシャルルとシグナムが駆け寄り、彼女に賞賛の言葉を送った。すると……

「なんだ貴様等は！？許可なく窓から入ってくるとは無礼にもほどがあるだろう！」

今まで呆然としていたレジアスが我に帰り、エルザ達に向かって怒鳴った。だがエルザはそれに動じることなくレジアスに詰め寄った。

「黙れ。かつての仲間を裏切り…人の道を踏み外した貴様に、そのようなことを言われる筋合いはない！」

「っ……やはり、そうだったのか……」

エルザの言葉を聞いたゼストは拳を握り締める。

「すまないが、私はコイツと話がある。少し出ていてくれないか？」

「……わかった。行くぞ、三人とも」

「ああ……」

「はっ」

ゼストの頼みを聞き、エルザは三人を引き連れて部屋を出る。その際に気絶しているドウエをシグナムが担いでいた。

そして部屋を出ると……

「エルザ！？ ウェンディ！？ シャルル！？」

「「「リリー！」」」

「お前は機動六課の！？」

「お前は確か…アギト、だったか？」

部屋の外で待機していたリリーとアギトの二人と鉢合わせした。

「何でお前らが……！ いや、それよりダンナは……ダンナはどうしたんだよ！？」

「安心しろ。今レジアス中将と話をしているところだ」

ゼストの身を案じるアギトにシグナムがそう言うと、アギトは安心

した表情を浮かべた。

「ところでエルザ、ガジルとルーテシアを知らないか？ここ最近、連絡が取れないんだが……」

「ああ、実はな……」

エルザはリリーにガジルとルーテシアを六課が保護したこと、そして現在実行中の作戦の内容を説明した。

「そうか……無事ならそれでいい」

それを聞いたリリーは微笑を浮かべながら言った。すると、部屋からゼストが出てきた。

「ダンナ！」

「ゼスト！」

アギトとリリーはゼストに駆け寄る。

「アギト、リリー、待たせたな。さて……」

ゼストはエルザ達を見る。

「スカーレット、貴女には感謝している」

「気にするな」

礼を言うゼストにエルザはそう答える。そしてゼストはシグナムとウエンディとシャルルに視線を向ける。

「お前たちにも感謝している。名を聞かせてくれないか？」

ゼストはシグナム達に名を尋ねる。

「機動六課ライトニング分隊副隊長、シグナムだ」

「ウエンディ・マーベルです」

「シャルルよ」

三人の名を聞いたゼストはエルザとシグナムを見据える。

「スカーレット、シグナム。二人に頼みがある」

「「頼み？」」

突然のゼストの申し出に二人は首を傾げる。

「一つ目はシグナム、アギトのロードになつてはくれないか？」

「な、何言つてんだよ、ダンナ!？」

突然そんなことを言われて驚愕するアギト。

「アギトの能力に一番ロードとして相性が良いのはあなたしかいない。頼む……」

ゼストは頭を下げてシグナムに頼んだ。

「……承知した。騎士としての頼みなら断る理由はない」

「感謝する」

再び頭を下げるゼスト。

「ちょっと待てよダンナ！私はまだ……」

当然アギトは不満に思うが、ゼストはアギトに触れた。

「アギト、わかってくれ。これはお前の幸せの為でもあるんだ」

「ダンナ……」

ゼストの真剣な目と言葉に、アギトは何も言えなくなった。

「もう一つの頼みは……エルザ・スカーレット、オレと本気で戦ってくれるか？」

ゼストはエルザとの戦いを望んだ。

「……死ぬつもりなのか？」

エルザの問い掛けにゼストは無言で頷く。

「オレの命はもう残り少ない。騎士として……最後を飾りたいのだ……」

そんなゼストに対してエルザは……

「ふざけるな……！」

静かだが、確かな怒りを込めてそう言った。

「騎士としての最後を飾りたいと言うお前の気持ちはわかる。だが、お前は残された者たちの未来を考えていない」

「残された者の……未来？」

「そうだ。お前はさっきアギトに言ったな？ 『お前の幸せの為』だと……アギトの幸せを考えるのなら、死のうなどと考えるな……！」

エルザの強い叱咤が響き渡る。

「仲間の為に死ぬな！仲間の為に生きる！それが…幸せな未来に繋がるんだ！！」

エルザの言葉に、ゼストは目を見開いて呆然としており、やがて「ふっ」と微笑を浮かべる。

「そうだな…お前の言う通りだ。まさか…年下に説教されて、大事なことに気がつくとは…オレもまだまだだな」

「ふふっ……手合わせならば、いつでも受けよう」

「そうだな。その時はよろしく頼む」

エルザとゼストはそう言いながら微笑み合う。すると、シグナムのレヴァンティンに通信が入った。

「どうした？」

「ドラグニル達がメガーヌ救出作戦を開始したようだ」

「メガーヌを救出だと？ 一体どういうことだ？」

ゼストの問いにエルザは先ほどリリーに説明した説明と同じ説明をした。

「私たちもこれからスカリエッティのアジトへと向かう。ゼスト、お前は どうする？」

エルザの問い掛けにゼストは……

「……オレも協力させてくれるか？メガーヌはオレのかつての部下だった……頼む」

と言った。

「決まりだな。シグナムはウェンディとシャルルと共にドワー工を連れて行け。そのあとでまた合流しよう」

「わかった」

「はい！」

「わかったわ」

エルザの指示に三人は頷く。

「アタシはお前と行く！アタシのロードになるに相応しい器がこの目で見てやる！」

アギトはシグナムをジッと見据える。

「構わない。行くぞ！」

「おう！」

シグナムはアギトを引きつれ、六課に向かった。

「エルザさん！またあとで！」

「気をつけることね」

シグナムを追いかけるようにウエンディとシャルルも六課に向かって行った。

「オレは一緒に行くぞ。オレも妖精の尻尾の魔導士だからな」
フェアリーテイル

リリーはエルザを見てそう言うと、エルザは微笑を浮かべた。

「よし、行くぞ！ゼスト！リリー！」

「ああ！」「」

そしてエルザはゼストとリリーを引き連れてスカリエッティのアジトへと向かったのだった。

つづく

作戦開始（前書き）

今回の主役はアイツです！

リリカルテイル！前回までは！

「悪いが、遊んでいるヒマはない」

「騎士として…最後に飾りたいのだ……」

「仲間の為に死ぬな！仲間の為に生きる！それが…幸せな未来に繋がるんだー！」

「アタシのロードになるに相応しい器がこの目で見てやる！」

作戦開始

ルーテシアの母、メガーヌ・アルピーノの救出作戦が決行された。

作戦の内容は単純。

まずはナツとグレイとガジルとハッピーの四人がアジトに突入し、アジト内で大暴れをしてスカリエッティ達の注意を逸らす。

その間に次はジェラルが潜入し、アジトのシステムをダウンさせる。

そして最後に機動六課メンバーが突入し、一気に制圧する。

となっている。

そして現在、ナツ達はスカリエッティのアジト前にやって来ていた。

「大暴れは得意だぜ！」

「あい！」

「ま、やってやるか」

「ギロツ……なっなとおっははじめよっせ」

「おしっ……行くぞお!!」

そう言つと、ナツ達はアジトに突入した。すると……

ヴー! ヴー! ヴー!

アジト内に警報が赤いランプと共に鳴り響く。それと同時にナツ達の前に数十体のガジェットが現れる。

「火竜の鉄拳!!」

「アイスメイク? 槍騎兵?^{ランス}!!」

「鉄竜棍!!」

ドゴオオオオオン!!

だが、ナツ達の魔法の前に一瞬で吹き飛ばされ、破壊された。

「この三人が組んだら怖いものなしだね」

破壊されたガジェットを見てハッピーはそう呟いた。

「スカリエツティはどこだああ!!」

そう叫ぶナツを筆頭に通路を突き進む。

「おいナツ。オレ達はルーテシアの母親を探しに来たんだぞ？スカリエツティを探す必要はねえんじゃねえのか？」

「何言ってるんだよ？どうせ居場所わかんねえんだから、スカリエツティを探して吐かせた方が速えだろ？」

「ぐっ……それも、そうだな……」

ナツに論破されたグレイは悔しそうに顔を歪めた。

「……………」

そんな二人の会話を聞きながら、ガジルは何かを考えているような表情をしていた。

「…ん？おい、見ろよ」

すると、グレイが通路の先を指差す。その先は、道が二つに分かれていた。

「道が分かれてる……どうするの？」

「どうするって……二手に分かれるしかねえだろ？」

ハッピーの問い掛けにグレイがそう答える。すると……

「……………テメエらは右へ行け」

ガジルが二人に向かってそう言う。

「ギヒツ…オレは一人で十分だ。テメエらが居ると、逆に足手まといなんだよ」

「なんだとコラア?!?!?」

ガジルの言葉に当然ナツとグレイは怒鳴る。

「ギヒヒ…あばよ!」

そう言うと、ガジルは一人左側の通路を走って行った。

「ガジルのヤロー…!!」

「ほっとけよあんなヤツ!オレ達はこっちへ行くぞ!」

「チツ…わかったよ!」

「あい!」

そしてナツ達はガジルが向かった通路とは逆の通路へと走って行った。

そして、一人別の道を選んだガジルは通路を走っている。

「……確かこの通路を真っ直ぐ行って、つきあたりの角を右に曲がる」

ガジルはブツブツと呟きながら通路を走る。

「んでもって、ここから四つ目の部屋……」

そしてガジルは一つの扉の前に立ち止まると……

「ここだあ!!」

ドゴオオン!!

思いっきり扉を蹴破り、中へと突入した。

そしてその中には……

「やあ、ガジル君じゃないか」

このアジトの主、ジェイル・スカリエッティが王座のような椅子に座っていた。

「よお、久しぶりだな…スカリエッティ」

「ふむ…侵入者とは君のことだったのか」

「他にも数人居るけどな」

「それで、何の用かね？ただ戻って来たわけではなさそうだが？」

「……ルーテシアの母親、メガーヌ・アルピーノを返してもらおう」

ガジルがそう言うと、スカリエッティは目を丸くし、何か面白いものを見るような目でガジルを見る。

「ほう…以外だね。君はそんなに優しい性格だったかな？」

スカリエッティの問い掛けに、ガジルは「ケツ」と前置きをしてから口を開く。

「オレはルーテシアからの依頼を遂行しようとしてるだけだ。依頼を達成出来なかったとなれば、名折れだからな」

「名折れ？」

「オレのじゃねえぞ……」

言葉を一旦区切り…

「フェアリーテイル妖精の尻尾のだ！」

そう言い切ったのだった。

「フェアリーテイル？ああ、君の世界にある魔法使いのギルドの名前だったかな？」

「そうだ。ギルドの誇りにかけて、オレはテメエからルーテシアの母親を奪い返す……！」

ガジルがそう叫ぶと、スカリエツティは「ふむ……」と顎に手を当てる。すると突然……

「いいだろっ」

と言った。

「なに？」

その言葉に目を見開くガジル。

「メガーヌ・アルピーノを返す…と言っただよ。クアットロ」

「はい」

スカリエッティははっきりとそう告げると、奥からルーテシアの母親、メガーヌを乗せた台車をクアットロが運んできた。

「……………どういっつもりだ？」

随分とあっさりメガーヌを返そうとするスカリエッティを警戒するガジル。

「メガーヌ・アルピーノはルーテシアを私に協力させるための、いわば人質のようなものだった。だがルーテシアが六課に捕まった以上、興味がなくなったのさ…」

「……………」

淡々と言うスカリエツティに警戒しながらも、台車に乗っているメガ―ヌに近づくガジル。

「だが、君には興味がある！」

「っ…………チイツ！」

その時、スカリエツティはグローブ型のデバイスを身につけ、ガジルをバンドで拘束しようとするが、元からスカリエツティを警戒していたガジルはそれをかわす。だが……

ガシッ

「なっ!?!」

突如、床から手が生え、ガジルの両足を掴んだのだ。

「テメエ、セイン!!」

「ごめんね〜ガジル」

その手の正体はナンバーズのNo.6…セインだった。そしてその間に、スカリエッティのバインドがガジルに巻きつき、ガジルの身動きを封じた。

「テメエ！放しやがれ！！」

「そうはいかないよ。君の魔法、滅竜魔法には前々から興味があったんだ。研究させてもらおうよ」

「ドクター、残りの侵入者はどうします〜？」

「ふむ、おそらくガジル君と同じ別の世界の魔法使いだろう。アジトの全システムを使って捕獲、後に研究させてもらおうとしよう」

クアットロの質問にスカリエッティがそう答える。すると……

「ギヒツ……そいつは無理だな」

バインドで縛られながらも、ガジルは笑みを浮かべてそう言った。

「どごいじいとかね？」

「簡単だ。もうすぐこのアジトのシステムは使い物にならなくなるんだからよ」

ガジルの言葉を聞いたスカリエッティは嘲笑うかのように笑みを浮かべる。

「ふふつ、何を言うかと思えば……それは無駄だよガジル君。ウーノのIS『フローレス・セクレタリー不可触の秘書』の前では、どんなことをしようと……」

《大変ですドクター！！システムが……次々と崩壊していきます！！》

「……っ！！！？」「」

突然入ったウーノからの通信を聞いたスカリエッティ、クアットロ、セインは目を見開き、驚愕した。

とあるアジトの一室で、ウーノはコンソールを巧みに操作してシステムを復旧させようとするが、こちらの操作はまったく受け付けず、奇妙な形の魔法陣がシステムを支配していった。

「何故こちらの操作を受け付けない!!?このままだとシステムが……!」

「悪いな……」

「っ!?!?」

うるたえるウーノの前に、いつの間にかアジトに潜入したジェラルが立っていた。

「このシステムは破壊させてもらっ」

「貴様が原因か!?!一体どうやってこのセキュリティを!?!?」

「確かにここのシステムは強力なセキュリティで守られている。並みのハッキングでは落とすことは出来ないだろう。だから……セキュリティごと魔法を組み込んだ」

「なに!？」

驚愕するウーノに対し、ジェラルは画面に映る奇妙な魔法陣を指差しながら話を続ける。

「その魔法陣の名は『自律崩壊魔法陣』このアジトのシステムは間もなく、セキュリティごと自ら消滅する」

そう……いくらシステムが強固なセキュリティに守られていようとも、そのセキュリティ諸共自滅させてしまえば意味は成さないのである。

「みんな……あとは任せた」

《申し訳ありませんドクター……全システム…跡形もなく消滅しました……》

その通信を聞いたスカリエッティは呆然としていた。

「ギヒツ……上手くやったみてえだな」

そう言うとガジルは腕から鉄の刃を出し、自分を拘束していたバンドを切り裂いた。

「あとは……テメエらだけだ」

「「っ……！」」

睨みながらそう言うガジルに、セインとクアットロは少し未を引いた。だがスカリエッティは……

「ふ、ふふふふ……！」

肩を震わせて、不気味な笑い声を上げた。

「まさか……本当にシステムを破壊してくるとは思わなかったよ」

「諦めるんだな。もうすぐ機動六課の連中が来る。お前はもう終わりだ、スカリエッティ」

「ふふっ…ガジル君。君は私がこのような事態を想定していなかったと思っっているのかね？」

そう言うと同時に、スカリエッティのデバイスのコアの部分が輝き始めたのだった。

《ジェラルドだ。アジトのシステムは破壊に成功。同時にナンバーズの一人を拘束した》

「了解！」

「私たちも今から出撃するから、ジェラルルは待機してて」

《わかった》

なのはとフェイトがそう言うと、ジェラルルからの通信が途絶える。

「じゃあ、機動六課FW部隊、出撃するよ！」

「おう！」

「「「はい！」「」「」

なのはの号令にヴィータと新人メンバーが返事をする。そしてアジトに突入しようとしたその時……

《待ってください！！》

突如、シャーリーからの通信が入った。

「どうしたのシャーリー!？」

血相を変えたシャーリーを見て、ただ事ではないと判断したフェイトは何事も尋ねる。

《大変なんです!数千体にも及ぶガジェットが街に向かっていきます
!?!》

『っ!?!?!?』

その言葉にその場に居た全員に衝撃が走る。

《現在ははやて部隊長とシグナム副隊長、それからウエンディちゃん
が足止めしてくれていますが、いつまで持つか……》

「わかった!みんな、作戦変更!ガジェットの殲滅に向かうよ!」

「え、でも中にいるナツ達はどうするんですか!？」

《オレに任せろ》

ティアナの問いに答えたのはジェラルルだった。

《先ほどの通信は聞こえていた。中に突入しているメンバーはオレが何とかする。君たちはガジェット殲滅を》

「わかりました。ジェラルルさん、お願いします！みんな、行くよ
！」

「うん！」

「おう！」

「「「「はい！」「」「」

アジトの中のことにはジェラルルに任せ、なのは達FW部隊はガジェットの殲滅へと向かった。

「スカリエッツィ！テメエ、何しやがった！？」

「ふふっ…こんなこともあるのかと思ってね。システムの中核の一部をこのデバイスに移植させていたのさ。そして今、残ったガジェツトを全て解放した」

「なにっ！？」

「そしてガジル君…君には私の最高傑作でお相手しよう」

そう言うと、再びスカリエッツィのデバイスが輝き始める。すると

……

ドゴオオオオオン！！

突然壁を突き破り、何かが現れた。

「な、何だコイツは……ドラゴン!？」

そう、現れたのはまるでドラゴンのような形をしたガジェットだった。

「そうさ、これが私の最高傑作……偶然手に入れた竜の細胞を基にして作り上げた究極のガジェット!名前は……ガジェット・ドラグーン」とでも呼ぼうか」

『グオオオオオオオ!』

スカリエッティの言葉に呼応するかにようにガジェット・ドラグーン(以後ガジェットD)はアジトを揺るがすような咆哮を上げる。それを見たガジルは……

「鉄で出来たドラゴン……気に食わねえな……」

怒りで満ちた表情でガジェットDを睨みつけた。

「まるで、メタリカーナを侮辱された気分だぜ……!」

この時ガジルの脳裏には、自分の育ての親であり、滅竜魔法を教え

てくれたドラゴン…メタリカーナの姿が浮かんでいた。

「テメエに教えてやるぜ、スカリエツティ……竜の誇りを汚すことの罪深さをな！」

つづく

鋼鉄の魂（前書き）

サブタイトルに深い意味はありません。バトルパートが難しい……！

リリカルテイル！前回までは！

「おしつ……行くぞぉ……！」

「ギルドの誇りにかけて、オレはテメエからルーテシアの母親を奪い返す……！」

「これが私の最高傑作……偶然手に入れた竜の細胞を基にして作り上げた究極のガジェット！」

「テメエに教えてやるぜ、スカリエツティ……竜の誇りを汚すことの罪深さをな……！」

鋼鉄の魂

「うおおおおおおお!!」

スカリエツティの秘密兵器『ガジェット・ドラグーン』に単身で突撃するガジル。

「鉄竜剣!!」

そして腕を鉄の剣に変形させ、ガジェットDに切り掛かる。しかし

……

『グオオオオオオ!!』

「なにっ!?!?ぐおっ!!」

ガジェットDはビクともせず、さらに尻尾を振り回してガジルを壁に叩きつけた。

「ぐっ……なんて硬さだ……！」

ガジルは起き上がりながら毒づくと、スカリエッティが口を開いた。

「ふふふ……それはそうさ。何故ならガジェット・ドラグーンの装甲の強度は君の身体のデータを基にしているのだからね」

「なんだと!?!」

「君とナンバーズの訓練のデータは全て取らせてもらっていた。それ以上の強度を作り出すなど、私にとっては造作もないことだよ」

そう説明を終えたスカリエッティは「さて……」と言ってクアットロとセインの二人に視線を向けた。

「クアットロ、セイン。君たちはアジトに居る他の侵入者を捕らえてくるんだ」

「はい」

「わかった」

スカリエッツィの指示を聞いた二人はすぐさま部屋を出て行った。

「へっ、テメエは逃げなくていいのかよ？」

「そうしたいのは山々なのだがね。ガジェット・ドラグーンには少々欠点があつてね」

「欠点だと？」

「そう。ガジェット・ドラグーンは私のデバイスから発せられる信号で動いている。その信号が途絶えると、機能を停止してしまうのだよ」

「なるほどな……つまり、テメエを狙えばいいってことか!!」

そう言ってガジルはスカリエッツィに向かって駆け出す。だが…

「させると思っているのかい？」

「なにっ!?!?ぐはあっ!?!」

突如、ガジェットDの腕が飛んできてガジルを吹き飛ばした。

「ガジェット・ドラグーンは何よりも私を守るようにプログラムしてある。私を攻撃したいのであれば、まずはガジェット・ドラグーンを倒す他ないのだよ」

「ケツ…だったら…!!」

ガジルはゆっくりと起き上がり…

「すぐにでも倒してやんよ!!!!」

再びガジェットDに向かって駆け出した。

「鉄竜棍!!」

ドゴオオオン!

腕を鉄の棍棒に変形させて叩き込むが、ガジェットDの装甲はビクともしない。

「ギヒツ……鉄竜の鉄と、テメエが造ったナマクラを一緒にすんじやねえよ」

それを見て口角を吊り上げて笑みを浮かべるガジル。

「来なつ…テメエの最高傑作とやら、すぐにスクラップにしてやっからよっ……！」

一方その頃、ナツとグレイとハッピーは……

「スカリエツティはどこだあ……！」

ドゴオオン！

壁を破壊して中に突入するナツ。

「ふん！ふん！」

そして中にスカリエッティの姿がないのを確認すると……

「次い！！」

ドゴオオン！

すぐそこに扉があるのにも関わらず、隣の部屋の壁を破壊した。それを天井から見ている一つの影があった。

「（あ、あの男は雇ってものを知らないの？メチャクチャ過ぎる…！）」

その影とはセインであり、ディープダイバーを使ってナツの様子を監視していた。

「（正直、あんなヤツとは戦いたくないけど…それも言ってられな
いんだよ…）」

セインはゆっくりと天井の壁から出てきて……

「ねっ！！」

「ぐほお！！」

思いっきりナツの後頭部を蹴り飛ばした。

「「ナツ！？」」

少し離れた場所にいたグレイとハッピーはそれを見て驚く。

「いってえ……！何すんだコラア！！！」

ナツは起き上がりながら自分を攻撃したセインに向かって怒鳴る。

「悪いけど、ドクターの命令で君たちを捕まえさせてもらうよ！」

「ふざけんなっ！」

ナツは拳に炎を纏い、セインに殴りかかろうとするが……

「『ディープダイバー』!」

再び地面の中に潜り、それを避ける。

「っ、地面に潜りやがった!？」

「コイツは…あの時の!」

グレイはヴィヴィオを拾った時の事件のことを思い出した。

「ナツ! 気をつける! コイツは地面の中を自由に潜りやがる! 地面の中じゃ、お前の鼻も利かねえだろ!？」

「チッ! 厄介なヤローだな」

「どっつするの、ナツ?」

「簡単だ。出てきたところをぶん殴る!」

「うわぁ…すごく単純だね」

ナツの作戦に呆れるハッピー。すると……

「だったら、これならどうかしら？」

「「あ？」」

突然後ろから声に振り返ると、そこにはカプセル型、球体型などの様々な種類のガジェットを数十体従えたクアットロが立っていた。

「うふふくのふく　いくら貴方達が強くても、この数のガジェットに勝てるかしら？」

すでに勝ち誇った笑みを浮かべるクアットロ。

「行きなさい！」

クアットロがそう言うと、全てのガジェットがナツとグレイに向かって動き出す。

「へっ…グレイ、手え出すなよ？」

「出す気にもなれねえよ」

「あい」

グレイとハッピーが溜め息混じりにそう言つと、ナツが一人でガジェットの群れに突撃する。そして……

「だりやああああ！！」

ドゴオオオン！

炎を纏った拳を叩き込み、一番近くに居たガジェットを破壊する。それを皮切りに殴る、蹴ると次々とガジェットを破壊し始めるナツ。

「無駄よ！ たった一人でこの数のガジェットに勝てるわけ……」

ドゴオンー！ドゴオンー！ドゴオンー！

「勝てる…わけ……！」

ドゴオン！ドゴオン！ドゴオン！

「……………！！！」

先ほどの勝ち誇った顔が一変し、今度は信じられないものを見る表情へと変わるクアットロ。そして遂に、全てのガジェットがナツによって破壊された。

「そ、そんな……！本当にたった一人で……アンタは一体何者なの……！！？」

焦った表情を浮かべるクアットロの問い掛けにナツはニッと笑う。

「よく覚えとけよ。これが妖精フェアリーテイルの尻尾の……！」

そして炎を纏った渾身の拳を……

「魔導士だ……！！！」

クアット口に叩き込んだ。

「ぎゃああああー!!」

それを喰らったクアット口は吹き飛び、思いっきり壁に叩きつけられて気絶した。

「クア姉!!」

それを地面の中から見ていたセインは地面から飛び出し、クアット口に駆け寄る。

「くっ……くっ……」は逃げるしか

「させると思っつか?」

パキイン!

「っ、しまった!」

逃げようとしたセインの前に 그레이が現れ、彼女の胸から下を氷付けにした。

「おっと、お前の能力で逃げようなんて考えるなよ？その気になりや、お前を氷ごと粉々にすることだってできるんだぜ？」

「くっ………！」

그레이の脅しの言葉にセインは歯を食い縛る。

「悪いな」

トスッ

「うっ………！」

その時、 그레이が素早くセインの首元に手刀を叩き込み、セインを気絶させた。

「いっちょ上がりだな」

「おっ!」

「あい!」

ナツとグレイとハッピーは笑みを浮かべる。すると……

「ナツ!グレイ!」

「お、ジェラルル!」

ナツ達とジェラルルが合流した。

「こいつらは…そうか、残りのナンバーズを捕まえたのか」

捕まったセインと気絶したクアットロを見て言うジェラルル。

「これでナンバーズは全員保護したな」

「あとは、スカリエッティのヤローだけだ!」

「……それなんだが、実は……」

ジェラルルは現在のなのは達の状況を伝えた。

「マジかよ……」

「んなことになってんのかよ」

「ああ。今は機動六課の人達が足止めしてくれているが、いつまで持つか分からない。だからナツ達も向こうの援護に行つて欲しい」

「…わかった。行くぞナツ、ハッピー！」

「おう！」

「あいさー！」

そう言うと、三人は大急ぎでなのは達の援護へと向かった。

その頃、ガジェットDと戦っているガジルは……

「うおおおお！！鉄竜槍・鬼薪きしん！！！！」

高く飛び上がり、鉄の槍に変形させた腕を連続で目にも止まらぬ速さで突き出し、ガジェットDの頭に攻撃する。

「まだまだあ！！鉄竜の咆哮！！！！」

それだけでは留まらず、さらに鉄の破片を含んだプレスをお見舞いした。

『グオオオオオ！！』

それを喰らったガジェットDは苦しげな咆哮を上げる。だが、すぐに体勢を立て直し、いまだ空中に居るガジルに向かって腕を振り下

ろした。

「ギヒヤー!!」

空中に居たガジルは当然避けることが出来ず、地面に叩きつけられる。それと同時にガジェットDが大きく口を開いた。すると、その口から巨大な熱線が発射された。

「くっ……っ!?!」

それを避けようとしたガジルだが、自分の背後に視線を送ると、目を見開いた。何故なら、ガジルの背後にはいつの間にか台車から落ちた眠っているメガーヌが居たからだ。

「チイツー!!」

このまま避けたらメガーヌに直撃する。それではルーテシアの依頼は達成出来ない。そう考えたガジルは避けるのを止め、身体中を鋼鉄の鱗で覆った。そして守るようにメガーヌの前に立つ。

「うおおおおおおお!!!!」

そして真正面から巨大な熱線を受け止める。だがその熱線の威力は半端ではなく、鋼鉄の鱗で防御していてもガジルは何度か後ろに吹き飛ばされそうになったが、なんとか踏み止まった。

「ぐっ…ハア…ハア…！」

だが、受けたダメージは大きく、ガジルはその場で膝をついた。

「ふふ…魔力が底をついたようだね」

それを見たスカリエッティが口を開いた。

「諦めたまえ。魔力が無ければ、もう何も出来まい」

「ぐっ…（確かに、魔力がねえんじゃ…もう……）」

と、ガジルが諦めかけたその時…

《あきらめんな》

「っ…！」

ガジルの記憶の中から、一人の男の言葉が浮かび上がった。

「……………ギヒッ」

それを思い出したガジルは笑みを浮かべる。

「諦めるかよ……………！」

「っ……………！」

「まだ終わってねえ…！かかってこいよクス野郎……………」

頭の中に浮かび上がる言葉を口にしながら、ゆっくりと立ち上がるガジル。

「オレは！ここに立ってるぜ！……………」

ガジルは、かつてナツに言われた言葉を叫びながらしっかりと立ち

上がった。それを見たスカリエッティは少し驚いた表情をするが、すぐに笑みを浮かべる。

「中々頑張るじゃないか、ガジル君。だが、これで終わりだ」

そんなスカリエッティの言葉に答えるようにガジェットDがガジルに向かって腕を振り上げた。

「チツ…ぐうっ！」

それを避けようとするガジルだが、身体に走った痛みのおかげで動くことが出来なかった。

そして、無情にもガジェットDの腕が勢い良く振り下ろされたのだ。それを見たスカリエッティは残念そうな表情を浮かべる。

「ふむ…大切な研究対象を潰してしまったな。まあ、いいか。すぐに別の研究対象を探すでしょう」

そう言って部屋から出て行こうとするスカリエッティ。すると……

「どこへ行く気だ？」

「っ!?!」

突如、頭上から声が聞こえ、スカリエッティはすぐに視線をそしらに向ける。そこには……

「まだガジルは…潰れていないぞ」

「んあ?」

呆気にとられた表情を浮かべているガジルを抱えたリリーが飛んでいた。

「リリー!」

「派手にやられたな、ガジル」

「……ケツ、まだ負けてねえよ」

「ふっ……」

強がるガジルの言葉に微笑を浮かべるリリー。すると…

「ガジル！リリー！」

「ゼスト！？」

少しの間だが、行動を共にしたゼストが現れた。

「なんでテメエがここに！？」

「色々あって、エルザと会ったんだ。今は作戦に協力している。あと、エルザは街に向かっていているガジェット殲滅に向かった」

「へっ…なら丁度いい。ゼスト！そこに居るルーテシアの母親を連れて行け！！」

「っ、メガーヌ！」

ガジルの言葉を聞いたゼストはメガーヌに駆け寄る。

「そいつを連れてさっさと行け！こいつはオレだけで十分だ！」

「……信じていいんだな？」

「当然だ」

ゼストの問いにガジルは笑みを浮かべながら答えると、ゼストは微笑を浮かべてメガーヌを抱きかかえた。

「オレもルーテシアも……待っているからな」

そう言い残して、ゼストはこの場から立ち去って行った。それを確認したガジルはリリーに向かって口を開く。

「リリー、降ろせ」

「良いのか？お前、魔力が殆ど残っていないんだろ？」

「いいから降ろせ！」

「……やれやれ」

リリーは溜め息混じりにそう言うと、ゆっくりとガジルを地面に降ろした。

「……少々誤算はあったが、まだ潰れていないのなら丁度いい。今度こそ、君を研究させてもらうよ!!!」

『グオオオオオ!!』

スカリエッティがそう言うと同時に、再びガジェットDがガジルに向かって腕を振り下ろした。

「ガジル!!」

それを見たりリーはガジルの名を叫ぶ。だが……

「魔力がねえなら、捻り出すまでだ……!!」

「っ!!?」

なんと、ガジルはガジェットDの巨大な腕を受け止めていた。

「明日の分の魔力を、捻り出す……!!」

そう叫びながらガジルはガジェットDの腕を弾き飛ばす。

「滅竜魔導士が、作りモンのドラゴンなんぞに負けるかよおおお!!」

そしてガジルは頭の上で両手を合わせる。

「滅竜奥義……!!」

そしてそれを、一気に振り下ろした。

「業魔・鉄神剣……!!」

その一瞬だけ、ガジルの両手は巨大な鋼鉄の剣へと変化し、ガジェットDの身体を真っ二つに切り裂いたのだった。

そして切り裂かれたガジェットDはバチバチと電気をほとばしらせ

二つの炎（前書き）

今回は短めですが、書きたかったことは全部詰め込みました。

リリカルテイル！前回までは！

「ドラゴンスレイヤー滅竜魔導士が、作りモンのドラゴンなんぞに負けるかよおおお！
！」

「滅竜奥義………！」

「業魔・鉄神剣………！」

二つの炎

ガジェット・ドラグーンとの死闘の末、ガジルは勝利を収めた。

「ば、バカな……！ガジェット・ドラグーンが……！」

「終わりだ……スカリエッティ」

ドスッ

「ぐっ………！」

ガジェットDが破壊されたことにスカリエッティが驚愕している間に、ガジルはスカリエッティの腹部に拳を叩き込み、彼を気絶させた。

「ハア、ハア……仕上げだ」

そう言うとガジルは最後の力を振り絞り、手を槍に変形させてスクリエッティのデバイスのコアを貫き、破壊した。

「これで依頼は……達成……」

ドサッ

「ガジル！」

ついに力尽きたガジルはその場にゆっくりと倒れこんだのだった。

「デイバイン・バスター……」

「プラズマ・ランサー……」

「フリースヴェルグ……」

「火竜の咆哮！！」

「アイスゲイザー
氷欠泉！！」

「サイクルソード
循環の剣！！」

その頃、機動六課のメンバーと途中から合流したナツ、グレイ、エルザは大量のガジェットを破壊していた。

「チイツ！こいつらゾロゾロと……！！」

「キリがねえな……」

壊しても壊しても次々と湧いて来るガジェットにナツとグレイは嫌気がさし、毒づく。

「弱音を吐くな！一体でも多く破壊するんだ！絶対に街に行かせるな！！」

「そうは言ってもよ、このままじゃジリ貧だぜ？」

「うん。どうにかしてガジェットを一掃出来ればいいんだけど……」

「もう私達にそこまでの魔力は残ってないし……」

「どないしたらえんや……」

この危機的状況をどうにか打破出来ないかと全員が頭を悩ませていると、エルザが口を開いた。

「一つ、方法がある」

エルザのその言葉に全員の視線が集中する。

「何だよ、方法って？」

「その前に、シグナム！」

エルザが呼ぶと、近くでガジェットと戦っていたシグナムが合流する。側に居たアギトも着いてくる。

「どうした、スカーレット？」

「突然すまない。お前とアギトはユニゾン出来るか？」

「まだ試してはいないが…」

「一応できるぜ」

シグナムとアギトがそう答えると、エルザは「よし」と呟き、今度はナツに視線を向けた。

「ナツ、まだ魔力は残っているな？」

「？ああ、残ってるぜ」

エルザの問いにナツは首を傾げながらも答えた。

「おいエルザ、一体何をしようってんだ？」

グレイが問い掛けると、エルザはゆっくりと口を開いた。

「ナツとシグナムの合体魔法だ」
ユニゾンレイド

「なっ!?!」

「合体魔法だと!?!?」

エルザの言葉にナツとグレイは驚愕し、聞き慣れない単語になのは達は首を傾げた。

「ユニゾンレイド?」

「なんやのそれ……?」

「合体魔法とは別々の魔法を一つに融合して威力を高める魔法だ。だが、本当に息のあった者同士でなければ発動は難しく、とある者は生涯を費やしても習得には至らないかったと言っ話もある」

エルザの説明になのは達は驚く。

「そんなこと出来るの!?!?」

「わからん。だが、前々から感じていたが、ナツとシグナムの魔力

は相性がいい。成功する確率が高い。どうする、二人とも?」

エルザは当の本人である二人に問い掛ける。すると二人は……

「いいぜ、やってやろうじゃねえか!燃えてきたぞ!」

「どの道それしか手はないのだろう?ならばやってみせるぞ。良いか、アギト?」

「当然!」

と答えた。それを聞いたエルザは笑みを浮かべる。

「そうか、では任せたぞ。なのは、フェイト、はやて、他のみんなを下がらせてくれ!」

「うん!」

「わかった!」

「了解や!」

そう言うと、なのはとフェイトとはやてはガジェットと戦っているメンバーに報告に行ったのだった。

それから少しして、未だ大量に残っているガジェットの前に立つのはナツとシグナム、そしてアギトだけとなった。

「準備はいいか、ドラグニル？」

「んなモンとづくに出来てるっつーの！」

「そうか……そう言えば初めてだな。お前をこうして肩を並べるのは」

「そっぴやそっぴだな」

「……ドラグニル……スカーレットが言っていた合体魔法……成功すると思っか？」

「……不安なのか？」

「少しな」

「らしくねえな」

「そうだな…忘れてくれ」

シグナムがそう言うと、ナツは一呼吸置いて、再び口を開く。

「オレを信じろ！」

「っ、なに？」

突然ナツが言った言葉にシグナムは目を丸くする。

「ユニゾンレイド合体魔法は術者の二人が互いを信頼し合って、初めて成功する魔法だ。だからシグナム、オレを信じろ！オレもお前を信じる！！」

「ドラグニル……」

「ナツだ！名前で呼び合うのも信頼の証…だろ？」

「っ……ふっ、そうだな。では行くぞ、ナツ！」

「おう！！」

二人は会話を終わると、真っ直ぐに大量のガジェットに向かって行く。

「アギト！」

「おうよ！」

「ユニゾン・イン！！！」

シグナムとアギトが同時にキーワードを口にすると、二人の身体が炎に包まれる。そしてその炎が消えると、シグナムの姿は青紫基調の色合いの服と金色の籠手、薄紫の目で彩度の低いピンク色の髪となり、背中には炎の羽が着いていた。

「うおおおおおおおー！！！」

そんな二人に負けじとナツも、残っている魔力を最大限に使い、身体中に炎を纏わせる。

「滅竜奥義！」

「剣閃烈火！」

ナツは全炎を両腕に纏い、シグナムはレヴァンティンに強大な炎を纏わせる。そして……

「紅蓮爆炎刃^{ぐれんばくえんじん}！！！！！」

「火竜一閃！！！！！」

二人同時に強力な炎の斬撃を放った。

「（オレを信じるだと？ふっ……バカ者め……）」

技を放ちながらシグナムは微笑を浮かべる。

「（あの模擬戦以来、お前の力を疑ったことなど……一度もない！
！！）」

そう心に思いながら、シグナムは剣を持つ力を強めた。

「「おおおおおおおおお！！！！！！」」

そしてその二つの巨大な炎は大量のガジェットに向かいながら、徐々に合わさっていき……

「「魔力融合！！」」

そして、一つの炎となった。

「「ユニゾンレイド合体魔法！！！！！！」」

そしてその強大な炎は全てのガジェットを一瞬で包み込み、大爆発を起こした。

「凄い……」

誰が言った言葉かはわからないが、その言葉には全員が頷かざるを得なかった。

そして爆煙が晴れると、そこにはガジェットの様子が一体も無かった。

「シャーリー！ガジェット反応は！？」

それを見たはやてはすぐさまロングアーチに確認を取る。

《あ、ありません！ガジェット反応なし！！全滅しました！！》

その報告を聞いた全員が歓声を上げた。

「いよっしやあああああ……！！」

その中でもナツの歓声が一際大きく響き渡っていた。

こうして、J S 事件は幕を閉じたのだった。

くじく

協力者（前書き）

リリカルテイル！前回までは！

「オレを信じろ！」

「では行くぞ、ナツ！」

「「ユイソウ合体魔法！……！！！」

協力者

JS事件解決から数時間後。首謀者であるジェイル・スカリエツテ
イは逮捕され、留置所に送り込まれた。

そして、スカリエツテイ逮捕に今回もつとも尽力をつくした男、ガ
ジル・レッドフォックスは……

「バリバリ！ガジガジ！ボリボリ！」

包帯だらけの身体にも関わらず、食堂のテーブルの上で大量の鉄ク
ズを凄い勢いで食べていた。

「は、話には聞いていたけど、本当に鉄を食べるのね……」

「うん……凄いね」

そんなガジルの姿を見て、同じく食堂で食事をしていたティアナとスバルは唾然としていた。

「凄い食いつぶりだな、ガジル」

すると、彼のパートナーであるリリーがガジルに話しかけた。

「つたりめーだ。大量の魔力を使ったからな。腹へってしようがねえんだよ」

そう言いながらも鉄を食べる手は止まらないガジル。そんなガジルを見て、やれやれと溜め息をつくりりー。すると……

「ガジル……！」

「ん？」

後ろから声をかけられて振り向くガジル。そこにはルーテシアが立っていた。

「何だルーテシアか。どうした？」

鉄を口に運びながら尋ねるガジル。

「ゼストから聞いた……ガジルが母さんを助けてくれたって……」

「別に……オレはただお前からの依頼を達成させたただけだ」

「っ……！」

「ぬおわっ!!!?」

すると突然、ルーテシアがガジルに抱きついた。

「て、テメエ！いきなり何を……っ！」

そこまで言いかけてガジルは気がついた。ガジルに抱きつきながらルーテシアが涙を流していることに……

「グスツ……それでも……ありがとうガジル……母さんを……助けてくれて……っ！」

「……………つたく」

ガジルは諦めたように溜め息をつき、そのままルーテシアの頭をそつと撫でた。

「いつまでもメソメソしやがって…母親が目を覚ました時も、そんな顔する気か？」

「グスツ……………（フルフル）」

首を横に振りながら涙を拭うルーテシア。

「だったら今の内に母親を笑顔で迎える準備でもしとけ。オレもリ―もまだ見たことねえ、お前の笑顔をな」

「うん……………そうする。ガジル、本当にありがとう…！」

「っ……………！」

そう言つとルーテシアは薄くだが、確かに微笑んだ。それを見たガジルは一瞬呆気にとられる。

「……ケツ。そんな笑顔じゃあ母親は起きてくんねえぞ」

「うん……もっと頑張ってみる」

「……へっ」

笑みを浮かべると同時に、ガジルはもう一度ルーテシアの頭を撫でたのだった。すると……

「ロリコン」

食堂のどこかからそんな声が聞こえた。

「今ロリコンだったの誰だコラアアア!!!」

そんなガジルの怒声が食堂に響き渡ったのだった。

翌日、機動六課部隊長室。

ジェラルルとエルザ、そしてなのは、フェイト、はやての五人が集まっていた。

「今回集まってもらったのは他でもない。一週間後に控えたサタン・ペザリオスとの決戦についてだ」

メンバーを集めた張本人、ジェラルルがそう言うと、メンバー全員が気を引き締める。

「決戦に参加するメンバーは機動六課のメンバーに妖精の尻尾フェアリーテイルのメンバー……総合的に見ても、最強の布陣と言えるだろう。だが、オレ達とヤツ等の間には一つだけ決定的な差がある」

「それは何や？」

「技術力だ」

はやての質問に静かに答えるジェラルド。

「以前サタンが機動六課にハッキングを仕掛けてきたように、今回の戦いの最中でもハッキングを仕掛けてくるだろう」

「でもそれはロングアーチの人達が…」

「阻止できる…とは限らないだろうな」

フェイトの言葉を遮り、エルザが言った。

「相手は私たちの世界では天才魔法科学者と呼ばれていた男だ。失礼だが、ロングアーチの技術力では対処出来ないだろう」

「それは……！」

なのはは反論しようとするが、前回あっさりとはッキングを許してしまった手前、言葉を出すことが出来なかった。

「そこでだ、その差を埋めるためにあるヤツに協力を頼み、協力の約束を取り付けることが出来た」

「」「あるヤツ?」「」

ジェラルルの言葉に首を傾げるなのは達。すると、ジェラルルの「入って来てくれ」と言う言葉と同時に扉が開いた。そこへ入って来たのは……

「やあ、」
「機嫌よう」

先日解決したJS事件の首謀者、ジェイル・スカリエッティだった。

「な、何でスカリエッティが此処に居るんや!!?」

「もしかして、協力者って……!!」

「この男のことだ」

驚愕するなのはさての問い掛けに答えるようにジェラルルはそう言った。

「っ……！ふざけないでっ……！！」

すると、フェイトが今まで聞いたことのない怒声を上げた。

「この男が素直に協力するとは思えない！絶対何かを企んでる！何でこんな男に協力なんて……！！」

「スカリエッツィの技術力はサタンにも引けを取らない。オレ達には必要な人材だ」

「でも！こんな犯罪者が……！！」

尚も反論するフェイトに、ジェラルドは「ふう……」と息を吐いた。

「犯罪者が此処に居てはならないと言っのならば……オレも此処に居てはならない人間だ」

「「「え？」「」」

「っ……！！」

「ほっ…」

ジェラルルの言葉に三人娘は驚愕し、エルザは辛そうな表情を見せ、スカリエッティは興味深そうに声を漏らした。

「オレはエルザ達の世界では最低最悪の大悪党だ。死者を冒瀆し、エルザ達を傷つけ、評議院を破壊し、そして……仲間を…殺した」

「……っ?!?!?」「」

その言葉に三人は驚愕し、目を見開いた。

崩壊寸前の機動六課を救い、先日の事件にも協力してくれた男が、まさか大悪党だとは思わなかったのだ。

「今のオレにその時の記憶はないが、オレが最低のクズで、犯罪者であることに変わりはない」

「ジェラルル……」

自分を卑下する言葉を口にするジェラルルを見て、エルザは今にも泣き出しそうな表情を見せる。

「頼む!!」

ジェラルは三人に向かって頭を深く下げる。

「サタンとの決戦には、どうしてもスカリエッティの力が必要なんだ！」

頭を下げながらそう頼み込むジェラル。すると……

「私からも頼む！」

「っ……エルザ」

なんとエルザも三人に頭を下げた。

「確かに、スカリエッティはお前たちにとっては許すことの出来ない犯罪者かもしれん。だが、人は犯した罪を償うことができる。だから頼む！スカリエッティに、罪を償うチャンスを与えて欲しい！」

「……」

そして暫くの沈黙のあと、はやてが溜め息混じりに口を開いた。

「わかりました。ジェル・スカリエツィを協力者として迎えることを許可します」

「はやて!?!」

はやての言葉に驚愕するフェイト。

「「めんなフェイトちゃん……フェイトちゃんの気持ちも分かるけど、今まで機動六課を守ってくれたエルザさんとジェラルさんにここまでされたら断れへんわ。それに、フェイトちゃんのその理論で言うたら私や守護騎士たち、フェイトちゃん自身も此処に居たらアカンってことになるで?」

「うっ……!」

はやてにそう言われてフェイトは言葉を詰まらせる。

もう十年も昔の話だが、フェイトとはやて、それと守護騎士たちは理由はどうあれ犯罪を犯してしまった。その罪を償うために管理局に入局したのである。

「同じ犯罪者で、局員になった私らが許されて…管理局に協力の意志を見せとるスカリエツティが許されへんなんて道理はないやろ？」

「っ……なのは！」

フェイトは次に親友であるのはに言葉をかけるが……

「ごめん、フェイトちゃん…今回は私もはやてちゃんと同意見だよ」

「そんな……！」

信頼していたなのはにまでそう言われ、フェイトは目を見開きながら下唇を噛み、そして……

「私は……認めない…絶対に……！」

「フェイトちゃん！」

そう叫びながらフェイトはなのはの静止の声も聞かず、部長長室を飛び出して行った。

「……ごめんな、見苦しい所をみせてもうて……」

「いや、元はオレの勝手なことを言ったせいだ。彼女には悪いことをした」

「ふむ、確かに…間接的には言え、私は彼女の母親、プレシア・テスタロツサの人生を狂わせた人間だからね。怨まれても仕方のないことだ」

スカリエツティがそう言うと、なのはとはやての視線がスカリエツティに突き刺さる。

「ジェイル・スカリエツティ……一応貴方を協力者として迎えますけど、行動などは全て監視させて頂きます」

「構わないよ。当然の処置だ」

「それからこれは個人的なことなんやけど……ウチの部隊のみんなに変なことしたら…わかっとするやんな？」

「わかっているよ。その時は、君が私を始末したまえ」

はやての威圧感の籠った言葉をモノともしないスカリエッティはそう答えると、続けて言葉を発する。

「まあ、そんなことは絶対にしないと約束しておこう。彼との契約もあることだしね」

そう言いながら横目でジェラールを見るスカリエッティ。その言葉にジェラール以外の三人は疑問を抱いた。

「契約？」

「そう、契約さ。その内容を言うつもりは無いが、私とジェラール君の利害が一致した…とだけ言っておこう」

そう言いながら笑うスカリエッティの笑みは、面白い玩具を見つけたような笑いだった。

一方その頃、部隊長室を飛び出したフェイトは隊舎の近くにある、以前ティアナが自主練をしていた森の中へと来ていた。

「はぁぁ………」

そしてフェイトは近くの木にもたれ掛かりながら座ると、大きな溜め息をついた。

「はやてとなのは、それにジェラルルさんの言っていることも分かるし、理解もしてる……だけど、やっぱり私には………」

と、顔を俯かせながらブツブツと独り言を言うフェイト。すると……

「なにやってんだよ?」

「っ!?!?」

突然声を掛けられたため、フェイトは驚きながら顔を上げる。そこ

に居たのは……

「グレイ……」

「よおっ」

フェイトの前にしゃがみ込み、片手を上げて挨拶をするグレイの姿があった。

「どうしてここに？」

「ん？ヒマだったから隊舎の中を歩き回ってたら、お前が血相変えて出て行くのが見えたんで、何かと思って追いかけてきたんだよ。んで、お前はどうしたんだよ？」

「……………実は……」

フェイトは先ほどの部隊長室でのやり取りとグレイに説明した。

「なるほどなあ、スカリエッティを仲間になえ……………確かに昨日まで敵だったヤツが、いきなり仲間になるってのは、おいそれと納得出来る話じゃねえよな」

「うん……」

「けど、なのはとはやての二人はそれを納得しちまってる。んで、お前一人反発して飛び出してきちまったってわけか」

「うん……」

グレイの言葉にフェイトはただ頷くだけだった。

「でもよ、普段のお前なら犯罪者でもそこまで拒絶はしねえだろ？
何でそうスカリエッティを目の敵にするんだ？」

「……それは……」

一瞬迷ったフェイトだが、ゆっくりと口を開いた。そして自分の過去を含めて全て話した。

スカリエッティの研究のせいで母親であるプレシアの人生が狂ったこと。

自分はプレシアの本当の娘ではなく、亡くなったアリシア・テスト

ロツサのクローンだと言ったこと。

そして十年前に理由はどうあれ、犯罪を犯してしまったことなど、
全て話した。

「そうか……そりゃ確かに、怨むなつつう方が無理な話だ」

「うん……アイツの研究のせいで、母さんの人生がメチャクチャに
なった……アイツの……せいで……!!」

言葉を口にするにつれ、フェイトの声が震えている。

「でもよ、こころは考えられねえか？」

そう言ってグレイは一呼吸置くと、再び口を開いた。

「その研究があったからこそ、お前が生まれた」

「え？」

グレイの言葉に、フェイトは呆気に取られる。

「そしてお前は、なのはと出会って、はやて達と出会って、スバルにティアナ、エリオやキャロに出会って、そして……オレ達と出会えた」

「っ……!」

グレイの言葉に目を見開くフェイト。そんなフェイトの頭に、グレイはポンツと自分の手を置く。

「スカリエツティのことを許せとは言わねえよ。けど、アイツの研究のお陰で……仲間」って言う大切な存在と出会うことが出来た。その点に関してだけは、感謝してやっても良いんじゃないかねえかな?」

そう言いながらそのままフェイトの頭を撫で始めるグレイ。フェイトは最初は驚いていたが、やがて気持ち良さそうに目を細めた。

「……うん、ありがとう……グレイ……もう少し、前向きに考えてみる」

「そっか」

フェイトの言葉を聞いたグレイは満足そうに笑い、フェイトの頭から手を離す。その際に、フェイトは少々名残惜しそうな顔をしていたが…

「んじゃ、オレは戻るわ。気持ちの整理がいたら、二人に謝りに行けよ」

そう言うと、グレイは隊舎に向かって歩いて行った。その後ろ姿を見送りながらフェイトは……

「ありがとう…グレイ……」

と、頬を染めながら呟いたのであった。

つづく

恋する乙女達・その？（前書き）

しばらくこのシリーズが続くと思います。

そして今回はなのは&フェイト編です。

恋する乙女達・その？

サタンとの決戦まで残り五日にまで迫ったある日のこと……

「ハア……」

フェイトは部屋でソファに座りながら大きな溜め息をついていた。

「どうしたの、フェイトママ？」

そんなフェイトを心配して、彼女の顔をヴィヴィオが覗き込む。

「あ、ヴィヴィオ……ううん、何でもないよ」

る。

「だ、誰！？それって誰なの！！？」

なのは興奮気味でフェイトに詰め寄る。それに戸惑いながらも、フェイトは恥ずかしそうに頬を染めながら口を開く。

「えっと……その………グレイ………」

「……へ？」

フェイトの告白を聞いたなのは先ほどの興奮が嘘のように静まり、呆然とした顔をしていた。

「フェイトちゃんも……グレイさんのことが……？」

「え？」

「あっ……！」

なのは口を滑らせたことに気がつき、慌てて口を塞ぐが、時すで

に遅く……

「私『も』ってことは……もしかして、なのはも……？」

フェイトにそう問い掛けられたなのは顔を真っ赤にしながら頷いた。

「……うん……私も好きだよ…… 그레이さんのこと……」

そう言うと、フェイトは一瞬驚いた表情を見せるが、すぐに優しい笑顔を浮かべた。

「そう……じゃあ私となのははライバルだね」

フェイトのその言葉になのはは一瞬呆気に取られるが、すぐに笑顔を浮かべる。

「うん！負けないよ、フェイトちゃん！」

「私だって負けないよ！」

そう言つて二人は笑い合う。すると、ヴィヴィオが首を傾げながら質問する。

「うう？なのはママもフェイトママもグレイおにいちゃんが好きなの？」

「え？う、うん……」

「まあ、ね……」

ヴィヴィオの質問に二人は戸惑いながら頷く。するとヴィヴィオはニパツと笑い……

「じゃあグレイおにいちゃんはヴィヴィオのパパだね！」

と、無垢な笑顔でそう言った。

「「ええええ！！？」」

当然驚くのはとフェイト。

「ヴィヴィオ、パパに会ってくるー」

そう言うと、ヴィヴィオは部屋を出て行き、ピューという効果音がつきそうな勢いで走って行った。

「「ヴィ、ヴィヴィオ！ちょっと待って！！」」

そんなヴィヴィオを二人は慌てて追いかけて行った。

その頃、そのグレイ本人はと言つと……

「…でよ、そしたら……」

「ははっ！マジかよ！」

食堂でテーブルに座りながらヴァイスと談笑をしていた。

すると……

クイクイ

「ん？」

服を引っ張られる感触を感じたグレイはそちらに視線を向ける。そこにはグレイの服の裾を掴んでいるヴィヴィオの姿があった。

「ヴィヴィオじゃねえか。どうしたんだよ？」

と、グレイがそう尋ねると、ヴィヴィオは純真な笑顔を浮かべて……

「グレイパパ」

と言った。

「」「……は？」

それを聞いたグレイとヴァイスは素っ頓狂な声を上げた。

「お、おいヴィヴィオ……今、何だった？」

「グレイパパ」

グレイは何かの聞き間違いだと願いながら、もう一度ヴィヴィオに尋ねるが、先ほどとまったく同じ答えが返ってきた。

「ハアアアアアア……！！？」

グレイの絶叫に似た叫び声が食堂に響き渡る。

「グレイ……お前……！！」

「待てヴァイス！何だその顔は！？言つとくがオレはなんもしてねえからな！！つてかヴィヴィオ！何でオレがお前のパパなんだ！？」

引きつった顔でグレイを見るヴァイスにツッコみつつ、グレイはヴィヴィオを問い詰める。だが、ヴィヴィオ本人は不思議そうに首を傾げている。

「?違うの?」

「違う違わないの前に、何でそういうことになったんだ!？」

「だって、なのはママもフェイトママもグレイパパのこと」

「「わあああああ!?!?!」」

ソニックムーブ並の速さで食堂で入って来たなのはとフェイトが慌ててヴィヴィオの口を塞いだ。

「ヴィヴィオ!今何を言おうとしたの!？」

「え?ママ達はグレイパパのことがすきって……」

「そう言うことは簡単に言っちゃダメなの!!わかった!？」

「は……」

なのはとフェイトに説教されてシュンツと肩を落とすヴィヴィオ。

それを見てホッと息を吐く二人。すると……

「おいコラ」

「「っ！！？」」

後ろから聞こえる低い声にビクッと肩を震わせる二人。そして、そつと後ろを振り向くと……

「どづいつことが……説明して貰おうか？」

冷たい怒気（冷氣？）を身に纏ったグレイの姿があった。

「うおっ、寒っ……退散退散っ……」

その冷たさに当てられたヴァイスは身体を抱きながらその場から去って行った。

「なんで急にヴィヴィオがオレのことをパパだなんて呼び始めたんだ？」

「え、え〜と……」

「それは……」

私たちはグレイのことが好きだからです…なんてことを言うわけにもいかず、二人は冷や汗を流しながら戸惑っていた。すると、ヴィオがグレイの足元に駆け寄る。

「グレイパパってよんじゃダメなの？」

「当たり前だ。オレはまだガキを持つような歳じゃないんでな」

「でもヴィヴィオはグレイパパってよびたい！」

「どういう理屈だよそりゃ？ダメなもんはダメだ」

「よーびーたいー！」

「ダメだ」

「うっ……」

「……………」

グレイとヴィヴィオが言い合いをしていると、次第にヴィヴィオの表情が歪む。

「ふええ……………」

そしてヴィヴィオの目に涙が溜まっていく。それを見たグレイは……

「っ……………わーっ たよ！好きに呼べよー！」

遂に折れた。

「うん！グレイパパ」

するとヴィヴィオはすぐさま涙を引っ込め、グレイに抱き付いた。

「ったく……………」

グレイは少し困った顔をしながらも、抱きつくヴィヴィオの頭を撫でてあげた。

「あ、あの……グレイさん……」

「その……ごめんなさい、私たちのせいで……」

なのはとフェイトが申し訳なさそうに謝罪する。

「……別にいいさ。大方、ヴィヴィオが父親が欲しいとか言い出したんだろ？んで、身近にいる男……つまりオレを父親役にしたってとこだろ？」

「え？えつと……その……はい……」

本当のことを言うわけにもいかないの、二人はグレイに話を合わせたのだった。

「なのはママ！フェイトママ！」

すると、ヴィヴィオがグレイに抱き付きながら二人を呼んだ。そしてそのまま、輝かんばかりの笑顔で言葉を発した。

「こんなにステキなパパとママ達と居れて、ヴィヴィオ……幸せだよ
っ！」

「……！！」

その言葉に三人は驚くが、すぐに優しい笑顔を浮かべた。

「よしヴィヴィオ！みんなで一緒に遊ぶか？ハッピーやリリーも誘
つてよ！」

「うん！あそぶー！！」

グレイの提案にヴィヴィオは笑顔で頷く。

「んじゃあ、行くっぜ？」

「うん！」

グレイとヴィヴィオは手を繋いで食堂を後にした。そんな光景をな
のはとフェイトは微笑みながら見ていた。

「ヴィヴィオ、嬉しそうだね」

「うん…本当に……」

そう言って二人は微笑み合う。

『おい！お前ら何してんだよ？』

『なのはママー！フェイトママー！はやくー！』

少し遠くの方から、グレイとヴィヴィオが二人を呼ぶ声が響く。

「あ、ごめん！」

「今行くから！」

そう言って、二人は一緒にグレイとヴィヴィオのもとへ向かった。

「（いつか……本当の『家族』に……！）」

そんな想いを、胸に抱きながら……

つづく

恋する乙女達・その？（前書き）

乙女シリーズ第二話目です。

独自解釈などがございますが、ご了承ください。

今回はルーテシア&ウエンディ（妖精）編です。

恋する乙女達・その？

グレイとヴィヴィオ、そしてなのはとフェイトの四人でちょっとした一悶着があった同じ頃、ここにも恋する少女達が居た……。

ルーテシアの想い人

場所は医務室。そこにはルーテシアとウェンディ、それからベッドに寝たきりのメガーヌが居た。

「ウェンディ……母さんの容態はどう？」

そう無表情で尋ねるルーテシア。ウェンディはそれを笑顔で答える。

「大丈夫。シヤマル先生が言うには、長い間生体ポッドの中に入れてたから意識が戻りにくくなってるけど、しばらく安静にすれば必ず目は覚めるって」

「そう……よかった」

無表情だった顔が安堵に代わり、ルーテシアはホッと息をついた。

「これもメガー又さんを助け出してくれたガジルさんのお陰だね？」

「うん。ガジルには、本当に感謝してる……」

ルーテシアがそう言うと、ウェンディは微笑ましいものを見るような表情になった。

「……なに？」

その視線に気がつくルーテシア。

「ふふつ……ルールーちゃんは本当にガジルさんのことが好きなんだなあって……」

ウエンデイが微笑みながらそう言うと、ルーテシアは「うん……」
と小さく頷きながら言葉を口にする。

「私はガジルが好き……私を守ってくれたり、私のために怒ってくれたり、私の頭を撫でてくれたり……何より、あんな傷だらけになっても必死に母さんを助け出してくれたガジルが……大好き」

そう想い人のことを語るルーテシアの顔は無表情だが、心なしか若干顔が赤い。因みにそれを聞いていたウエンデイの顔はもっと赤い。

「ルールーちゃん……大胆……」

「……………」

すると、ルーテシアは突然ウエンデイの顔をジッと見始める。

「えっと……なに？ルールーちゃん」

「……………ウエンデイは……」

「はい？」

「好きな人……いないの？」

「へ？……ええええ！！？」

ルーテシアのストレートな質問に驚くウエンディ。

「そ、そそそ…そんなのいないよ！」

「……そうなの？」

再度ルーテシアの問い掛けに、今度はコクコクと首を縦に振って答えるウエンディ。

「そう……」

「……」

「……」

そこで会話がストップし、沈黙が医務室を支配する。ウエンディにとってはこの上なく痛い空気だった。すると……

「ウエンディちゃん、いる？」

医務室にシャマルが入って来た。

「は、はい！どうしたんですか？」

「はやてちゃんからの伝言なんだけど、ちょっと資料室の整理を手伝って欲しいって」

「はい！わかりました！行ってきます！！」

この部屋の空気が痛い状況となっていたウエンディにとっては、この知らせは都合が良かったため、すぐに引き受け、資料室へと走って行ってしまった。

「えっと……何かあったの？」

「……ちょっと」

そして医務室には、ウェンデイの勢いに呆然としているシャマルと相変わらず無表情のルーテシアが残されていた。

ウェンデイの初恋

「恋愛……かあ……」

資料室で資料本を整理しながらウェンデイは一人呟く。先ほどまでは、はやてとラインが一緒に居たのだが、急な仕事が入ってしまい、先ほど出て行ってしまった。ゆえに、現在はウェンデイ一人で資料整理をしていた。

「そう言えば私……初恋すらしたことないかも。ナツさんと 그레이さんとガジルさんは憧れだし、エドラスのジエラルもただの恩人で、恋愛対象ってわけじゃないし……」

そう呟きながらも整理を進めるウェンデイ。

「うん！大丈夫！私もまだ12歳だし！」

ウエンディは自分に言い聞かせるようにそう言つと、一冊の資料本を手に取つた。

「えつと、この資料は……この上だね」

はやてから預かつた資料本の一覧表を見ながらウエンディは高い本棚を見上げる。目的の位置は結構高い場所だった。

「よいしょ、よいしょ……」

近くにあった梯子を使い、本棚を登るウエンディ。そして目的の位置にたどり着くと、そこに資料本を納める。

「これでよしつと」

本を納めたのを確認し、ウエンディは下に降ろつとした。だが……

ズルッ

「あっ……………!!」

何と梯子に掛けようとした足を踏み外し、そのままバランスを崩してしまった。ウエンディはしまったと言う表情をするが、もう遅い。

「きゃあああああ!!!!」

ウエンディは重力に従って梯子から落ちてしまった。

「っ……………!!!!」

迫る硬い床にウエンディは覚悟してギュッと目を瞑る。その時……

「危ないっ!!!!」

そんな声と同時に、輝く閃光が走った。

「……………?」

いつまで経っても来ない衝撃に、ウエンディは恐る恐る目を開ける。
そこには……

「大丈夫ですか、ウエンディさん？」

「エリオ……君？」

バリアジャケットを身に纏い、ウエンディをお姫様抱っこで抱えているエリオの姿があった。

どうやら梯子から落下するウエンディを見て、即座にバリアジャケットを展開し、ソニックムーブで間髪一髪ウエンディを助けたようだ。

「驚きました。八神部隊長からウエンディさんの手伝いをするように言われて来たんですけど、まさかそのウエンディさんが落ちてくるなんて……」

「うう……」

エリオの言葉にウエンディは恥ずかしそうに顔を真っ赤にする。

「とにかく、無事でよかったです」

「う、うん……ところで、エリオ君……」

「はい？」

「ずっとこの格好は……恥ずかしいです……」

「え？……あっ」

そう言われてエリオは気がついた。自分が未だにウエンディをお姫様抱っこをしていることに。

「すみません！今降ろします」

「う、うん……」

エリオはゆっくりとウエンディを降ろし、同時にバリアジャケットも解除した。

「えっと……ありがとう、エリオ君……」

「いえ。それより、早く整理を終わらせてしまいましょう」

と、笑顔でそう言うエリオにウエンディは……

「うん／＼／」

頬を赤く染めて、頷いたのだった。

その後、食堂にて……

「ねえ、シャルル……」

「何よ？…どうかしたの？」

ウエンディの言葉に応答したなが優雅にダーズリンティーを口に運

び……

「私……好きな人できたかも」

「ブウウー……!!!!」

思いっきり噴出した。

「シャルル……汚いよ」

「そんなことはどうでもいいのよっ！それよりアンタ！今なんて言ったの!?!」

「へ？何って……」

「好きな人が出来たとか言わなかった!?!」

「う、うん……言ったよ」

恐ろしい形相で問い詰めるシャルルに圧倒されながらも頷くウエン
デイ。

「誰よそれ！教えなさい！私には知る権利があるはずよっ！！」

ウエンデイが小さい頃から一緒だったシャルルは知る権利があると主張する。だが……

「え〜……いくらシャルルでも教えられないよお……／＼／」

ウエンデイは赤くなった頬を両手で押さえ、イヤイヤと首を振って拒否した。

「ちょっと！アンタそんなキャラだった！？本当に一体誰なのよお
おお！！！！」

シャルルの絶叫に似た叫び声が六課全体に響き渡ったのだった。

UNU

恋する乙女達・その？（前書き）

やべえ…今回はやっちまいました。恋する乙女達とか言ってる場合
じゃねえよコレ。なにコレ？どうすんのコレ？

えっと……とりあえずどうぞ。

今回はノーヴェ&ティアナ編です。

恋する乙女達・その？

ノーヴェの願い

早朝・訓練所にて……

「うおおおおおおお！……！」

「でりゃあああああ！……！」

まだFWメンバーの訓練すら始まっていない時間帯。そんな朝早くから、二人の男女の雄叫びが響いていた。

「やるじゃねえか！ノーヴェ！……！」

「へへっ、ナツこそな！けど……！」

「負けねー！！」

そう言っつて拳をぶつけ合うナツとノーヴェ。

現在二人は魔法無しの肉弾戦勝負をしていた。と言うのも、以前ナツがノーヴェとした『また喧嘩しよう』と言う約束を実行中なのである。

だが、名目上は喧嘩だが、二人の表情は喧嘩とは思えないほど活き活きしていた。

「よくウエンディ達と姉妹喧嘩はしたことあったけど、こんなに楽しいと思える喧嘩は初めてだ！！」

「オレもこんな喧嘩は久しぶりだ！燃えてきたぞ！！」

そしてまた…拳をぶつけ合う音が、訓練所に響いたのであった。

「ハア…ハア…ハア…！」

それから一時間後。ついに力尽きた二人はその場で倒れ込んでいた。

「さ、流石に……疲れたな…！」

「へっ、へへ……だらしねえな…オレはまだまだ…行けるぜ…！」

「息絶え絶えのクセに何言ってるんだよ？」

「うつせえ」

地面に仰向けに倒れながらお互いに軽口を言い合う二人。

「次に喧嘩するとしたら……サタンってヤツとの決戦のあとかな？」

すると、ノーヴェが口にしたのはあと数日に控えたサタンとの決戦。

「そついや、オメエらも参加するんだよな？」

「ああ。ウーノ姉とクア姉は主にドクターのサポートで、それ以外のナンバーズは全員戦闘だつてよ」

ノーヴェ達の生みの親であるスカリエツティが決戦の時のみ六課に協力することになったので、ノーヴェを含めたナンバーズも決戦に参加することになったのである。

「……………なあ」

「ん？どうしたんだよ？」

「その戦いが終わったらさ……………お前……………元の世界に帰るんだよな？」

そう。サタンとの決戦が終わったら、ナツを含めた妖精の尻尾は自分達が元居た世界に帰ってしまうのだ。

「それがどうしたんだよ？」

「……………アタシ…イヤだ……………！」

静かに、だがハッキリとノーヴェはそう言った。

「お前は生まれて初めて出来たアタシの友達だし、戦闘機人だったアタシを人間って認めてくれた恩人でもあるんだ！なのに……どうしてそのお前が居なくなるんだよっ……！！！」

そう言うノーヴェの声は段々と震え始める。

「ノーヴェ……」

そんなノーヴェをナツは何とも言えない表情で見つめている。

「なあナツ……決戦が終わっても、ずっとこの世界に居ないか？」

「っ……」

「我俣を言ってるのはわかってる……けど、お前が…ナツが居なくなるのは……イヤなんだよ……！」

「……………」

ノーヴェが出した問い掛けに、ナツが出した答えは……

「悪いノーヴェ……それは出来ねえ……」

断りの言葉だった。

「フェアリーテイル妖精の尻尾はオレ達の家で、ギルドの連中は家族だ。オレ達は帰らなきゃいけないんだ……家族のところへ……」

「……そっか……」

ナツの言葉を聞いたノーヴェの顔はどこか泣きそうだったが、涙は見せず、そう答えた。

「じゃあさ、もう一つ聞いてもらっていいか？」

「何だよ？」

ノーヴェは一呼吸置いて、ゆっくりと口を開いた。

「ナツ……アタシは……！」

ティアナの想い

「まったく、ナツはどこに行ったのかしら？部屋にも居ないし……」

ティアナは一人隊舎を歩きながらそう呟いた。

「一緒に朝ごはん食べようと思ったのに……」

なのはの諸事情で急遽午前中の訓練が中止になった為、ティアナは新人メンバーにナツを加えて朝食を取ろうと思ったのだが、肝心のナツが見つからないのだ。

「いつもなら部屋で寝てるクセに何で今日に限って……」

と、ティアナは愚痴を言ったその時……

ドゴオオオオオオン！！

「っ、なに！？」

突然響いた轟音に驚くティアナは窓から音が響いた先を見る。

「今の音って訓練所から？もしかして……イヤ、十中八九アイツね」

朝からこんなに騒がしい音を出せる人物をティアナは一人しか知らない。

「探す手間が省けたわ」

そう言って、ティアナはナツが居るであろう訓練所へと向かった。

「あ、いたいた。ナツ　　! !」

ようやく見つけたナツに声を掛けようとしたティアナだが、すぐに口を噤み、何故か物陰に隠れた。その理由は……

「（あれは……ノーヴェ？どうしてナツと？）」

ナツの隣りにノーヴェが居たからである。

「（……って言うか、何で私隠れてるんだろう？）」

ティアナが自分の行動に戸惑っていると、ナツとノーヴェの会話が聞こえてきた。

『……………なあ』

『ん？どうしたんだよ？』

『その戦いが終わったらさ……お前……元の世界に帰るんだよな？』

「っ！！？」

それを聞いたティアナは大きく目を見開いた。

「（戦いって……サタンとの決戦？そっか……この決戦が終わったら、ナツは元の世界に帰っちゃうんだ……）」

そう思うと、ティアナは悲しそうな表情をする。

『それがどうしたんだよ？』

『……アタシ……イヤだ……！』

「……………」

またも聞こえてきた会話にティアナは耳を傾ける。

『お前は生まれて初めて出来たアタシの友達だし、戦闘機人だったアタシを人間って認めてくれた恩人でもあるんだ！なのに……どうしてそのお前が居なくなるんだよっ……！！』

「（……ノーヴェ）」

もつとも近しい人間が居なくなる時ほど、辛いものはない。兄・デイーダを失ったことのあるティアナにはノーヴェの気持ちが痛いほど伝わってきた。

『なあナツ……決戦が終わっても、ずっとこの世界に居ないか？』

『っ……』

物陰越しでも、ナツが息を呑んだのがわかった。

『我俣を言ってるのはわかってる……けど、お前が…ナツが居なくなるのは……イヤなんだよ……！』

『……………』

ノーヴェの問い掛けの答えを言う時を、ノーヴェだけではなく、ティアナもジツと待っていた。そしてナツが出した答えは……

『悪いノーヴェ……それは出来ねえ……』

断りの言葉だった。

『フェアリーテイル妖精の尻尾はオレ達の家で、ギルドの連中は家族だ。オレ達は帰らなきゃいけないんだ……家族のところへ……』

「……………」

物陰でナツの言葉を聞いていたティアナは目を伏せた。

「（……そうよね…ナツはいつだって家族の下へ帰らないと言っていた…ナツの答えなんて最初から分かり切ってたこと……なのに……）」

ティアナはギョツと拳を握り締める。

「（……泣きそうになるのよ……！……）」

ティアナの目には、今にも溢れ出しそうなほどの涙が浮かんでいた。だがティアナは流しそうになる涙を必死に堪えた。すると、再びノーヴェの声が聞こえてきた。

『じゃあさ、もう一つ聞いてもらっていいか？』

『何だよ？』

「……………」

これ以上何を聞くつもりかと気になったティアナは耳を傾ける。そしてノーヴェがゆっくりと口を開いた。

『ナツ……………アタシは……………！お前のことが、好きだっ！！』

「っ！！！！！！？」

ティアナは一瞬、ノーヴェが言ったことが理解出来なかった。だが、すぐに理解した。ノーヴェはナツに告白したのだ。

『ノーヴェ……』

すると、ナツの声が聞こえてきた。

「（イヤ……！）」

『オレも……！』

「（聞きたくない……！……！）」

『お前ごと……』

「（イヤアツ……！……！）」

ナツノーヴェの告白の答えを出す前に、ティアナはその場から逃げるように走って行ってしまった。

あの後、ティアナは自室に戻ってきていた。

「あ、ティア。おかえり！ナツは見つかった？」

部屋に入ると、同室のスバルが迎える。

「……………」

だがティアナは何の返事も返さず、ただ顔を俯かせるだけだった。

「ティア？どうしたの？」

スバルがもう一度問い掛けると、ティアナはようやく口を開いた。

「ゴメン、スバル……ちょっと、部屋を出てくれない？」

「へっどつてっ。」

「いいから……お願い」

「ティア、何かあったの？だったら私が相談に……」

そう言いかけたスバルは咄嗟に口を閉じた。何故なら……

「お願い……今は……一人にして……」

今のティアナは長い付き合いのスバルでさえ見たことがないほど、弱々しい姿だった。

「う、うん……」

そんな姿を見せられては、スバルは何も言えず、ただティアナの頼みに従った。

「ティア、何があったのかは知らないけど……私はティアの味方だからね！」

そう言い残して、スバルは部屋をあとにした。

「……………」

一人になったティアナは特に何かをするといわけでもなく、そのままゆっくりと自分のベッドにうつ伏せに倒れこんだ。

「（あの後………… ナツは何て返事をしたんだろう？）」

思い出すのは先ほどのナツとノーヴェのやり取り。

「（ナツが他の人から告白された………… ただそれだけなのに…………！ど
うして、こんなに悲しいの…………！！）」

ティアナは枕に顔を押し付け、涙を流した。

「うつうつ…………！ひつく…………ぐすつ…………！！」

部屋には、ティアナのすすり泣く声だけが虚しく響いていたのだっ
た。

あ
と
が
き

じ
く

恋する乙女達・その？（後書き）

はい、続きます。ティアナの話は次回に続きます。

決してネタ切れと言うわけでは…アリマセンヨ？

恋する乙女達・その？（前書き）

散々引つ張ったクセにこの体たらくです。笑ってください、この駄作者を……

今回で恋する乙女編はラストです。

恋する乙女達・その？

ティアナの想い？

「え？ティアナが？」

昼過ぎの時間帯、グレイとフェイト、そしてヴィヴィオと昼食を取っていたのははスバルからの相談を受けていた。

「はい……ティア、朝からずっと部屋に籠りつきりなんです。朝ごはんもお昼ご飯も食べないで……」

「珍しいね……ティアナが引きこもるなんて……」

「何かティアナに変わったことはなかったのか？」

ティアナが引きこもっていると言う話にフェイトは驚き、グレイはスバルに質問をする。

「はい。朝、部屋から出て行って、それで戻ってきたら何だか元気がなくて……ティアとは訓練校から一緒ですけど…あんなに弱ったティア、見たことありません」

グレイの質問にスバルは俯きながら答えると、ヴィヴィオ以外の三人は思案顔になる。

「また無茶な自主練をしたとかじえねえか？」

「あ、それはあるかも。サタンとの決戦が近いから、もしかしたらプレッシャーを感じて……」

「でもティアナが同じ過ちを繰り返すとは思えないよ」

「私もそれは無いと思います。最初に部屋を出て行くとき、ティアはクロスミラーージュを置いていきましたから」

グレイとフェイトの考えをなのはとスバルが否定する。

「そもそも、どうしてティアナは朝早くに部屋を出て行ったの？」

「あ…それは、午前の訓練が無くなったので、みんなで朝ごはんを食べようと思いついて、それだったらナツも誘おうと言った話になって、ティアがナツを探しに行ったんです」

「」「」

なのはの質問の答えを聞くと、三人は合点が行ったと言った表情をした。

「えっと…それってつまり……」

「原因は……」

「あのクソ炎か……」

上からなのは、フェイト、 그레이の順番で結論を出し、頭の中にナツの顔を思い浮かべた。

「え！？ナツが原因なんですか!？」

「それ以外に考えられねーだろ」

「ティアナ、ナツのこと好きだからね」

「うん。ナツを呼びに行ってから元気が無くなったとしたら、それしかないと思うよ」

「大方、ナツが余計なこと言ってティアナをへこませたんだろ。アイツ、こういうことに関しちゃう鈍感だからな」

「（それはグレイ（さん）も一緒だと思う）」

グレイの発言になのはとフェイトはツツコミを入れたかったが、それを口には出さずに心の中で留めた。

「とりあえず、ナツを問い詰めるか。んで、謝らせれば解決だろ」

「うん。じゃあ、そうしようか」

グレイの提案になのはが賛成したその時……

「腹減ったな、今日は何か食うかなあ？」

ナツ登場。

「……ナイスタイミング……」

まるで狙ったかのようなナツの登場に四人は口を揃えて言った。

「ナツ！ テメエちょっとこっち来い！」

「ああ！？ なんだグレイ！ オレは今からメシなんだよ！」

「いいからナツ、こっちに来て！」

「スバルまで何なんだよ！？」

抵抗するナツをグレイとスバルが無理矢理連行し、なのは達の席に着かせた。そしてナツにティアナが部屋に引きこもっている話と、

その原因がナツにあるのではないかと言う話をした。

「で？お前ティアナに何したんだ？」

「ナツ君、どうなの？」

「早く言った方がいいよ？」

「今ならティアも許してくれると思うから！」

上からグレイ、なのは、フェイト、スバルがナツを問い詰めるが……

「あのな……オレ、今日は一度もティアと会ってねーぞ」

「「「「ええ！？」「」「」」

予想外のナツの言葉に四人は驚愕する。

「嘘ついてんじゃねえぞクソ炎！！」

「嘘じゃねえよ変態氷!!」

お互いにゼロ距離で睨みあうナツとグレイ。

「二人とも落ち着いて!」

「ともかく!ナツは今日ティアナとは会ってないんだね?」

今にも喧嘩しそうな二人をなのはが止め、フェイトがナツに質問する。

「ああ。オレは今朝はずっと訓練所に居たからな」

「訓練所だあ?」

ナツの言葉にグレイが訝しげな表情をする。

「いつも朝は寝てばっかのテメエが訓練所で何してたんだよ?」

「模擬戦だよ。今日はノーヴェとずっと模擬戦してたんだよ」

「ノーヴェと？」

「ああ。前から約束してたからな」

「その時に変わったことは？」

「特に何も」

「」「……うん」「」

ナツが嘘をついているとも思えず、四人は再び頭を悩ませる。すると、ナツが口を開いた。

「とりあえず、引きこもってるティアを引きずり出せばいいんだろ？」

そう言つとナツは立ち上がり、食堂を出て行くところとする。

「は？おい、どこ行くんだよ？」

「決まってるんだろ。ティアの部屋だ。何で引きこもってるか、アイツに直接聞いた方が早えだろ？」

「じゃあ私も……っ！」

スバルも行くこうとするが、なのはに止められる。

「ナツ君、任せてもいいかな？」

「おう。このままじゃ、気になってメシも食べねえからな」

頭をガシガシと掻きながらそう言って、ナツは食堂を出て行ったのだった。

その頃、自室に引きこもっているティアナは……

「……………はあ」

ベッドの隅で三角座りをして、大きな溜め息をついていた。

「もうお昼過ぎ……………そろそろスバルを呼び戻して……………」

そう言って扉に向かおうとするティアナだが、その瞬間まるで金縛りにあったかのように動きを止める。

「（……………イヤだ……………外に出たくない……………もし外に出て、ナツに会ったら……………私……………）」

ナツに遭遇することを恐れ、自室から出ることが出来ないティアナ。

「でもこんなんじゃない、もし緊急出勤が出たときに困るし……………どうしよう……………」

と、ティアナが軽い自己嫌悪に陥っていると……………

『おーいティアナ！居るか？』

「(っ、ナツ!?)」

扉の外側からナツの声が聞こえてきた。

『スバルからオメエが部屋に引きこもってるって聞いたんだけどよ……』

「(あのバカスバル……!)」

頭に怒りマークを浮かべて拳を握るティアナ。

『おいティア、オメエが何で引きこもってるのか知らねえけどよ、スバルもなのはも心配してんぞ』

「っ……!」

ナツの言葉を聞いたティアナは目を見開く。

「(アンタのことで悩んでるのに……何でアンタはそんなに能天気なのよ……!!)」

『何か悩んでるんだったらよ、オレ達に相談しろよ。仲間だろ?』

「……………くせに……………」

『ああ?』

「何も分かってないクセに、好き勝手言わないでよっ!……………」

ティアナの叫びが部屋の外にまで響き渡る。

『はあ?おいティア、何キレてんだよ?』

「うるさいっ!……………アンタなんか、ノーヴェと仲良くやってなさいよ……………」

『なんでノーヴェの名前が出てくるんだよ!……………?』

「今日の朝、好きだって言われてたじゃないっ!……………」

ぞこらアアアア！！！！！』

ドゴオオオオオオオオン！！！！

「っ！！！？」

ナツの怒号が響いた次の瞬間、部屋の扉が轟音と共に吹き飛び、その向こう側には拳に炎を纏ったナツが立っていた。

「……………」

そして拳の炎を消し、ゆっくりとティアナに向かっていく。

「な、なによ……………来ないでよ！！！」

「……………」

ティアナの静止の言葉も聞かず、段々と歩み寄るナツ。

「来ないでっって言ってるでしょ！？もう私のことなんて放っというて……っ！……！」

そこまで言いかけて、ティアナは言葉を止めた。何故なら……

「いいから落ち着けよ…ティア」

ナツに抱き締められていたからである。

「あっ………！」

抱き締められながらポンポンと背中を叩かれ、ティアナは落ち着いたように息を吐いた。

「落ち着いたかよ？」

「……………っん」

ナツの問い掛けにコクンと頷きながら答えるティアナ。

「（昔リサーナと喧嘩した時、ミラに言われたことを試してみたけ

ど…利くもんだな」

そう思いながらティアナを解放するナツ。

「んで？お前はオレとノーヴェエの話をごとまで聞いてたんだ？」

「……決戦が終わったなら、ナツが元の世界に帰るって言うところから」

「殆ど最初からじゃねえか。まあいいや……で、どこまで聞いたんだ？」

「ノーヴェエがナツに好きって言ったところまで……」

「んじゃあ、そこから先を聞いてねえのか。一応言っとくけどなアイア、アレはオメエが思ってるようなモンじゃねえぞ」

「え……？」

「アレはな……」

その言葉を皮切りに、ナツはその時のことを語りだす。

遡ること数時間前、訓練所にて。

「ナツ……アタシは……！お前のことが、好きだっ……！」

ノーヴェの言葉が訓練所に響く。

「ノーヴェ……」

「アタシはお前のこと、友達として……仲間として好きだ……！それだけ……言っところうと思って……」

ノーヴェがそう言うと、ナツはニカッと笑い……

「オレもお前のことは好きだぜ。仲間としてな！」

「……へへっ」

ナツの言葉にノーヴェは同じようにニカッと笑い返す。

「今度の決戦……絶対に勝とうぜ、ナツ！」

そう言ってノーヴェはナツに向かって拳を突き出す。

「おうー!!」

ナツはそれに答えるように拳を突き出し、お互いの拳をぶつけ合ったのだった。

「……………！」

ナツの話聞いたティアナは呆然としていた。

「えっと、つまり……………あの時ノーヴェエが言ってた好きは、男女の好きじゃなくて……………仲間としての好きってこと？」

「それ以外にあんのかよ？」

「……………はあ」

ティアナは無意識に頭を押さえて、溜め息をついた。

「これじゃあずっと悩んでた私がバカみたいじゃない……………」

「ん？何か言ったか？」

「何でもないわよ……………」

頭を押さえながらそう答えるティアナ。

「（でも……ちょっとホツとしたかな）」

「そついや、ティア。オメエ何で引きこもってたんだ？」

「え？あー……もういいわ。悩んでも無駄だってわかったから」

「んだよそれ？聞かせるよ！」

「うるさいバカナツ！！」

ゴンツ！

「いってええ！！なにすんだ！！」

ティアナの拳骨を喰らったナツは怒鳴りながら立ち上がる。その時

……

ガツ！

「うおっ!?!」

「え!?!ちよっ……!」

「うわあああああ!?!」

ナツが自分で破壊した扉の破片に足を引っ掛けてしまい、そのままティアナと共に倒れてしまった。

「ちよつとナツ!重いわよ!」

「す、すまねえ……」

そう言っただけティアナの上から退くこととするナツ。すると……

「ティア!何か凄い音聞こえたけど大丈夫!?!」

「って、何でドアが壊れてんだよ!?!一体何が……」

「」「」「」あっ……「」「」「」

ティアナが心配になって来たのであろうスバルとグレイが部屋を覗き込むと、二人は目を点にした。何故なら、二人の目にはどう見てもナツがティアナを床に押し倒しているようにしか見えないのだから……。

「わ……わりい……邪魔したな……」

「ティア……えっと、ほどほどにね……」

そう言い残すと、二人は気まずそうな表情をしたまま早足でその場から去って行った。

「……誤解だああああ!!」

二人の絶叫に似た叫びが部屋に響いたのだった。

その夜。

「だぁーくっそぉ……今日は散々だったぜ……」

「あい。自業自得だと思うよ」

あの後ナツは部屋の扉を壊したことをはやてとエルザにたっぷりと叱られてしまったのだ。

「今日はもうさっさと寝ちまうか」

「あい！じゃあ電気消すよ」

そう言って、ハッピーが部屋の電気を消そうとしたその時……

コンコン……

控えめなノックが聞こえた。

「あれ？誰だろこんな時間に……」

「何だ？客か？」

突然の来訪者に疑問を感じながら扉を開けるナツ。するとそこに居たのは……

「あ、ナツ……」

寝巻き姿のティアナだった。

「ティアナ？どうしたんだよ？」

「……悪いんだけど、今日アンタ達の部屋で寝かせてくれない？」

「……ハアア！！？」

「うっほー！ー？」

いきなりのティアナの頼みに驚愕するナツとハッピー。

「何でだよ！？」

「アンタが私たちの部屋のドアを壊したからでしょ！ー！」

そう、ナツがティアナとスバルの部屋の扉を破壊してしまったため、その修理が終わるまで二人は部屋を使うのが出来ないのである。

「スバルは？」

「スバルはキャロの部屋に行ったわ。流石にウエンディの部屋に押し掛けるのには気が引けるし、エルザさんは……何か怖いし……ダメ……かな？」

「うっ……」

扉を壊した張本人であるため、罪悪感を感じるナツ。

「……わーっただよ。早く入れ」

「うん……」

ナツに招き入れられ、部屋に入るティアナ。

「お前ベッドで寝ろよ。オレは床で寝っから」

そう言って掛け布団だけ持って床に寝ようとするナツ。そんなナツをティアナが止める。

「ちょっと待ちなさい！急に押し掛けたのは私なんだから、私が床で寝るわよ」

「いいからベッドで寝ろよ。ドアを壊しちまったのはオレなんだしな」

「でも………！」

そう言っただけで頑なに譲らない二人。すると今まで黙っていたハッピーが口を開く。

「じゃあ…二人で寝れば？」

「「へ？」」

「も、もうちょっと詰めなさいよ…」

「これ以上は無理だっつうの！つか、あんまくっつくんじゃねえよ
「！」

結局、ハッピーに上手いこと言い包められた二人は同じベッドで寝ることになった。

「……………ねえナツ」

「ああ？」

「今度の決戦、必ず勝つってノーヴェと約束したのよね？」

「それがどうした？」

「じゃあ…私とも約束して……必ず、勝つわよ」

「……へっ、たりめーだろ」

パンッ

そう言うと、二人は互いに軽いハイタッチをかわした。

「（それからもし、みんなが無事に帰ってきたら……ナツに伝えよう……この想いを……）」

そう心の中で決心すると、ティアナはゆっくりと瞼を閉じて、眠りについたのだった。

サタンとの決戦まで、あと…三日。

じ
く

科学者の休日（前書き）

今回の話は六課に協力することになったジェイル・スカリエッティの話です。

とりあえず此处に触れておかないと後々困ることになるので、思いついてすぐに書き上げました。（所要時間：約60分）

もちろん、募集したリクエストはきっちり書かせていただきます。因みに順番とタイトルは以下の通りです。

? Blue様のリクエスト

『竜召喚士と天空の竜』

? クレハ様のリクエスト

『八神はやての観察』

? レイン様のリクエスト

『最初で最後の……』

となっております。ご協力ありがとうございました！頑張って書き上げたいと思います！

科学者の休日

ここは機動六課に新たに作られた研究室。その部屋の中には一人の男が机に向かっていた。

彼の名前はジエイル・スカリエッティ。

次元犯罪者として機動六課に逮捕されたが、現在はサタンとの決戦に為に機動六課に協力している男である。

「ふう……退屈だな」

誰も居ない研究室でスカリエッティはただ一人呟く。彼は一応協力者として迎えられているが、経歴が経歴なので、許可が無ければ研究室に居ることしか出来ず、今も機動六課の監視下にあるため大それたことは出来ないのである。

「ウーノ達も居ないしな……」

彼の娘であるナンバーズは現在更生プログラムを受けるため、海上隔離施設に出向いているため、六課には居ない。

因みにこの更生プログラムを受けることをウーノ、ドゥーエ、トーレ、クアットロ、セツテの五人は拒否していたが、スカリエッティが言った言葉で渋々受けることになった。その際に言った言葉が：

『君たちがこれから先どのように生きていくのか興味を持った。出来ることなら……幸せに生きて欲しい』

であった。これを聞いたフェイトを含めた局員はもちろん、ナンバーズまでもが驚愕していた。

「あの時は、ガラにでもないことを言ったものだ。彼らと関わって……私の中で何かが変わったのか？」

研究室の中で一人自問自答するスカリエッティ。すると……

「ジェイル、居るか？」

「ん？やあ、ジェラール君」

彼を六課に引き込んだ張本人、ジェラールが入って来た。

「気分はどうだ、ジェイル？」

「最悪と言っていていいね。ずっと部屋に居るのは退屈過ぎる」

ジェラルルの質問にスカリエッティ：ジェイルは本当につまらなそうに答える。

「だろうな。そう思って、八神はやてから二時間だけだが、お前の外出許可を貰ってきた」

ジェラルルがそう言うと、ジェイルは目を丸くする。

「ほづ…よく許可を貰うことが出来たね」

「最近のお前は大人しいからな。八神はやてもその辺を考慮してくれたようだ」

「ふむ、ではお言葉に甘えるところ」

「ああ、今の内に他のメンバーとの間に出来た溝を埋めてくるとい

い
「」

「そうさせて貰うよ」

そう言うとジェルは座っていた椅子から席を立ち、研究室から出た。

「まったく、彼はとんだお人好しだな……」

そう呟きながら、ジェルは隊舎の廊下を歩いて行った。

「「……」」

「..」」

しばらく歩いていると、ジェイルはFWメンバーの一人であるスバルと、六課に出向しているギンガのナカジマ姉妹にバッタリと鉢合わせした。

「やあ、スバル・ナカジマ君とギンガ・ナカジマ君じゃないか」

「……………！」

スカリエッティは気さくに話しかけるが、当の二人は完全に警戒した目でジェイルを見ていた。

「そう警戒しないでくれたまえ。今の私は六課の協力者で、八神部隊長の許可を貰って散歩をしているだけなのだから……………」と、言っても無駄だろうね。まあ丁度いい…君たちに用があつたんだ」

「……………！」

ジェイルの言葉にナカジマ姉妹は身構える。そしてジェイルはそんな二人に向かって……………

「すまなかつたね」

謝罪の言葉と共に頭を下げた。

「「え!?!」」

いきなりのもので驚くナカジマ姉妹。

「君達の母親：クイント・ナカジマを殺したのは私だ。直接殺したのはナンバーズだが、この責任は親である私を取るべきだと思っ
ね。謝って許してもらえないことではないとも思っているが、本当に
すまなかった」

そう言いながらも頭を下げるジェイルにギンガが戸惑っていると、
スバルが一步前に出て、口を開いた。

「……母さんを殺した貴方の事は、許すことは出来ません。だけど、
こうやって謝ってくれた事は忘れません」

「スバル君……」

スバルの言葉にジェイルが呆然としてみると、ギンガも前に出てき
た。

「この話の続きは、決戦が終わってからにしましょう。お互いに生きて…ね？」

「……ああ、そうなるように私も全力でサポートさせてもらうよ」

ジェイルが微笑みながらそう言うと、ナカジマ姉妹も微笑んだ。

「では、私は失礼させてもらうよ。他にも謝らなければならない人たちがいるのでね」

ジェイルはそう言って、二人の横を通り過ぎる。

「あ、そうそう」

と思ったら、何かを思い出したように立ち止まる。

「ノーヴェのことをよろしく頼むよ」

「ノーヴェを？」

突然出てきたノーヴェの名前に二人は意味を理解出来ずに首を傾げる。

「ああ、そう言えば君たちは知らなかったね。NO・9のノーヴェは君達の母親、クイント・ナカジマの遺伝子を使用したクローン体だ。君たちとは遺伝子上の姉妹にあたる。生まれた順で言えば、スバル君の妹かな」

「えええ!!!?」

「なるほど……通りでスバルと顔が似てると思った」

知らされた新事実にはスバルは驚愕し、ギンガは納得したような表情を浮かべた。

「そっかぁ……私の妹かぁ……」

自分に妹が居ると言う話を聞いて、スバルは嬉しそうな顔をする。

「ノーヴェは口は悪いが、根は君たちと同じ優しい子だ。仲良くしてあげて欲しい」

「「はいつ!」」

ジェイルの頼みを二人は快く承諾する。それを聞いたジェイルは満足そうな笑みを浮かべ、今度こそ二人と別れた。

ナカジマ姉妹と別れた後も、ジェイルは特にアテもなく隊舎の中を歩き回っていた。

「おっ、ジェイルじゃねえか」

「ん?」

後ろから声を掛けられたので振り返って見ると、そこには……

「君は…確かグレイ・フルバスター君か」

声を掛けた張本人であるグレイが立っていた。

「おう。それよりお前は大丈夫なのか？確か研究室からは出られねえって聞いたぜ？」

「問題ないよ。ジェラルド君が八神部隊長に許可を貰って来てくれたからね」

「そうか。で、何してんだ？」

「このメンバーとの間に出来た溝を埋めようと思ってね。さっきナカジマ姉妹に謝罪してきたところさ」

「へえ……他にも謝るヤツが居るのか？」

「そうだね……数えるとキリがないが……とりあえず、高町なのはフェイト・テストロッサ、そして……ヴィヴィオには謝っておきたいな」

「ふーん……だってよ」

「？」

すると、突然グレイはジェイルの後ろに向かって声を掛ける。それを疑問に思ったジェイルは後ろを振り返る。

「っ!？」

そこには、管理局のエースオブエース…高町なのは。六課の中でもっともジェイルを怨んでいるであろうフェイト・T・ハラオウン。そしてその二人と手を繋いでいるヴィヴィオの姿があった。

このとてつもない面子に流石のジェイルも目を見開いた。

「ぐ、グレイ君!？これは一体……!？」

「わりいな、ジェラルに頼まれたんだ。お前の後押しをしてやれっつてな」

「いや、これは後押しと言っつより……」

ドッキリではないか?と言おうとした時、ジェイルの白衣がクイクイツと引っ張られる。

「っ……ヴィヴィオ」

ジェイルは白衣を引っ張ったヴィヴィオに視線を向ける。

「おじさん……私のことを、教えてください」

「っっっっ！！？」「っ」

ヴィヴィオの言葉にジェイルだけではなく、なのはとフェイトとグレイも目を見開いた。

「ナンバーズのみんなが教えてくれたの……私を狙って機動六課を襲ったって……そして、私が聖王の器だって……」

ヴィヴィオは言葉を紡ぎながら、ジェイルの白衣をギュッと握る。

「ヴィヴィオ……！」

そんなヴィヴィオを見たジェイルは、意を決したような顔つきになる。

「わかった……君たちも……いいかい？」

ジェイルが確認を取ると、他の三人は静かに頷いた。それを見たジェイルはゆっくりと口を開く。

「ヴィヴィオ、君は『聖女王』……オリヴィエ・ゼーゲブレヒの血から造られたクローンだ」

ジェイルの告げた真実にヴィヴィオ、なのは、フェイトが目を見開く中、 그레이が一人首を傾げていた。

「おい、なんだ？その『聖女王』ってのはよ？」

「『聖女王』とは、数百年前の諸王戦乱時代に存在した古代ベルカの王のことだよ」

그레이の質問に答えながら、ジェイルは目を伏せる。

「古代ベルカ王族は自らの体に生体兵器『レリックウェポン』としての力をつけていたとされていた。私はそれを起動させるために、ヴィヴィオを攫って、レリックを体内に埋め込んで古代の戦船『聖

王のゆりかご』の制御ユニットとして組み込もうとした……」

そこまで言うと、ジェイルはヴィヴィオに深く頭を下げた。

「すまない！私のくだらない実験に、君を……君たちを傷つけてしまった。本当にすまない！！」

ヴィヴィオ、なのは、フェイトに深く謝罪するジェイル。すると……

「もついいよ……おじさん」

ヴィヴィオが微笑みながらジェイルにそう言った。

「ヴィヴィオ……」

「本当のママとパパがさいしょから居ないことは悲しかったけど……今のヴィヴィオには、すてきなパパとママ達が居るから！」

と、満面の笑顔でそう言うヴィヴィオ。その笑顔に釣られ、グレイ、なのは、フェイト、そしてジェイルも笑みを浮かべた。

「ありがとう……ヴィヴィオ」

そう言ってジエイルはヴィヴィオの頭を撫でると、次はなのに向き合った。

「高町なのは……八年前、君に瀕死の重傷を負わせたのは私が作ったガジェットだ。すまない……」

なのには向かって頭を下げるジエイル。

「……もういいですよ。確かにあの出来事のせいで、私は二度と飛べないかもしれない恐怖に囚われた……でも、フェイトちゃんはやてちゃん、その他にもたくさんの人の支えがあって、今の私が居るんです。だから……もういいんです」

「半分は自業自得ですしね」と苦笑いを浮かべながらそう言うのは。

「そうか……ありがとう」

そう言って再びなのはに頭を下げると、次にジエイルが視線を向けたのが……

「……………」

この中で一番自分を怨んでいるであろう、フェイトだった。

「フェイト君…私は……………」

「みなまで言わなくて結構です」

ジェイルの言葉を遮るようにフェイトが口を開いた。

「ジェイル・スカリエツティ…………私の母さんの人生を狂わせた貴方を、私は許すことは出来ない」

「……………」

その言葉に、ジェイルは目を伏せる。すると、フェイトは「でも…………と言葉を繋ぎ、再び口を開いた。

「でも、貴方の研究があつたから、私が生まれた。そして、なのはやはやて…………シグナム達守護騎士、スバルやティアナ…………エリオやキヤロ…………そして妖精の尻尾フェアリーテイルのみんなに出会うことが出来た。その事に関

してだけは……感謝しています」

「……………」

フェイトの言葉を聞いたジェイルは呆気にとられた表情をしていた。

「まあ、これはグレイから言われたことですけどね」

と、苦笑いを浮かべるフェイト。それに釣られて、ジェイルも笑みを浮かべた。

「ふふつ、まさか君に感謝されるとは思わなかったよ……やはり不思議な人達だね、妖精の尻尾は……」
フェアリーテイル

「あ？」

ジェイルの言った言葉の意味が分からず、グレイは首を傾げる。

「君達の言葉は必ずと言って良いほど、人の心に影響を与える。いつも不機嫌顔だったノーヴェに笑顔を与えてくれたナツ君といい、ルーテシアの閉ざされた心を開いたガジル君といい、そしてグレイ君、君は私のことを怨み続けてきたフェイト君の心を変えた。本当

に不思議で、興味深い……研究したいほどに」

「っっっ！」「っ」

ズザザ！

ジェイルの最後の眩きを聞いたグレイは引き気味に後退してジェイルから距離を取り、なのはとフェイトは待機状態のデバイスを構えた。

「あははは！冗談さ」

「テメエが言つと冗談に聞こえねえんだよ！！！」

可笑しそうに笑うジェイルに怒鳴るグレイ。とりあえず冗談だと言ふ事ではなかとフェイトもホッと一息ついた。

「君達は研究するより、観察していた方が面白いからね」

ジェイルはそう言つと、腕時計で時間を確認する。

「おっと、そろそろ自由時間も終わりだね。私は研究室に戻るとし
よう」

「そうか。んじゃ、今度の決戦……よろしく頼むぜ」

「ああ、出来る限りのサポートをさせてもらおうよ」

グレイとジェイルはパンツと軽いハイタッチを交わす。そしてジェイルは研究室へと向かった。

「……………ん？」

ジェイルが白衣のポケットに両手を入れた瞬間、何か入っているのを感じたジェイルはそれをポケットから引き出す。

それは赤く輝く宝石のような石、レリックだった。

「……………これはもう、必要ないね。あとで処分するでしょう」

ジェイルはそう呟くと、レリックを再びポケットの奥へと仕舞った。

そのレリックは本来、ヴィヴィオの体内に埋め込もうとしていたレ

リックだったが、今のジェイルはもう必要のないものだ判断した。

その時のジェイルの表情はとても……優しい表情をしていた。

つづく

竜召喚士と天空の巫女（前書き）

ちよつとタイトルを予定より変えました。

Blue様のリクエストで、主に幼少組がメインです。

ただちよつと不安要素が……

幼少組の三人は基本丁寧語なので、砕けた話し方に少々違和感があるかもしれませんが、ご容赦ください。

なお、今回は幼少組の私服姿が登場しますが、ご想像は読者様にお任せいたします。

あと、僕の活動報告の方に【過負荷の少年】のちよつとした小説があります。良ければそちらも見てください。

感想お待ちしております。

竜召喚士と天空の巫女

これは…サタンとの決戦まで残り三日に迫ったある日の出来事。

「エリオ君どこかなあ？」

そう呟きながら六課の隊舎を歩いているのは、機動六課FW部隊の一人である少女、キャロ・ル・ルシエである。

現在彼女は同じ部隊であり同僚である少年、エリオ・モンディアルを探している最中だった。

そしてしばらく廊下を歩いていると、ついにキャロは目的の人物の背中を見つけた。

「あつ、いた！エリオく　「エリオ君！！」　え？」

キャロがエリオの名を呼ぶより僅かに早く、誰かがエリオに声をかけ、エリオに駆け寄ってきた。それは……

「あ、ウエンディさん」

フェアリーテイル
妖精の尻尾の魔導士である少女、ウエンディ・マーベルだった。

「どうしたんですか？」

「えっと、エリオ君はもうお昼ご飯食べた？」

「いえ、これからです」

「私もこれからだから、一緒に食堂に行っていいかな？」

「はい、もちろん！」

ウエンディの問い掛けにエリオは笑顔を浮かべて了承すると、ウエンディも嬉しそうに笑顔を浮かべる。

「じゃあ行こう、エリオ君！」

そう言うと、ウエンディはエリオの手を掴む。

「えっ、ちよっ……ウエンディさん!？」

その行動にエリオは戸惑いながら、ウエンディに引っ張られて行った。

そして、その二人のやり取りをずっと見ていたキャラロは……

「……………むう」

可愛らしく片頬を膨らませ、羨ましそうに二人を見ていたのだった。

そしてそこから少し離れた場所では、一人の女性がその様子を見ていた。

「……………ほほっ」

そして楽しそうな表情を浮かべると、その場を去って行った。

因みにその女性の頭には、狸の耳が生えていたらしい……

「…………ハア」

その後、自室に戻って来たキャラ口はエリオに声を掛けることを出来なかつたことに落ち込み、溜め息をついていた。

「キユル……………」

そんなキャラ口を心配そうに見ているのは、彼女の相棒である竜・フリードだった。

「ねえフリード……………最近ね、エリオ君とウエンディちゃんがよく一緒に居るの……………」

キャラの言う通り、ここ最近エリオはウエンディと共に居ることが多いのである…と言うより、ウエンディからよくエリオに歩み寄っているのである。そのことをキャラは不審に思っていた。

「ウエンディちゃんって……エリオ君のことが好きなのかな？」

「キュル？」

キャラの言っている意味がわからないのか、フリードは首を傾げる。

実はキャラはエリオのことが好きなのである。それゆえに、エリオとウエンディの関係が気になっていた。

「もしそうだとしたら……どうしよう？」

「キュクル……」

キャラが消え入りそうな声でそう言うと、フリードは心配そうに鳴き声を上げる。その時……

《キャラ〜口〜!〜!》

「ひゃっ!？」

「キュツ!？」

突然目の前に空間モニターが出現したことで驚いた声を上げるキャロとフリード。そしてその空間モニターには六課の部隊長である八神はやてが映し出されていた。

「ぶ、部隊長……どうしたんですか？」

一応敬礼をしながらそう尋ねるキャロ。

《うん、ちょっと部隊長室まで来て欲しいねんけど、ええかな?》

「は、はい…」

《ほな、待ってるぞー》

そう言い残して、はやてとの通信が切れる。

「なんだろう?」

「キユル？」

唐突な呼び出しにキャラロとフリードは首を傾げながらも部屋を後にしたのであった。

その後、部隊長室の前にやって来たキャラロはゆっくりと扉をノックする。すると中から「どござ〜」と言つ返事が返って来た。

「失礼します」

キャラロはそう言って、部隊長室に足を踏み入れる。すると……

「あ、キャラロ！」

「キャラちゃん！」

「え？エリオ君にウエンディちゃん！？」

そこには部隊長であるはやてだけではなく、何故かエリオとウエンディも居た。

「ようやく揃ったな」

驚く三人を差し置いて、ただ一人はやてだけがニコやかに言った。

「あの、はやてさん。どうして私たちを集めたんですか？」

三人を代表してウエンディがそう尋ねる。

「うん、実はな……」

はやては勿体つけるように言葉を区切り……

「君らに休暇をあげようと思って呼んだんや」

と言った。

「「「へ？」「」」

当然三人は呆気に取られる。

「この間の休暇は中途半端に終わってもうたやろ？せやから君らに
…」

「ちょっと待ってください！」

はやての言葉を遮ってエリオが声を上げた。

「サタン・ペザリオスとの決戦がもうあと二日に迫っているんですよ！？そんな状況で休暇だなんて……」

「だからこそや」

「え？」

今度ははやてがエリオの言葉を遮った。

「今度の決戦……みんなの将来に少なからず関わってくると思う。特に君らはこれからの将来、どうなるかわからん。せやからこそ、『今』を大事にして欲しいんや」

「「部隊長……」」

「はやてさん……」

「それに今は一時の休みみたいなモンや。ちょっとくらい遊んだってバチは当たらへん。今日くらいは決戦のことは忘れて、街にでも行っって遊んで来い……な？」

はやてが諭すようにそう言うと、三人は顔を見合わせる。そして……

「「「はいっ！」」」

元気良く頷いたのであった。

その後、部隊長室から出て行く三人を見送ると、はやての元にリインが飛んできた。

「はやてちゃん、良かったですか？」

「ん？何がや？」

「あの三人だけに休暇を上げることですよ。他の局員から苦情とか来ないですかねえ？」

「大丈夫やって。フェイトちゃんやエルザさんから許可は貰ってるし。それに…ウエンディちゃんのこともあるやろ？」

「あっ……」

「今度の決戦が終わったらウエンディちゃんは元の世界に帰ってまう。せやから今の内に楽しい思い出を作って欲しいんや」

「はやてちゃん……！」

「それに……」

「それに？」

「あの三人の三角関係が面白そうやしなあ！」

「……リインの感動を返して欲しいですう」

そんな会話があったことを、幼少組の三人は知らない。

それから約1時間後……

「お待たせしましたあ！」

自室で私服姿に着替えたキャロは待ち合わせ場所である隊舎の入り口前に来ていた。

「あ、キャロ！」

だがそこには、エリオしか居なかった。

「あれ？ウエンディちゃんは？」

「まだだよ。たぶんもうすぐ……あ、来た！」

そう言うエリオの視線の先には、いつもとは違う可愛い服装に、髪型をツインテールにしたウエンディが小走りで走ってきていた。

「ごめんなさい！お待たせしました！」

着くなり二人に向かって頭を下げるウエンディ。

「大丈夫ですよ」

「私も今来たところですから」

そう言つて笑顔で許す二人。それを見てウエンディは安堵の表情を浮かべる。

「ウエンディちゃん、服も髪型も可愛いね」

「そうかな？キャロちゃんも可愛いよ」

キャロとウエンディはお互いの服装を褒め合う。その光景は歳相応の女の子同士の会話だった。

「ねえ、エリオ君はどう思う？」

「えっ？」

ウエンディに突然話を振られたエリオは目を丸くする。

「えっと……可愛いですよ、ウエンディさん」

「……むっ」

褒められたのにも関わらず、ウエンディは何故か不満げな顔をする。
それを見たエリオは戸惑う。

「あの…ウエンディさん？」

「ねえエリオ君、どうして敬語で話すの？」

「え？だって、ウエンディさんは年上ですし……」

「たった二つ違いだよ？そんなに変わらないんだから、敬語はやめよう？名前も呼び捨てでいいから」

「は、はい…じゃなくて、うん……ウエンディ」

「うん！」

それを聞くと、ウエンディは満足そうな笑顔を浮かべた。

「……………」

そんな二人のやり取りを、キャラが悲しそうな表情で見ていることを二人は知らない。

それから三人は電車に乗ったりして、クラナガンに到着した。

「わ〜！」

クラナガンの町並みを見て、ウエンディは感動的な声を上げた。

「ウエンディちゃん、楽しそうだね？」

「うん！私の居た世界じゃ、こんなに大きな建物はなかったから！」

ウエンディが笑顔でそう言うと、釣られて二人も笑顔になった。

それから数時間、三人は事前にスバルとティアナから聞いていた様々な街中の遊び場所を回った。そして一通り回って少々くたびれた三人は近くの公園のベンチに腰を降ろしていた。

「はあく楽しかったね」

「うん！」

ウエンディの言葉にエリオとキャラロは頷く。

「僕、何か飲み物を買って来るよ。何がいい？」

「あ、それじゃあ私はお茶を……」

「じゃあ私は……」

「オレンジジュースだよね？」

「え？」

キャラは驚いた。まさに自分が言おうとした飲み物をエリオが言い当てたのだから。

「キャラはオレンジジュースが好きだからね。覚えちゃったよ」

「えっ！？あっ……うう…／／／」

それを聞いたキャラは恥ずかしそうに顔を真っ赤にした。

「それじゃあ行って来る」

そんなキャラに気付かず、エリオは飲み物を買いに行った。そして公園のベンチには、ウエンディとキャラの二人が残された。

「……………」

特に会話らしい会話もなく、ただジッと座ってるウエンディとキャラ。するど……

「キャラちゃん」

ウェンデイが口を開いた。

「な、なに？」

突然話しかけられたキャラは少し驚きながらも言葉を返した。

「キャラちゃんって……エリオ君のこと、好きなの？」

「え……ええええ!!!？」

いきなりの問い掛けにキャラは声を上げて驚愕した。

「どっなの？」

「う、うん……好きだよ……エリオ君のこと」

キャラは恥ずかしそうに頷く。

「でも、ウエンディちゃんも好きなんですよ？エリオ君のこと……」

「……うん」

キャラとは違い、ウエンディは冷静に頷いた。

「ウエンディちゃん、最近エリオ君と一緒に居るでしょ。私それを見て、ウエンディちゃんのこと凄いなあって思ってたの。あんなに積極的にエリオ君の側に行けるんだから……」

「……それは違うよ」

「え？」

キャラの言葉をウエンディは否定する。

「私になるべくエリオ君の側に居ようよしてるのは……もう、時間がないから……」

「時間って……あつー!!」

そこでキャラは気がついた。ウエンディは元々別の世界の人間。今度の決戦が終わったら、ウエンディは元の世界に帰らなければならないのである。

「笑っちゃうよね？せつかくの初恋があと三日で終わっちゃうなんて……」

そう言って自虐的な笑顔を浮かべるウエンディ。

「だからキャラちゃん、私が帰った後は私の分まで頑張ってね？」

そう言ってキャラに声援を送るウエンディ。しかし……

「ズルイ……ズルイよウエンディちゃん!!」

帰ってきたのは予想外の言葉であった。

「どうしてそう簡単に諦めちゃうの!?!確かに決戦が終わったらウエンディちゃんは元の世界に帰っちゃうかもしれない!?!だけど、それはエリオ君を諦める理由にはならないよっ!?!」

「っ!?!?」

キャラロの言葉に目を見開くウエンディ。

「元の世界に帰った後でも、またこの世界に来る可能性はあるでしょ！？どんな状況でも、可能性がある限り諦めない！私が今まで見てきた妖精フェアリーテイルの尻尾の魔導士さん達はみんなそうだったよ！ウエンディちゃんは違うの！！？」

「……………！！！」

それを聞いたウエンディは、そっと自分の肩に刻まれたギルドの紋章に触れる。そして……

「……………そうだね…うん、そうだよね！！向こうの世界に帰っても、またこの世界に来る方法を探せばいいんだよね！！！」

自分の考えを思い直し、嬉しそうな笑顔を浮かべた。

「ありがとうキャラロちゃん！」

「これくらい当たり前だよ！だってウエンディちゃんは、私の恋のライバルで……大切な友達だもん！！！」

「キャラちゃん……!!」

その言葉を聞いたウエンディは嬉しそうに笑いながら、キャラの手を握った。

「たとえウエンディちゃんが元の世界に帰っても……」

「うん……私とキャラちゃんは……ずっと友達だよ!!」

そう言いながら、二人は友情を誓い合いながら両手でお互いの手を握り締める。すると……

「お待たせしました!」

三人分の飲み物を抱えたエリオが戻って来た。

「どつぞ」

「ありがとう、エリオ君!」

「ありがとう！」

二人はお礼を言いながらエリオから飲み物を受け取る。

「ところで、向こうまで声が聞こえてたけど、一体なんの話をしてたの？」

エリオが二人にそう問い掛けると、ウエンディとキャロは顔を見合わせて……

「フフツ…内緒」

と、笑顔で答えた。

「えー！どうして？」

「女の子同士の」

「秘密です」

「はぁ………?」

釈然としないが、これ以上追及するのもどうかと考えたエリオはもう何も聞かなかったであつた。

そして、日が傾き始めた頃、三人は帰路についていた。

「楽しかったね!」

「うん!また来たいね!」

ウェンディとキャロがそう話し合っていると……

「また来よう!」

エリオが大きな声でそう言った。

「また三人で……絶対に……」

「「エリオ君……」」

そう言うエリオの表情を見て、二人は悟った。エリオは決戦のことや、ウエンデイが帰ってしまうことも踏まえてこんなこと言っているのだと。

つまり、たとえウエンデイが帰ってしまうとしても……必ず決戦に勝って、また三人で遊びに行こう……と言っているのだ。

それを察したウエンデイとキャラロは……

「「うんっ!!」」

満面の笑顔で頷いたのだった。

サタンとの決戦まで、あと……二日。

U, U, U

？生きる？道（前書き）

今回もタイトルを予定より変えました。

クレハ様のリクで、はやてとグレイの話です……が。

今回は作者的にかなりダメな出来となっております。

短い＋グダグダ＋無理矢理感＋ギャグとシリアスの入れ替わりが激しい駄文です。

あと、ちょっとだけ某人気海賊漫画のシーンをオマージュしました。

読まなくても今後の話に支障はありません。

最後にクレハさん、申し訳ありませんでした！！

？生きる？道

「……………はああ」

ある日の部隊長室。その部屋の主である八神はやては悩んでいた。

その原因は、あと二日に迫ったサタン・ペザリオスとの決戦である。はやてがその決戦にかける思いは人一倍大きい。その理由は、敵になってしまった最愛の家族…リインフォースのことである。

「リインフォース……………」

リインフォースのことを考える彼女の脳裏に、数日前のリインフォースの言葉が蘇る。

『貴女は私の主でも無ければ、家族ですらありません』

「っ……………！！！」

家族に拒絶された悲しみ。家族を利用されている怒り。そして……
家族が生きていたと言う嬉しさ。様々な感情が彼女の中で入り混じ
っている。

「あーもーアカン……こんな調子やったら仕事にならへんわ。食堂
でコーヒーでも飲んで気分転換でもしてこよ」

そう言っではやてはデスクから立ち上がり、部隊長室を後にして食
堂へ向かったのである。

「お？はやてじゃねえか」

「あ、グレイ……さん……」

グレイに声をかけられて振り返ったはやては、言葉を失った。

「あ？どうしたんだよ？」

「はやてさん、こんにちはー！」

何故なら、グレイはヴィヴィオと仲が良さそうに手を繋いでいた。

パンツ一丁で。

「変質者やー！ー！ー！ー！」

「うおお！？何だ急に！？」

「ヴィヴィオ、こっちにき来い！そんな変態の近くに居たらアカン
！ー！」

「誰が変態だテメエ！ー！」

「どこからどう見てもアンタに決まっとるやる！！何でパンツー丁やねん！！？」

「おい待て、勘違いすんな。ヴィヴィオと会ってから脱いだんじゃねえ。ヴィヴィオと会う前に脱いだんだ」

「どうでもええわ！！」

그레이の的外れな発言にツッコミを入れるはやて。

「とにかく早く服を着い！ヴィヴィオの教育に悪い！マネしたらどないするん！！？」

「ったく。わーったよ……えっと、どこに脱ぎ捨てたっけ？」

そう言うと 그레이は脱ぎ捨てた服を探して来た道を戻り始めた。それをヴィヴィオと共に見送ったはやては大きな溜め息をついた。

「はああ……ヴィヴィオも大変やね、あんなんがパパで……」

「うう？パパは優しいよ？」

ヴィヴィオははやての言っている意味が分からず、首を傾げている。

「いや、そうじゃなくて……まあええわ。そこらへんの教育はなのはちゃんとフェイトちゃんに任せよ」

「?????」

独り言を言って自己完結するはやてと首を傾げるヴィヴィオ。すると……

「はやてさん、何かなやんでる？」

突然ヴィヴィオがそんなことを言い出した。

「へ?」

いきなりすることに素っ頓狂な声を上げるはやて。

「今のはやてさん、フェイトママと同じかおしてる」

「フェイトちゃんど？」

「うん。フェイトママがジエイルのおじさんのことで悩んでたときと同じかお……」

「あーなるほどなあ……」

確かに家族絡みのことで悩んでいるのは同じかもしれないと、はやては思った。

「まあ、悩んどることは悩んどるけど……」

すると、はやてのその言葉を聞いたヴィヴィオはニコツと笑い……

「じゃあ、グレイパパにそうだんしてみるといいよ！」

「え？グレイさんに？」

「うん！フェイトママもグレイパパに悩み聞いてもらった！そしてらフェイトママ、げんきになった！……」

「へえ〜…（そう言えばなのはちゃんも 그레이さんのお陰でふっ切れたって言うようになったような……）」

と、はやてがそう思っていると……

「ふう、やっと見つかったぜ」

今度はちゃんと服を着ている 그레이が戻って来た。

「パパ〜」

そんな 그레이にヒシッと抱きつくヴィヴィオ。

「ねえパパ!」

「ん?なんだ?」

「はやてさんがね、悩んでるみたいなの!」

「悩み?」

「うん！だからグレイパパに相談にのってほしいんだって！」

「相談って……あのな、オレはカウンセラーじゃねえんだよ。んなメンドクセエこと……」

「……ダメなの？」

「やってられるか」と言おうとしたグレイにヴィヴィオが上目遣い＋涙目でグレイを見る。そんなヴィヴィオに見られたグレイは……

「……しょうがねえな。聞くだけ聞いてやるよ」

と言った。

「（親バカや……親バカがおる！）」

グレイ……知らず知らずのうちに親バカになっている男である。

「んで、悩みって何なんだよ？」

場所は部隊長室。グレイはグデーっとだらしなくソファに座りながらはやてに尋ねる。因みにヴィヴィオは部屋に帰した。

「あの、グレイさん……それ人の悩みを聞く態度やないと思うんやけど……」

「言っただろ？オレは聞くだけ聞いてやるだけだ。あと、お前の悩みが深刻だったらそれなりに力になってやるが、しょうもねえ悩みだったら一蹴するぜ？」

グレイの言葉にはやては多少ムツとなったが、そこは我慢した。

「ほな言いますよ。実は……」

そこからはやては自分の悩みと同時に自分の過去についても打ち明

けた。闇の書や守護騎士、そしてリインフォースのことなど全てを。

「……なのはとフェイトもそうだが、お前らガキの頃からどんな人生歩んできてんだよ？」

グレイは若干引き気味に言う。

「あはは……まあそんなわけやから、今度の決戦……私は絶対に負けられへん！大事な家族を取り戻してみせる！この命に代えてもや！」

「……………」

力強い言葉でそう宣言するはやて。すると、それを黙って聞いていたグレイはゆっくりと口を開き……

「……………ったく、何に悩んでるかと思ったら……くだらねえな」

と言った。

「……なんやと?」

そんなグレイをはやては怒りの籠った目で見るが、そんな目を物ともしないグレイはさらに言葉を続ける。

「前々から思っていたがはやて、テメエは部隊を率いるのに向いてねえ」

「っ……」

「指揮能力もそうだが、何よりダメなのは……テメエのその優し過ぎる性格だ」

「……何が…言いたいんや?」

そう言うはやての声は若干震えているが、グレイは気にせず続ける。

「わからねえか?お前はこの部隊に居るヤツ等全員死ななければ良いと思ってる。今回の決戦もそうだ。強大な敵が相手でも、お前はみんな無事ならいいと思ってるやがる。妖精オレたちの尻尾も含めてだ」

そこまで言うと、グレイははやてを見据えて……

「甘いんだよ、テメエは……」

と、言い放った。

「っ、その何がアカンねや！？部隊のみんなの無事を願って何が悪いんや！！？」

熱くなるはやての言葉にグレイは冷静に言葉を返す。

「人は死ぬぜ」

その瞬間、部隊長室にパンツと乾いた音が響く。

「……ってえ」

叩かれた頬を擦るグレイの目の前には怒りの形相を浮かべるはやての姿があった。

「なんでそんなこと言うん！！？この部隊のみんなは大事な仲間や！！無事でいて欲しいに決まってるやろ！！！」

「だったら何でテメエは命賭けてんだよ!!!?」

「っ……………!?!」

グレイが放った一言にはやては押し黙る。

「そのリインフォースってヤツを助けたいと思ってんのはテメエだけなのか!? 家族のことを思ってるのはテメエだけなのか!? 違うだろ!! シグナムやヴィータ………… 守護騎士の連中も同じ気持ちのはずだ!!」

「……………!!」

グレイの言う事にはやては何も返せず、ただ黙る。それでもグレイは言葉を続ける。

「全員同じ気持ちだ。それだけは覚えとけ」

「……………うん」

はやては顔を俯かせながらようやく発した言葉はそれだけだった。
それを見たグレイは……

「……ハア、ダメだな。オレはどうもカウンセリングには向いてねえらしい」

そう言いながら、グレイは申し訳なさそうに頭をかく。

「わりい、言い過ぎた」

「……ううん。怒られて逆になんやスッキリしたわ。私こそゴメンな？引っぱたいてしもつて……」

「別に。気にすんな」

「でも気持ちは変わらへんで？私はリインフォースを取り戻して、みんなで無事に此処に帰ってくる！当然、私も含めてな！」

「へっ、欲張りなヤツだぜ。けどまあ、そういうヤツは嫌いじゃねえけどな」

そう言いながらはやての頭を乱暴に撫でるグレイ。すると、はやて

は恥ずかしそうに頬を染める。

「な、なんやねん……さっきまでくだらん言っつとったくせに……」

「ああ、くだらねえな。自分の命を？犠牲？にする道なんぞ。けど……」

グレイは一呼吸置いて、もう一度口を開く。

「今のお前は、仲間と？生きる？道を行こうとしている。その気持ち
ちは、くだらなくなんかねえさ」

と、グレイは笑いかけながら言う。それを見たはやては笑い返す。

「ありがとうなあ、グレイさん」

「別に。結局オレは怒鳴り散らしたただけだからな」

「それでも気持ちはずっと楽になった。グレイさんのおかげや」

「そっか、ならよかった。んじゃ、オレは帰るぜ」

「うん。私はこのまま仕事の続きや」

「そうか、頑張れよ」

そう言い残して、グレイは部隊長室を出て行った。

「……よっしゃ！気合入れてやるか！！」

そう言って、はやては残った仕事に取り掛かる。その表情は先ほどよりも清々しい顔をしていたのだった。

サタンとの決戦まで、あと…一日。

つづく

最初で最後の……（前書き）

やっと出来ました。レインさん、お待たせして申し訳ありません。

今回は短いですが、それでも書きたかったことは詰め込みました。

一応シリアスを目指して書いたのですが…本当にシリアスに出来たかは微妙です。

それではどうぞー!!

新連載の『LYRICAL TAIL』もよろしくお願いします。

最初で最後の……

サタンとの決戦まであと一日。

六課の隊舎全体に緊張が走る中、訓練所では……

「はあああああ!!」

「ぬおおおおお!!」

二人の男女の雄叫びが響くと同時に、ガキイイン!!と言う激しい金属音が響き渡る。それを皮切りに、同じような金属音が何度も響き渡る。

それがしばらく続くと、二人の男女……エルザとゼストは互いに距離を取る。

「……………」

「……………」

エルザは剣を、ゼストは槍を構えて、互いに無言のまま姿を見据える。そして……

「「おおおおお！！！！」」

まったくの同時に動き出し、渾身の力で武器を振るった。

ガキイイイイイン！！！！

今までで一番大きな金属音が響く。それと同時に、空中に一本の武器がヒュンヒュンつと音を立てて舞い上がる。そしてそのまま落ちてきた武器は、地面に深く突き刺さった。

「これで、5戦3勝2敗……私の勝ち越しだな」

「……………」

エルザの言葉にゼストは地面に刺さった槍を見ながら薄く笑った。

「さすがだな。妖精の尻尾最強の女と呼ばれるだけのことはある」

フェアリーテイル

「よせ。私より強い者などごまんと居るさ」

槍を引き抜きながらゼストが賞賛の言葉を送ると、エルザは遠慮気味に言った。すると……

「エルザ」

「っ、ジェラール」

二人の前にジェラールがやって来た。

「八神はやてが呼んでいる。悪いが来てもらえるか？」

「はやてが？わかった。ではな、ゼスト」

「ああ」

そう言ってエルザはゼストと別れ、ジェラールと共に部隊長室へと向かった。

「買出しだと？」

その後、部隊長室では、エルザが素っ頓狂な声を上げた。

「せや。ちよつと部隊の必要物資の数が足りなくなってきたな…それを二人で買ってきて欲しいんや」

「だったら、ミッドチルダの地理に欠しいオレ達より、他の局員に頼めばいいんじゃないか？」

「そうしたいとこやねんけど、なのはちゃんやフェイトちゃんを含めた局員みんな明日の決戦の準備で大忙しなんや。せやから、手の空いとる二人に頼みたいんや」

「むっ……」

はやての言葉を聞いて、エルザは思案顔になる。確かに色々準備が必要な局員に比べて、エルザたち妖精の尻尾フェアリーテイルは特にすることがない。明日の決戦に全力で挑む…ただそれだけなのだ。

「それならば、ナツ達に任せてもいいのではないか？」

「本気でそう言ってるん？」

「むっ……」

そう言われてエルザは考え込む。

ナツ 言われた通りのモノを買えるとは思えない + 確実に街で暴れる。

グレイ 街で服を脱いだら騒ぎになる。最悪捕まる。

ウエンディ 大きな街を一人で歩かせるには心許ない。

ガジル ナツと同様の理由で無理。

ハッピー&シャルル 論外

「……仕方がないな」

エルザが溜め息混じりでそう言つと、ジェラルルも頷く。

「ホンマに？いやー助かるわぁ。ほんならコレ、必要なモンのリストとそれが置いてあるお店の地図。あと支払いはこのカードを使って、領収書を貰ってきてくれたらええわ」

「了解した。ふむ……随分と数が多いな」

エルザが見たリストには必要なものがびっしりと書かれていた。

「そらぁ私が適当に……ゴホンッ！明日の決戦に必要なモンも入つとるからな」

「そうか」

どつやら前半の言葉は聞こえなかったらしい。

「では行くか、ジエラル」

「ああ」

そう言うと、二人は揃って部隊長室を出て行った。それを確認した
はやては…

「もう出てきてもええよ」

と言った。すると、部屋の物陰からナツとグレイが出てきた。

「作戦成功だな」

グレイが笑いながらそう言うと、ナツとはやても笑みを浮かべる。

「アイツは…ジエラルはエルザの側に居るべきなんだ。こんくら
いしねーと、二人つきりにはならねえしな」

そう…先ほどはやてが二人に頼んだ買出しは建前で、本当の目的は

エルザとジェラールを二人っきりにすることだった。

「まあ、あとは成るようになるやる」

はやての言葉にナツとグレイは頷き、部屋の窓からエルザとジェラールが出掛けて行くのを見送ったのだった。

「ふむ……さて、次の店は……」

「エルザ……」

「ん？どうしたジェラール？」

「……重いんだが」

そう呟くように言うジェラルルの両手には大量の買い物袋がぶら下がっていた。これはクラナガンに来て買ったモノであり、ジェラルルはその全てを持たされていた。

「弱音を吐くな。男だったらそれくらい持て」

「……………随分と横暴だな」

ジェラルルは苦笑しながら言った。

「……………そういえば初めてだな。お前とこうして出掛けるというのは」

「そうなのか？オレは昔の記憶がないから分らんが……………」

「ああ。少なくとも、こうしてのんびりと出掛けるという事に縁が無かったのは確かだったがな」

「そうか……………まあ、オレは嬉しいよ。一時とは言え、こうしてエルザと一緒に居られることが……………」

「っ…… / / /」

ジエラルルの放った言葉を聞いて、エルザの頬が朱に染まる。

「ば、バカなことを言っていないで、早くの次の店に行くぞ!！」

エルザが誤魔化すように歩き出す。すると……

ガッ

「きゃあっ!！」

余程動揺していたのか、エルザは何かに躓き、前に倒れそうになる。

「エルザ!！」

そんなエルザを助けるために、ジエラルルは片手に持っていた荷物を放り投げ、エルザの手を掴んで彼女を引き寄せた。

「ふう、危なかったな……」

ジェラールは自分の胸に寄りかかっているエルザに言う。対するエルザの顔は先ほどよりも赤くなっていた。

「ば、バカ者……大切な荷物を放り投げるやつがあるか……」

エルザは照れ隠しにそう言うが、ジェラールはそんなエルザに微笑みながら……

「エルザが傷つくよりは、ずっとマシだ」

と言った。

「~~~~~!!/~/」

その言葉を聞いて、エルザはおそらくナツ達も見たこと無い表情をしていた。

「それにしても……『きゃあっ』か」

「っ!!」

エルザは先ほど自分が無意識に上げた悲鳴を思い出す。

「可愛いものだな」

「!?!?!?!?わ、忘れるー!?!?!?!」

そんなエルザの叫びがクラナガンに響いたのだった。

その後、買い物を終えた二人は休憩がてら高台にある公園に来てベンチに座っていた。

「これで買うものは全部だな」

「ああ。流石にこれだけ多いと、時間が掛かってしまったな」

因みにもう夕方である。

「だが、結果的にはそれでよかったかもしれん」

「なに？」

「見てみる」

そう言ってジェラルルはある方向を指差す。

「おお……」

それを見て、エルザは思わず感嘆の声を上げた。

ジェラルルが指差したその先には、沈みかけた夕日が高台から綺麗に見えていた。

「……………綺麗なものだな」

「ああ。お前と同じ……綺麗な緋色だ」
スカーレット

「っ……そう言えば、エルザ・スカーレットと言つ名はお前に貰ったものだったな。もっとも、お前は覚えていないかもしれないが……」

「いや、覚えているよ」

「っ!?!?」

ジェラルルの言葉にエルザは驚いて目を見開く。

「言つただろうっ?絶対に忘れないと……」

「……………!!?!?」

その言葉を聞いて、エルザの脳裏に幼き日のジェラルルの言葉が浮かび上がる。

お前の髪の色だ。これなら絶対に忘れない

「っ……………!」

それを思い出したエルザは一瞬泣きそうになるが、それをグッと堪えた。

「ジェラール……………お前は決戦が終わったらどうするんだ?」

「……………」

エルザの問い掛けに、ジェラールは目を伏せる。そしてゆっくりと口を開く。

「オレは罪人だ。帰るべき場所へ帰るさ」

「……………そう…か…」

それを聞いたエルザは、やはりと言う顔をする。今はこうして居るが、彼が罪人であることには変わりはない。今回の決戦が終わったら、ジェラールは魔法評議員の牢獄に逆戻りするつもりなのだ。

「……明日の決戦…必ず勝つぞ」

「わかっている」

それを踏まえた上で、エルザとジェラルルは明日の決戦の勝利を…
強く誓ったのである。

「……………」

ポスッ

「?…エルザ?」

すると、エルザは突然ジェラルルに身を寄せ、彼の肩の上に自分の頭を置いた。

「すまない……だが少しの間だけ…こっさせてくれ………」

「……………ああ」

震える声でそう言うエルザに、ジェラルルは何も問わずに肩を貸した。

そしてそのエルザはジェラルルの肩を借りながら、人知れず…静かに…涙を流していた。

そんな二人を、綺麗に輝く夕日だけが照らしていた。

空をあたたかく…情熱的に…美しい緋色に染め上げながら……

ただ……輝いていた。

サタンとの決戦まであと…一日。

つづく

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7105s/>

魔法少女リリカルなのはStrikerS～六課と妖精の尻尾～

2011年10月9日17時25分発行